(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第214集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第41集

神保植松遺跡

《本文編Ⅰ》

1997

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第214集
関越自動車道(上越線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第41集

神保植松遺跡

《本文編Ⅰ》

1997

群馬県教育委員会
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
日本道路公団

神保植松遺跡全景

序

関越自動車道藤岡ジャンクションから分岐して長野・新潟に向かう上信越自動車道は、平成８年11月に長野市まで開通するところとなりました。この高速道路は、群馬西部の藤岡市から富岡市にかけて鏑川が形成した河岸段丘とそれに連なる丘陵の中を走ります。

この河岸段丘や丘陵上には数多くの遺跡が分布することが知られています。多野郡吉井町に所在する神保植松遺跡もその一つで、上信越自動車道建設にかかわる発掘調査によって旧石器時代から近世にわたる数多くの遺構・遺物が発見されました。

特に本遺跡の注目される遺構として、壷や甕形土器などを埋設した弥生時代中期の土壙群や、中世の地方豪族であった神保氏の居城とみられる城館跡があります。堀で区切られた複数の郭内から掘立柱による建物遺構・柵列・木戸・井戸跡などが検出され、戦国期における地方城館の構造を研究する上で貴重な資料を提供しています。

ここに『神保植松遺跡』の発掘調査報告書が刊行の運びとなりましたが、発掘調査から刊行に至るまで、日本道路公団、群馬県教育委員会、吉井町教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに発掘調査・整理事業にかかわった多くの皆様のご協力とご支援に厚くお礼を申し上げます。そして、本書が地域の歴史を解明する上で、多くの方に広く活用されますことを願い序といたします。

平成８年３月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之

例　　言

1．本書は、関越自動車道（上越線）建設工事に伴い事前調査された「神保植松遺跡」の発掘調査報告書である。

2．神保植松遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字神保字植松・辻・稲荷山・仁賀久保に所在する。

3．発掘調査は、日本道路公団の委託を受けた群馬県教育委員会が、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して行われた。

4．調査期間及び担当者

(1)　発掘調査期間　昭和62年10月１日～平成元年３月31日

調査面積　31.500㎡

担 当 者　昭和62年度　鬼形芳夫、谷藤保彦、三浦茂三郎、飯塚聡、外山政子（嘱託）

昭和63年度　藤巻幸男、谷藤保彦、小島達夫、外山政子

(2)　整 理 期 間　平成６年４月１日～平成９年３月31日

担 当 者　谷藤保彦

(3)　事　　務　常務理事　白石保三郎（昭和62･63年度）、中村英一（平成６・７年度）、菅野清（平成８年度）

事務局長　井上唯雄（昭和62年度）、松本浩一（昭和63年度）、近藤　勲（平成６年度）、原田恒弘（平成７・８年度）

管理部長　田口紀雄（昭和62年度）、蜂巣　実（平成６年度～平成８年度）

研究部長　上原啓巳（昭和62･63年度）、神保侑史（平成６・７年度）、赤山容造（平成８年度）

課　　長　岸田治男（平成６・７年度）、平野進一（平成８年度）

庶 務 課　課　　長　斎藤俊一（平成６年度）、小渕　淳（平成７・８年度）

（総）　国定　均、笠原秀樹、須田朋子、吉田有光

柳岡良宏、高橋定義（平成６・７年度）、宮崎忠司（平成８年度）

非常勤務員　大沢友治

臨時職員　今井もと子、内山佳子、塩浦ひろみ、菅原淑子、角田みづほ、羽鳥京子、星野美智子、松井美智代、山口陽子、吉田恵子、若田誠

関越道上越線調査事務所長　井上　信（昭和62・63年度）

総括次長　片桐光一（昭和62・63年度）

次　　長　原田恒宏（昭和62年度）、徳江　紀（昭和63年度）

課　　長　鬼形芳夫（昭和63年度）

庶 務 課　黒沢重樹（昭和62・63年度）

臨時職員　山崎郁夫、神戸市四郎、町田康子、本城美樹

5．報告書作成関係者

本 文 執 筆　谷藤保彦、関根慎二（第４章２）、高島成侑（第４章３）

編 集 担 当　谷藤保彦

遺物写真　佐藤元彦

保存処理　関　邦一、土橋まり子、小材浩一、小沼恵子

整理補助員　礒邉佳子、大澤亜矢子、掛川智子、神谷みや子、霜田恵子、白井和子、萩原由美子、船津博子、星野春子、細井敏子、本多琴恵

6．石材鑑定は（群馬地質研究会）飯島静男氏に依頼した。

7．石器の一部の実測図作成は、㈱技研測量設計に委託し、写真実測を行った。また、遺構・遺物トレースの一部についても、㈱技研測量設計に委託した。

8．中世城郭に伴う掘立建物の分析及び復元は、高島成侑氏に依頼した。

9．中世城郭の復元図は、㈲歴史環境研究所に委託し、香川元太郎氏が作成した。

10．発掘調査及び報告書作成にあたり下記の方々より種々のご協力、ご教示をいただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）

吉井町教育委員会、浅野晴樹、今村啓爾、上田典男、梅沢重昭、大竹憲治、木下哲夫、小林謙一、設楽博己、渋谷昌彦、鈴木徳雄、高島成侑、田中耕作、寺崎裕助、戸田哲也、贄田明、服部敬史、細田勝、本田秀生、本間宏、峰岸純夫、山崎一、山下歳信、芳賀英一、若狭徹、綿田弘実、渡辺誠

11．本書を作成するにあたり、事業団職員諸氏に多くのご教示を受けた。記して感謝する次第である。

凡　　例

1．遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。座標系は国家座標第Ⅸ系である。

2．遺構断面図、等高線に付した数字は標高を表す。

3．欠番の遺構については、番号を記載し欠番と明示してある。

4．遺構の位置を示すグリッドの表記は、その遺構が面積的に最も多く掛かるグリッド名を示した。

5．遺構実測図の縮尺は基本的に次の通りである。
住居1/60、竈1/30、掘立柱建物跡1/80、土坑1/60（一部1/20）、方形周溝墓・古墳1/100（1/50）
これら以外についても、図中に縮尺を記した。

6．遺物実測図の縮尺は次の通りである。
土器1/3・1/4、石器4/5・1/2・1/3・1/4・1/6、石製品1/2・1/3、鉄製品4/5・1/2、土器の拓影図1/3、
これら以外についても、図中に縮尺を記した。

7．縄文土器のうち、図中の繊維土器と無繊維土器の区分については、土器断面に●を付してあるものが繊維土器を表す。

8．出土遺物のうち、縄文・弥生時代の土器・石器については、その出土量が多く、紙面等の都合により代表的なものを掲載した。その結果、未掲載遺物も多い。
また、本文中に掲載した遺物は、必ずしも写真図版編に掲載されてはいない。特に、遺構外遺物については、その一部を代表させている。

9．遺物の観察については、縄文・弥生時代のものは文章による記述を行い、古墳時代以降の遺物は遺物観察表を用いて記した。石器・石製品・鉄器等については、各計測表を用いて記した。

10．石器計測表での石材については、一部に略した名称を使用した。略名で記載した石材は、次の通りである。

石材名称	略名
粗粒輝石安山岩	粗輝安山岩
細粒輝石安山岩	細輝安山岩
デイサイト質凝灰岩	デイ質凝灰岩
ホルンフェルス	ホルン

目　　次

＜本文編Ⅰ・Ⅱ＞

序
例　　言
凡　　例
抄　　録

第1章　調査の概要
第1節　調査に至る経過……1
第2節　調査の方法と経過……2
第3節　調査日誌抄……4

第2章　遺跡の環境
第1節　地理的環境……6
第2節　歴史的環境……6
第3節　基本土層……11

第3章　検出された遺構と遺物
第1節　旧石器時代の遺物……12
第2節　縄文時代の遺構と遺物……14
1．住　居　跡……14
2．土　　坑……97
3．遺構外出土遺物……150
第3節　弥生時代の遺構と遺物……514
1．住　居　跡……514
2．土　　坑……519
3．遺構外出土遺物……572
第4節　弥生時代終末から古墳時代初頭および古墳時代の遺構と遺物……609
1．弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡……609
2．方形周溝墓……665
3．古墳時代後期の住居跡……681
4．古　　墳……688
第5節　平安時代の遺構と遺物……739
1．住　居　跡……739
2．土　　坑……822
3．遺構外出土土器……823
4．畠状遺構……832
第6節　中世の遺構と遺物……833
1．城郭の堀と郭……833
2．掘立建物・柵列・木戸・門跡遺構……882
3．井　　戸……973
4．竪穴状遺構……974
5．土　　坑……980
6．出土遺物……998
7．神保城（植松城）について……1057
第7節　近世土坑……1064
第8節　時期不明遺構……1065
1．土　　坑……1065
2．追加資料……1090

第4章　考　　察
1　縄文時代前期中葉土器群について……1093
2　縄文時代前期終末土器群について……1108
3　中世掘立建物について……1118

挿　図　目　次

《本文編１》

第 1 図　調査範囲及びグリッド設定図
第 2 図　遺跡位置及び周辺遺跡地図
第 3 図　基本土層模式図
第 4 図　旧石器試堀配置図
第 5 図　遺構外出土石器
第 6 図　７号住居跡平面図・出土遺物
第 7 図　７号住居跡出土遺物（１）
第 8 図　７号住居跡出土遺物（２）
第 9 図　25・30号住居跡
第 10 図　25号住居跡出土遺物
第 11 図　26（Ａ・Ｂ）・27・28・35・40・41号住居跡平面図
第 12 図　26号住居跡平面図
第 13 図　26号住居跡出土遺物（１）
第 14 図　26号住居跡出土遺物（２）
第 15 図　26号住居跡出土遺物（３）
第 16 図　26号住居跡出土遺物（４）
第 17 図　26号住居跡出土遺物（５）
第 18 図　26号住居跡出土遺物（６）
第 19 図　26号住居跡出土遺物（７）
第 20 図　26号住居跡出土遺物（８）
第 21 図　26号住居跡出土遺物（９）
第 22 図　26号住居跡出土遺物（10）
第 23 図　26号住居跡出土遺物（11）
第 24 図　26号住居跡出土遺物（12）
第 25 図　26号住居跡出土遺物（13）
第 26 図　26号住居跡出土遺物（14）
第 27 図　26号住居跡出土遺物（15）
第 28 図　26号住居跡出土遺物（16）
第 29 図　26号住居跡出土遺物（17）
第 30 図　26号住居跡出土遺物（18）
第 31 図　26号住居跡出土遺物（19）
第 32 図　26号住居跡出土遺物（20）
第 33 図　26号住居跡出土遺物（21）
第 34 図　26号住居跡出土遺物（22）
第 35 図　26号住居跡出土遺物（23）
第 36 図　26号住居跡出土遺物（24）
第 37 図　26号住居跡出土遺物（25）
第 38 図　26号住居跡出土遺物（26）
第 39 図　26号住居跡出土遺物（27）
第 40 図　26号住居跡出土遺物（28）
第 41 図　26号住居跡出土遺物（29）
第 42 図　26号住居跡出土遺物（30）
第 43 図　26号住居跡出土遺物（31）
第 44 図　26号住居跡出土遺物（32）
第 45 図　26号住居跡出土遺物（33）
第 46 図　26号住居跡出土遺物（34）
第 47 図　26号住居跡出土遺物（35）
第 48 図　26号住居跡出土遺物（36）
第 49 図　26号住居跡出土遺物（37）
第 50 図　26号住居跡出土遺物（38）
第 51 図　26号住居跡出土遺物（39）
第 52 図　26号住居跡出土遺物（40）
第 53 図　26号住居跡出土遺物（41）
第 54 図　26号住居跡出土遺物（42）
第 55 図　26号住居跡出土遺物（43）
第 56 図　26号住居跡出土遺物（44）
第 57 図　26号住居跡出土遺物（45）
第 58 図　26号住居跡出土遺物（46）
第 59 図　26号住居跡出土遺物（47）
第 60 図　26号住居跡出土遺物（48）
第 61 図　27号住居跡出土遺物（１）
第 62 図　27号住居跡出土遺物（２）
第 63 図　28号住居跡出土遺物（１）
第 64 図　28号住居跡出土遺物（２）
第 65 図　28号住居跡出土遺物（３）
第 66 図　28号住居跡出土遺物（４）
第 67 図　28号住居跡出土遺物（５）
第 68 図　28号住居跡出土遺物（６）
第 69 図　28号住居跡出土遺物（７）
第 70 図　35号住居跡出土遺物（１）
第 71 図　35号住居跡出土遺物（２）
第 72 図　35号住居跡出土遺物（３）
第 73 図　40号住居跡出土遺物
第 74 図　59・60号住居跡平面図
第 75 図　59号住居跡出土遺物
第 76 図　61号住居跡平面図
第 77 図　61号住居跡出土遺物
第 78 図　35号土坑平面図
第 79 図　770号土坑平面図
第 80 図　745・774号土坑平面図
第 81 図　縄文時代土坑平面図（１）
第 82 図　縄文時代土坑平面図（２）
第 83 図　縄文時代土坑平面図（３）
第 84 図　縄文時代土坑平面図（４）
第 85 図　縄文時代土坑平面図（５）
第 86 図　縄文時代土坑平面図（６）

第 87 図　縄文時代土坑平面図（7）
第 88 図　縄文時代土坑平面図（8）
第 89 図　土坑出土遺物（1）
第 90 図　土坑出土遺物（2）
第 91 図　土坑出土遺物（3）
第 92 図　土坑出土遺物（4）
第 93 図　土坑出土遺物（5）
第 94 図　土坑出土遺物（6）
第 95 図　土坑出土遺物（7）
第 96 図　土坑出土遺物（8）
第 97 図　土坑出土遺物（9）
第 98 図　土坑出土遺物（10）
第 99 図　土坑出土遺物（11）
第100図　土坑出土遺物（12）
第101図　土坑出土遺物（13）
第102図　土坑出土遺物（14）
第103図　土坑出土遺物（15）
第104図　土坑出土遺物（16）
第105図　土坑出土遺物（17）
第106図　土坑出土遺物（18）
第107図　土坑出土遺物（19）
第108図　土坑出土遺物（20）
第109図　土坑出土遺物（21）
第110図　土坑出土遺物（22）
第111図　土坑出土遺物（23）
第112図　土坑出土遺物（24）
第113図　土坑出土遺物（25）
第114図　土坑出土遺物（26）
第115図　土坑出土遺物（27）
第116図　遺構外出土土器（1）
第117図　遺構外出土土器（2）
第118図　遺構外出土土器（3）
第119図　遺構外出土土器（4）
第120図　遺構外出土土器（5）
第121図　遺構外出土土器（6）
第122図　遺構外出土土器（7）
第123図　遺構外出土土器（8）
第124図　遺構外出土土器（9）
第125図　遺構外　A区出土土器（1）
第126図　遺構外　A区出土土器（2）
第127図　遺構外　A区出土土器（3）
第128図　遺構外　B区出土土器（1）
第129図　遺構外　B区出土土器（2）
第130図　遺構外　C区出土土器（1）
第131図　遺構外　C区出土土器（2）
第132図　遺構外　C区出土土器（3）
第133図　遺構外　C区出土土器（4）
第134図　遺構外　C区出土土器（5）
第135図　遺構外　C区出土土器（6）
第136図　遺構外　C区出土土器（7）
第137図　遺構外　C区出土土器（8）
第138図　遺構外　C区出土土器（9）
第139図　遺構外　C区出土土器（10）
第140図　遺構外　C区出土土器（11）
第141図　遺構外　C区出土土器（12）
第142図　遺構外　C区出土土器（13）
第143図　遺構外　C区出土土器（14）
第144図　遺構外　C区出土土器（15）
第145図　遺構外　C区出土土器（16）
第146図　遺構外　C区出土土器（17）
第147図　遺構外　C区出土土器（18）
第148図　遺構外　C区出土土器（19）
第149図　遺構外　C区出土土器（20）
第150図　遺構外　C区出土土器（21）
第151図　遺構外　C区出土土器（22）
第152図　遺構外　C区出土土器（23）
第153図　遺構外　C区出土土器（24）
第154図　遺構外　C区出土土器（25）
第155図　遺構外　C区出土土器（26）
第156図　遺構外　C区出土土器（27）
第157図　遺構外　C区出土土器（28）
第158図　遺構外　C区出土土器（29）
第159図　遺構外　C区出土土器（30）
第160図　遺構外　C区出土土器（31）
第161図　遺構外　C区出土土器（32）
第162図　遺構外　C区出土土器（33）
第163図　遺構外　C区出土土器（34）
第164図　遺構外　C区出土土器（35）
第165図　遺構外　C区出土土器（36）
第166図　遺構外　C区出土土器（37）
第167図　遺構外　C区出土土器（38）
第168図　遺構外　C区出土土器（39）
第169図　遺構外　C区出土土器（40）
第170図　遺構外　C区出土土器（41）
第171図　遺構外　C区出土土器（42）
第172図　遺構外　C区出土土器（43）
第173図　遺構外　C区出土土器（44）
第174図　遺構外　C区出土土器（45）
第175図　遺構外　C区出土土器（46）
第176図　遺構外　C区出土土器（47）
第177図　遺構外　C区出土土器（48）
第178図　遺構外　C区出土土器（49）
第179図　遺構外　C区出土土器（50）
第180図　遺構外　C区出土土器（51）

第181図　遺構外　C区出土土器（52）
第182図　遺構外　C区出土土器（53）
第183図　遺構外　C区出土土器（54）
第184図　遺構外　C区出土土器（55）
第185図　遺構外　C区出土土器（56）
第186図　遺構外　C区出土土器（57）
第187図　遺構外　C区出土土器（58）
第188図　遺構外　C区出土土器（59）
第189図　遺構外　C区出土土器（60）
第190図　遺構外　C区出土土器（61）
第191図　遺構外　C区出土土器（62）
第192図　遺構外　C区出土土器（63）
第193図　遺構外　C区出土土器（64）
第194図　遺構外　C区出土土器（65）
第195図　遺構外　C区出土土器（66）
第196図　遺構外　C区出土土器（67）
第197図　遺構外　C区出土土器（68）
第198図　遺構外　C区出土土器（69）
第199図　遺構外　C区出土土器（70）
第200図　遺構外　C区出土土器（71）
第201図　遺構外　C区出土土器（72）
第202図　遺構外　C区出土土器（73）
第203図　遺構外　C区出土土器（74）
第204図　遺構外　C区出土土器（75）
第205図　遺構外　C区出土土器（76）
第206図　遺構外　C区出土土器（77）
第207図　遺構外　C区出土土器（78）
第208図　遺構外　C区出土土器（79）
第209図　遺構外　C区出土土器（80）
第210図　遺構外　C区出土土器（81）
第211図　遺構外　C区出土土器（82）
第212図　遺構外　C区出土土器（83）
第213図　遺構外　C区出土土器（84）
第214図　遺構外　C区出土土器（85）
第215図　遺構外　C区出土土器（86）
第216図　遺構外　C区出土土器（87）
第217図　遺構外　C区出土土器（88）
第218図　遺構外　C区出土土器（89）
第219図　遺構外　C区出土土器（90）
第220図　遺構外　C区出土土器（91）
第221図　遺構外　C区出土土器（92）
第222図　遺構外　C区出土土器（93）
第223図　遺構外　C区出土土器（94）
第224図　遺構外　C区出土土器（95）
第225図　遺構外　C区出土土器（96）
第226図　遺構外　C区出土土器（97）
第227図　遺構外　C区出土土器（98）
第228図　遺構外　C区出土土器（99）
第229図　遺構外　C区出土土器（100）
第230図　遺構外　C区出土土器（101）
第231図　遺構外　C区出土土器（102）
第232図　遺構外　C区出土土器（103）
第233図　遺構外　C区出土土器（104）
第234図　遺構外　C区出土土器（105）
第235図　遺構外　C区出土土器（106）
第236図　遺構外　C区出土土器（107）
第237図　遺構外　C区出土土器（108）
第238図　遺構外　C区出土土器（109）
第239図　遺構外　C区出土土器（110）
第240図　遺構外　C区出土土器（111）
第241図　遺構外　C区出土土器（112）
第242図　遺構外　C区出土土器（113）
第243図　遺構外　C区出土土器（114）
第244図　遺構外　C区出土土器（115）
第245図　遺構外　C区出土土器（116）
第246図　遺構外　C区出土土器（117）
第247図　遺構外　C区出土土器（118）
第248図　遺構外　C区出土土器（119）
第249図　遺構外　C区出土土器（120）
第250図　遺構外　C区出土土器（121）
第251図　遺構外　C区出土土器（122）
第252図　遺構外　C区出土土器（123）
第253図　遺構外　C区出土土器（124）
第254図　遺構外　C区出土土器（125）
第255図　遺構外　C区出土土器（126）
第256図　遺構外　C区出土土器（127）
第257図　遺構外　C区出土土器（128）
第258図　遺構外　C区出土土器（129）
第259図　遺構外　C区出土土器（130）
第260図　遺構外　C区出土土器（131）
第261図　遺構外　C区出土土器（132）
第262図　遺構外　C区出土土器（133）
第263図　遺構外　C区出土土器（134）
第264図　遺構外　C区出土土器（135）
第265図　遺構外　C区出土土器（136）
第266図　遺構外　C区出土土器（137）
第267図　遺構外　C区出土土器（138）
第268図　遺構外　C区出土土器（139）
第269図　遺構外　C区出土土器（140）
第270図　遺構外　C区出土土器（141）
第271図　遺構外　C区出土土器（142）
第272図　遺構外　C区出土土器（143）
第273図　遺構外　C区出土土器（144）
第274図　遺構外　C区出土土器（145）

第275図　遺構外　C区出土土器（146）
第276図　遺構外　C区出土土器（147）
第277図　遺構外　C区出土土器（148）
第278図　遺構外　C区出土土器（149）
第279図　遺構外　C区出土土器（150）
第280図　遺構外　C区出土土器（151）
第281図　遺構外　C区出土土器（152）
第282図　遺構外　C区出土土器（153）
第283図　遺構外　C区出土土器（154）
第284図　遺構外　C区出土土器（155）
第285図　遺構外　C区出土土器（156）
第286図　遺構外　C区出土土器（157）
第287図　遺構外　C区出土土器（158）
第288図　遺構外　C区出土土器（159）
第289図　遺構外　C区出土土器（160）
第290図　遺構外　C区出土土器（161）
第291図　遺構外　C区出土土器（162）
第292図　遺構外　C区出土土器（163）
第293図　遺構外　C区出土土器（164）
第294図　遺構外　C区出土土器（165）
第295図　遺構外　C区出土土器（166）
第296図　遺構外　E区出土土器（1）
第297図　遺構外　E区出土土器（2）
第298図　遺構外出土石器　石鏃（1）
第299図　遺構外出土石器　石鏃（2）
第300図　遺構外出土石器　石鏃（3）
第301図　遺構外出土石器　石鏃・石錐
第302図　遺構外出土石器　石匙
第303図　遺構外出土石器　スクレイパー（1）
第304図　遺構外出土石器　スクレイパー（2）
第305図　遺構外出土石器　スクレイパー（3）
第306図　遺構外出土石器　スクレイパー（4）
第307図　遺構外出土石器　スクレイパー（5）
第308図　遺構外出土石器　スクレイパー（6）
第309図　遺構外出土石器　打製石斧（1）
第310図　遺構外出土石器　打製石斧（2）
第311図　遺構外出土石器　打製石斧（3）
第312図　遺構外出土石器　打製石斧（4）
第313図　遺構外出土石器　打製石斧（5）
第314図　遺構外出土石器　打製石斧（6）
第315図　遺構外出土石器　打製石斧（7）
第316図　遺構外出土石器　打製石斧（8）
第317図　遺構外出土石器　打製石斧（9）
第318図　遺構外出土石器　打製石斧（10）
第319図　遺構外出土石器　磨製石斧
第320図　遺構外出土石器　石核（1）
第321図　遺構外出土石器　石核（2）
第322図　遺構外出土石器　原石
第323図　遺構外出土石器　磨石（1）
第324図　遺構外出土石器　磨石（2）
第325図　遺構外出土石器　磨石（3）
第326図　遺構外出土石器　磨石（4）
第327図　遺構外出土石器　磨石（5）
第328図　遺構外出土石器　磨石（6）
第329図　遺構外出土石器　磨石（7）
第330図　遺構外出土石器　凹石（1）
第331図　遺構外出土石器　凹石（2）
第332図　遺構外出土石器　凹石（3）
第333図　遺構外出土石器　凹石（4）
第334図　遺構外出土石器　凹石（5）
第335図　遺構外出土石器　凹石（6）
第336図　遺構外出土石器　凹石（7）
第337図　遺構外出土石器　凹石（8）
第338図　遺構外出土石器　凹石（9）
第339図　遺構外出土石器　凹石（10）
第340図　遺構外出土石器　凹石（11）
第341図　遺構外出土石器　凹石（12）
第342図　遺構外出土石器　凹石（13）
第343図　遺構外出土石器　凹石（14）
第344図　遺構外出土石器　凹石（15）
第345図　遺構外出土石器　凹石（16）
第346図　遺構外出土石器　凹石（17）
第347図　遺構外出土石器　凹石（18）
第348図　遺構外出土石器　凹石（19）
第349図　遺構外出土石器　凹石（20）
第350図　遺構外出土石器　凹石（21）
第351図　遺構外出土石器　凹石（22）
第352図　遺構外出土石器　凹石（23）
第353図　遺構外出土石器　凹石（24）
第354図　遺構外出土石器　凹石（25）
第355図　遺構外出土石器　凹石（26）
第356図　遺構外出土石器　凹石（27）
第357図　遺構外出土石器　凹石（28）
第358図　遺構外出土石器　凹石（29）
第359図　遺構外出土石器　凹石（30）
第360図　遺構外出土石器　凹石（31）
第361図　遺構外出土石器　凹石（32）
第362図　遺構外出土石器　凹石（33）
第363図　遺構外出土石器　凹石（34）
第364図　遺構外出土石器　凹石（35）
第365図　遺構外出土石器　凹石（36）
第366図　遺構外出土石器　凹石（37）
第367図　遺構外出土石器　凹石（38）
第368図　遺構外出土石器　凹石（39）

第369図　遺構外出土石器　凹石（40）
第370図　遺構外出土石器　凹石（41）
第371図　遺構外出土石器　凹石（42）
第372図　遺構外出土石器　凹石（43）
第373図　遺構外出土石器　凹石（44）
第374図　遺構外出土石器　多孔石（１）
第375図　遺構外出土石器　多孔石（２）
第376図　遺構外出土石器　多孔石（３）
第377図　遺構外出土石器　多孔石（４）
第378図　遺構外出土石器　多孔石（５）
第379図　遺構外出土石器　多孔石（６）
第380図　遺構外出土石器　多孔石（７）
第381図　遺構外出土石器　多孔石（８）
第382図　遺構外出土石器　多孔石（９）
第383図　遺構外出土石器　多孔石（10）
第384図　遺構外出土石器　多孔石（11）
第385図　遺構外出土石器　多孔石（12）
第386図　遺構外出土石器　多孔石（13）
第387図　遺構外出土石器　多孔石（14）
第388図　遺構外出土石器　多孔石（15）
第389図　遺構外出土石器　多孔石（16）
第390図　遺構外出土石器　多孔石（17）
第391図　遺構外出土石器　多孔石（18）
第392図　遺構外出土石器　多孔石（19）
第393図　遺構外出土石器　多孔石（20）
第394図　遺構外出土石器　多孔石（21）
第395図　遺構外出土石器　多孔石（22）
第396図　遺構外出土石器　多孔石（23）
第397図　遺構外出土石器　多孔石（24）
第398図　遺構外出土石器　多孔石（25）
第399図　遺構外出土石器　石皿（１）
第400図　遺構外出土石器　石皿（２）
第401図　遺構外出土石器　石皿（３）
第402図　遺構外出土石器　石皿（４）
第403図　遺構外出土石器　石皿（５）
第404図　遺構外出土石器　石皿（６）
第405図　遺構外出土石器　石皿（７）
第406図　遺構外出土石器　石皿（８）
第407図　遺構外出土石器　石皿（９）
第408図　遺構外出土石器　石棒・磨石
第409図　遺構外出土遺物　ミニチュア土器・土製品
第410図　遺構外出土遺物　土偶・岩偶
第411図　遺構外出土遺物　耳飾り・玉・垂飾り
第412図　遺構外出土遺物　垂飾り
第413図　遺構外出土遺物　土製・石製円盤
第414図　遺構外出土遺物　石製品（１）
第415図　遺構外出土遺物　石製品（２）
第416図　遺構外出土遺物　石製品（３）
第417図　遺構外出土遺物　石製品（４）
第418図　遺構外出土遺物　石製品（５）
第419図　遺構外出土遺物　石製品（６）
第420図　遺構外出土遺物　石製品（７）
第421図　51号住居跡平面図・出土遺物
第422図　65号住居跡平面図
第423図　65号住居跡出土遺物
第424図　67号住居跡平面図・出土遺物
第425図　１号土坑平面図
第426図　41号土坑平面図
第427図　159号土坑平面図
第428図　245号土坑平面図
第429図　495号土坑平面図
第430図　669号土坑平面図
第431図　670号土坑平面図
第432図　683号土坑平面図
第433図　688号土坑平面図
第434図　705・706号土坑平面図
第435図　弥生時代土坑平面図（１）
第436図　弥生時代土坑平面図（２）
第437図　弥生時代土坑平面図（３）
第438図　弥生時代土坑平面図（４）
第439図　弥生時代土坑平面図（５）
第440図　弥生時代土坑平面図（６）
第441図　弥生時代土坑平面図（７）
第442図　弥生時代土坑平面図（８）
第443図　土坑出土土器（１）
第444図　土坑出土土器（２）
第445図　土坑出土土器（３）
第446図　土坑出土土器（４）
第447図　土坑出土土器（５）
第448図　土坑出土土器（６）
第449図　土坑出土土器（７）
第450図　土坑出土土器（８）
第451図　土坑出土土器（９）
第452図　土坑出土土器（10）
第453図　土坑出土土器（11）
第454図　土坑出土土器（12）
第455図　土坑出土土器（13）
第456図　土坑出土土器（14）
第457図　土坑出土土器（15）
第458図　土坑出土土器（16）
第459図　土坑出土土器（17）
第460図　土坑出土土器（18）
第461図　土坑出土土器（19）
第462図　土坑出土土器（20）

第463図　土坑出土石器（1）
第464図　土坑出土石器（2）
第465図　土坑出土石器（3）
第466図　H区弥生時代遺物分布図
第467図　遺構外　A・B・C区出土土器（1）
第468図　遺構外　A・B・C区出土土器（2）
第469図　遺構外　A・B・C区出土土器（3）
第470図　遺構外　A・B・C区出土土器（4）
第471図　遺構外　E・F区出土土器（1）
第472図　遺構外　E・F区出土土器（2）
第473図　遺構外　H・H区B下出土土器（1）
第474図　遺構外　H・H区B下出土土器（2）
第475図　遺構外　H・H区B下出土土器（3）
第476図　遺構外　H・H区B下出土土器（4）
第477図　遺構外　H・H区B下出土土器（5）
第478図　遺構外　H・H区B下出土土器（6）
第479図　遺構外　H・H区B下出土土器（7）
第480図　遺構外　J区出土土器
第481図　遺構外表採出土土器（1）
第482図　遺構外表採出土土器（2）
第483図　遺構外表採出土土器（3）
第484図　遺構外表採出土土器（4）
第485図　遺構外表採出土土器（5）
第486図　遺構外表採出土土器（6）
第487図　遺構外表採出土土器（7）
第488図　遺構外出土石器　打製石斧（1）
第489図　遺構外出土石器　打製石斧（2）
第490図　遺構外出土石器　打製石斧（3）
第491図　遺構外出土石器　打製石斧（4）
第492図　遺構外出土石器　打製石斧（5）
第493図　遺構外出土石器　打製石斧（6）
第494図　遺構外出土石器　打製石斧（7）
第495図　遺構外出土石器　打製石斧（8）

《本文編2》

第496図　1号住居跡平面図
第497図　1号住居跡出土遺物（1）
第498図　1号住居跡出土遺物（2）
第499図　1号住居跡出土遺物（3）
第500図　1号住居跡出土遺物（4）
第501図　2号住居跡平面図
第502図　2号住居跡出土遺物（1）
第503図　2号住居跡出土遺物（2）
第504図　2号住居跡出土遺物（3）
第505図　3号住居跡平面図
第506図　3号住居跡出土遺物（1）
第507図　3号住居跡出土遺物（2）
第508図　4号住居跡平面図
第509図　4号住居跡出土遺物（1）
第510図　4号住居跡出土遺物（2）
第511図　5号住居跡平面図・出土遺物
第512図　9号住居跡平面図
第513図　9号住居跡出土遺物（1）
第514図　9号住居跡出土遺物（2）
第515図　9号住居跡出土遺物（3）
第516図　24号住居跡平面図
第517図　24号住居跡出土遺物（1）
第518図　24号住居跡出土遺物（2）
第519図　24号住居跡出土遺物（3）
第520図　24号住居跡出土遺物（4）
第521図　29号住居跡平面図・出土遺物
第522図　31号住居跡出土遺物
第523図　31号住居跡平面図
第524図　33号住居跡平面図
第525図　33号住居跡出土遺物（1）
第526図　33号住居跡出土遺物（2）
第527図　47号住居跡平面図
第528図　47号住居跡出土遺物
第529図　49号住居跡平面図・出土遺物
第530図　54号住居跡平面図
第531図　54号住居跡遺物出土状態
第532図　54号住居跡出土遺物（1）
第533図　54号住居跡出土遺物（2）
第534図　54号住居跡出土遺物（3）
第535図　54号住居跡出土遺物（4）
第536図　54号住居跡出土遺物（5）
第537図　54号住居跡出土遺物（6）
第538図　54号住居跡出土遺物（7）
第539図　58号住居跡平面図
第540図　58号住居跡出土遺物（1）
第541図　58号住居跡出土遺物（2）
第542図　58号住居跡出土遺物（3）
第543図　58号住居跡出土遺物（4）
第544図　66号住居跡平面図・出土遺物
第545図　69号住居跡平面図
第546図　1号方形周溝墓平面図
第547図　1号方形周溝墓出土遺物
第548図　2号方形周溝墓平面図
第549図　3号方形周溝墓平面図
第550図　3号方形周溝墓出土遺物
第551図　4号方形周溝墓平面図
第552図　5号方形周溝墓平面図
第553図　6号方形周溝墓平面図
第554図　5・6・7号方形周溝墓出土遺物

第555図　７号方形周溝墓平面図
第556図　８号方形周溝墓平面図
第557図　８号方形周溝墓土層断面図
第558図　９号方形周溝墓
第559図　11号住居跡平面図
第560図　12号住居跡平面図
第561図　11号住居跡出土遺物
第562図　12号住居跡出土遺物（１）
第563図　12号住居跡出土遺物（２）
第564図　１号古墳平面図
第565図　１号古墳石室平面図
第566図　１号古墳石室断面図
第567図　１号古墳出土遺物（１）
第568図　１号古墳出土遺物（２）
第569図　１号古墳出土遺物（３）
第570図　１号古墳出土遺物（４）
第571図　２号古墳地形図
第572図　２号古墳平面図
第573図　２号古墳墳丘土層断面図
第574図　２号古墳石室平面図
第575図　２号古墳石室断面図
第576図　出土埴輪（１）家形
第577図　出土埴輪（２）家形
第578図　出土埴輪（３）家形
第579図　出土埴輪（４）家形・太刀形
第580図　出土埴輪（５）盾・鞆・翳形
第581図　出土埴輪（６）翳形
第582図　出土埴輪（７）翳形
第583図　出土埴輪（８）人物
第584図　出土埴輪（９）馬形
第585図　出土埴輪（10）馬形
第586図　出土埴輪（11）朝顔
第587図　出土埴輪（12）円筒
第588図　出土埴輪（13）円筒
第589図　出土埴輪（14）円筒
第590図　出土埴輪（15）円筒
第591図　出土埴輪（16）円筒
第592図　出土埴輪（17）円筒
第593図　出土埴輪（18）円筒
第594図　出土埴輪（19）円筒
第595図　出土埴輪（20）円筒
第596図　出土埴輪（21）円筒
第597図　出土埴輪（22）円筒
第598図　出土埴輪（23）円筒
第599図　城古墳の石室と出土遺物
第600図　３号古墳平面図
第601図　８号住居跡平面図
第602図　８号住居跡出土遺物
第603図　10号住居跡平面図
第604図　10号住居跡出土遺物
第605図　14号住居跡平面図
第606図　14号住居跡出土遺物（１）
第607図　14号住居跡出土遺物（２）
第608図　14号住居跡出土遺物（３）
第609図　14号住居跡出土遺物（４）
第610図　16号住居跡平面図
第611図　17号住居跡平面図
第612図　17号住居跡出土遺物（１）
第613図　17号住居跡出土遺物（２）
第614図　18号住居跡平面図
第615図　18号住居跡出土遺物
第616図　19号住居跡平面図
第617図　19号住居跡出土遺物
第618図　20号住居跡平面図
第619図　20号住居跡出土遺物
第620図　21号住居跡平面図
第621図　21号住居跡出土遺物
第622図　22号住居跡平面図・出土遺物
第623図　32号住居跡平面図
第624図　32号住居跡カマド
第625図　32号住居跡出土遺物（１）
第626図　32号住居跡出土遺物（２）
第627図　32号住居跡出土遺物（３）
第628図　34号住居跡平面図
第629図　34号住居跡出土遺物（１）
第630図　34号住居跡出土遺物（２）
第631図　34号住居跡出土遺物（３）
第632図　36号住居跡平面図
第633図　36号住居跡カマド
第634図　36号住居跡出土遺物（１）
第635図　36号住居跡出土遺物（２）
第636図　36号住居跡出土遺物（３）
第637図　37号住居跡平面図
第638図　37号住居跡カマド・出土遺物
第639図　37号住居跡出土遺物
第640図　38・39・45号住居跡平面図
第641図　38・39・45号住居跡カマド
第642図　38・39・45号住居跡堀り方
第643図　38号住居跡出土遺物
第644図　42号住居跡平面図
第645図　42号住居跡出土遺物
第646図　43号住居跡平面図
第647図　43号住居跡出土遺物
第648図　44号住居跡平面図

第649図　44号住居跡出土遺物
第650図　48号住居跡平面図・出土遺物
第651図　50号住居跡平面図・出土遺物
第652図　52号住居跡平面図
第653図　52号住居跡出土遺物
第654図　53号住居跡平面図・出土遺物
第655図　55号住居跡平面図・出土遺物
第656図　55号住居跡出土遺物
第657図　56号住居跡平面図
第658図　56号住居跡出土遺物
第659図　57号住居跡平面図
第660図　57号住居跡出土遺物
第661図　62号住居跡平面図
第662図　63号住居跡平面図
第663図　63号住居跡出土遺物
第664図　64号住居跡平面図
第665図　68号住居跡平面図
第666図　68号住居跡カマド・住居出土遺物
第667図　90号土坑
第668図　平安時代土坑平面図
第669図　土坑出土遺物
第670図　遺構外出土遺物（1）
第671図　遺構外出土遺物（2）
第672図　遺構外出土遺物（3）
第673図　遺構外出土遺物（4）
第674図　遺構外出土遺物（5）
第675図　F区畠状遺構図
第676図　各郭の呼称図
第677図　1号堀平面図
第678図　1号堀土層断面図
第679図　1号堀断面図（1）
第680図　1号堀断面図（2）
第681図　2号堀（東側）平面図
第682図　2号堀（東側）土層断面図
第683図　2号堀（西側）平面図
第684図　2号堀（西側）断面図
第685図　3・5号堀平面図
第686図　3・5号堀土層断面図
第687図　4号堀平面・土層断面図
第688図　6号堀（西側）平面図
第689図　6号堀（北側）平面図
第690図　6号堀（西側南部）平面図
第691図　6号堀断面図
第692図　6号堀（西側北部）平面図
第693図　7号堀平面図
第694図　7号堀断面図
第695図　橋脚遺構平面図
第696図　橋脚遺構出土木製品（礎板）
第697図　土橋（1号堀）
第698図　土居下遺物出土状態平面図
第699図　掘立建物遺構配置図（1）
第700図　掘立建物遺構配置図（2）
第701図　掘立建物遺構配置図（3）
第702図　掘立建物遺構配置図（4）
第703図　掘立建物遺構配置図（5）
第704図　掘立建物遺構配置図（6）
第705図　掘立建物遺構柱間計測図（1）
第706図　掘立建物遺構柱間計測図（2）
第707図　掘立建物遺構柱間計測図（3）
第708図　掘立建物遺構柱間計測図（4）
第709図　掘立建物遺構柱間計測図（5）
第710図　掘立建物遺構柱間計測図（6）
第711図　1号掘立建物遺構平面図
第712図　2号掘立建物遺構平面図
第713図　3号掘立建物遺構平面図
第714図　4号掘立建物遺構平面図
第715図　5号掘立建物遺構平面図
第716図　7号掘立建物遺構平面図
第717図　8号掘立建物遺構平面図
第718図　10号掘立建物遺構平面図
第719図　9号掘立建物遺構平面図
第720図　11号掘立建物遺構平面図
第721図　11号掘立建物遺構断面図
第722図　12号掘立建物遺構平面図
第723図　13号掘立建物遺構平面図
第724図　14号掘立建物遺構平面図
第725図　15号掘立建物遺構平面図
第726図　16号掘立建物遺構平面図
第727図　17号掘立建物遺構平面図
第728図　19号掘立建物遺構平面図
第729図　20号掘立建物遺構平面図
第730図　21号掘立建物遺構平面図
第731図　22・23号掘立建物遺構平面図
第732図　24号掘立建物遺構平面図
第733図　25号掘立建物遺構平面図
第734図　26号掘立建物遺構平面図
第735図　29号掘立建物遺構平面図
第736図　27号掘立建物遺構平面図
第737図　28号掘立建物遺構平面図
第738図　30号掘立建物遺構平面図
第739図　30号掘立建物遺構断面図
第740図　31号掘立建物遺構平面図
第741図　32号掘立建物遺構平面図
第742図　33号掘立建物遺構平面図

第743図　34号掘立建物遺構平面図
第744図　35号掘立建物遺構平面図
第745図　36号掘立建物遺構平面図
第746図　37号掘立建物遺構平面図
第747図　38号掘立建物遺構平面図
第748図　39号掘立建物遺構平面図
第749図　40号掘立建物遺構平面図
第750図　41号掘立建物遺構平面図
第751図　42号掘立建物遺構平面図
第752図　43号掘立建物遺構平面図
第753図　44号掘立建物遺構平面図
第754図　48号掘立建物遺構平面図
第755図　46号掘立建物遺構平面図
第756図　49号掘立建物遺構平面図
第757図　50号掘立建物遺構平面図
第758図　51号掘立建物遺構平面図
第759図　52号掘立建物遺構平面図
第760図　53号掘立建物遺構平面図
第761図　54号掘立建物遺構平面図
第762図　55号掘立建物遺構平面図
第763図　56号掘立建物遺構平面図
第764図　57号掘立建物遺構平面図
第765図　58号掘立建物遺構平面図
第766図　59号掘立建物遺構平面図
第767図　60号掘立建物遺構平面図
第768図　61号掘立建物遺構平面図
第769図　62号掘立建物遺構平面図
第770図　1・2号柵（柱列）遺構平面図（1）
第771図　3・4・5号柵（柱列）遺構平面図（2）
第772図　6・7号柵（柱列）遺構平面図（3）
第773図　8・9・10号柵（柱列）遺構平面図（4）
第774図　B区1・2・3号柵（柱列）遺構平面図（5）
第775図　11号柵（柱列）遺構平面図（6）
第776図　2・4号井戸遺構平面図
第777図　3号井戸遺構平面図
第778図　3号井戸遺構断面図
第779図　5号井戸遺構平面図
第780図　1号竪穴遺構平面図
第781図　2・3号竪穴遺構平面図
第782図　4号竪穴遺構平面図
第783図　5号竪穴遺構平面図
第784図　181号土坑平面図（中世火葬墓）
第785図　225号土坑平面図
第786図　235・281号土坑平面図
第787図　458号土坑平面図
第788図　459号土坑平面図
第789図　459・460号土坑平面図
第790図　中世土坑平面図（1）
第791図　中世土坑平面図（2）
第792図　中世土坑平面図（3）
第793図　中世土坑平面図（4）
第794図　中世土坑平面図（5）
第795図　中世土坑平面図（6）
第796図　中世土坑平面図（7）
第797図　中世土坑平面図（8）
第798図　中世土坑平面図（9）
第799図　中世出土遺物　内耳鍋（1）
第800図　中世出土遺物　内耳鍋（2）
第801図　中世出土遺物　内耳鍋（3）
第802図　中世出土遺物　内耳鍋（4）
第803図　中世出土遺物　内耳鍋（5）
第804図　中世出土遺物　内耳鍋（6）
第805図　中世出土遺物　内耳鍋（7）
第806図　中世出土遺物　内耳鍋（8）
第807図　中世出土遺物　内耳鍋（9）
第808図　中世出土遺物　内耳鍋（10）
第809図　中世出土遺物　内耳鍋（11）
第810図　中世出土遺物　擂鉢（1）
第811図　中世出土遺物　擂鉢（2）
第812図　中世出土遺物　擂鉢（3）
第813図　中世出土遺物　擂鉢（4）
第814図　中世出土遺物　カワラケ（1）
第815図　中世出土遺物　カワラケ（2）・香炉・火鉢
第816図　中世出土遺物　磁器
第817図　古銭
第818図　鉄製品（1）
第819図　鉄製品（2）
第820図　石臼（1）
第821図　石臼（2）
第822図　石臼（3）
第823図　石臼（4）
第824図　石臼（5）
第825図　凹石
第826図　板碑（1）
第827図　板碑（2）
第828図　板碑（3）
第829図　板碑（4）
第830図　板碑（5）
第831図　板碑（6）
第832図　板碑（7）
第833図　板碑（8）
第834図　板碑（9）
第835図　板碑（10）
第836図　板碑（11）

第837図　板碑（12）
第838図　五輪塔（１）
第839図　五輪塔（２）
第840図　五輪塔（３）
第841図　五輪塔（４）
第842図　第５地点平面図と本調査地との位置関係
第843図　城郭縄張り図
第844図　城郭推定縄張り図
第845図　近世土坑平面図
第846図　時期不明土坑平面図（１）
第847図　時期不明土坑平面図（２）
第848図　時期不明土坑平面図（３）
第849図　時期不明土坑平面図（４）
第850図　時期不明土坑平面図（５）
第851図　時期不明土坑平面図（６）
第852図　時期不明土坑平面図（７）
第853図　時期不明土坑平面図（８）
第854図　時期不明土坑平面図（９）
第855図　時期不明土坑平面図（10）
第856図　時期不明土坑平面図（11）
第857図　時期不明土坑平面図（12）
第858図　時期不明土坑平面図（13）
第859図　時期不明土坑平面図（14）
第860図　時期不明土坑平面図（15）
第861図　時期不明土坑平面図（16）
第862図　時期不明土坑平面図（17）
第863図　時期不明土坑平面図（18）
第864図　時期不明土坑平面図（19）
第865図　時期不明土坑平面図（20）
第866図　時期不明土坑平面図（21）
第867図　縄文時代　埋甕
第868図　主な施文法と出土状況
第869図　北関東における有尾式土器変遷図
第870図　大形菱形文系土器群段階変遷図
第871図　諸磯ｂ式・下島式・諸磯ｃ式土器
第872図　下島武土器
第873図　諸磯ｃ式・鋸歯状貼付文土器
第874図　晴ヶ峯式・十三菩提式・異系統の土器
第875図　下島式・諸磯式土器の系譜
第876図　主な掘立柱建物の構造（１）
第877図　主な掘立柱建物の構造（２）
第878図　27号掘立柱建物復元図
第879図　11号掘立柱建物復元図
第880図　28号掘立柱建物復元図
第881図　12号掘立柱建物復元図

表　目　次

《本文編１》
表１　周辺の主要遺跡
表２　石器計測表
表３　７号住居跡出土石器計測表
表４　25号住居跡出土石器計測表
表５　26号住居跡出土石製品計測表
表６　26号住居跡出土石器計測表
表７　27号住居跡出土石器計測表
表８　28号住居跡出土石器計測表
表９　35号住居跡出土石器計測表
表10　40号住居跡出土石器計測表
表11　縄文時代土坑一覧表
表12　25号土坑出土石器計測表
表13　35号土坑出土石器計測表
表14　212号土坑出土石器計測表
表15　268号土坑出土石器計測表
表16　282号土坑出土石器計測表
表17　288号土坑出土石器計測表
表18　289号土坑出土石器計測表
表19　290号土坑出土石器計測表
表20　304号土坑出土石器計測表
表21　306号土坑出土石器計測表
表22　308号土坑出土石器計測表
表23　328号土坑出土石器計測表
表24　340号土坑出土石器計測表
表25　346号土坑出土石器計測表
表26　351号土坑出土石器計測表
表27　408号土坑出土石器計測表
表28　676号土坑出土石器計測表
表29　745号土坑出土石器計測表
表30　761号土坑出土石器計測表
表31　763号土坑出土石器計測表
表32　767号土坑出土石器計測表
表33　770号土坑出土石器計測表
表34　774号土坑出土石器計測表
表35　遺構外出土石鏃計測表
表36　遺構外出土石錐計測表
表37　遺構外出土石匙計測表
表38　遺構外出土スクレイパー計測表
表39　遺構外出土打製石斧計測表
表40　遺構外出土磨製石斧計測表
表41　遺構外出土石核計測表
表42　遺構外出土磨石計測表
表43　遺構外出土凹石計測表
表44　遺構外出土多孔石計測表
表45　遺構外出土石皿計測表
表46　遺構外出土石棒計測表
表47　遺構外出土ミニチュア土器計測表
表48　遺構外出土土・岩偶計測表
表49　遺構外出土耳飾り・玉・垂飾り計測表
表50　遺構外出土土・石製円盤計測表
表51　遺構外出土石製品Ⅰ類計測表
表52　遺構外出土石製品Ⅱ類計測表
表53　遺構外出土石製品Ⅲ類計測表
表54　65号住居跡出土石器計測表
表55　弥生時代土坑一覧表
表56　21号土坑出土石器計測表
表57　245号土坑出土石器計測表
表58　492号土坑出土石器計測表
表59　513号土坑出土石器計測表
表60　568号土坑出土石器計測表
表61　569号土坑出土石器計測表
表62　670号土坑出土石器計測表
表63　671号土坑出土石器計測表
表64　680号土坑出土石器計測表
表65　683号土坑出土石器計測表
表66　688号土坑出土石器計測表
表67　721号土坑出土石器計測表
表68　722号土坑出土石器計測表
表69　749号土坑出土石器計測表
表70　遺構外出土打製石斧計測表

《本文編２》
表71　１号住居跡出土石器計測表
表72　２号住居跡出土石器計測表
表73　４号住居跡出土石器計測表
表74　９号住居跡出土石器計測表
表75　24号住居跡出土石器計測表
表76　31号住居跡出土石器計測表
表77　33号住居跡出土石器計測表
表78　47号住居跡出土石器計測表
表79　54号住居跡出土石器計測表
表80　58号住居跡出土石器計測表
表81　66号住居跡出土石器計測表
表82　１号方形周溝墓出土土器観察表
表83　３号方形周溝墓出土土器観察表
表84　５・６・７号方形周溝墓出土土器観察表
表85　11号住居跡出土土器観察表

表86　12号住居跡出土土器観察表
表87　1号古墳出土遺物観察表
表88　遺構外出土埴輪観察表
表89　8号住居跡出土土器観察表
表90　10号住居跡出土土器観察表
表91　14号住居跡出土土器観察表
表92　17号住居跡出土土器観察表
表93　18号住居跡出土土器観察表
表94　19号住居跡出土土器観察表
表95　20号住居跡出土土器観察表
表96　21号住居跡出土土器観察表
表97　22号住居跡出土土器観察表
表98　32号住居跡出土土器観察表
表99　34号住居跡出土土器観察表
表100　36号住居跡出土土器観察表
表101　37号住居跡出土土器観察表
表102　38号住居跡出土土器観察表
表103　42号住居跡出土土器観察表
表104　43号住居跡出土土器観察表
表105　44号住居跡出土土器観察表
表106　48号住居跡出土土器観察表
表107　50号住居跡出土土器観察表
表108　52号住居跡出土土器観察表
表109　53号住居跡出土土器観察表
表110　55号住居跡出土土器観察表
表111　56号住居跡出土土器観察表
表112　57号住居跡出土土器観察表
表113　63号住居跡出土土器観察表
表114　68号住居跡出土土器観察表
表115　平安時代土坑一覧表
表116　89・90号土坑出土土器観察表
表117　遺構外出土土器観察表
表118　中世土坑一覧表
表119　中世遺物観察表
表120　古銭観察表
表121　鉄製器観察表
表122　石臼観察表
表123　凹石計測表
表124　板碑観察表
表125　五輪塔観察表
表126　近世土坑一覧表
表127　時期不明土坑一覧表

抄　　録

1．遺跡の概略

本遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字神保に位置する。遺跡の発掘調査は、昭和62年10月１日から開始され、平成元年３月31日を以て終了した。遺跡は、調査前より中世城郭の「植松城」、神保古墳群の支群となる古墳群、弥生時代の遺物散布地として周知の複合遺跡であり、調査では縄文時代から中世に至る各時代の遺構が検出された。縄文時代の遺構には、竪穴住居跡や多くの土坑があり、包含層中よりは前期から中期の多量の土器・石器が出土した。特に前期中葉から中期初頭にかかる土器は、従来の群馬県内での不明な時期を充足させる良好な資料であり、併せて周辺地域からの土器の混在には、注目すべき点がある。弥生時代では、中期の土坑群が主体をなし、土坑内からは多くの土器が出土している。「岩櫃式土器」に関わる土器群であり、今後の土器研究に重要な資料として位置づけられるものと考えられる。また本遺跡は、古墳時代初頭の集落でもあり、出土した土器群は弥生時代終末期を含めた在地的な様相を知る上で、良好な資料である。さらに、中世城郭「植松城」については、その主要部分が調査対象となったため、ほぼその全様が解明されるに至った。特に掘立建物のあり方等から、居館城としての性格が強く、この地の有力郷族とされる「神保」氏との関係が問われる。

2．遺構数量

旧石器時代	槍先形尖頭器　３点
縄文時代	竪穴住居跡　12軒、土坑　81基、埋設土器　５基、包含層（出土遺物多量）
弥生時代	竪穴住居跡　２軒、土坑　77基、包含層（出土遺物多量）
古墳時代初頭	竪穴住居跡　16軒、方形周溝墓　９基
古墳時代後期	竪穴住居跡　２軒、古墳　３基
平安時代	竪穴住居跡　32軒、土坑　７基
中世	城郭　１、掘立建物　62棟、竪穴遺構　５基、土坑 142基、井戸　４基
時期不明	土坑 250基、溝

3．ま と め

調査地内からは、旧石器時代の遺物を始め、縄文時代早・前・中・晩期、弥生時代中期、古墳時代初頭、古墳時代中期の遺構・遺物から、各時代の集落が営まれたことが判明した。さらに、平安時代の集落の存在からは、当地に置かれた「韓級郷」に関連し、中世においては在地郷族の居館としての城郭が築かれるに至った。

第１章　調査の概要

第１節　発掘調査に至る経緯

首都圏と上信越地方を結ぶ関越自動車道上越線（上信越自動車道）は、東京都練馬から群馬県藤岡市までは関越自動車道新潟線と併用し、藤岡 JC から藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・妙義町・松井田町・下仁田町を経由して長野県佐久市に至り、長野県内を通過して新潟県上越市までの約280㎞に及ぶ高速自動車道である。平成５年３月に藤岡インターから佐久インター間の69㎞が開通するところとなったが、この上越線建設事業にかかわり多くの遺跡が発掘調査された。その調査に至る経緯を要約すると次のとおりである。

１）発掘調査に至るまでの経過

関越自動車道上越線の路線決定は、昭和47年に群馬県藤岡市～長野県佐久市間の基本計画が策定され、同54年に建設大臣から日本道路公団へ施行命令を行われている。昭和56年には藤岡市・吉井町・甘楽町・富岡市・下仁田町・松井田町（東部）の路線、同57年には松井田町・下仁田町（西部）・長野県佐久市までの路線が発表された。

群馬県教育委員会では、路線内の文化財に対応するため、昭和49年度に県企画部幹線交通対策課に対して、路線文化財保護法の遵守、指定文化財をさける等、文化財に関係する事項について協議を行った。昭和55年、群馬県教育委員会（文化財保護課）は路線及びその周辺の埋蔵文化財包蔵地の調査を実施した。その結果は同年３月藤岡市～松井田町間、同年11月に松井田町～下仁田町間の包蔵地としてまとめ、群馬県（企画部交通対策課）から「関越自動車道上越線関連公共事業調査報告書」として報告した。

昭和59年、建設事業の具体化に伴い、日本道路公団から埋蔵文化財の取り扱いについての依頼を受けた県教委文化財保護課は路線内の詳細な分布調査を行った。昭和60年、県教委文化財保護課は分布調査の結果に基づき、包蔵地を濃い分布地、淡い分布地、試掘調査を必要とする地域に区分し、発掘調査想定面積を約100万㎡、55遺跡とする回答を日本道路公団に行った。また、調査の基本方針を次のように策定した。

①発掘調査は昭和61～66年の６年間とする（後に平成２年までの５年間に変更）。

②発掘調査の中核機関となる財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が藤岡市～富岡市の約76万㎡を担当し、他の22万㎡は関係市町村で調査会を組織し対応する。

③埋文事業団は発掘調査の円滑化を図るため上越線調査事務所を開設し、整理事業も合わせて行うものとする。なお、調査の実施にあたり、日本道路公団と県教委は年度毎に委託契約を締結する。県教育委員会はそれを受けて埋文事業団、関係市町村の遺跡調査会に対して再委託契約を締結するものとした。

２）神保植松遺跡の発掘調査

県教委の再委託を受けた群馬県埋蔵文化財調査事業団は、昭和61年４月、多野郡吉井町南陽台に「上越線調査事務所」を開所した。発掘調査の体制は、初年度には４班15人体制としたが、その後、調査体制の拡充・整備につとめ、最終年度にあたる平成２年には12班45人体制に増員している。

路線内の文化財包蔵地にあたる多野郡吉井町神保に所在する植松遺跡（神保植松遺跡）は、中世居館跡の植松城、神保古墳群、弥生時代の遺物散布地として周知された複合遺跡である。本遺跡の発掘調査は、大沢川等の橋梁工事にかかわる道路公団の要請にかかわり、当初の調査計画を変更して、昭和62年10月から平成元年３月末の１年５ヶ月にわたり実施するところとなった。

第２節　調査の方法と経過

１．調査の方法

本遺跡の調査範囲は、大沢川の西側台地上の全長約400mが対象となっており、調査区内は高低差に富み、さらに取り付け道路等により複雑な形を呈している。

調査は、調査区の東側に位置する中世城郭「神保城」（植松城）の存在が予め知られていたことから、この城郭の調査から開始された。グリッドの設定にあたっては、城郭調査当初は路線に平行するように任意に10m四方の方眼を城郭のみに設定していたが、途中の段階で国家座標に合わせた設定に変更した。この国家座標を基としたグリッドの設定は、基点を調査区の南東（国家座標、ｘ＝26700.00、ｙ＝76600.00）に取り、調査範囲全体を覆うように４ｍの方眼を組むこととした。グリッドの呼称については、基点を０－０とし、ｘ軸方向に北へ０、１、２、３・・・、ｙ軸方向に西へ０、１、２、３・・・と設定し、その南東の交点をもってグリッド名とした。なお、その呼称はｘ軸―ｙ軸とした。

また、グリッドの設定とは別に、調査の進展の上から調査範囲全体を地形等を考慮し、小単位の調査区（Ａ～Ｋ）に分割し調査区の呼称を行った。

遺構等の図面の作成にあたっては、20分の１を原則としたが、城郭にかかわる図面等に関しては40分の１で作成している。また、住居跡の竈、土坑の一部等については10分の１とした。最終的な遺構の全体図については、100分の１で図化を行った。なお、城郭の図化にあたっては、調査期間の短縮という面から委託による航空測量を行った。

２．調査の経過

発掘調査は、道路公団側からの強い要望に応える形で、年度途中にして他遺跡の調査を切り上げ、昭和62年10月１日から本遺跡の調査に着手することとなった。道路公団側の大沢川等にからむ橋梁工事のために優先して調査を行ってほしいということであったため、調査区の東側に位置する中世城郭から調査が開始された。

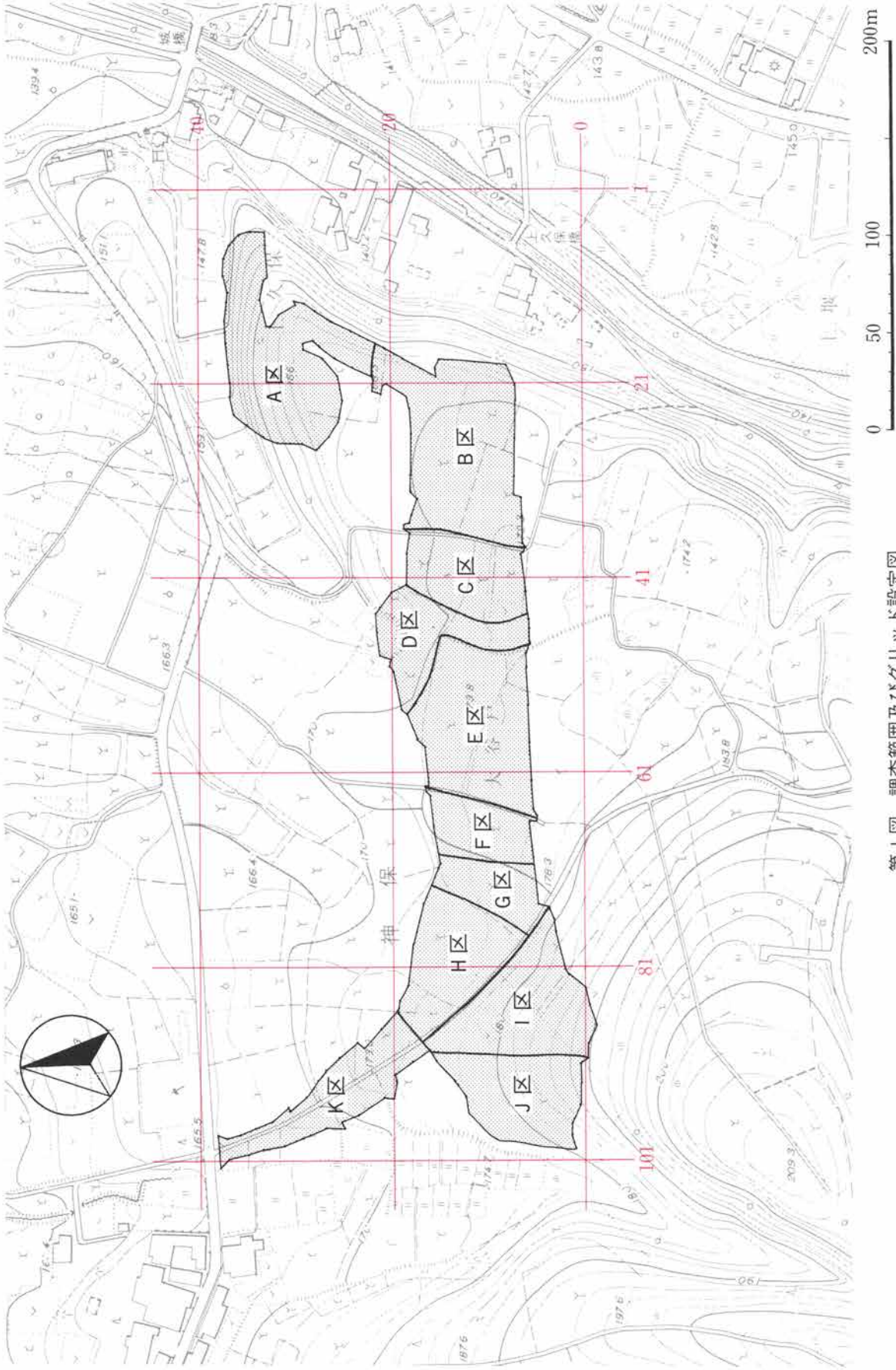
城郭の調査は、Ａ区からＤ区とした部分が対象となり、表土除去の後の遺構確認の結果から堀および各郭の存在が明かとなった。この確認調査により、城郭の約２分の１、主郭の約３分の２が調査対象となることになった。内堀の調査が先行され、調査が開始された。内・外堀の調査の後、外郭そして内郭の調査へと進み、区画された内郭内には複数に重複した掘立建物跡が検出されたとともに、内土塁、柵、木戸、土橋、井戸、暗渠、土坑等の城郭に伴う遺構・遺物が数多く検出された。

このＡ区からＤ区の城郭調査の終了後は、奈良・平安時代、古墳及び古墳時代、弥生時代、縄文時代への調査へと移り、多くの遺構・遺物を検出した。特にＣ区とした部分では、城郭築城に伴う盛り土が成されていたため、それ以前の時代の遺構・遺物の残存状況がきわめて良好な状態にあり、縄文時代の包含層に至っては、膨大な量の遺物が出土した。

なお、城郭調査の途中で、昭和63年度へと調査が継続された。

続いてＥ・Ｆ区の調査では、城郭外部にあたる部分でもあり、築城に伴う盛り土等の整地や、複数の掘立建物跡、多くの土坑・溝等が検出されたほか、古墳時代の方形周溝墓・古墳、弥生時代の土坑、縄文時代の包含層等の多くの遺構が検出された。

Ｇ・Ｈ区については、谷地部にあたることから調査の必要性が問われていたが、県教育委員会（文化財保



第１図　調査範囲及びグリッド設定図

護課）による試掘調査の結果、調査対象地とされた。調査では、古代の畠跡の他、古墳時代から平安時代にかけての遺物包含層、ならびに弥生時代の遺物包含層が検出され、多くの遺物が出土した。

Ｉ・Ｊ区は調査範囲の西側の尾根にあたり、Ｉ区とした尾根の東斜面には、中世の土坑、平安時代の住居跡、さらには弥生時代中期の土坑墓群が多く検出された。Ｊ区とした尾根の西斜面では、中世の竪穴状遺構等が検出されている。

さらに調査範囲全体の中で、ローム層が堆積している台地上については、旧石器時代の遺構・遺物の確認のための試掘調査を行ったが、遺構の確認はできなかった。

昭和62年10月から平成元年３月末までの１年半の本遺跡の調査の結果、検出された主な遺構には縄文時代から平安時代にかけての住居跡69軒、縄文時代から中世までの土坑約770基、溝37条、古墳時代の方形周溝墓９基、古墳３基、中世城郭、城郭に伴うないしは中世の掘立建物62棟、柱穴多数、井戸５基、さらに縄文・弥生時代の遺物包含層等がある。出土した遺物は、縄文時代から中世までの土器･陶器類が約300箱、石器類が約350箱を数える。

調査期間中、道路公団側からの工事工程上の要望により、工事用道路用地の先行調査・引渡し等はあったが、平成元年３月末をもって発掘調査の作業を終了した。

第３節　調査日誌抄

昭和62年度

10月１日　本日より作業開始。調査区内の重機による桑の抜根。

10月９日　城郭（Ｂ区）の表土掘削を開始する。

10月12日　Ｂ区の遺構確認を開始する。

10月26日　栗崎八幡遺跡の調査を終了し、全員植松遺跡に合流。この日より本格的に調査を開始する。

11月１日　１号および２・３号堀（内堀）の調査を開始する。

11月19日　吉井町資料館友の会来訪。

12月３日　Ｄ区６号・７号堀（外堀）の調査を開始する。

12月12日　Ａ区の遺構確認および６号堀（外堀）の調査を始める。

12月25日　年内の作業終了、調査区内の整理および安全対策を行う。

１月６日　年明けの作業開始。

１月14日　業者委託により国家座標にあわせたグリッドの設定、および杭打ちを行う。

１月18日　この日より担当の鬼形は他の遺跡の試掘調査へ出向、代わりに安坪遺跡より飯塚が担当となる。

１月20日　未買収地の件で、道路公団と打ち合せ。

１月25日　道路公団と地権者が来訪。

２月３日　県教委文化財保護課長視察。

２月８日　安坪遺跡より作業員の応援を受ける。

２月22日　奈良女子大学の村田修三先生来訪。

２月21日　この日より井出遺跡の調査を終えた三浦が本遺跡の担当として帰任､飯塚は安坪遺跡へ帰任する。

３月３日　中世城郭について、業者委託による航空測量を行う。

３月７日　工事用道路の件で、文化財保護課と協議を行う。

３月８日　文化財保護課により、Ｇ・Ｈ区の工事用道路範囲の試掘調査を開始する。

３月10日　Ａ区の方形周溝墓・住居跡等の調査を開始する。

３月23日　昭和62年度の発掘作業終了日。調査区内の整理および安全対策を行う。

昭和63年度

４月12日　昨年度の継続で、発掘作業を開始する。

４月15日　事務局長視察。堀の安全対策について指示を受ける。

４月19日　道路公団、工事企業体との三者で、調査区内の農道復元について協議を行う。城郭に伴う堀の埋め戻しを始める。

５月11日　Ｃ区の平安時代以前の遺構確認を始める。その結果、多くの遺構の存在が予測される。

５月20日　道路公団、文化財保護課との三者で、調査工程についての協議を行う。この協議の中で、工事用道路範囲の先行調査、および早期引渡しが議題となる。

５月25日　この日より工事用道路の先行調査のため、Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ区の調査を開始する。

６月３日　工事用道路について三者協議を行う。

６月14日　Ｈ区の調査が進められている中、谷地部の斜面に弥生時代中期の遺物包含層の存在が確認される。

７月４日　この日から隣接する神保富士塚遺跡より、作業員の応援を受ける。

７月15日　峰岸純夫先生が来訪。

７月25日　工事用道路範囲を含めた第１期分の引渡しとなるＦ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｊ区の調査がほぼ終了し、Ｅ区の調査を開始する。

８月４日　Ｅ区の工事用道路範囲の調査を終え、同範囲の旧石器時代の試掘調査を開始する。

８月８日　第２期の引渡し部分であるＥ区の工事用道路範囲を引き渡す。これよりＡ・Ｂ・Ｃ区の調査を再開させ、工事用道路範囲を先行させる。

10月19日　Ｂ・Ｃ区の工事用道路範囲の全ての調査が終了する。この工事用道路範囲の調査終了により、Ｂ区の城郭の主郭部およびＡ・Ｃ区を主体に調査を全面展開させる。

11月４日　文化財保護課長視察。

11月10日　Ｂ区主郭部の掘立建物の調査を開始する。

11月30日　Ａ区の旧石器時代の試掘調査を開始する。併せて、Ｉ・Ｊ区の本線部分の調査を開始する。

12月10日　Ｂ区の城郭主郭部の航空測量を行う。

12月26日　年内の作業終了日。調査区内の整理および安全対策を行う。

12月27日　八戸工業大学高島成侑先生から、主郭部内の掘立建物について指導を受ける。

１月６日　年明けの作業開始。隣接する多胡蛇黒遺跡より、作業員の応援を受ける。

１月９日　Ｆ区からＫ区の本線部分の調査を始める。

１月18日　Ｉ・Ｊ・Ｋ区について、気球による写真撮影を行う。

２月１日　Ｈ区において縄文時代前期の遺物包含層が確認され、この部分に調査を集中させる。

２月14日　Ｆ区からＫ区までの調査を終了。Ｅ区２号古墳の調査を始める。

３月１日　Ｂ区の旧石器の試掘調査を開始する。Ｅ区の方形周溝墓の調査に集中する。

３月10日　Ｃ区の縄文時代の遺物包含層の調査に集中するが、遺物の出土量が極めて多い。

３月15日　矢田遺跡から作業員の応援を受け、調査終了に向けＣ・Ｅ区の調査に集中する。

３月29日　Ｃ・Ｅ区の旧石器時代の試掘調査を終了し、この日をもって植松遺跡の発掘調査を終了する。

第２章　遺跡の環境

第１節　地理的環境

神保植松遺跡は、群馬県多野郡吉井町大字神保字植松他に所在し、北側約３kmを東流する鏑川の右岸上位段丘上にある。この段丘は下位丘陵への変換点にあたり、北流し鏑川にそそぐ東の大沢川、西の安坪川に挟まれ、小河川の侵食によって形成された起伏に富んだ地形が展開し、舌状台地が多くみられる。遺跡は、この台地の東側にあたり、大沢川の左岸台地上に位置する。吉井町の中心部から、南側へ約1.5kmほどの所にあたる。

遺跡地内にはいくつかの小谷地が見られ、遺跡の西側は南に位置する稲荷山から北へ延びる馬の背状の丘陵が発達しているため、起伏に富んだ地形となっている。対象的に、遺跡の東側に位置する中世城郭の周辺は、比較的平坦な場所となっている。調査範囲は、高速道路の路線内であるため東西に細長く延び、前述したような南から北へ延びるいくつかの丘陵性の台地を横切る形となっている。こうした地形の差が、調査を難しくさせると共に、検出される遺構の時期や種類等にも違いが認められるようである。

この地域を流れる鏑川は、長野県との境にその源を発し、県西部をやや蛇行しながら西から東へ流れ、高崎市倉賀野付近で烏川と合流し、さらに利根川へと至る。この鏑川が作用して形成されたのが、下仁田町、富岡市、甘楽町、吉井町、藤岡市の各市町が所在する通称「甘楽の谷」である。本遺跡が所在する吉井町は、日本三古碑の一つで国指定史跡である「多胡碑」で知られ、古代史研究の上からも注目されている地域でもある。また、遺跡の東方約500mには、西暦711年（和銅４年）にこの地に置かれたと言われる「韓級郷」の名を残していると考えられている「辛科神社」が鎮座している。

吉井町の中にあって、本遺跡の周辺は養蚕業などを中心とした典型的な農村地帯であったが、昨今の高速道路建設に伴い宅地造成やゴルフ場建設など、にわかに開発の波が押し寄せてきており、高速道路の開通後はさらに開発の勢いが増すものと予想される。

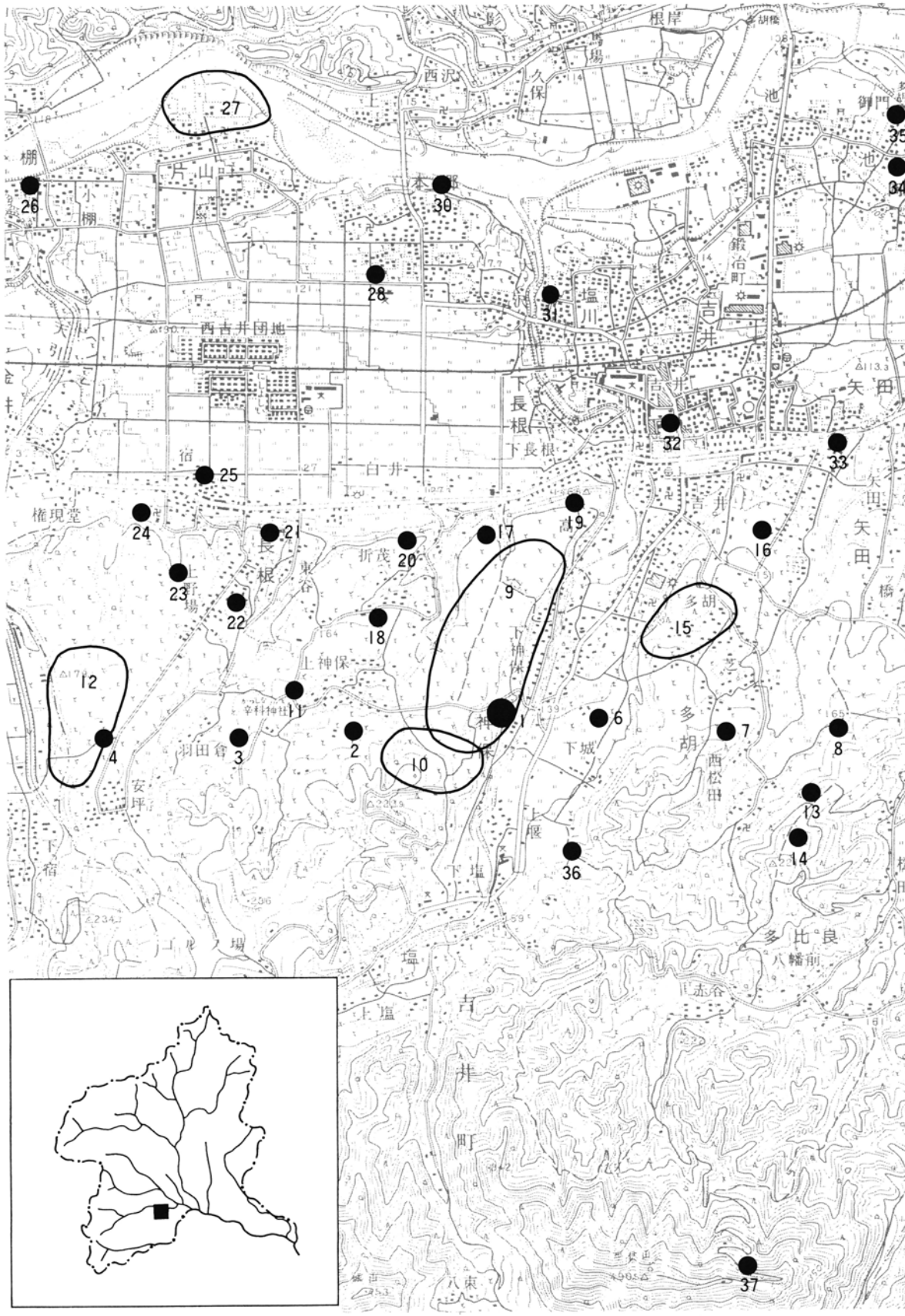
第２節　歴史的環境

本遺跡の地形的な概観は、前述した通りである。こうした地形を有するこの地域には、旧石器時代から現在に至るまでの数多くの遺跡が存在している。

旧石器時代

これまで県西部地域での調査例は少なく、代表的な遺跡には藤岡市北山遺跡等の数遺跡を上げるにとどまっていたが、今回の上越線の調査により数カ所の遺跡で旧石器の存在が確認された。A.T 降下以前の石器を出土させた遺跡には、甘楽町に所在する天引狐崎遺跡、天引向原遺跡、白倉下原遺跡、吉井町栗崎八幡遺跡の調査が相次ぎ、本遺跡の西側に隣接する神保富士塚遺跡では、比較的上層の As-AP に絡む石器群である。この他にも、矢田遺跡、多比良遺跡等においても、ローム層中からの石器が出土している。

また、吉井町誌（1974）には、本遺跡から表採された槍先形尖頭器が掲載され紹介されている。



第２図　遺跡位置及び周辺遺跡地図

表１　周辺の主要遺跡

No.	遺跡名	遺跡の概要	備考
1	神保植松遺跡	戦国時代の城郭、江戸期の建物跡、奈良・平安時代の住居跡30軒、古墳時代の住居跡17軒、弥生時代の住居跡７軒、土坑約50基、再葬墓５基、縄文時代の住居跡13軒。	昭和62年　群埋文調査
2	神保富士塚遺跡	弥生時代中期の土坑、古墳時代から平安時代にかけての住居跡、土坑、溝等。	昭和62年　群埋文調査
3	長根羽田倉遺跡	古墳時代後期から平安時代にかけての住居跡、土坑、溝、井戸などを検出。古墳時代後期の祭祀遺構と、これに伴う滑石製模造品類が出土。	昭和61・62年　群埋文調査
4	長根安坪遺跡	竪穴住居跡111軒。６世紀代の古墳、弥生時代の住居址、方形周溝墓、古墳時代の住居址、縄時代の配石遺構、住居跡等。	昭和63・平元年　群埋文調査
5	神保下條遺跡	竪穴住居７軒、方形周溝墓２基、古墳３基、AS-A下の水田、畠跡。	平成元年　群埋文調査
6	多胡蛇黒遺跡	旧石器時代の遺物、古墳時代後期から奈良・平安時代にかけての集落。	昭和63年　群埋文調査
7	矢田遺跡	古墳時代から平安時代にかけての集落。「八田郷」の線刻のある紡錘車出土。	昭和61年　群埋文調査
8	神保古墳群	南の谷あいから鏑川に注ぎ込む大沢川の左岸段丘上の縁辺に70基以上が分布していた。	
9	稲荷山遺跡	弥生時代中期の土器が多く散布している。本遺跡で同時期の土坑が検出された丘陵の南側斜面。	
10	辛科神社・神保館	・上野神名帳（永仁６年）に記載、多胡郡の筆頭に上げられている。群馬県古城塁址の研究・辛科神社の東北に接する単郭城で、東北から南西120m、西北から東南100mの規模を持つ、辛科神社境内にも堀を巡らす。植松城との関連が考えられる。	
11	安坪古墳群	後期の群集墳、上毛古墳総覧では44基を上げている。	
12	松田廃寺	詳細は不明。	
13	山ノ神古墳群	後期の群集墳。上毛古墳総覧では７基を上げている。	
14	多胡古墳群	大沢川をはさみ神保古墳群と対峙する。約50基が確認されるが、かつては80基以上あったものと思われる。	
15	川内遺跡	縄文時代の土坑、弥生時代の住居跡、方形周溝墓、古墳時代、奈良・平安時代の住居跡等。	昭和57年　吉井町教委調査
16	下高原廃寺	９～10世紀時代の寺院址か。	
17	折茂東遺跡	弥生後期の住居・方形周溝墓。古墳時代、平安時代の住居。昭61年吉井町教育委員会調査。	昭和61年　吉井町教委調査
18	高砦	詳細は不明。	
19	折茂砦	詳細は不明。	
20	長根城跡	小幡氏の家臣、長根氏の居城か。	
21	東脇場廃寺	９～10世紀代に寺跡か。	
22	西脇場・長根宿遺跡	古墳時代前期の住居跡、平安時代の住居跡。昭和61年吉井町教育委員会調査。	昭和61年　吉井町教委調査
23	恩行寺裏古墳	径約40m、高さ約８mの円墳、６世紀代の構築か。	
24	長根館（城の内）	奥平信昌の二男で松平右京太夫家治の居館か。詳細は不明。	
25	小棚城	詳細は不明。	
26	片山古墳群	後期の群集墳。上毛古墳総覧では７基が上げられている。内１基(片山１号墳)は平成３年８月に吉井町教育委員会により調査が行われ主体部に粘土郭を持つ前期古墳と判明。鏡、鉄鏃、滑石製模造品、櫛などが出土。	
27	道六神遺跡	一部にAS-B下水田、平安時代の住居。	昭和60年　吉井町教委調査
28	本郷古墳群	後期の群集墳。上毛古墳総覧では21基を上げている。本郷城。	
29	塩川城	詳細は不明。菅沼之常の居城か。	
30	吉井陣屋・吉井城	吉井藩の陣屋。天正18年以降菅沼小大膳康助の領となり、松平式部大助信友をへて宝暦の頃から、明治初期まで存続する。	
31	矢田陣屋	詳細は不明。	
32	岡廃寺	８世紀代前半の寺跡か。	

No.	遺跡名	遺跡の概要	備考
33	多胡碑	和銅4年3月9日甲寅　織茂（おりも）、韓級（からしな）、矢田（やた）大家（おおやけ）武美（むみ）、山等（やまな）の六郷を置いたことが記されている。日本三古碑の一つ。	国指定史跡
34	多胡下城（金沢城）	詳細は不明。	
35	一郷山城	新堀城の要害城。詳細は不明。	

縄文時代

この地域の縄文時代の遺跡としては、前・中期の遺跡が鏑川の両岸の上位段丘上に散在していることが、これまでに確認されている。吉井町誌に記載されている遺跡数としては、117遺跡が上げられている。主な場所としては、本遺跡である植松地区、多比良字笠懸地区、中城地区(新堀城跡およびその周辺)、多胡字蟹沢地区、長根字安坪・宿西・椿森地区、岩崎字東吹上・西吹上地区、吉井字腰巻・三平田地区が上げられている。このうち本遺跡周辺は表採資料も多く、以前より周知されていた場所である。ちなみに同地域における上越線の調査では、本遺跡の西側に隣接する神保富士塚遺跡、長根羽田倉遺跡、長根安坪遺跡からも前・中期の遺物が出土している。

弥生時代

吉井町内での弥生時代中期の遺物が散布する場所として、本遺跡の南側に位置する稲荷山の東北斜面が知られ、同町誌にも紹介されている。この稲荷山の東北斜面には、本遺跡の調査範囲も含まれるようであり、同稲荷山から延びる丘陵上にある西隣の神保富士塚遺跡においても同時期の土坑が多数検出されていることから、本遺跡を含めたこの辺り一帯が中期の大遺跡であることが予測される。また、大沢川を隔てた東側に位置する神保下條遺跡においても、中期の土坑群が検出されている。

さらに後期の遺跡としては、安坪遺跡等の数遺跡が町誌に記載されている。調査が行われた遺跡としては、入野遺跡、祝神遺跡、黒熊遺跡群、折茂東遺跡、川内遺跡等が上げられ、住居跡や方形周溝墓等が検出されている。

古墳時代

上毛古墳総覧および吉井町誌によると、同町内には多くの古墳群が点在しており、同町で最も大きいと言われる大字神保に所在する神保古墳群、大沢川を挟んだ対岸の多胡古墳群、大字長根に所在する安坪古墳群、大字塩の塩古墳群等が本遺跡の周辺に存在する。このうち神保古墳群については、本調査の調査範囲が同古墳群を横切る形となり、本調査地内での古墳の存在が予測された。なお、神保古墳群の中には、一本杉古墳や城古墳が含まれ、過去の調査により鈴釧、金環、勾玉、小玉、直刀等が出土している。近年の調査で注目される古墳としては、1991年に同町教委の調査による吉井町65号墳が上げられる。同古墳は粘土槨を持つ古墳で、主体部からは鏡、剣、鏃、斧等の鉄製品、滑石製模造品などが出土している。

集落跡としては、本遺跡の西側にある神保富士塚遺跡、長根羽田倉遺跡、長根安坪遺跡、折茂東遺跡、大沢川を挟む対岸にある多胡蛇黒遺跡、矢田遺跡等があり、いずれの遺跡も6世紀後半を中心とした時期の住居跡群が調査されている。中には古墳時代初頭の方形周溝墓とともに、同時期の住居の調査が行われた遺跡もある。近年、吉井町教育委員会により、本遺跡の北側約100m程の場所(南高原遺跡)で発掘調査が行われ、方形周溝墓、古墳、住居跡等が検出されている。

奈良・平安時代

本遺跡を含む周辺の多くの遺跡で、この時期の住居跡等が検出されている。「多胡碑」にも見られるように、当時のこの辺り一帯には郡・郷が置かれていたようであり、矢田遺跡では集落内の住居から出土した刻線をもつ紡錘車から矢田郷ではないかと推測されている。また、本遺跡地周辺についても、古代における多胡郡韓級郷の比定地とされている場所でもある。近年の南高原遺跡の調査でも、住居跡39軒、掘立柱建物遺構等が検出されている。

中・近世

この甘楽の谷と呼ばれる鏑川流域一帯には、群馬県の中世城館跡(1988)によれば約200カ所余の中世城郭・館跡が点在していることが知られている。これは西上州における地域豪族ないしは武士団が、活発に活動していたことを物語っている。

13世紀前半の承久の変の頃には、「吾妻鏡」の中に吉井町に関係する多胡、小串、多比良、神保の各氏名がみられ、14世紀中ごろには神保、小串、瀬下、奥平、岩崎等の氏名が様々な文献等にみられる。16世紀の戦国時代になると、平井城（藤岡市）には関東管領の山内上杉氏が在り、小田原の北条氏、甲斐の武田氏、越後の長尾氏と対峙していたが、その後武田信玄による小幡氏（甘楽郡国峰城主）を拠点とした西上州への進出を行うこととなる。武田信玄への起請文は数多く残されているが、その中に神保、小河原両氏連名のものもあり、この地域の豪族（武士団）達が時流の中で、時の大勢力の中に組み込まれていった様子がうかがえよう。なお、小河原氏は本遺跡の西方約1.5kmにある長根城主であり、神保氏は本遺跡地に大きく関わる人物と考えられる。

第3節　基本土層

本遺跡は、鏑川右岸の神保丘陵と呼ばれる上位段丘面上にあり、基盤層は吉井層と呼ばれる泥岩層から成り、その上の上部に粘性土層、下部に砂質土層の丘陵堆積物層がある。その上に、火山噴出物であるいわゆるローム層が堆積し、さらに現代に至る暗褐色土等の表土層が覆っている。この暗褐色土中には、浅間山を給源とするAs-AやAs-Bの各軽石が混在する層がある。またローム層中には、同じ浅間山を給源とするAs-YP、As-SP、As-BPの混在層ないしは純層が確認されると共に、As-BPの下位にAs-MPも確認されている。A.Tについては、基本土層のⅨ層の上部に確認されており、この地域一帯の堆積状況は同様である。

基本土層は、ローム層の堆積が良好な丘陵部と、黒色土の堆積が厚い谷地部とに大別される。丘陵部での堆積状況は、以下のように分層される。谷地部では、黒色土や暗褐色土が1m以上も厚く堆積し、基本土層のⅡ層下面にはAs-B軽石が薄く堆積している。

なお、中世城郭部分については、もともと東急斜面で西側に大きく斜面が広がる台地であったものと思われ、築城のさいの整地により旧地形とはかなり異なっているようである。

Ⅰ　黒　色　土……耕作土、As-Aの軽石を含む。

Ⅱ　暗 褐 色 土……As-B軽石を含み、締りがなく比較的サラサラしている。中世遺構の復土にもなる。

Ⅲ　暗 褐 色 土……軽石等の混入物がなく、縄文時代から平安時代の包含層であり、遺構の復土でもある。

Ⅳ　明 褐 色 土……ロームを多く含む漸移層。

Ⅴ　暗黄褐色土……As-YPの黄色軽石を小量含む軟質なローム。

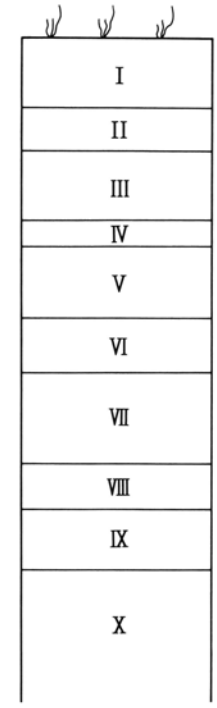
Ⅵ　明黄褐色土……やや堅く締まったロームで、層中にAs-SPの黄色軽石を含む。

Ⅶ　淡 褐 色 土……堅く締まってはいるが、風化したAs-BPを多く含み、部分的には幾枚かの間層もみられる。

Ⅷ　茶 褐 色 土……As-BPの最下位に位置するAs-MPの純層である。

Ⅸ　暗褐色粘質土……いわゆる暗色帯に相当する層であり、堅く締まった粘質土で小礫を混入する。A.Tは、この層中の上部に確認できる。

Ⅹ　青灰色粘質土……きめの細かい粘土。城郭の一部では、この粘土層まで整地がおよんでいる。



第3図　基本土層模式図

註

As-A（浅間－A軽石）　浅間山を給源とし、天明三年（1783）に降下。

As-B（浅間－B軽石）　浅間山を給源とし、天仁元年（1108）に降下とされる。

As-YP(浅間－板鼻黄色軽石)　浅間山を給源とし、約13,000年前に降下とされる。

As-SP（浅間－白糸軽石）　浅間山を給源とし、約15,000年前に降下とされる。

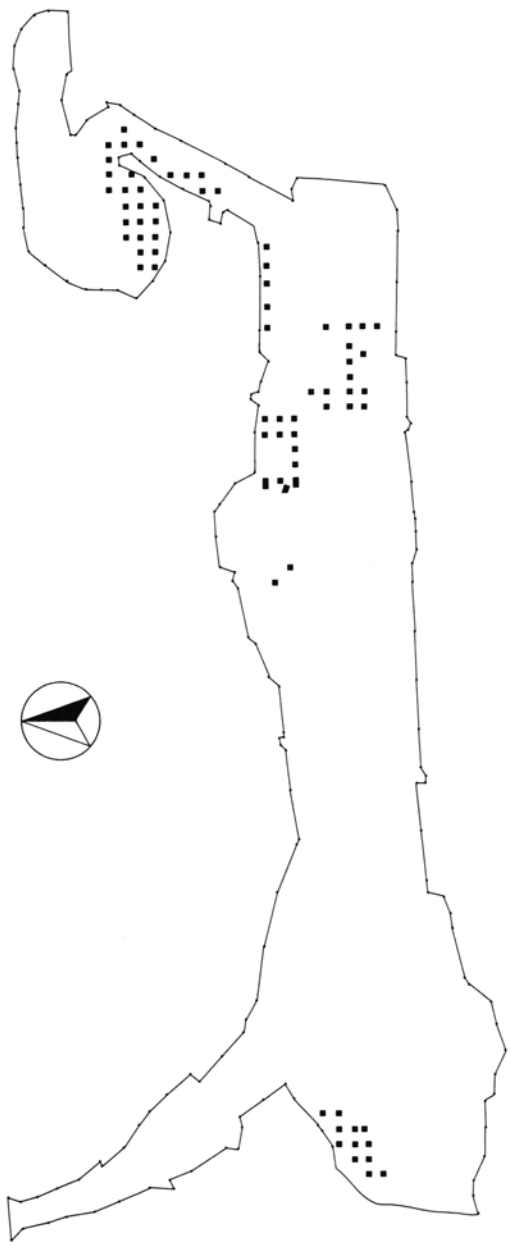
As-BP(浅間－板鼻褐色軽石)　浅間山を給源とし、約17,000～20,000年前に降下したとされる軽石群で、最下位にAs-MP（浅間－室田軽石）がある。

第３章　検出された遺構と遺物

本遺跡において検出された遺構および遺物は、主に縄文時代から中世の多期多様にわたるものものである。遺構としては、縄文時代から平安時代にかけての住居跡が69軒、縄文時代から弥生時代中期の土坑墓を含む中世までの土坑約770基、溝37条、古墳時代の方形周溝墓９基、古墳３基、中世城郭、城郭に伴うないしは中世の掘立建物62棟、竪穴遺構５棟、柱穴多数、井戸５基、さらに谷地部ないしは斜面部での縄文・弥生時代の遺物包含層等がある。出土した遺物は、縄文時代から中世までの土器・陶器類が約300箱、石器類が約350箱を数える。

こうした遺構のうち特に注目されるものとしては、中世城郭および弥生時代中期の土坑墓群などがあり、県内においても調査例は少なく、貴重な資料と言える。

本報告書では、これらの遺構について縄文、弥生、古墳、奈良・平安、中世の各時代に分け、それぞれの遺構の記載を行っているが、土坑、溝等の時期の確定できなかったものについては、それぞれの項の中で扱うこととした。また、各遺構に附した遺構番号については、調査時の番号を用いているため順不同となっている。なお、本遺跡での遺構･遺物の多さから、縄文･弥生時代編と、古墳・平安・中世編とに文冊して報告している。

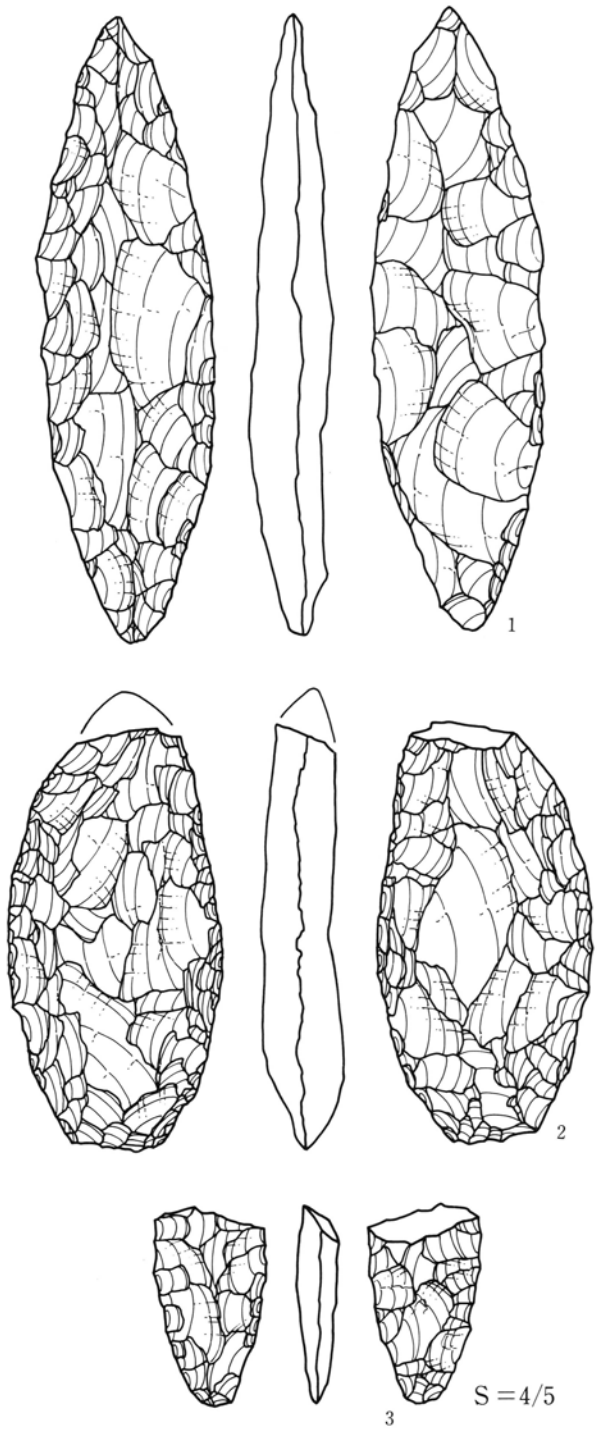


第４図　旧石器試堀配置図

第１節　旧石器時代の遺物

旧石器時代の調査については、吉井町誌に本遺跡から表面採集された黒色頁岩製の槍先形尖頭器が掲載されていることから、その存在の可能性が指摘されていたため、ローム台地を対象として随時試掘調査を行った。対象となった調査区は、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｊの各区であったが、結果としては石器の検出は確認されなかった。

ここに掲載する石器は、いずれも表土中および遺構覆土中より出土したものである。



第５図　遺構外出土石器

表２　石器計測表

No.	出土位置	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	表　採	黒色頁岩	10.3	2.9	1.2	36.8
2	B　区	チャート	7.0	3.5	1.8	36.5
3	C　区	チャート	3.3	1.9	0.7	4.5

１．出土遺物（第５図）

１は表土中より出土したもので、黒色頁岩製の槍先形尖頭器である。全体にやや粗い両面調整を施し、やや細身となる木葉形を呈している。器体の厚みが比較的あり、裏面が平に近いことから、断面形が蒲鉾状に近い形状を呈している。周縁への細部調整も、あまり施されていない。また、裏面の一部には、素材面が残されていることから、素材には比較的大振りな横長剝片が用いられたものと考えられる。長さ10.1cm、幅2.8cmを測る。

２は中世城郭に伴う１号堀の覆土中より出土したもので、チャート製の槍先形尖頭器である。周縁調整の細かく施された両面調整で、基部は欠損による再加工のためか、やや円くなる形状を呈している。先端部は、欠損している。残存するのは、長さ6.9cm、幅3.9cmを測る。

３は26号住居跡の覆土中より出土したもので、チャート製の槍先形尖頭器である。あまり質の良くない石材を使用し、全体にやや粗い感じの両面調整を施すもので、比較的細身となる小振りな木葉形を呈する。先端部側の上半が、節理面で欠損している。残存するのは、長さ3.2cm、幅1.9cmを測る。

第２節　縄文時代の遺構と遺物

本遺跡における縄文時代の遺構としては、住居跡がＡ区で１軒、Ｃ区で５軒検出され、土坑はＡ・Ｂ・Ｃ区に集中して81基が検出されている。なお、土坑については、縄文時代の所産であると認定できたもののみをこの項に掲載している。

これらの遺構が検出された場所は、もともと東側が急傾斜となり西側に広い緩斜面をもつ北側につき出た台地であったが、中世城郭の築城の際に整地され現地形を見せている。この整地により、旧地形が削平された部分では遺構が消滅ないしは残存状態が悪く、逆に盛り土された部分は良好な状態で検出されるといった状況であった。したがって検出された遺構は、削平のあまり及んでいない台地周縁部に点在して認められた。

遺構以外では、遺物包含層が良好な状態でＣ区に残されていた。また、Ａ・Ｈ区の小谷地部からも、遺物が多く出土している。これらの遺物については、他時期の遺構から出土したものも含めて、遺構外遺物として掲載している。

１．住　居　跡

検出された住居跡については、先述したようにＡ・Ｃ区からの６軒である。このうちＣ区の26・27・28・35・41号住居の５軒については、ほぼ同じ位置に重複するように検出された。またこの周辺には、埋め甕や焼土遺構も検出されたが、掘り込みが不明であること等から、住居としては扱わずにその他の遺構とした。

７号住居跡（第６～８図　表３）

Ａ区の台地の北側の縁辺にあり、26･27―23･24グリッドに位置する。平面形状は、隅丸となるやや不整な正方形を呈している。掘り込みは比較的浅く、確認された壁高は深いところでも10cm前後であり、城郭築城の際の整地のためか残存状況はあまり良くない。床面は不明瞭で、住居に伴う柱穴も確認できなかった。また炉跡についても、確認できなかった。覆土はローム粒を含む汚れた暗褐色土で、覆土中に少量の遺物を出土させたのみである。

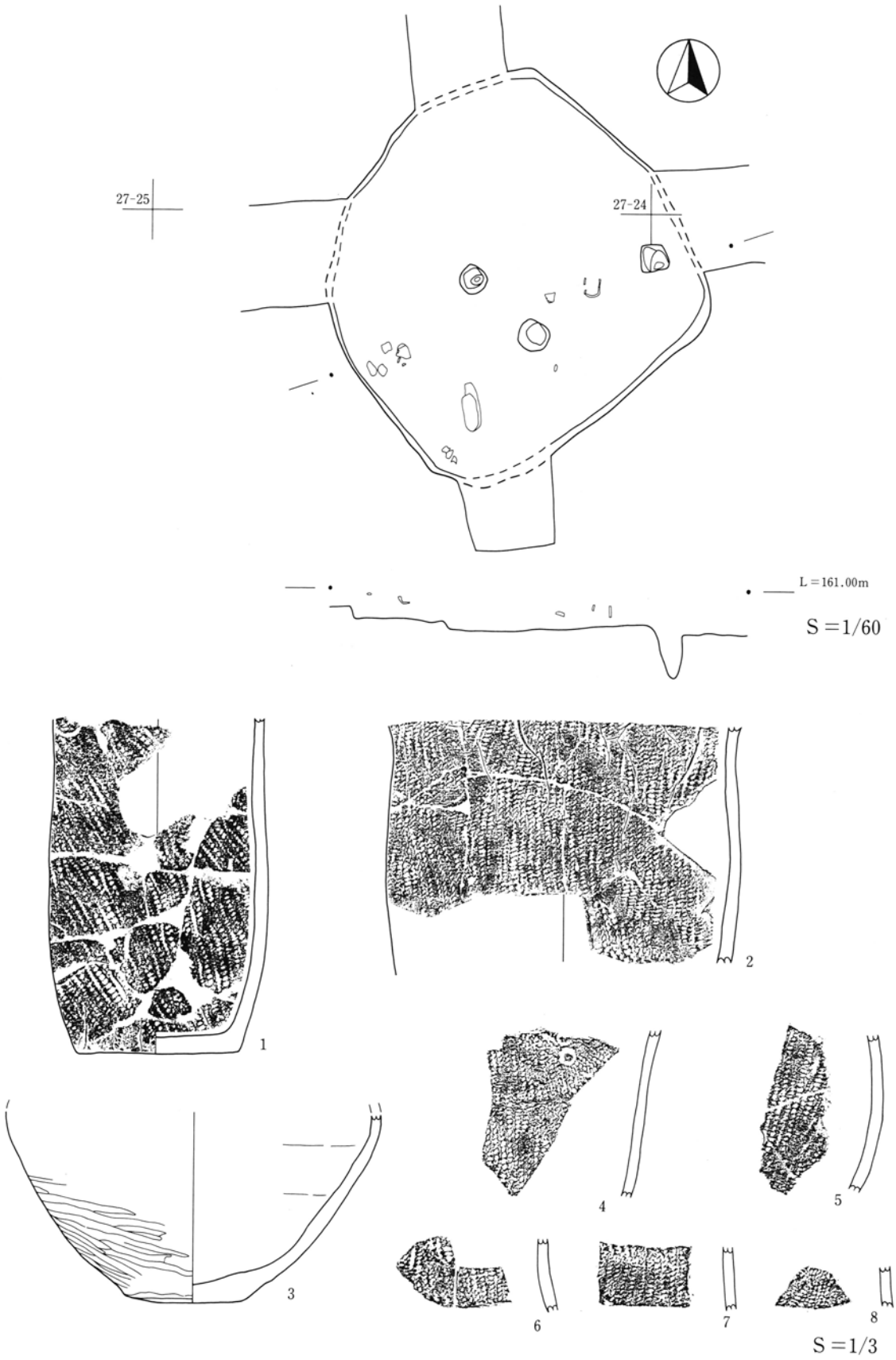
出土した遺物は、第６図の下段から第８図に示すごとくで、縄文時代前期を主体に若干の中期の土器、石器からなる。遺物については、次の通りである。

土器

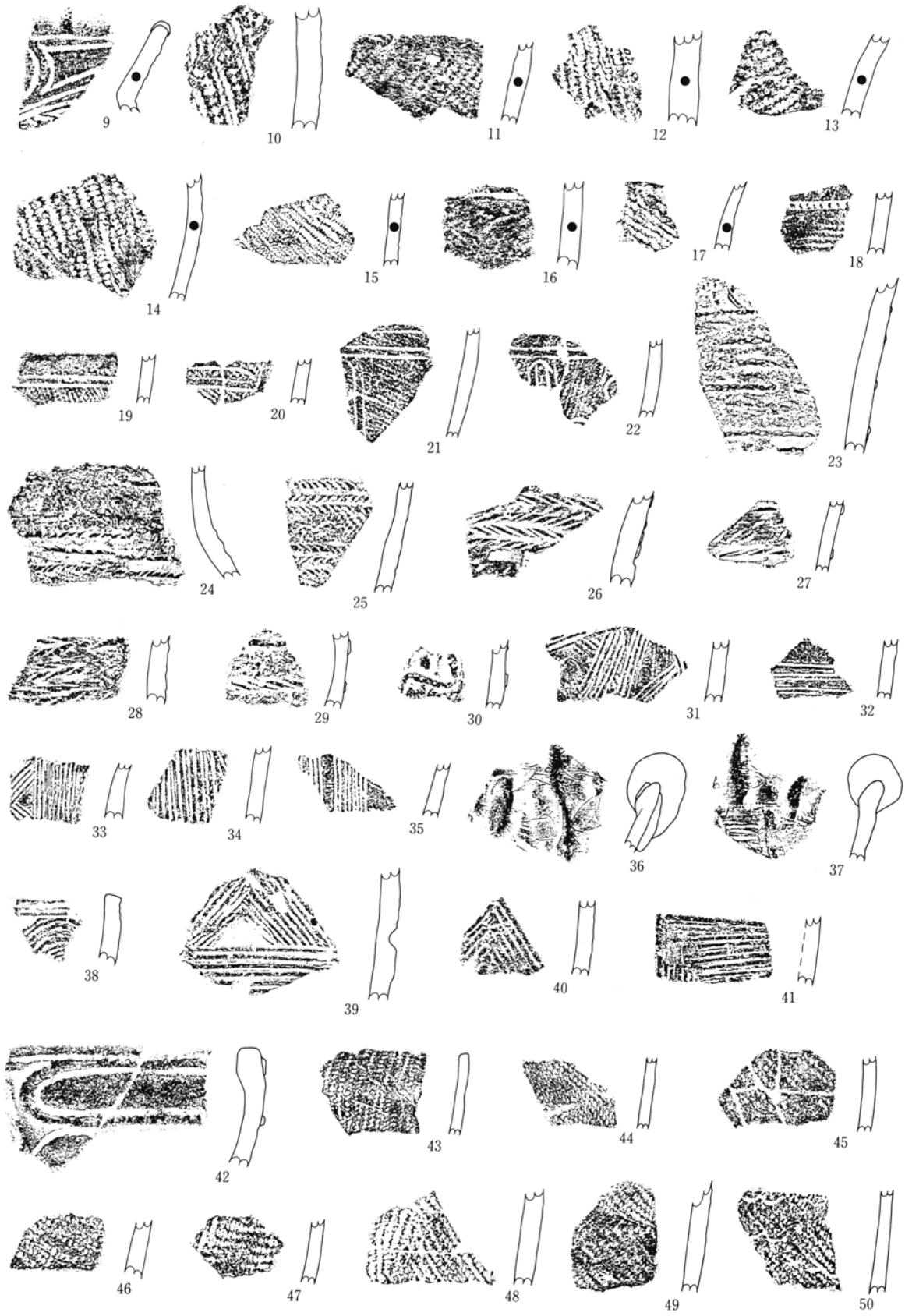
１・２は頸部が僅かにくびれる深鉢形となるもので、１は胴部にRLの縄文を斜位に施し、頸部下に円形刺突をもつ。２は頸部下の胴部に、条が縦走するRLの縄文を施すもので、４～８が同一個体となる。４の頸部には、縦位に円形刺突が施文されている。３は無文となる胴部下半である。

10～17は胎土に繊維を含むもので、10は正反の合による縄文を施す胴部片である。11～17は胴部にLRないしRLの縄文を施すものであるが、15には０段多条の縄が用いられ、16には１条の横位沈線がみられる。

18～50は無繊維のもので、18の胴部には半裁竹管による細い平行沈線間に、爪形刺突をもつ。19～22は地文に縄文をもち、胴部に半裁竹管による細い平行沈線で文様を描くものである。23～29は胴部に刻みをもつ浮線を数条巡らせるもので、地文に縄文をもつ。23の上端には、浮線による曲線的な文様がみられる。30は胴部に浮線状の波状文が貼付され、豆状貼付文をもち、地文に縄文を施す。31は地文に縄文をもち、半裁竹管により曲線的な文様が描かれるものである。32～35は胴部に、縦位の集合沈線および斜位の集合沈線を施すもの。36・37は口縁部に耳タブ状突起と、縦長の貼付文をもち、地文に横位の集合沈線をもつ。38～41は



第６図　７号住居跡平面図・出土遺物



S＝1/3

第７図　７号住居跡出土遺物（Ⅰ）

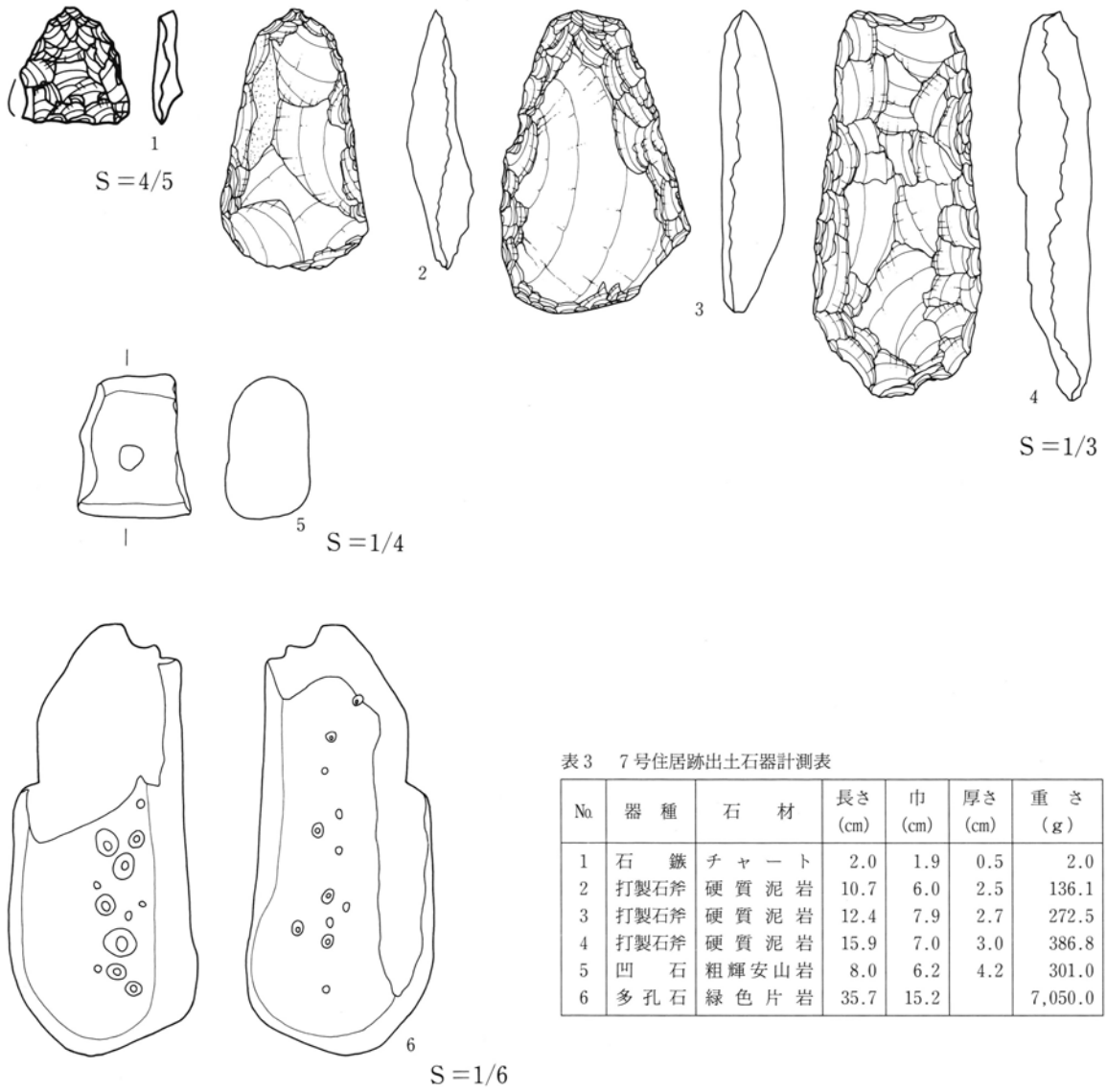


表３　７号住居跡出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	石　鏃	チャート	2.0	1.9	0.5	2.0
2	打製石斧	硬質泥岩	10.7	6.0	2.5	136.1
3	打製石斧	硬質泥岩	12.4	7.9	2.7	272.5
4	打製石斧	硬質泥岩	15.9	7.0	3.0	386.8
5	凹　石	粗輝安山岩	8.0	6.2	4.2	301.0
6	多孔石	緑色片岩	35.7	15.2		7,050.0

第８図　７号住居跡出土遺物（２）

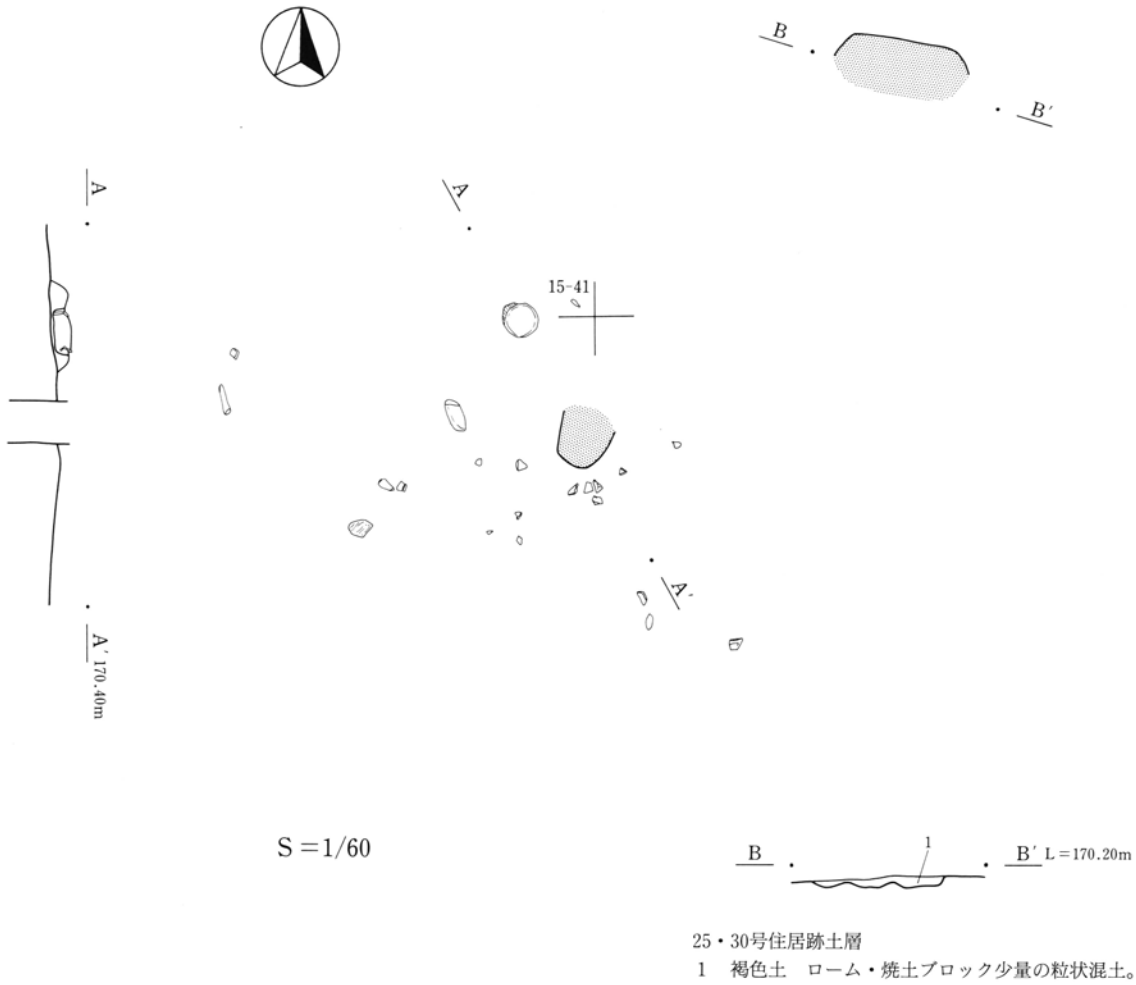
口縁部および胴部に半裁竹管で文様を描くもので、38の口縁下には三角の印刻文と渦状の文様が描かれ、39は縦位の矢羽根状・横位の集合状沈線、および三角の印刻文をもつものである。

９は波状口縁となる口縁部で、波底近くに小突起をもち、口縁部に沈線で平行および弧状の文様を描く。42は平口縁となる口縁部に隆帯状の楕円区画をもち、区画内に押し引き状沈線が施されるもので、口縁下にも１ないし２条の押し引き状沈線が巡る。

42～50は胴部に縄文が施されるもので、50には結節文がみられる。

石器

石器には、第８図に示した６点がある。黒曜石製の石鏃１点、打製石斧３点、磨石で片面に凹孔をもつもの１点、多孔石１点である。



第９図　25・30号住居跡

25号住居跡（第９・10図　表４）

東側台地（Ｃ区）の西縁辺寄りの平坦面にあり、14―40・41グリッドに位置し、24号住居跡の西側、39号住居跡の北側にある。中世城郭造成時の削平をうけ、さらには縞状に耕作溝による破壊をうけているため、残存状態は極めて悪く、焼土を伴う炉跡のみが検出された。

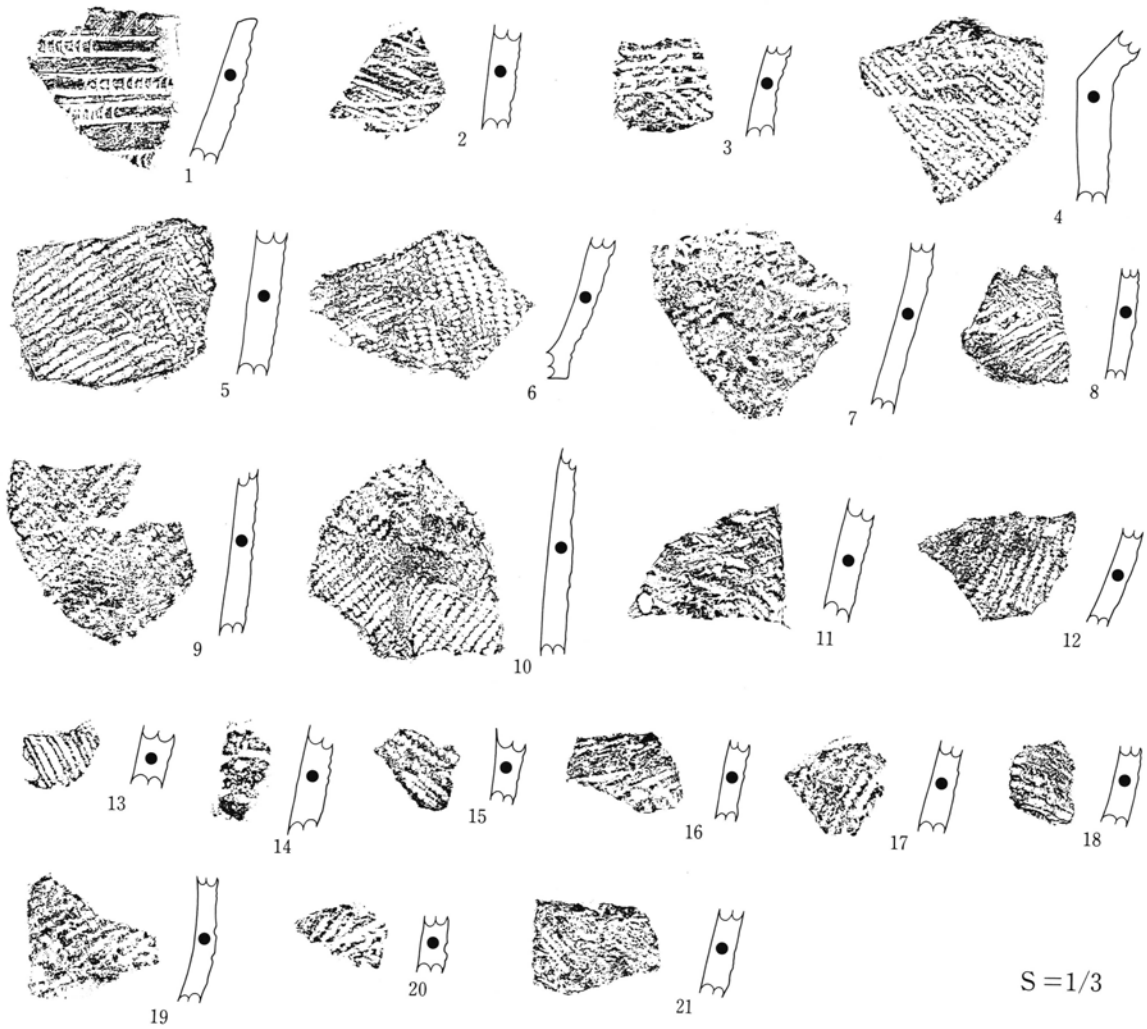
壁や床面等の検出ができなかったことから、平面形は不明である。検出された炉跡周辺の精査を試みたが、明確な床面の検出にはいたらなかった。また、柱穴等の検出もできなかった。

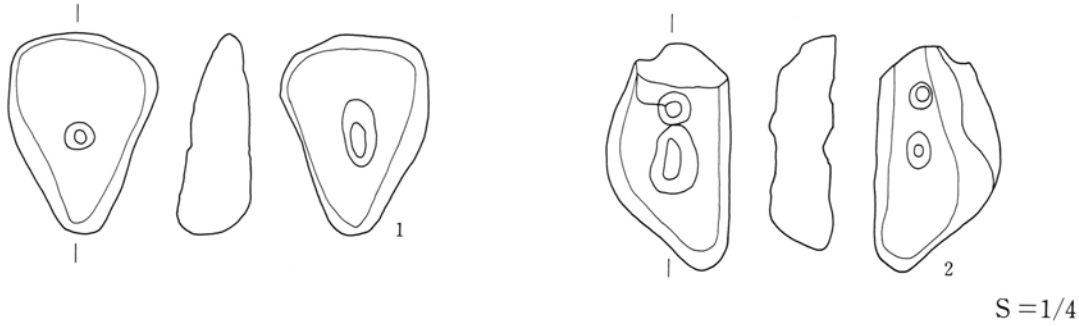
遺物の分布状況は、炉跡周辺で土器および石器が比較的まとまって出土している。

出土遺物は、第10図に示すごとくで、次の通りである。

土器

１～21は胎土に繊維を含むものである。１は口縁部に斜位の沈線を施し、その下に半裁竹管による平行沈線を数条もつが、沈線内に爪形刺突をもつ。この爪形刺突は、沈線内全体に及ぶものではなく、爪形を施す部分と、施さない部分とがみられ、条を変えて交互となるように施されるようである。３は頸部下に半裁竹





第10図　25号住居跡出土遺物

表４　25号住居跡出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	凹　石	緑色片岩	10.7	7.9	3.9	385.0
2	凹　石	黒色片岩	12.1	6.7	3.4	440.0

管による平行沈線と爪形刺突をもつもので、胴部に羽状縄文が施されている。２・４～21は胴部に縄文が施されるものであり、５・６・８は羽状縄文となるものである。このうち、４は附加条縄（１本附加）が用いられ、６は無節のＬと１本附加の附加条縄 RL による羽状縄文となるものである。13にも附加条縄（１本附加）が用いられている。

石器

石器は、第10図の下段に示した凹石の２点である。この凹石は、両面に凹孔を有するものである。

30号住居跡（第９図）

本住居跡は、東側台地の西縁辺寄りの平坦面にあり、15―40グリッドに位置し、24号住居跡の西側、25号住居跡の北側にある。中世城郭造成時の削平をうけ、さらには縞状に耕作溝による破壊をうけているため、残存状態は極めて悪く、焼土を伴う炉跡のみが検出された。

壁や床面等の検出ができなかったことから、平面形は不明である。検出された炉跡周辺の精査を試みたが、明確な床面の検出にはいたらなかった。柱穴等の検出もできなかった。

明らかに本住居に伴う遺物の出土はなかった。時期は、不明である。

26号住居跡（第11～60図　表５・６）

Ｃ区の台地の西側縁辺にあり、17・18―40グリッドに位置する。27・28・35・40・41号住居およびいくつかの土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のものと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は27・28・35・40号住居跡よりも新しく、平面形状は隅丸方形を呈している。北側の隅には、円形となる一段高い掘り込みが検出され、これを26号住Ｂとし、前者を26号住Ａとした。両者の新旧関係は、Ａが新しくＢが古い。このＢについても、住居跡としての可能性は高いと考えられる。

26号住Ａは、長軸4.8m、短軸3.8mを測り、長軸方向は北東をさす。壁は比較的しっかりと立ち上がり、壁高は確認面から1.2mもあり、床面がかなり深い。床面は堅くよく踏みしめられ、平坦である。炉跡は確認されなかったが、いくつかのピットが検出されており、対角線上に主柱穴が４本配されていたものと考えられる。覆土中からは、多量の遺物の他にかなりの量の小礫が出土している。おそらく、人為的な埋没によるものと考えられよう。

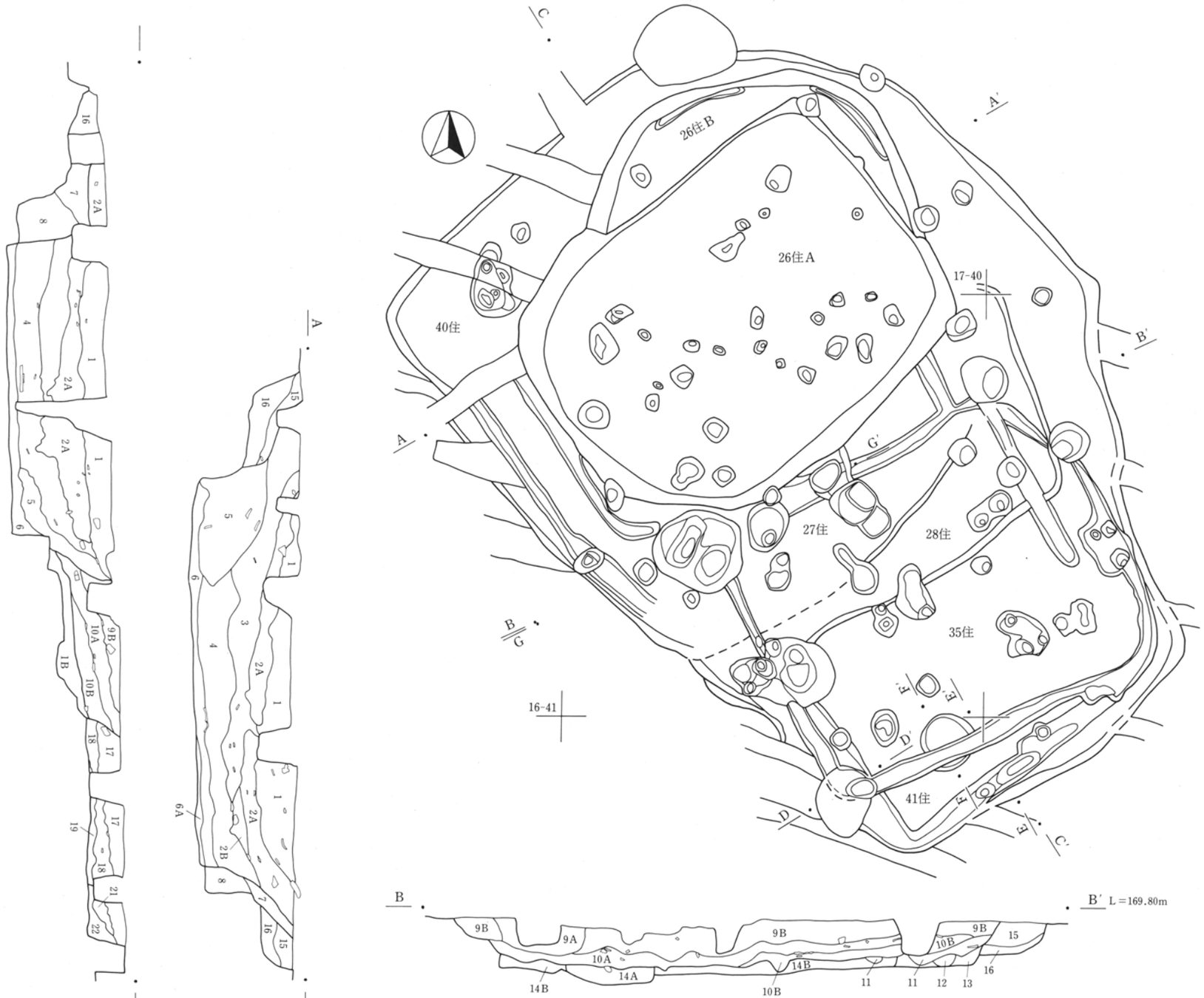
26号住Ｂは、先の26号住Ａの北側に重複し、18―40グリッドに位置する。重複する住居との新旧関係は、土層の堆積状況等から26号住Ａより古く、40号住よりは新しいと考えられる。平面形状は、その大部分が26号住Ａに壊されているためさだかではないが、円形ないしは楕円状を呈するものと考えられよう。壁はしっかりと立ち上がり、壁高は確認面から約1.0mを測る。床面は堅く踏みしめられ平坦であり、柱穴と考えられるピットがみられる。また壁際の一部には、周溝がみられる。

出土遺物は、復土中のものも含め、膨大な量が出土している。26号住Ａ・Ｂから出土した遺物は、それぞれの住居の判別が困難であることから、26号住出土遺物として一括して扱うこととした。また、調査当初は重複する他の住居跡をも含め、一括して遺物を取り上げていたため、他の住居遺物を一部に含んでいる。

遺物については、次の通りである。

土器

１・２は波状口縁となり、口縁が靴先状に大きく内側へ屈曲し、頸部がくびれ、胴部上半が僅かに膨らむ深鉢となる器形を呈する。１は地文に縄文をもち、刻みをもつ浮線で文様を描く。波状となる口縁下に４条



41号住居跡周溝とA土坑

1　淡い褐色土　ローム粒を含む。
2　黒褐色土　ロームブロックを含む。
3　黒褐色土　2層より黒い。
4　黄色土　ロームブロックを含む。

35号住居跡周溝と41号住居跡B土坑

1　褐色土　ロームの混土。
2　褐色土　ロームのブロック混土。
3　黒褐色土　ロームブロックを含む。

26・27・28・35・40・41号住居跡土層

1	褐色土	ローム中の白色粒子・浮石・炭化物・骨片を多量に含む。やや粘性で硬質。
2A	灰黄褐色土	白色粒子・炭化物を多量含む。粘性・硬質。
2B	褐色土	焼土と2D層のブロック混土。
3	くすんだ黄褐色土	ローム中の軽石・砂を多量に炭化物を少量含む。粘性弱くやや軟質。
4	くすんだ黄褐色土	3層と近似。色調やや明るく硬質。
5	淡い褐色土	3層に類する。
6	黄褐色土	やや軟質。
7	淡い褐色土	白色粒子・軽石を多量に含む。粘性弱く硬質。
8	くすんだ黄褐色土	4層と酷似。
9A	くすんだ褐色土	白色軽石を多量に炭化物を少量含む。硬質。
9B	褐色土	1層と同質。
10A	黒褐色土	炭化物を多量に含む。やや粘性・硬質。
10B	黒褐色土	10Aと同質。ローム粒を含み10A層よりやや軟質。
11	黒褐色土	10A層と同質。ロームブロックを含む。
12	黒褐色土	ロームとの混土。
13	淡い褐色土	ロームとの混土。軟質。
14A	くすんだ褐色土	ロームブロック・焼土・炭化物を含む。軟質。
14B	くすんだ褐色土	ローム粒を多量に含み軟質。上面に貼り床。
15	くすんだ褐色土	白色粒子を多量に含み硬質。
16	くすんだ褐色土	ローム粒の混土。
17	くすんだ灰褐色土	白色粒子・炭化物を含む。粘性なく硬質。
18	くすんだ灰褐色土	ロームブロックを少量含む。
19	黄色土	18層のブロック混土。
20	淡い褐色土	白色粒子を多量に含む。
21	淡い褐色土	白色粒子を多量に含みやや軟質。
22	黄色土	21層のブロック混土。

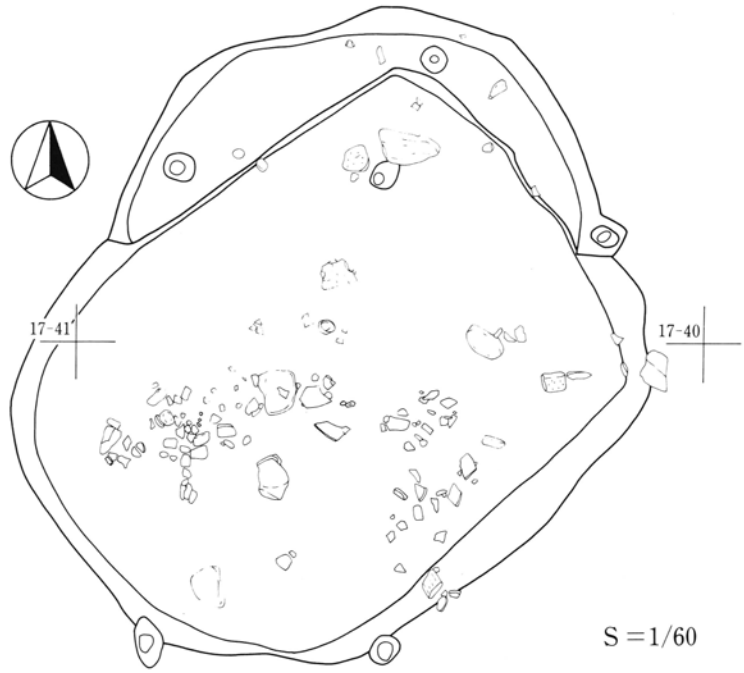
28号住居跡土坑土層

1　褐色土　ローム粒を含む。
2　淡い褐色土　ロームブロックを含む。
3　褐色土　黄褐色土の混土。
4　淡い褐色土　3層に類するが、明るい。

28号住居跡壁周溝土層

1　褐色土　ローム粒を少量含む。
2　褐色土　黄褐色土のブロック混土。
3　黒褐色土　褐色土のブロック混土。
4　褐色土　2層と同質。

第11図　26（A・B）・27・28・35・40・41号住居跡平面図



第12図　26号住居跡平面図

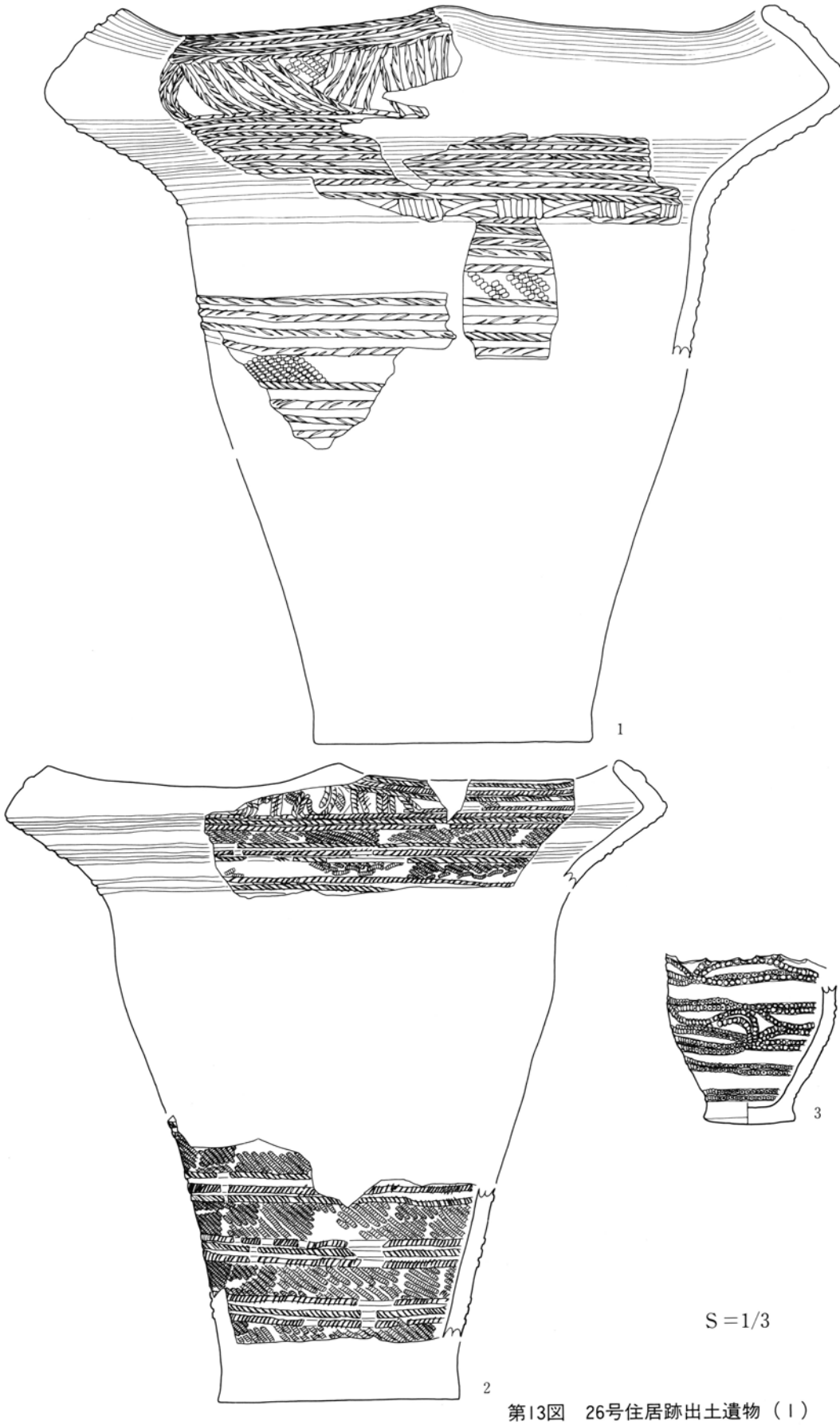
の浮線を巡らせ、その下に弧状ないし渦状の文様をもち、頸部には11条の平行な浮線が巡り、頸部下にはX字状の文様を施す。胴部には、数条を単位とする平行な浮線が数段巡る。２は１と同様に地文に縄文をもち、刻みをもつ浮線により文様を描くもので、波状となる口縁下に３条の浮線を巡らせ、その下に弧状・渦状の文様をもち、頸部以下の胴部に３条を単位とする平行な浮線が数段巡る。３は小形の深鉢となるもので、棒状工具による連続刺突列点により文様を描く。施文される文様は、２条を単位とし、平行に数段巡らせた間に、渦状等の曲線的な文様を描いている。４は胴部に屈曲をもつ深鉢で、浮線により文様を描く。施文される文様は、胴部に数条を単位とする浮線を数段巡らせ、その間に渦状ないし入り組み状・弧状・矢羽根状等の文様が描かれる。また、浮線文様を描いた後、縄文を施したものとみられ、浮線上に縄文をもつ。さらには、浮線に刻みを施す部分もみられる。５は平口縁となり、口縁が大きく内反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ深鉢となるもので、キャリパー状の器形を呈する。口縁には獣面突起をもち、縄文地文に、刻みをもつ浮線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に４条の浮線を巡らせ、その下に渦状･弧状等の文様を描き、頸部以下に数条を単位とする平行な浮線を数段巡らせている。６は胴部上半に膨らみをもつ深鉢である。施文される文様は、胴部上半までに１条の刻みをもつ浮線を数段巡らせ、その間に半裁竹管による横位の矢羽根状沈線を施す。胴部下半には、RL の縄文を施す。７は波状口縁となる大形の深鉢で、頸部がくびれ、口縁部が朝顔状に直線的に開く器形を呈する。地文に縄文をもち、刻みをもつ浮線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に４条の浮線を巡らせ、その下に弧状等の文様をもち、頸部以下には数条を単位とする平行な浮線を数段巡らせる。８は平口縁となり、口縁部が屈曲するように外反し、胴部が膨らみ、胴部下に段をも

つ浅鉢となるもので、口縁下の屈曲部に規則的に孔を有し、無文である。いわゆる有孔浅鉢である。９は深鉢の底部であり、胴部下半に刻みをもつ浮線を平行に巡らせたもの。地文にRLの縄文を施している。10は大形の深鉢の胴部であり、胴部上半に膨らみをもつ。地文に縄文をもち、刻みをもつ浮線で文様を描く。施文される文様は、胴部上半に渦状・弧状・横位の矢羽根状の文様を一帯もち、以下に平行に数条巡らせている。11は口縁部が靴先状に大きく内側へ屈曲する大波状口縁となり、頸部がややくびれる深鉢の器形を呈する。波頂部は両側に小突起をもつ三山状となり、波頂下に瘤状の貼付文を有する。地文に無節の縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に口縁に添うように沈線が巡らされ、波頂下の頸部にＶ字状の沈線をもつ。頸部以下には、１ないし数条の平行沈線が数段巡らされている。12は口縁部が大きく内側へ屈曲する波状口縁となる深鉢で、波頂下に瘤状の貼付文を有する。11と同様に、地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に数条の平行沈線を巡らせ、波頂下部分に瘤状貼付文を中心とする菱形を構成させる。頸部以下には、数条を単位とする平行沈線を数段巡らせるようである。13は頸部から口縁にかけて大きく開き、頸部がくびれ、頸部下に外側への屈曲部を有する深鉢の器形を呈する。地文に無節の縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様には、頸部から胴部にかけて１ないし数条を単位とする平行沈線が数段巡るものであり、頸部のくびれ部には弧状のＸ字状の文様と、その間に縦位の沈線が描かれる。14は13と同様の器形を呈する深鉢で、地文に縄文をもち、半裁竹管により平行沈線で文様を描く。施文される文様は、頸部および胴部に数条を単位とする平行沈線を数段巡らせるものであり、頸部下の屈曲部上端には縦位の沈線帯をもつ。15は胴部下半が大きくすぼまる深鉢の胴部であり、地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様が描かれる。施文される文様は、胴部に幅の広い集合状の平行沈線帯を数段もち、その間に入り組み状・弧状・横位の矢羽根状等の文様を描いている。16は緩やかな波状口縁となり、口縁がやや内反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ深鉢の器形を呈する。波頂下に瘤状の貼付文をもち、地文に縄文を施し、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に数条を単位とする平行沈線を巡らせ、その下の波頂下に同様の沈線で三角状の文様を描く。頸部以下には数条を単位とする平行沈線を巡らせ、胴部中央に弧状の曲線および横位に矢羽根に近いＶ字状となる文様を描く文様帯をもつ。17は平口縁の直線的に開く口縁となる深鉢で、地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁下に幅の広い集合状の平行沈線帯をもち、隙間を空けて胴部にも平行沈線を施している。18は胴部下半がすぼまり、胴部から口縁にかけて緩やかに開き、口縁部が大きく屈曲するように内反し、平口縁となる深鉢の器形を呈する。内反する口縁部には、貼付文の剝落痕があり、貼付文による口縁部装飾が施されていたようである。また貼付文間には、半裁竹管による斜位の沈線を有する。口縁部屈曲下および胴部下方には、数条の平行沈線が巡り、胴部文様帯を区画する。区画内には、縦位の平行沈線より大きく区割りされ、区割り内に弧状の文様が描かれ、さらに縦位の鋸歯状ならびに斜位の沈線が施されている。19は深鉢となる胴部下半である。地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様には、胴部下端に横位の集合沈線で胴部文様帯を区画し、区画内に縦位・弧状等の集合沈線が施され、その間に曲線的な文様が描かれている。20は胴部がくびれ、胴部下半がすぼまらずに底部となる細身の深鉢の器形を呈し、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、胴部下端に横位の集合沈線で胴部文様帯を区画し、区画内に縦位の集合沈線で大きく区割りし、区割り内に弧状の集合沈線が描かれ、縦位の矢羽根状沈線ならびに鋸歯状の沈線が施されている。21は平口縁となる口縁部が開き、胴部下半が膨らむ深鉢の器形を呈する。地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁部には文様をもたず、胴部下半に２段の横位の集合沈線帯を施し

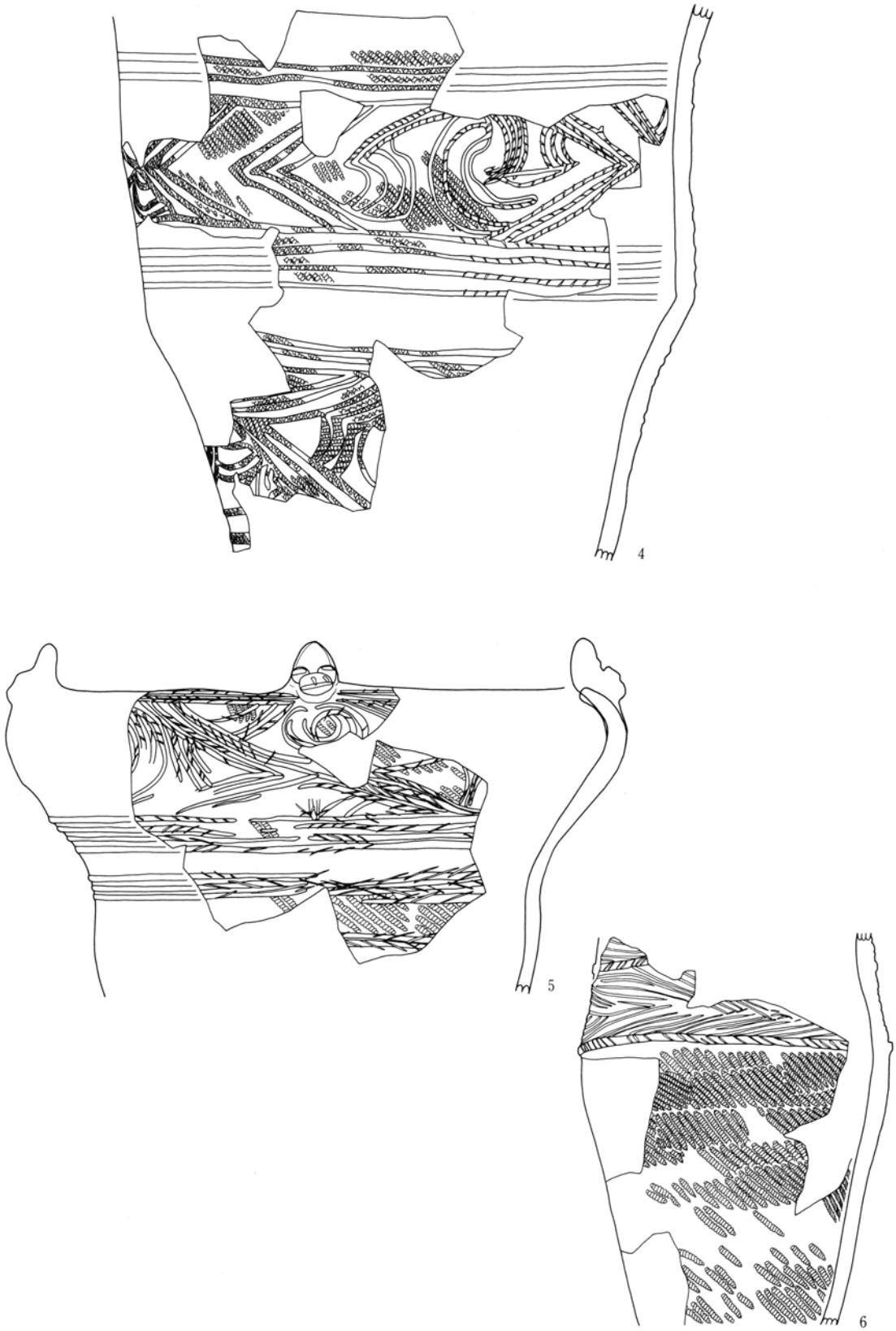
て胴部文様帯を区画し、区画内に縦位の集合沈線で大きく２単位に区割りしている。さらに区割り内には、弧状の集合沈線により３単位に区分され、中央の弧状区画内には８字状の文様が、その両側の区画内には曲線的な文様がそれぞれ施されている。なお、この土器については、その器形・施文文様のあり方（特に、口端部で文様が切れている）から、本来の口縁部を除去した姿と考えられ、現存する口縁部は、何等かの理由で除去された後に、疑似的に口縁を作り出したものと思われる。22は平口縁となる口縁部がくぼみ気味に僅かに外反し、胴部から口縁にかけて緩やかに開き、胴部下半がやや膨らむ深鉢の器形を呈する。内面口端部は、有段状となる。口縁には４単位の耳タブ状の貼付文がつき、地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で文様を描く。施文される文様は、口縁部および胴部下半に横位の集合沈線を施して胴部文様帯を区画し、区画内の耳タブ状貼付文下に縦位の集合沈線で４単位に区割りする。さらに区割り内には、弧状の集合沈線が施され、４単位の内の３単位の内部に横位・弧状・斜位等の集合沈線が施され、残る１単位に弧状ないしＶ字状の集合沈線による文様が描かれている。23は胴部下半から口縁部にかけて、朝顔状に開く深鉢の器形を呈する。器面には、沈線や浮線・縄文等による文様はみられず、ミミズ張れ状の微隆線が横位方向に全面にみられるものである。この微隆線は、２ないし３本ほどの指で、横位方向に撫でられたものと思われ、他の土器文様とは大きく異なるものである。24は深鉢となる胴部で、全面にRLの縄文が施されるものである。25は深鉢となる胴部下半で、地文に縄文を施し、２条の垂下する懸垂文をもつ。26～28は深鉢の胴部下半で、地文に縄文を施し、半裁竹管による平行沈線で文様を描くものであり、数条を単位とする平行沈線を数段巡らせている。26には胴部文様帯があり、弧状の文様が描かれている。29は平口縁で、両側に小突起をもつ４単位の突起を有し、口縁部が外反し、頸部がくびれ、胴部が膨らむ小形の土器で、内面の頸部位置は屈曲する。施文される文様は、半裁竹管による密な爪形刺突をもつ結節浮線で、口縁部突起下に円形および弧状、さらに方形状の文様が描かれ、胴部上半にも同様に二重となる円形文や三角文等が描かれる。その下には、２条の結節浮線を巡らせて文様帯区画を行い、胴部下半にはLRの縄文を施すものである。

第23～25図に示した30～108は、胎土に繊維を含むものである。30～42は口縁部および頸部に文様をもつものであり、30は爪形刺突、31～33は連続爪形により、菱形の文様が描かれるもの。34～39・42は半裁竹管による平行沈線で、菱形文様が描かれる。41は頸部に２条の細い隆帯が巡り、胴部に縦位回転による無節の羽状縄文を施すものである。43～57・104は口縁部以下に縄文を施すものであり、49は波状口縁となる。52の口縁部には、角状の突起が２個みられる。43・44・56・57は羽状縄文が施されるものであり、43はRLと０段多条のLRによる羽状、43には正反の合、56・57は無節による羽状縄文である。また、45・49～51・54は無節の縄である。58～103・105は胴部に縄文が施されるものであり、60・62～79・83は羽状縄文となる。この内、58は正反の合が、59は軸縄の回転絡条体が、60・61・63・64・77には附加条（１本附加）の縄によるものであり、66・74・79・81・82・84・87・89・90・93・97・99・105には無節の縄が用いられている。106・107は無文となる口縁部であり、108は無文の底部近くで円底気味のものである。

第26図以降は、胎土に繊維を含まないものである。特に、31～42図に示す土器群が多量に出土している。109～116・121は口縁以下に半裁竹管による弧状沈線を施すものであり、109は口縁下に爪形刺突をもつ平行沈線を３条巡らせ、その下に横位の弧状沈線を施し、円形刺突を加えている。110は地文に縄文をもち、口縁以下に連続する弧状沈線を施したもの。115・116は縦位沈線間に弧状沈線を施すものであり、115は地文に縄文を施し、113・115には円形刺突をもつ。112は櫛状工具により、弧状沈線を施すものである。117～144は口縁以下に櫛状工具により、波状の沈線を施すものである。117のように平行に巡る条線間に、波状文を施すも

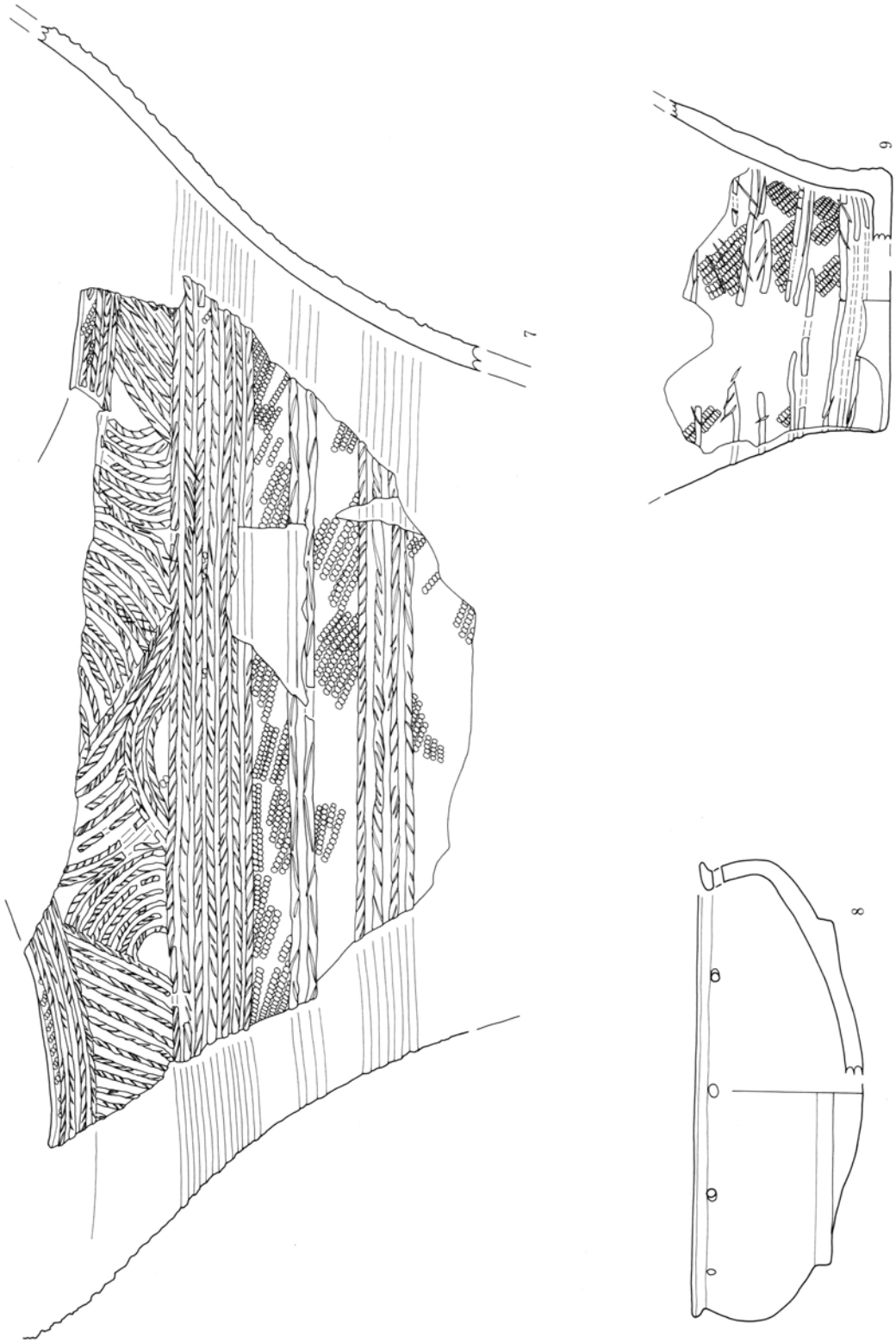


第13図　26号住居跡出土遺物（１）



S＝1/3

第14図　26号住居跡出土遺物（２）

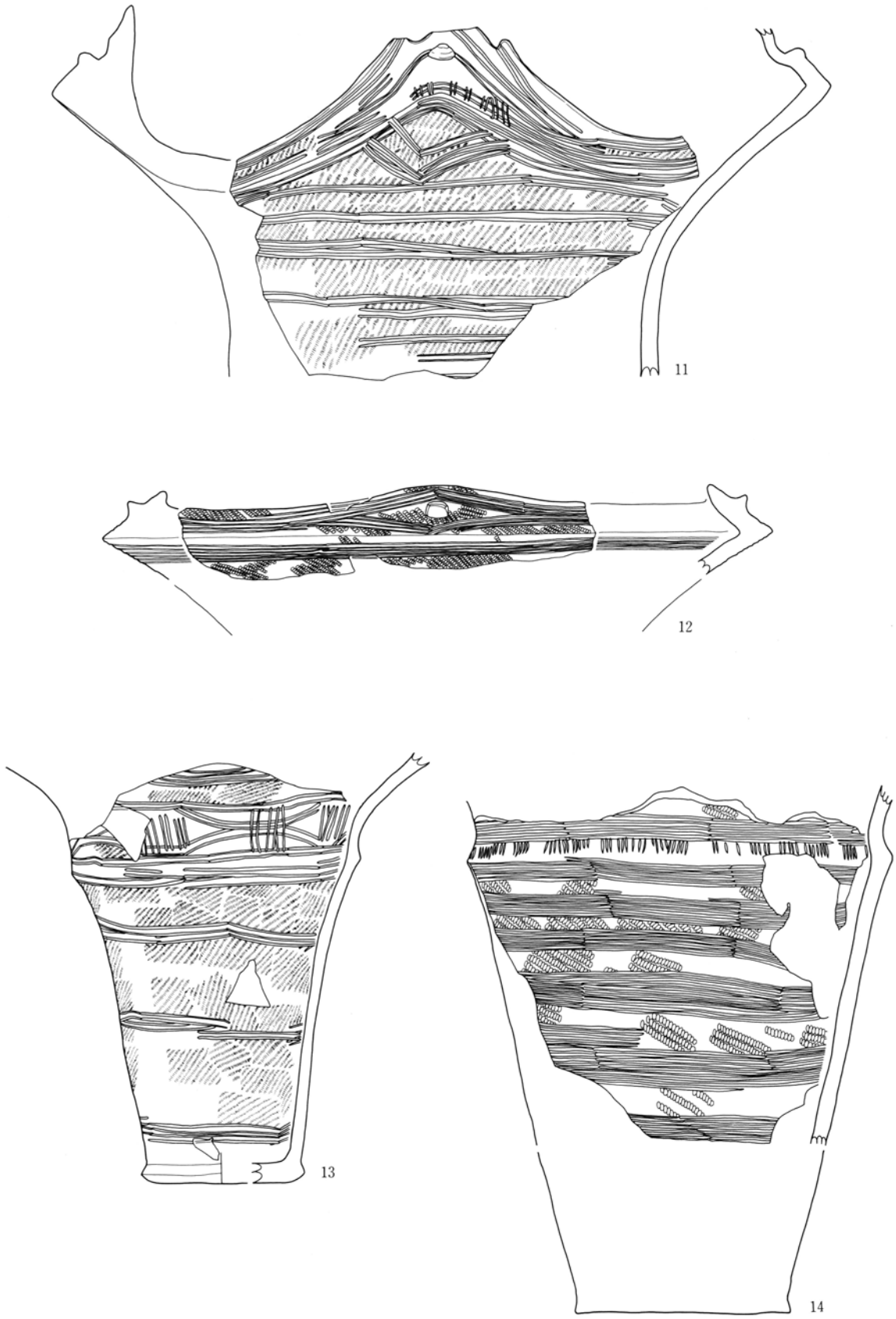


S＝1/3

第15図　26号住居跡出土遺物（３）

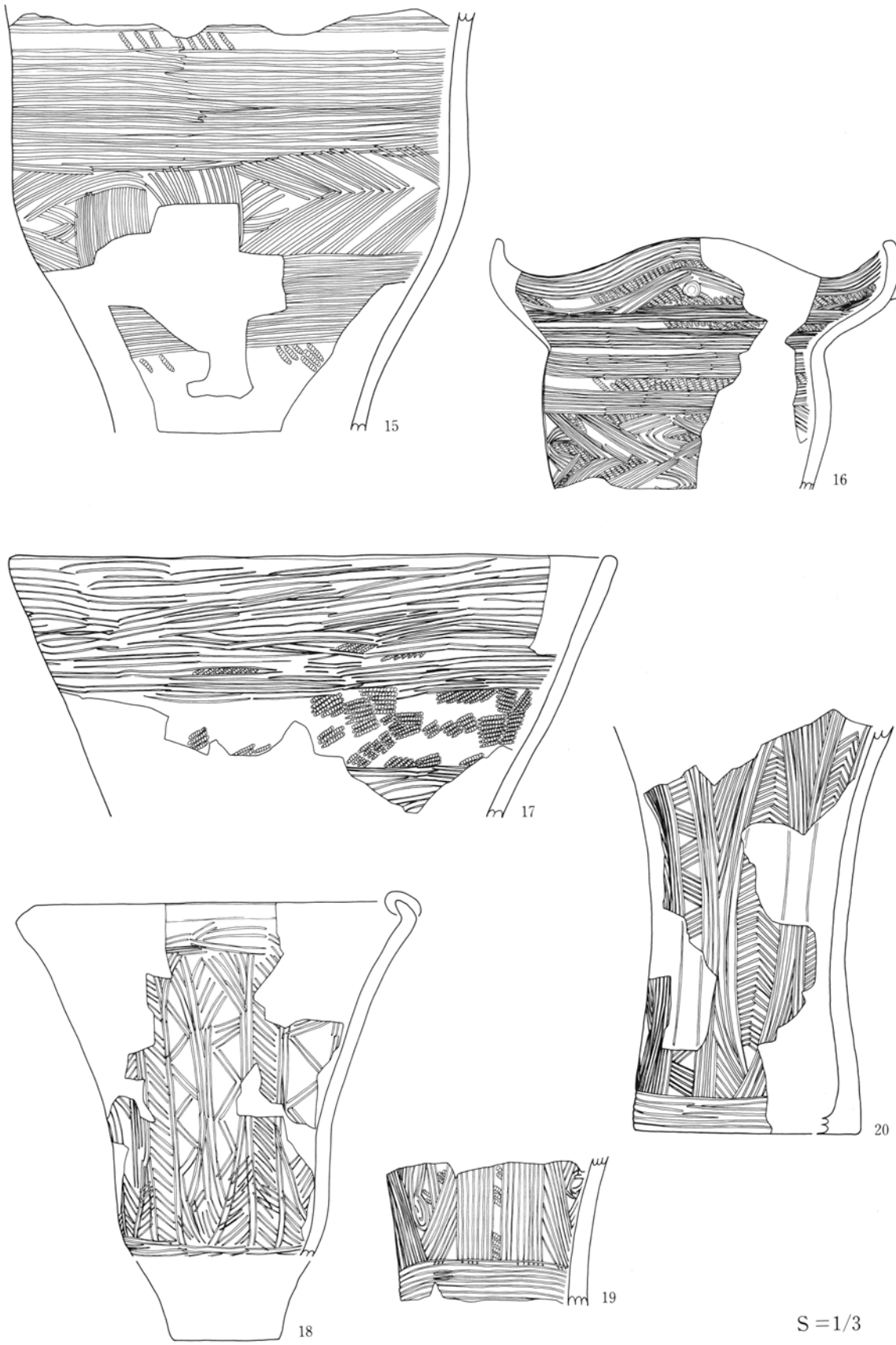
S＝1/3

第16図　26号住居跡出土遺物（４）

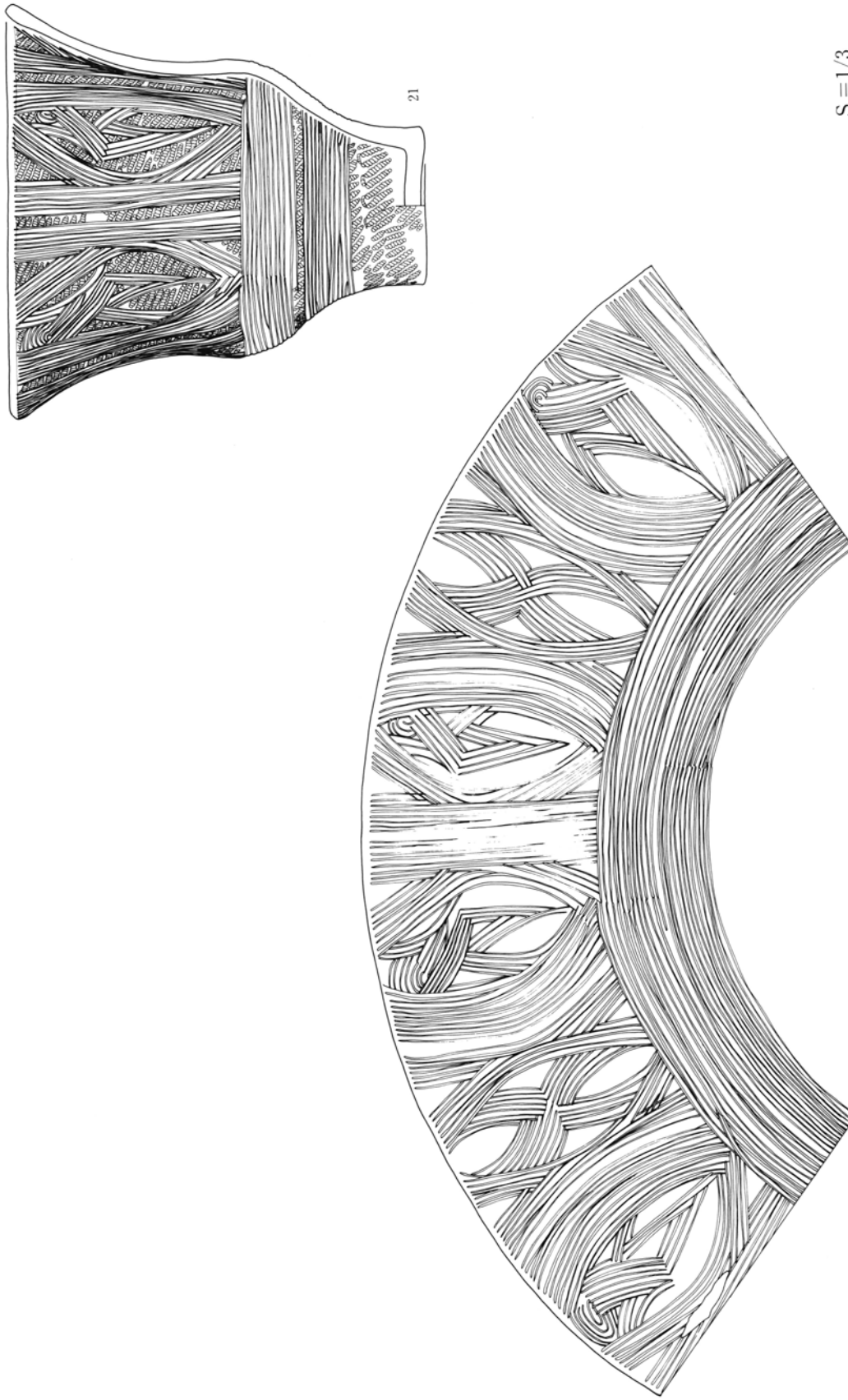


S＝1/3

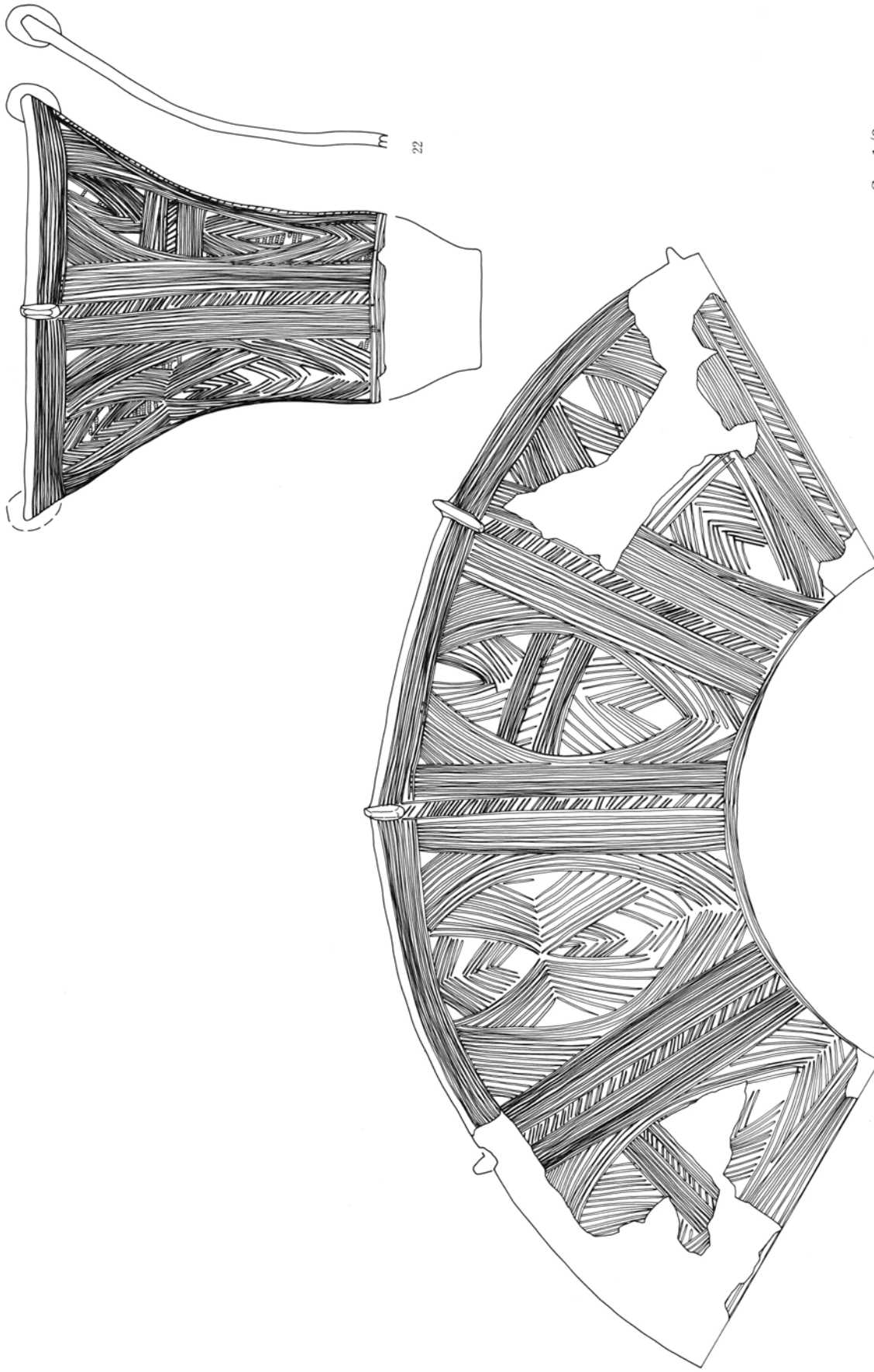
第17図　26号住居跡出土遺物（５）



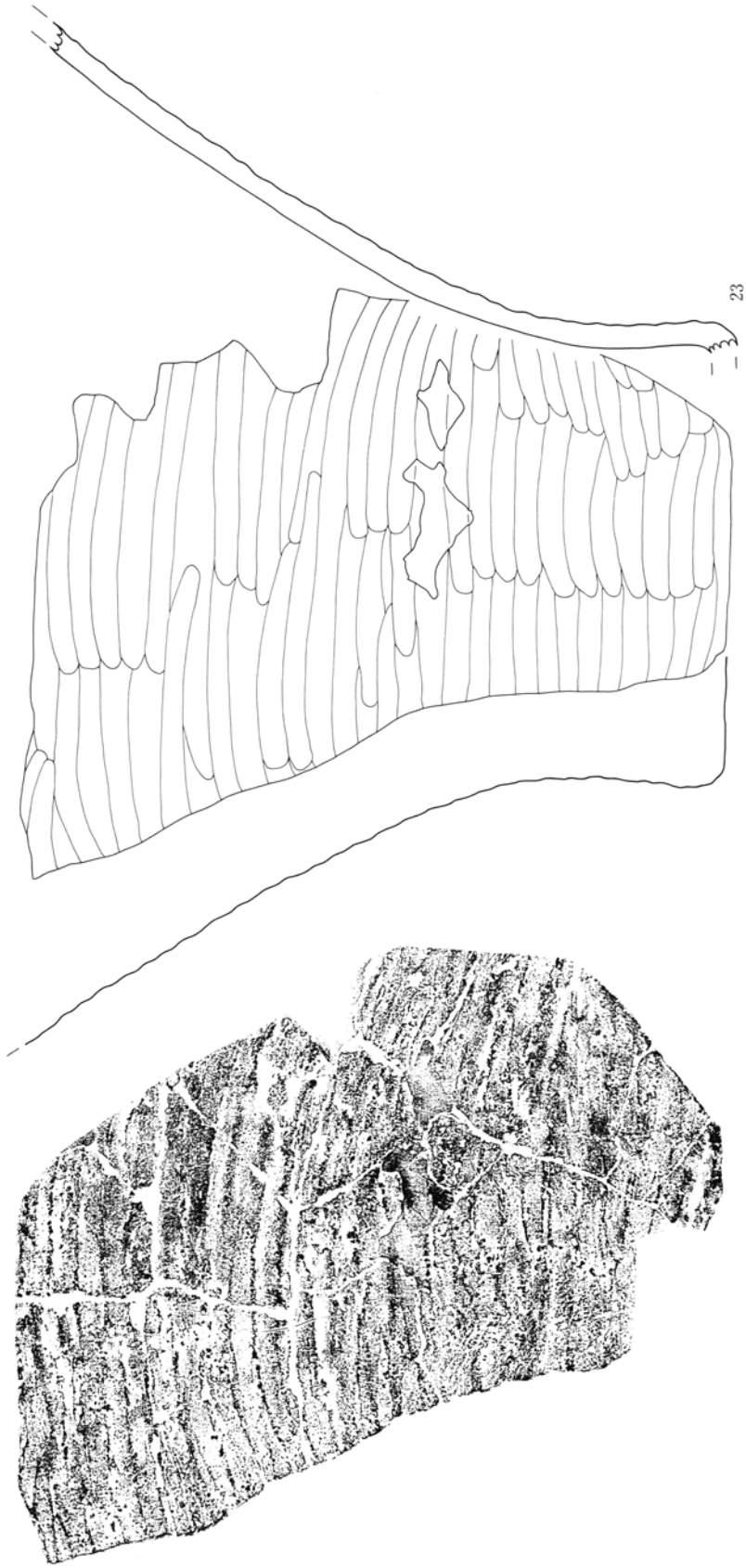
第18図　26号住居跡出土遺物（６）



第19図　26号住居跡出土遺物（７）

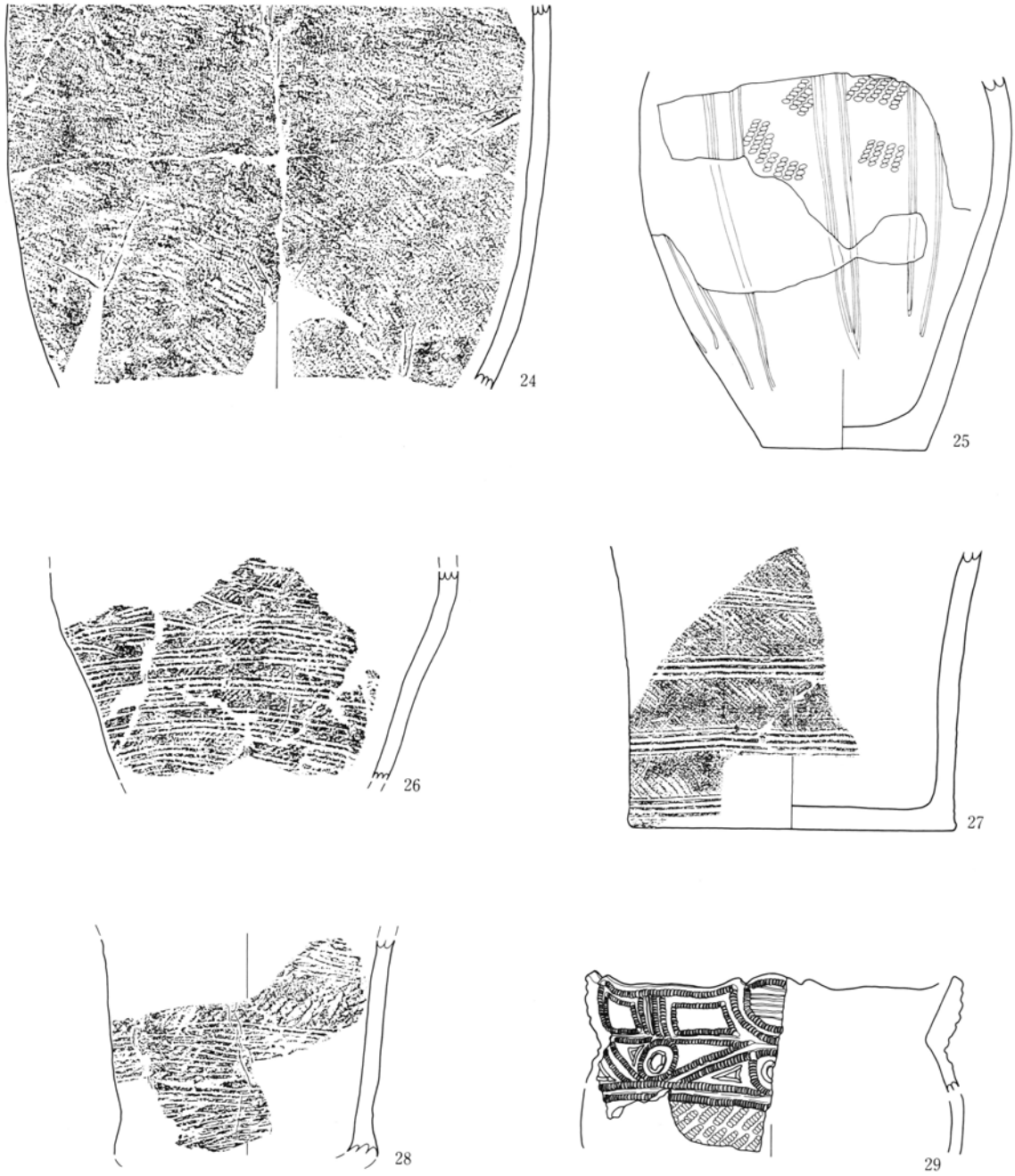


第20図　26号住居跡出土遺物（８）



S＝1/3

第21図　26号住居跡出土遺物（９）



第22図　26号住居跡出土遺物（10）

のや、136のように波状文のみを連続的に施文する例もある。また、縦位に円形刺突を加えるものもみられる。141・142・144をみると、胴部に縄文が施されている。145～193は細い半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くものであり、145～154は口縁下に数条巡らせるもの。156は口縁下に２条巡らせ、その下にレンズ状的な文様を描き、円形刺突を加えるもの。163～169は木葉文を描くもので、区画内に縄文をもち、円形刺突を加えるものもある。170～173は直線および曲線的に沈線を施して文様を描くものであり、区画内に縄文を施している。

194～312は口縁以下に爪形をもつ平行沈線および沈線間に刻みをもち、入り組み状・波状等の曲線的な文様を描くものである。207・210・211・218・233の口舌部には刻みが施され、円形刺突を加えるものもある。233・234・300・301・303～306には刻みをもつ浮線が施されている。233・234・309～312は半裁竹管による格子目状の文様が施されるものである。これらの内、231・232は波状口縁となるものであり、中には地文に縄文をもつものもある。

313～322は浅鉢の器形を呈するものであり、313～316・322は口縁下に孔を有する有孔浅鉢となるものである。施文される文様は、半裁竹管による木葉文等であり、爪形刺突を加えるものや、320のように刻みをもつ浮線が施されるものもある。321は底部近くで有段となるもので、322は無文となる。

323～439は口縁以下に刻みをもつ浮線により平行および入り組み状・渦状・弧状等に曲線的な文様を描くものである。323・324・331・354・357の口舌部には、Ｘ字状等の文様が浮線で施されるものであり、329はハ字状の刻みが、335・339・342には刻みが、それぞれ施されている。358～364は口縁部に付く獣面突起であり、口縁部以下には刻みをもつ浮線で文様が描かれる。365・366は同一個体となるもので、頸部下に外側への屈曲部を有し、その上端にＸ字状と、その内部に縦位の浮線を施している。394の頸部には、平行な浮線間に縦位の浮線をもつものである。胴部下半には、平行な浮線のみが施されるものが多い。これらの土器の地文には、ほとんどに縄文をもつ。

440～453は半裁竹管により施文するもので、先の浮線文と同様の文様を描くものである。

454～475は半裁竹管の集合沈線により、入り組み状・弧状等の曲線的な文様を描くものであり、454は靴先状となる大波状口縁である。476～495は口縁部から頸部にかけて、横位の矢羽根状等の集合沈線による文様を描くものであり、496～522はそれらの胴部である。541～546も胴部に横位の幅広な集合沈線を施すものである。630～440は大波状口縁となるものであり、538・539の波頂下にボタン状貼付文が施されている。

548～553・629～652は口縁部にボタン状貼付文および横位の集合沈線をもち、胴部に縦位・弧状等の文様を描くものであり、554・555は口縁部に横位の矢羽根状沈線や耳タブ状・ボタン状貼付文をもつものである。556は口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線をもち、その下に地文に横位の矢羽根状沈線をもち、棒状の貼付文を施すものである。

653～655は結節浮線により曲線的な文様が描かれるものであり、656は爪形刺突をもつ平行沈線と鋸歯状の浮線が施されている。

557～628は口縁以下および胴部に縄文を施すものであり、結節文や結束による羽状縄文もみられる。

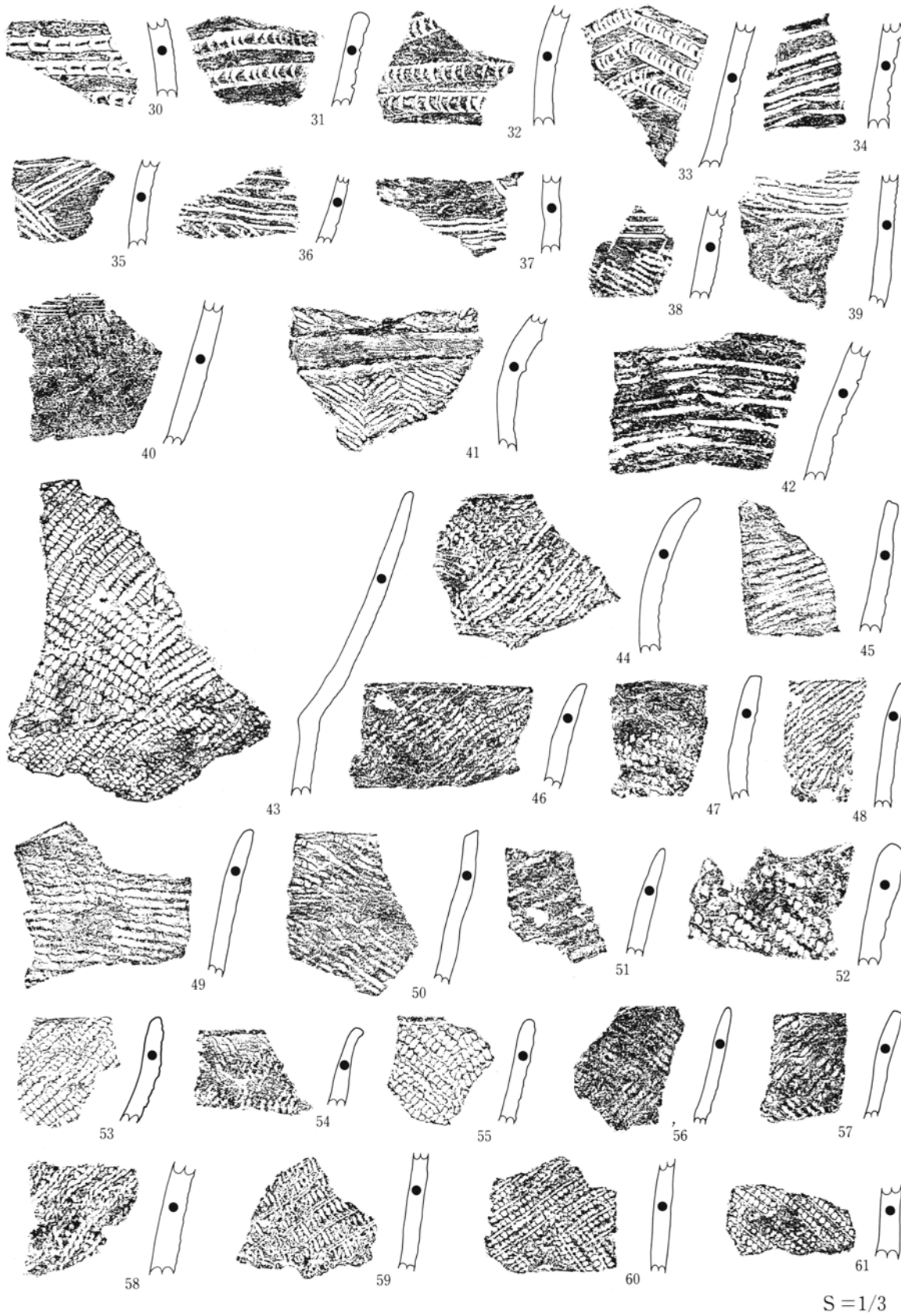
657～659は胴部に凹凸状の刺突を施すものであり、661～665は縦位の矢羽根状沈線と三角印刻文をもつものである。666は第22図29と同一の土器である。667・668は口舌部に半裁竹管による刺突をもち、口縁部に幅広の半裁竹管による平行沈線と、支点を交互に変える変形爪形文、さらに刺突を施し、その下に細い半裁竹管で沈線を施すものである。

669はミニチュア土器であり、670は土器片を利用した土製円盤、671は三角錘状の粘土塊である。

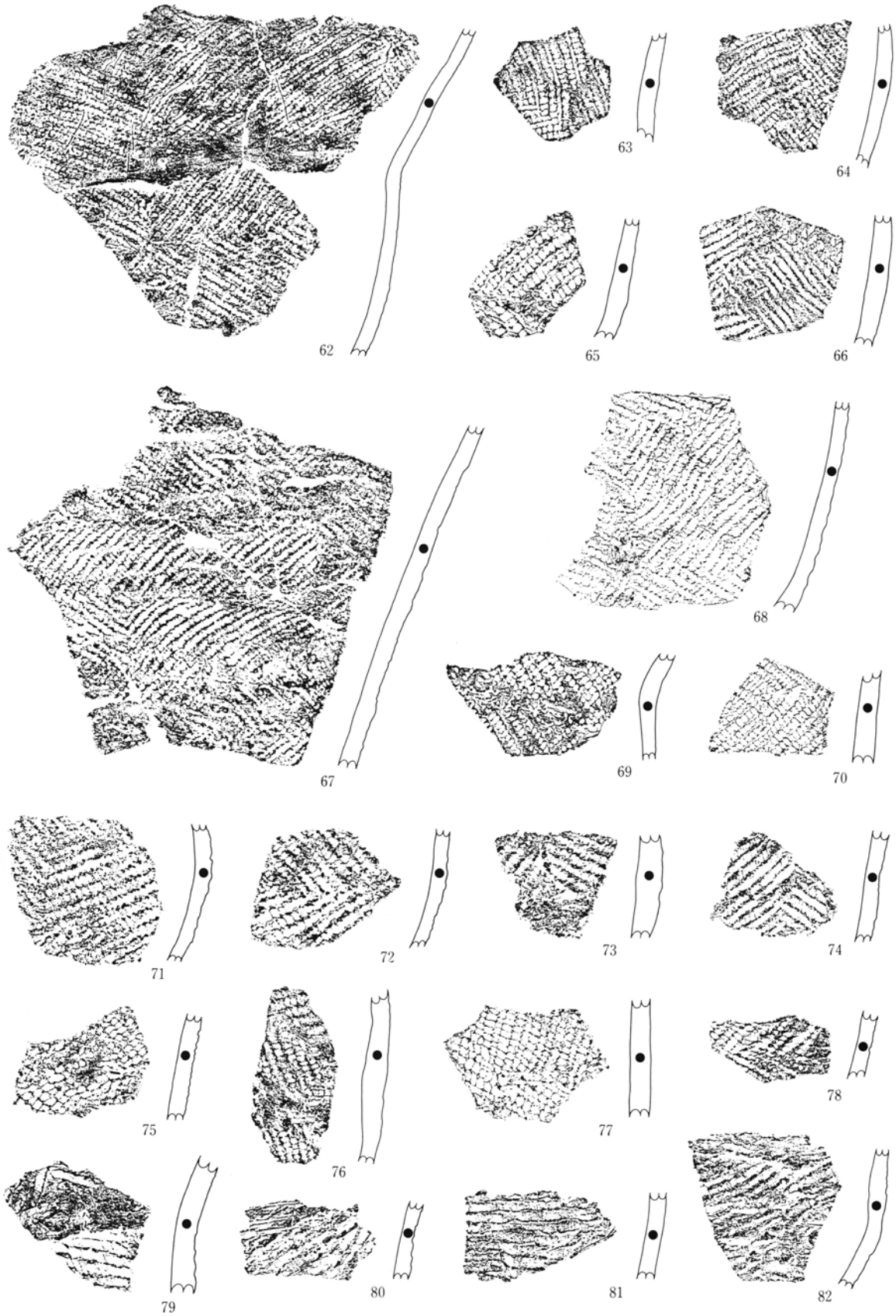
672～701は底部であり、701の胎土には繊維を含む。

石製品類　（第47図１～７）

１・２は円形で中央に孔をもち、抉状耳飾りないし垂れ飾りと考えられる。３は中央に孔をもつ玉である。４～６は石製の円盤であり、４の側面には溝を有し、６の片面は凸状をなし、丁寧な研磨が施されている。７も不整形ではあるが、中央に孔を有し、垂れ飾りと考えられるものである。

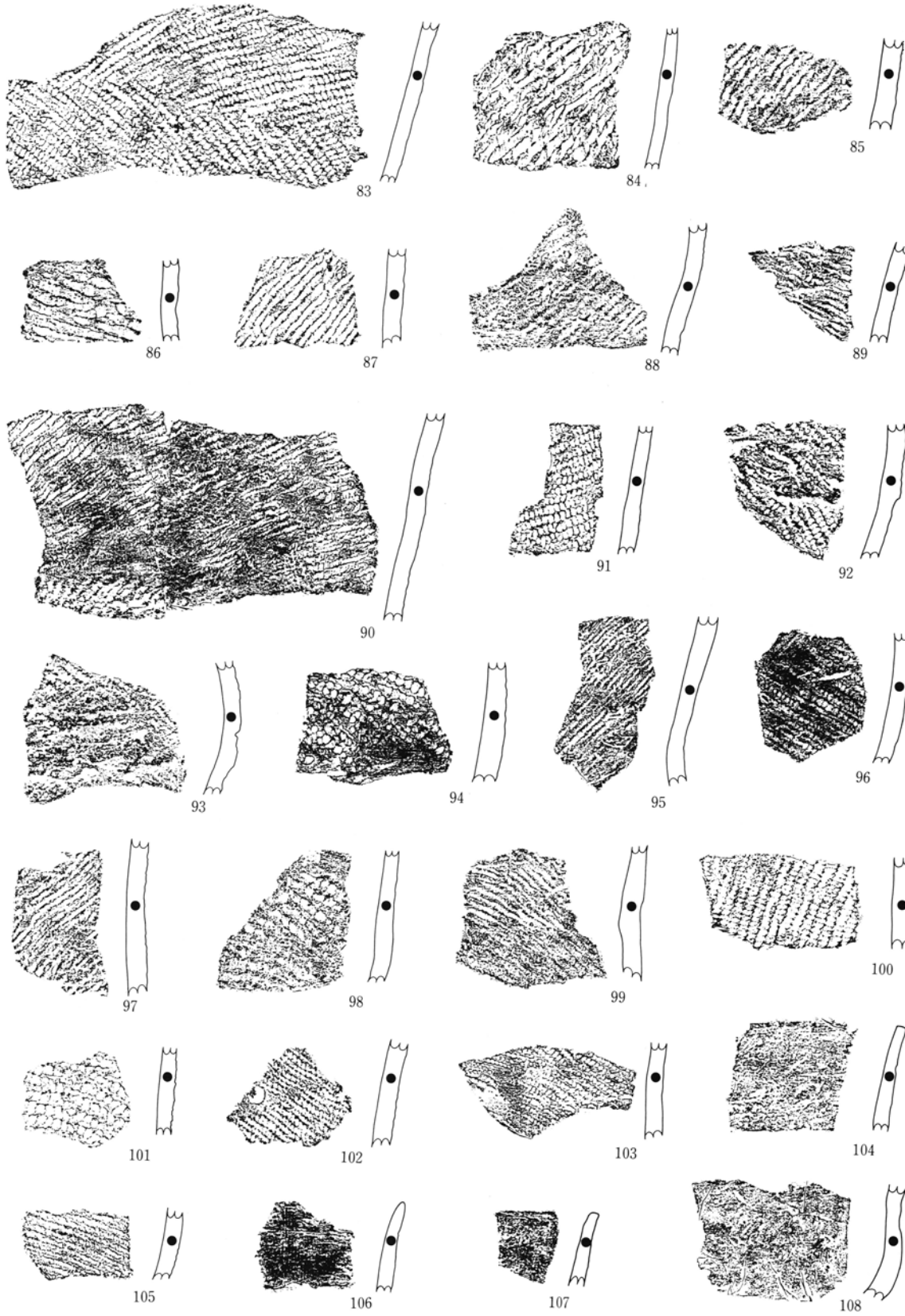


第23図　26号住居跡出土遺物（11）

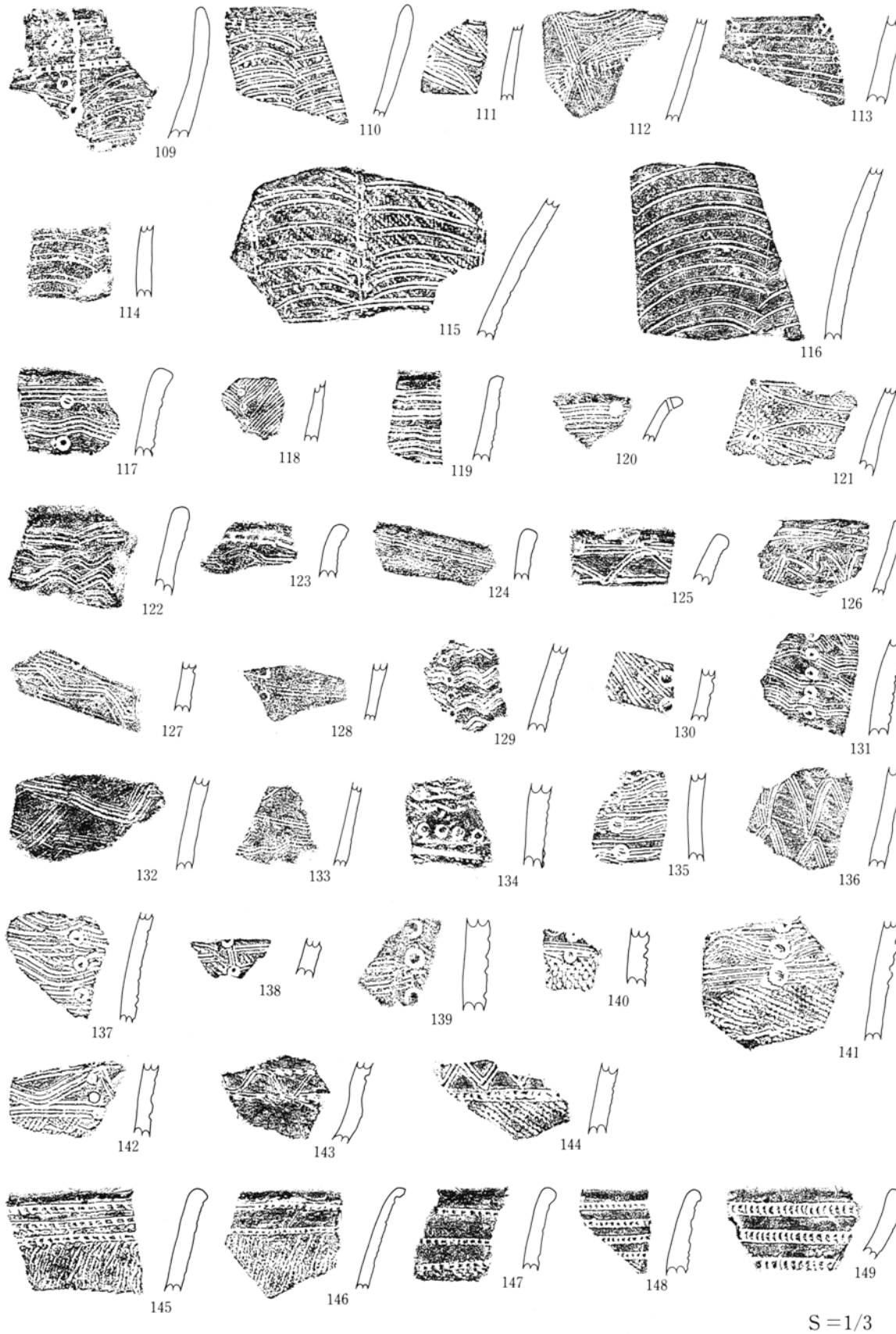


S＝1/3

第24図　26号住居跡出土遺物（12）

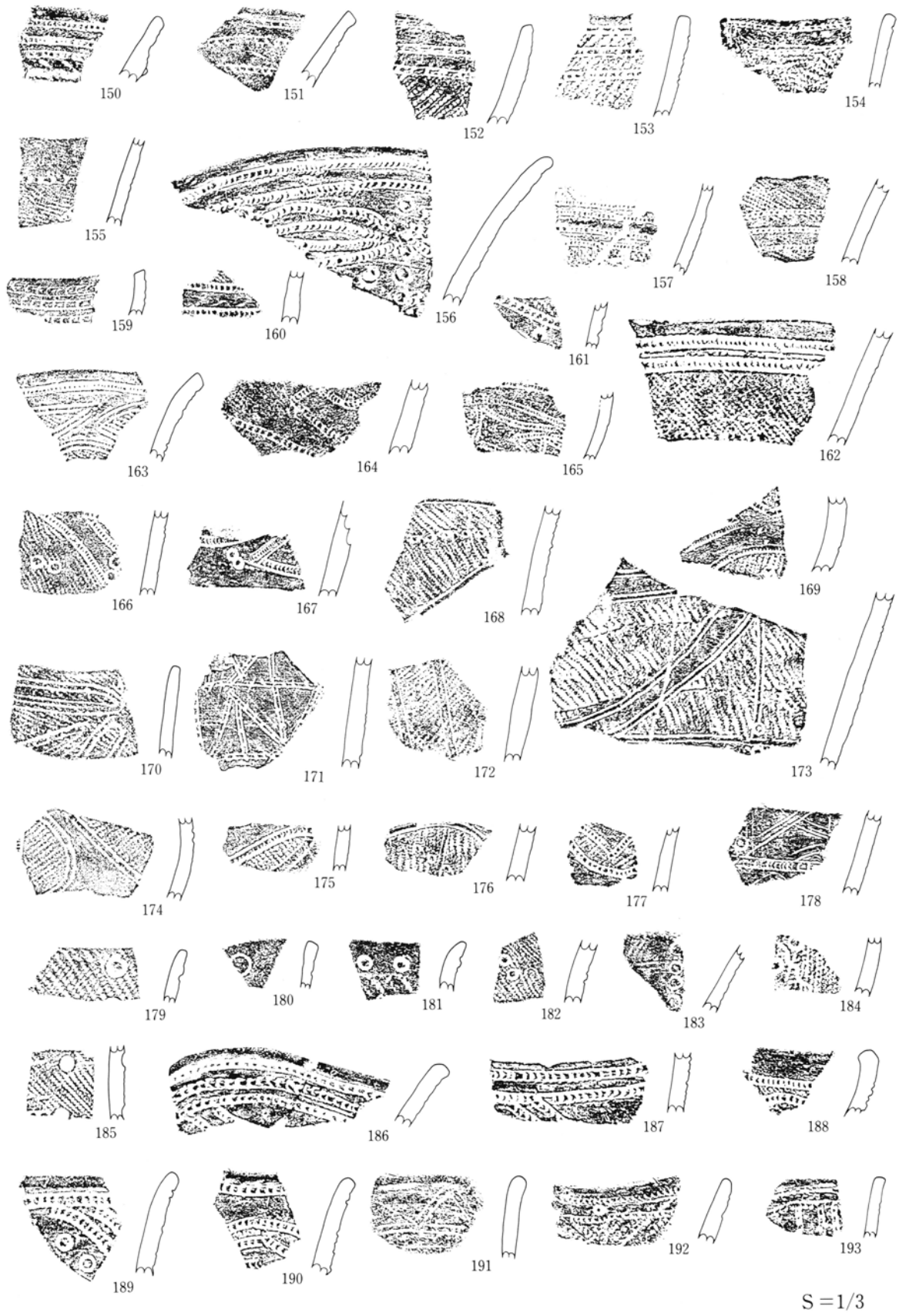


第25図　26号住居跡出土遺物（13）



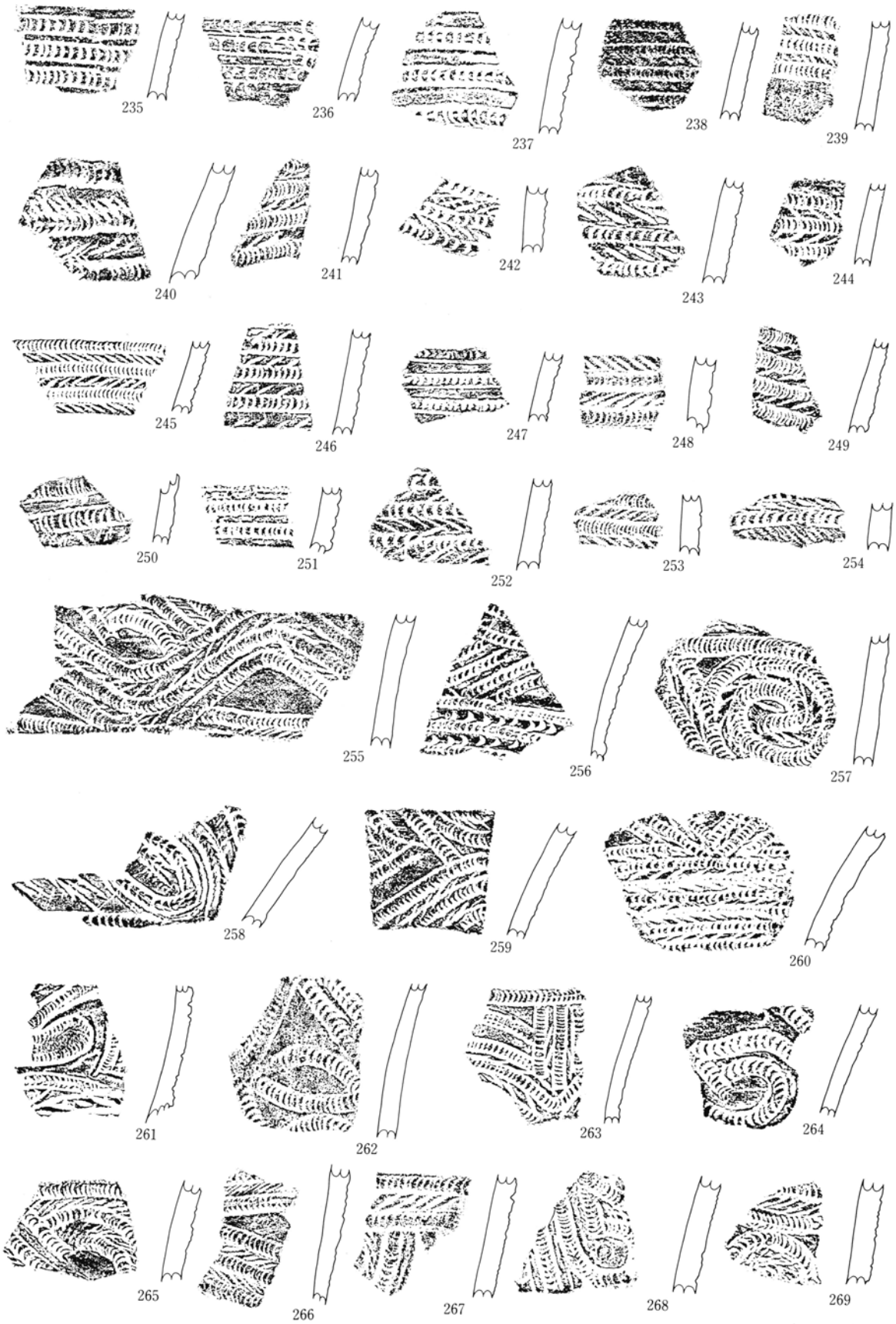
S＝1/3

第26図　26号住居跡出土遺物（14）



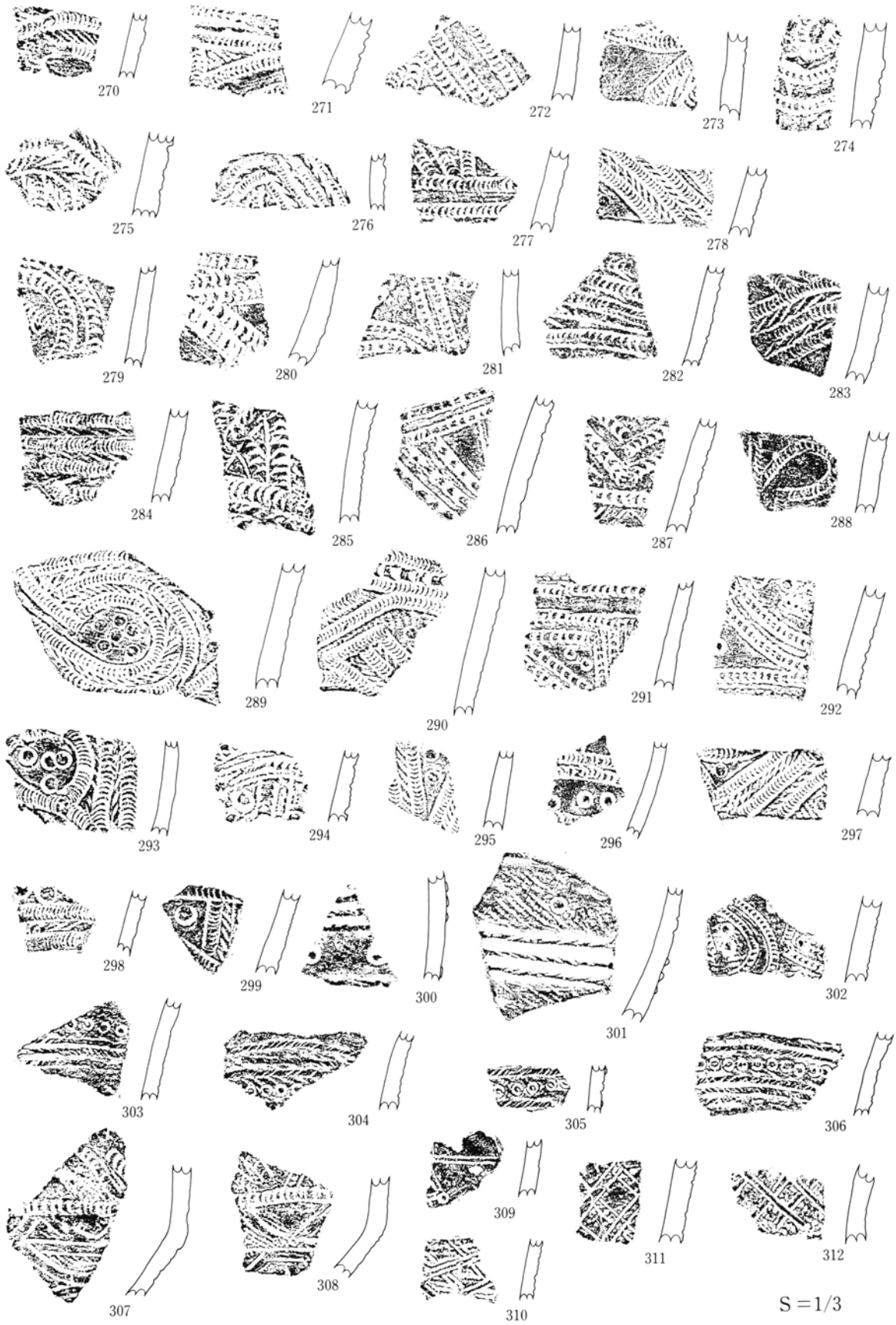
第27図　26号住居跡出土遺物（15）

第28図　26号住居跡出土遺物（16）　S＝1/3



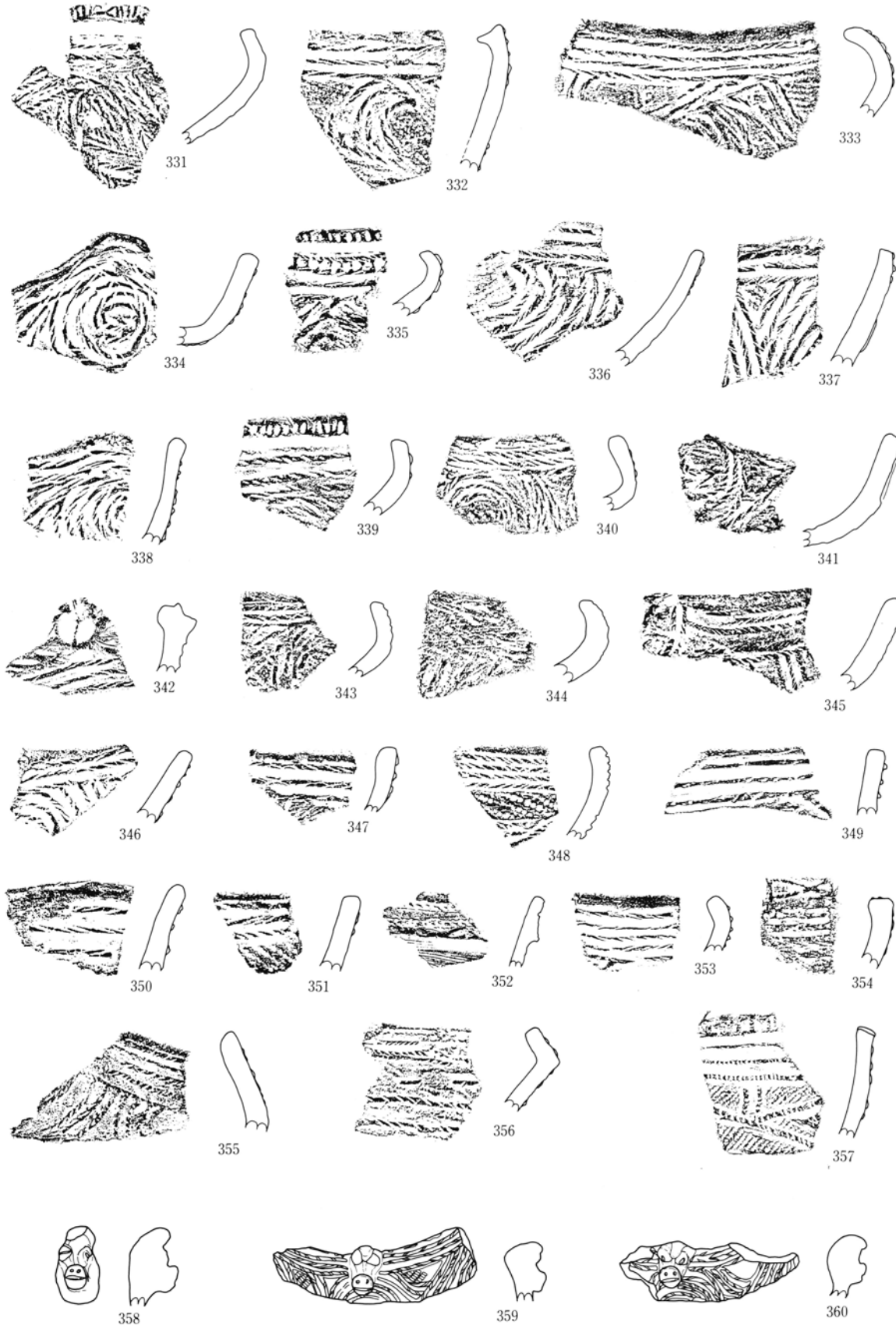
S＝1/3

第29図　26号住居跡出土遺物（17）

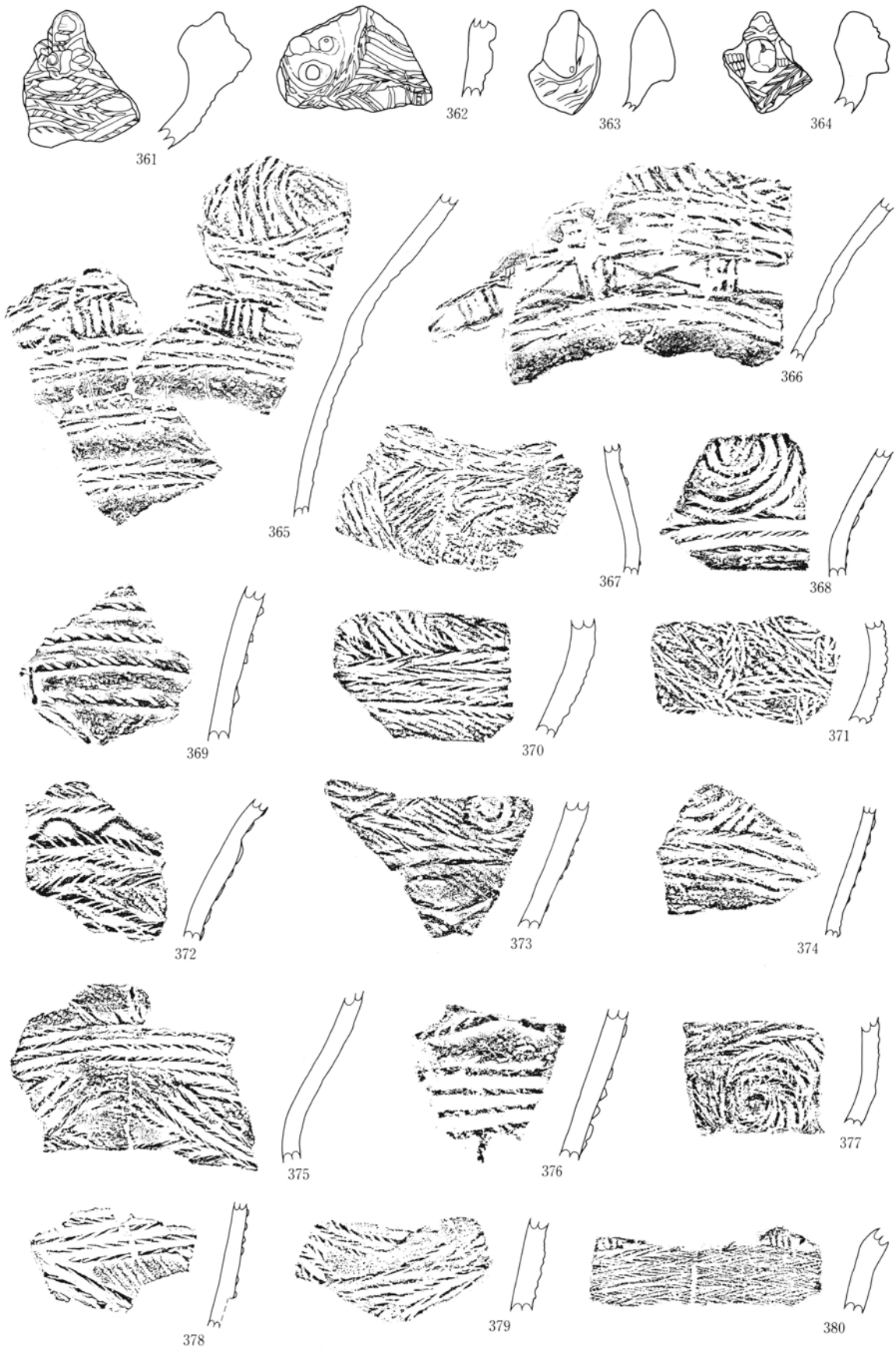


第30図　26号住居跡出土遺物（18）

第31図　26号住居跡出土遺物（19）



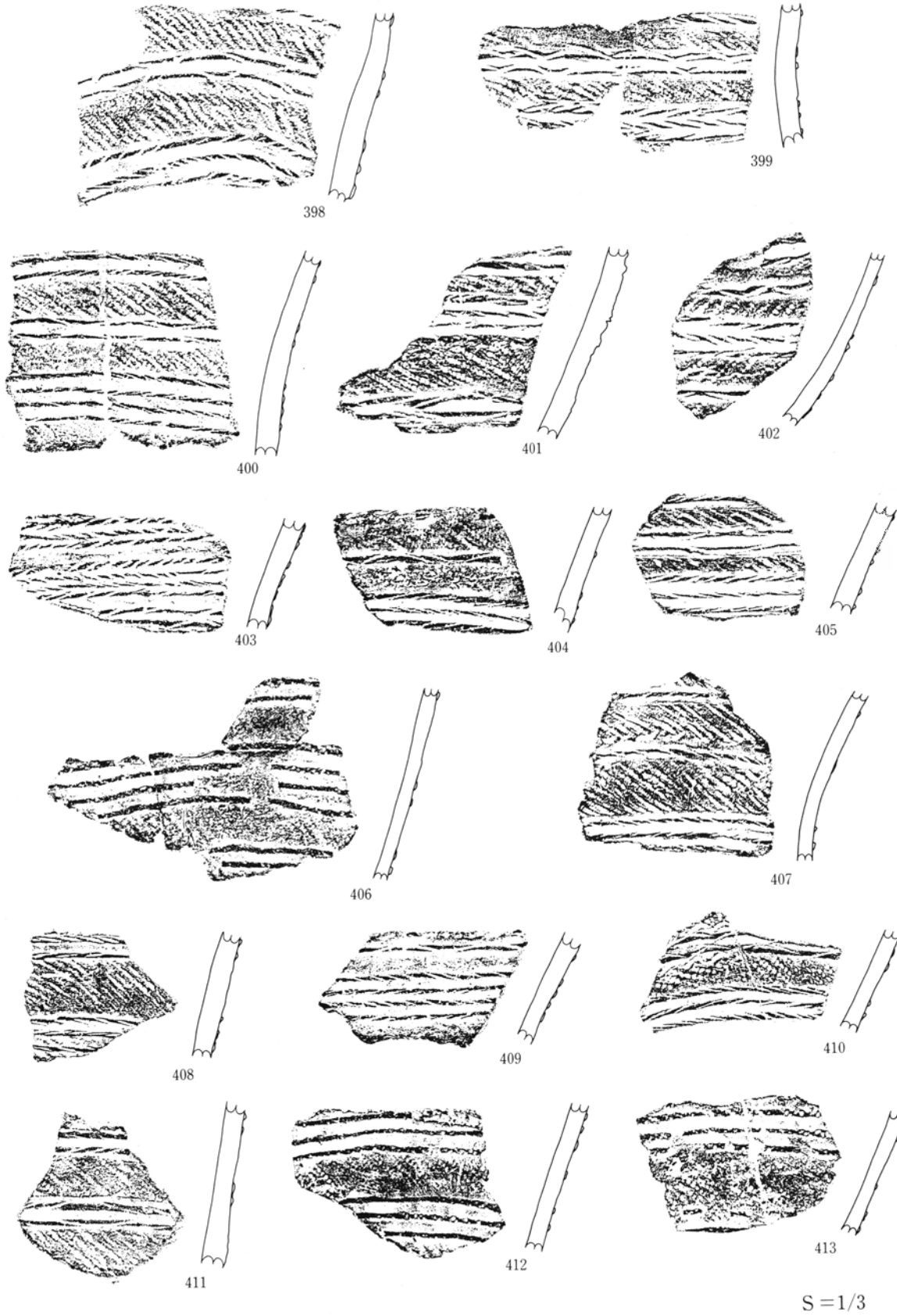
第32図　26号住居跡出土遺物（20）



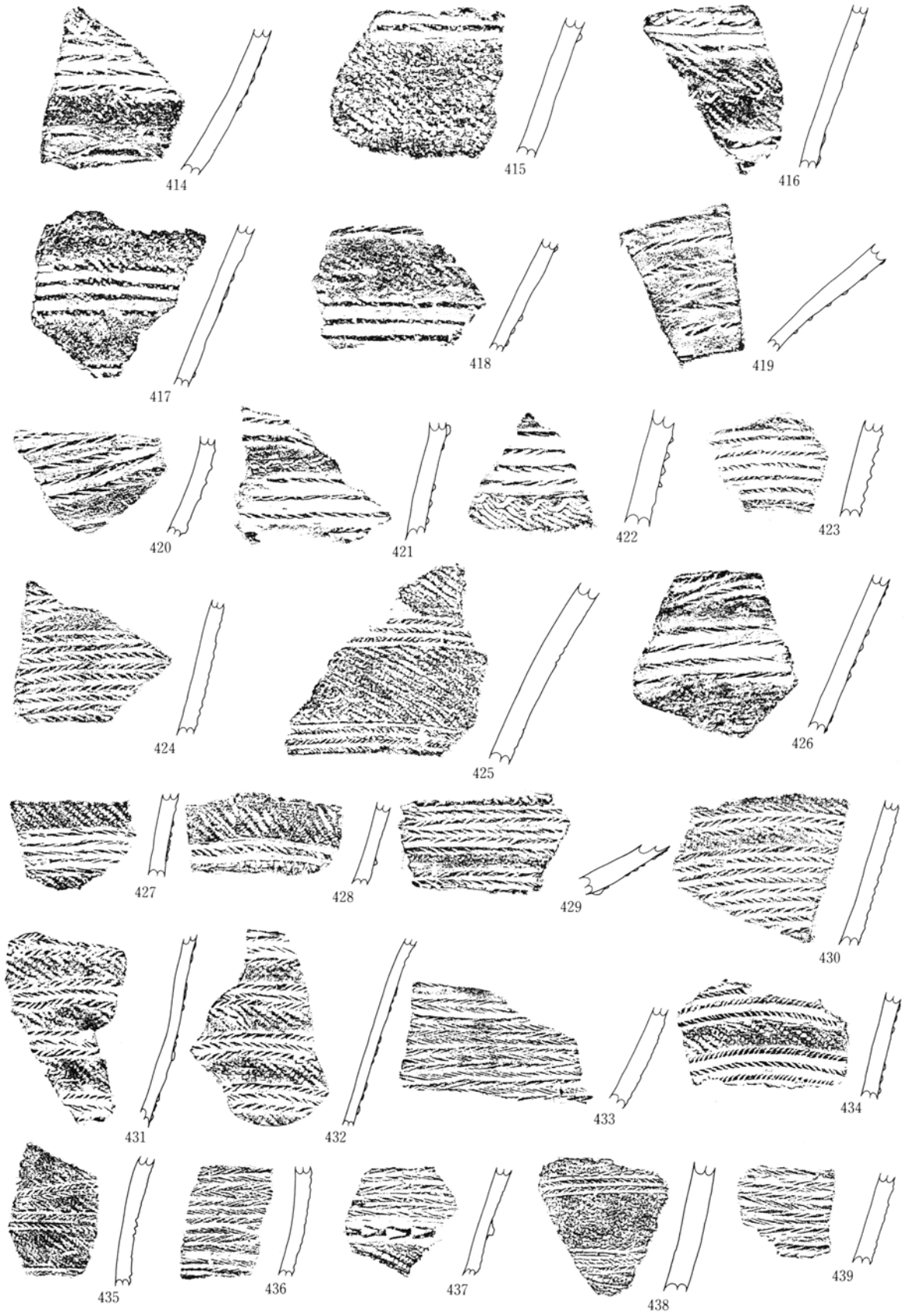
第33図　26号住居跡出土遺物（21）

S＝1/3

第34図　26号住居跡出土遺物（22）

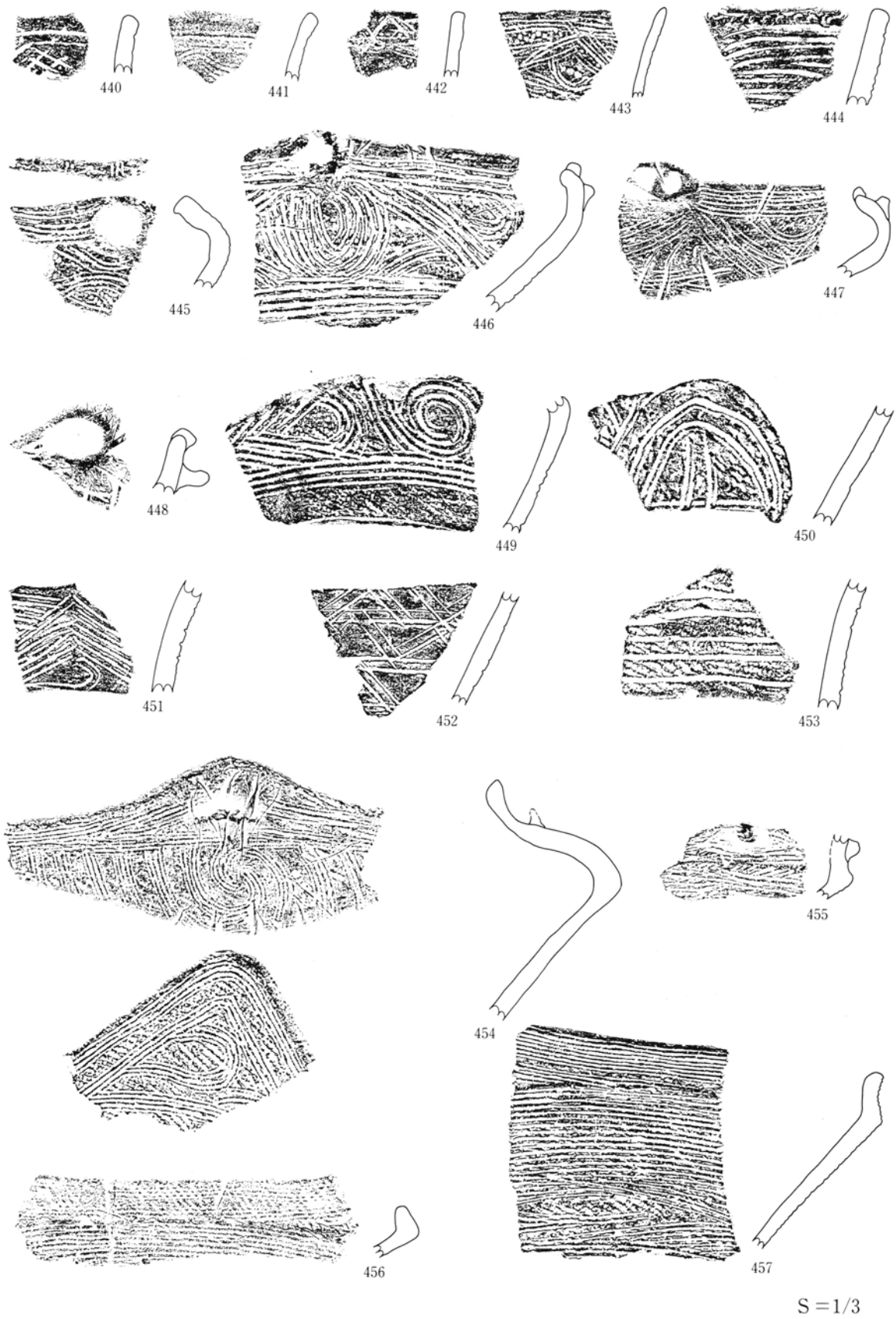


第35図　26号住居跡出土遺物（23）

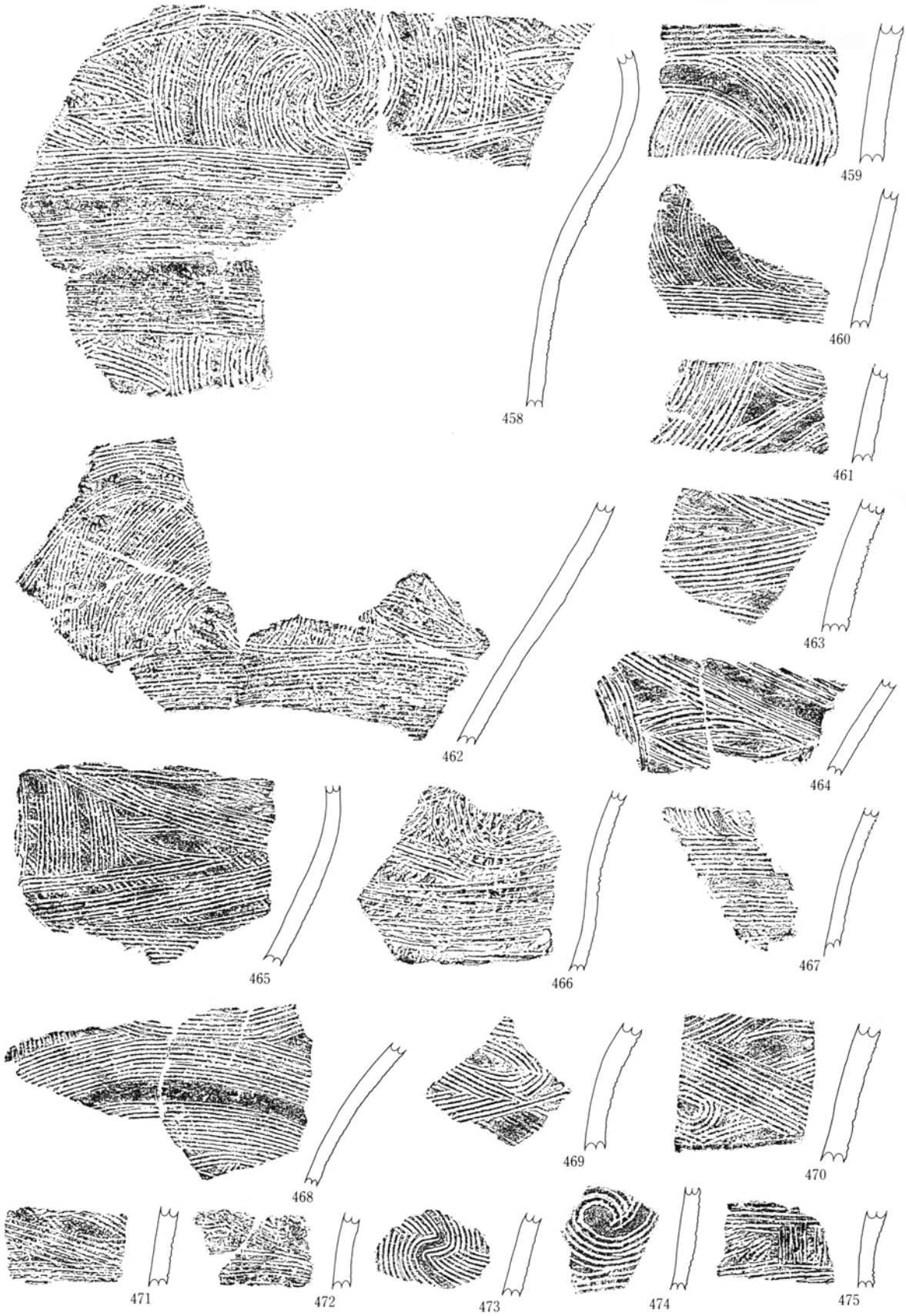


S＝1/3

第36図　26号住居跡出土遺物（24）

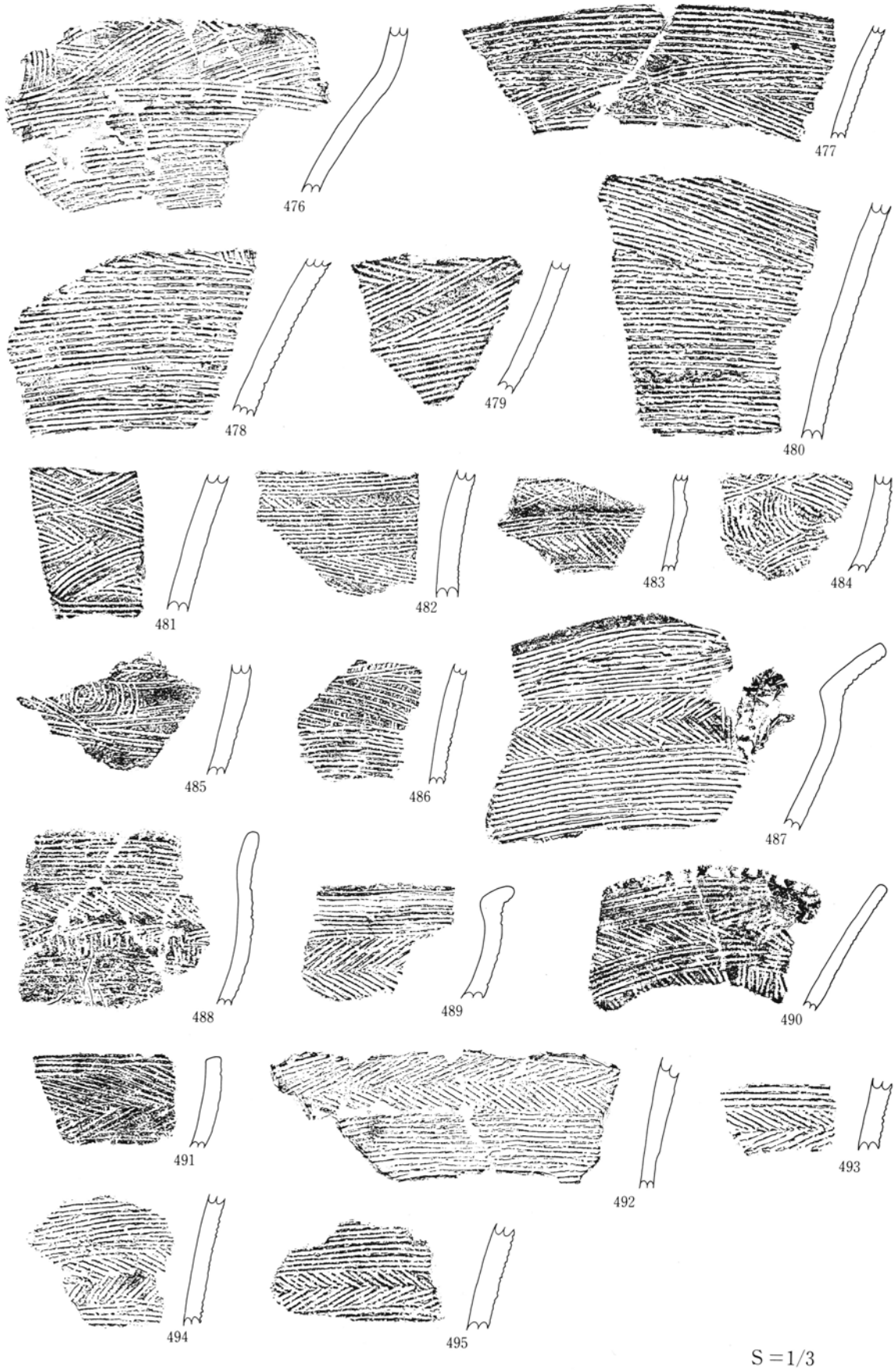


第37図　26号住居跡出土遺物（25）

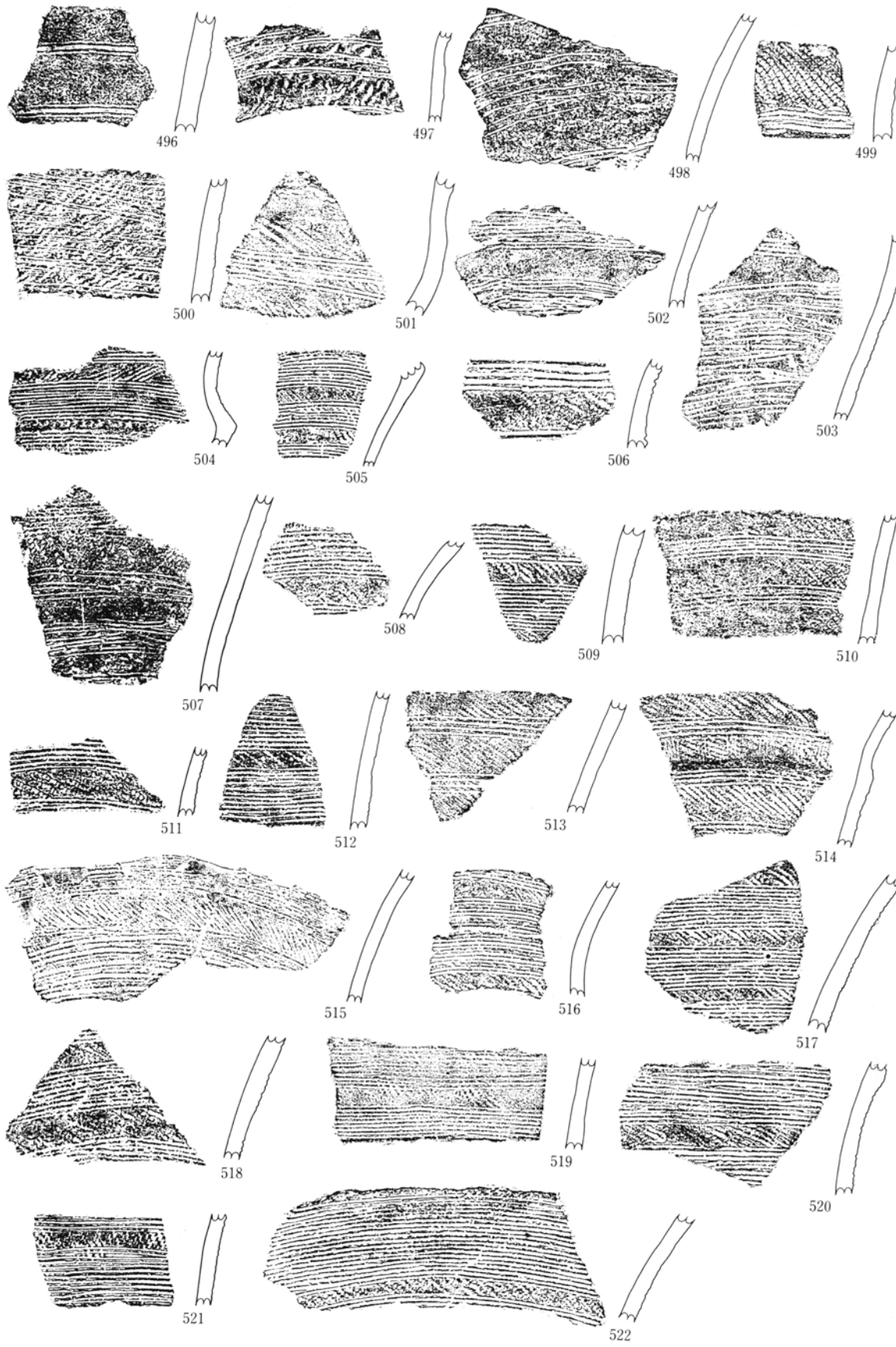


S＝1/3

第38図　26号住居跡出土遺物（26）



第39図　26号住居跡出土遺物（27）



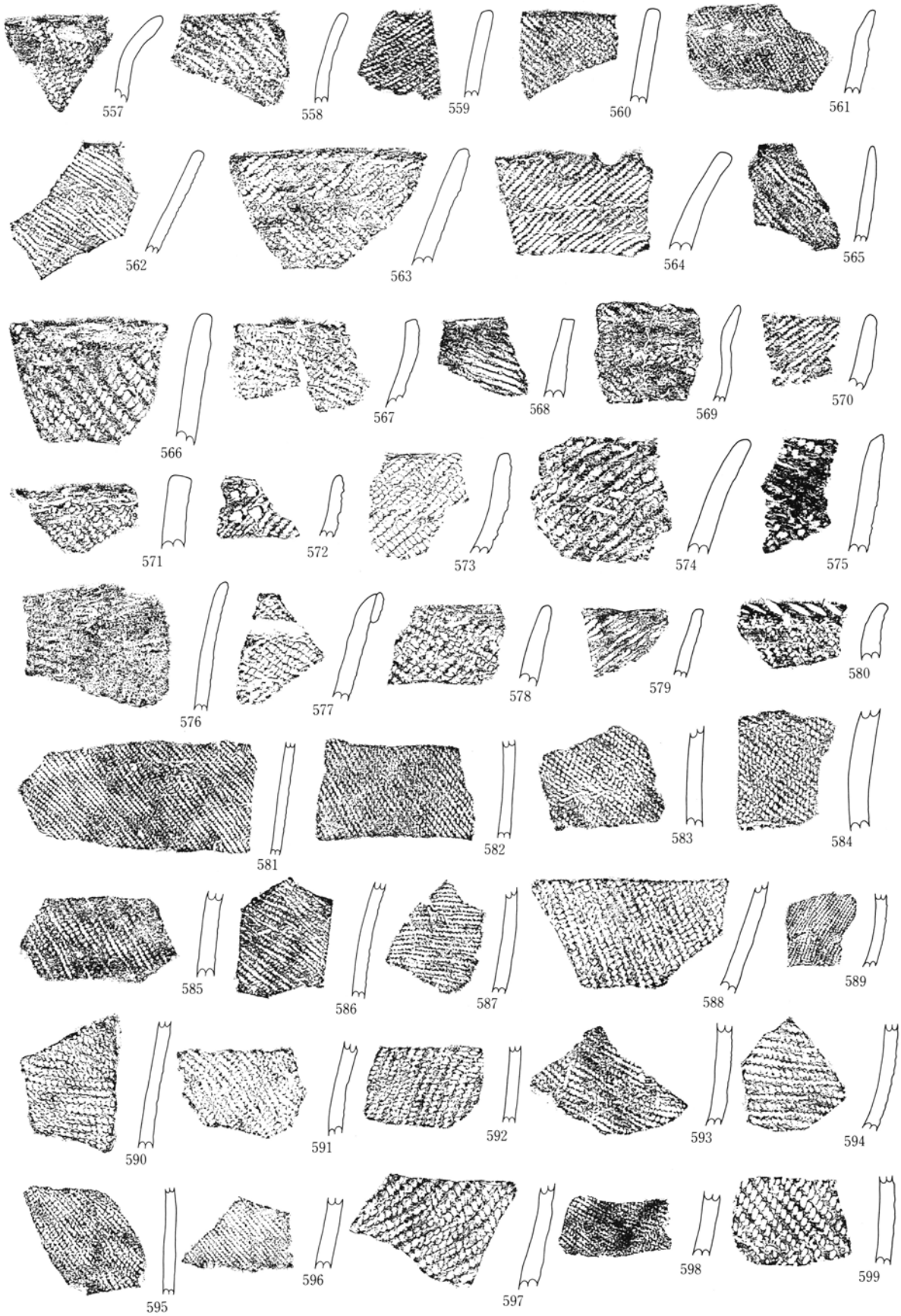
第40図　26号住居跡出土遺物（28）　　S＝1/3

S＝1/3

第41図　26号住居跡出土遺物（29）

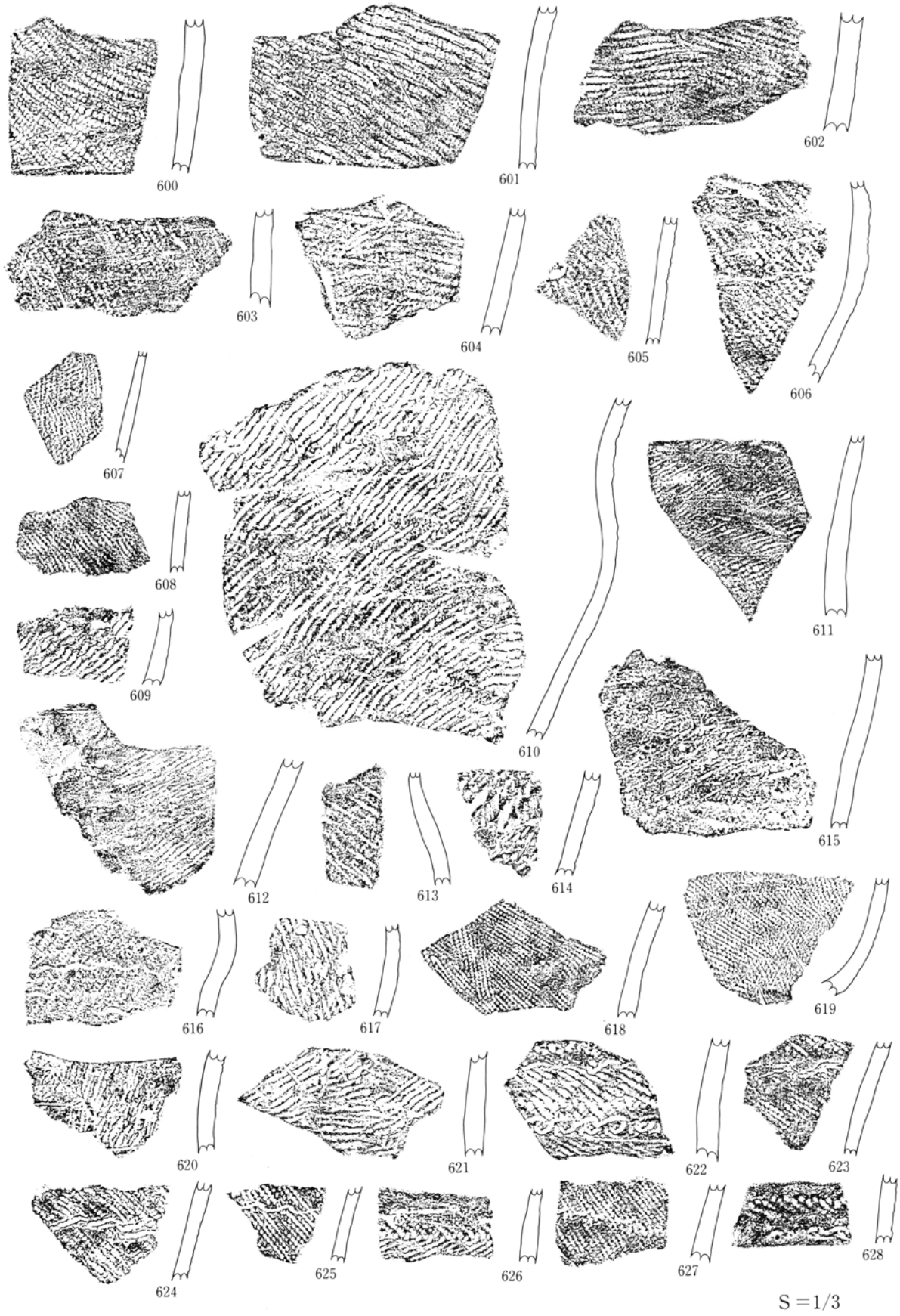
S＝1/3

第42図　26号住居跡出土遺物（30）

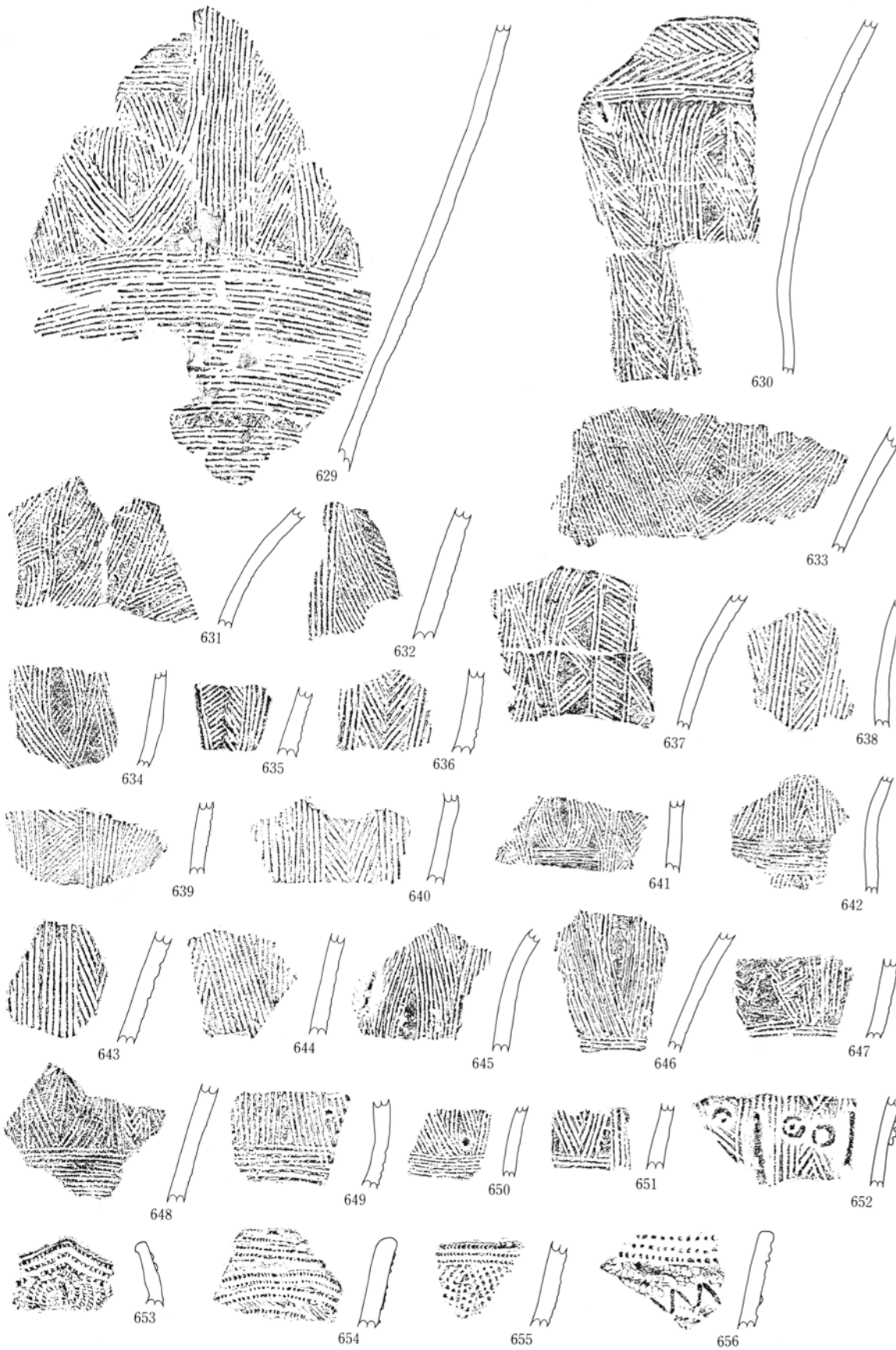


S＝1/3

第43号　26号住居跡出土遺物（31）



第44号　26号住居跡出土遺物（32）



第45図　26号住居跡出土遺物（33）

S＝1/3

第46図　26号住居跡出土遺物（34）

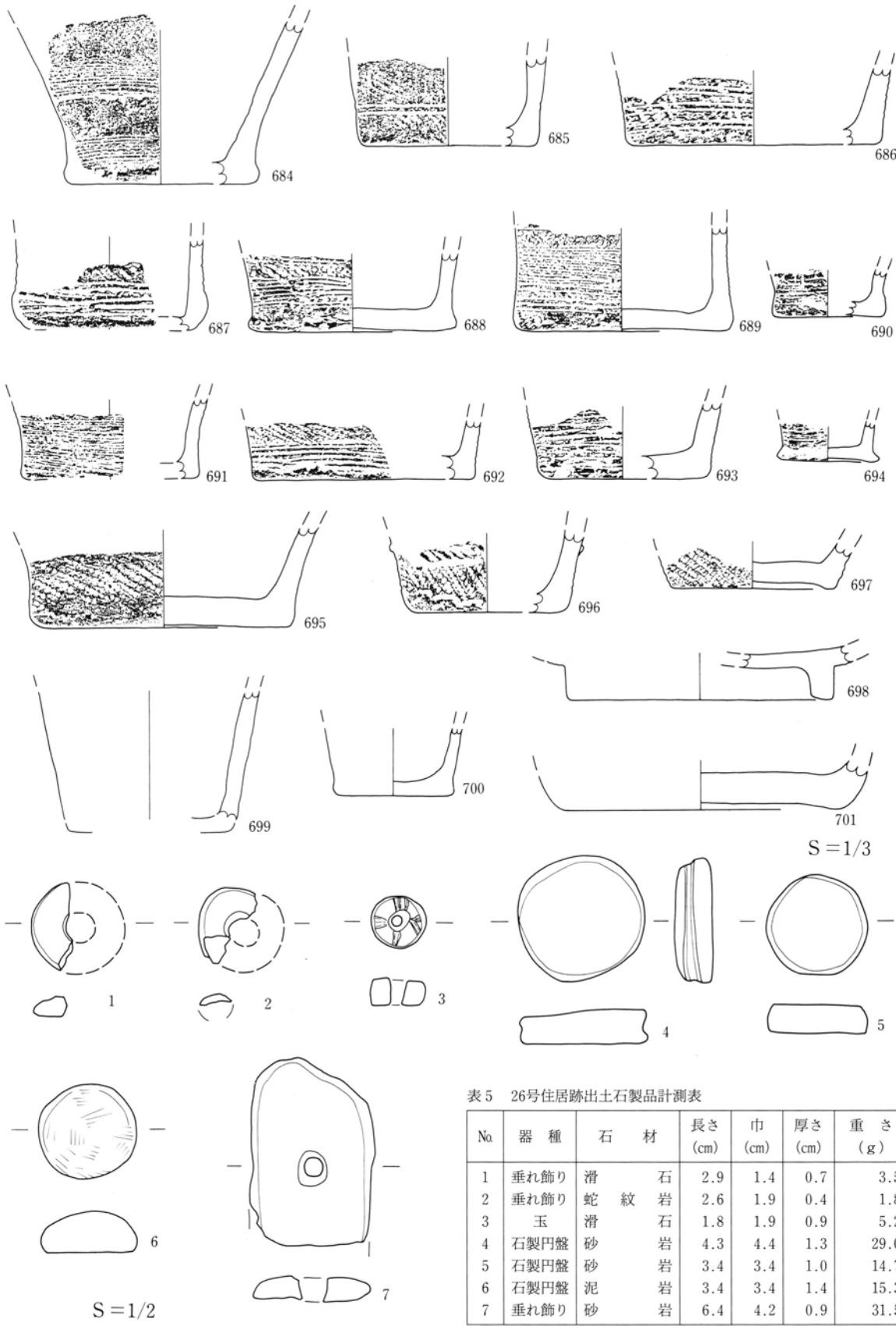
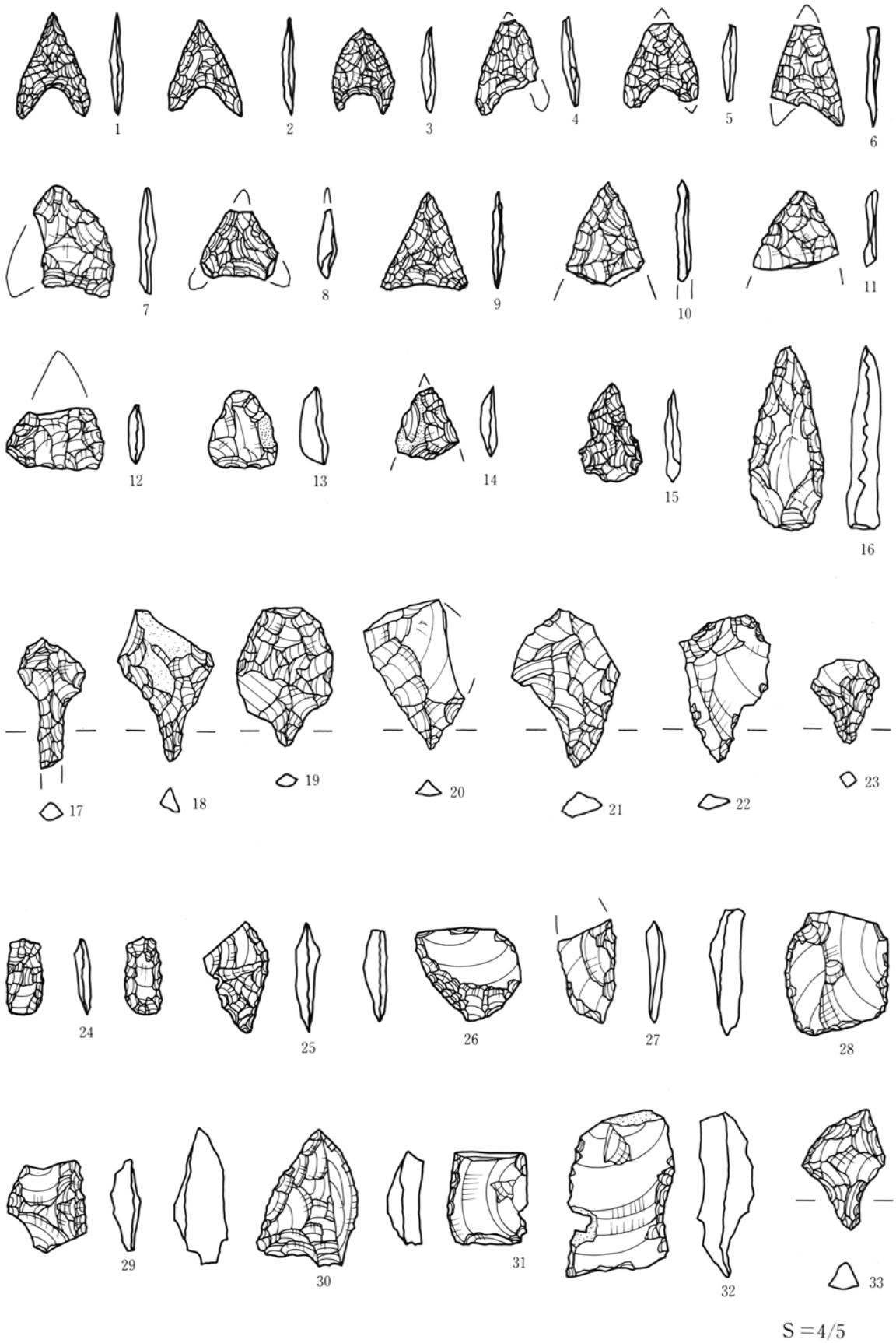


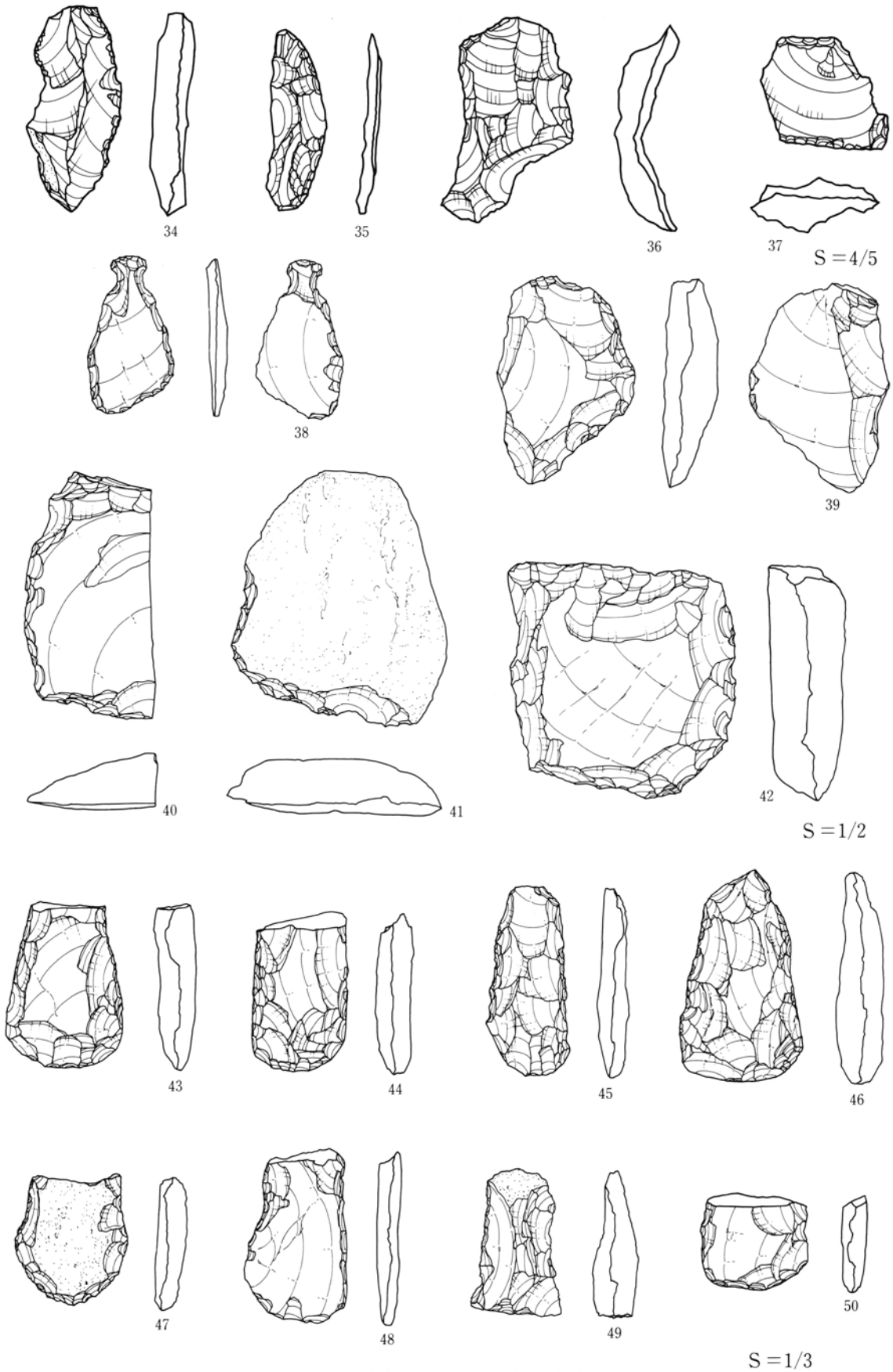
表５　26号住居跡出土石製品計測表

No.	器　種	石　　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	垂れ飾り	滑　　石	2.9	1.4	0.7	3.5
2	垂れ飾り	蛇　紋　岩	2.6	1.9	0.4	1.8
3	玉	滑　　石	1.8	1.9	0.9	5.2
4	石製円盤	砂　　岩	4.3	4.4	1.3	29.0
5	石製円盤	砂　　岩	3.4	3.4	1.0	14.7
6	石製円盤	泥　　岩	3.4	3.4	1.4	15.3
7	垂れ飾り	砂　　岩	6.4	4.2	0.9	31.5

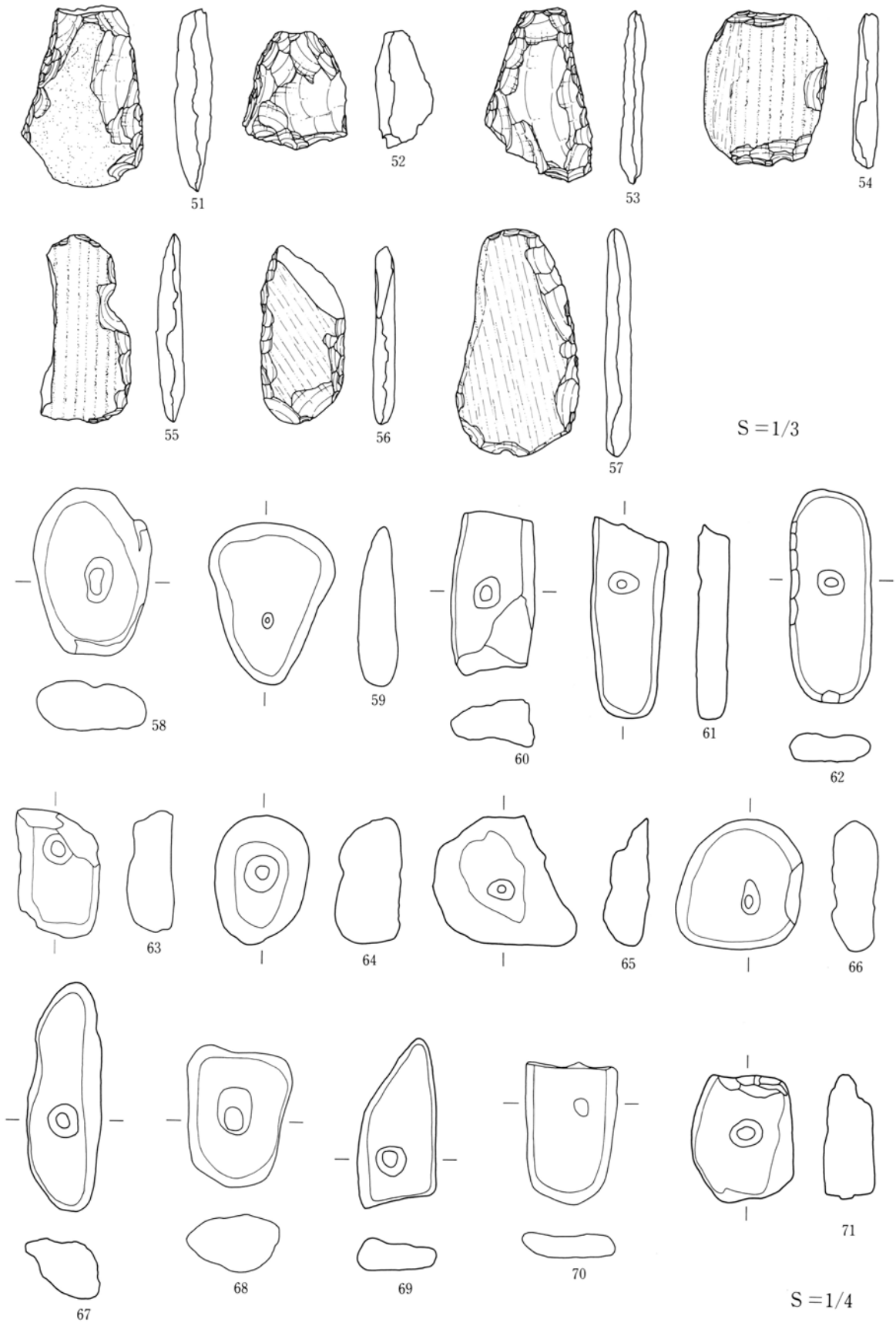
第47図　26号住居跡出土遺物（35）



第48図　26号住居跡出土遺物（36）



第49図　26号住居跡出土遺物（37）

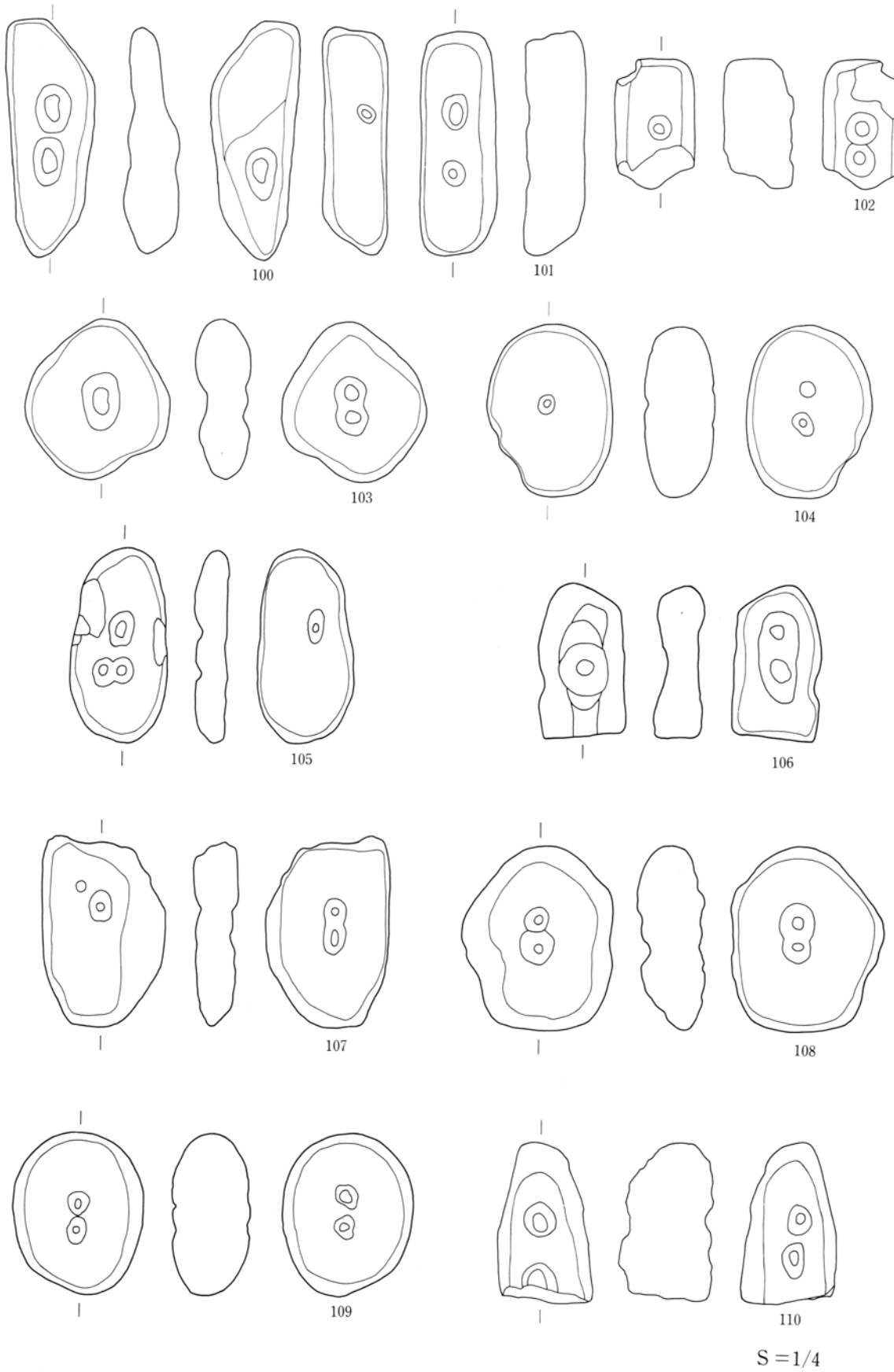


第50図　26号住居跡出土遺物（38）

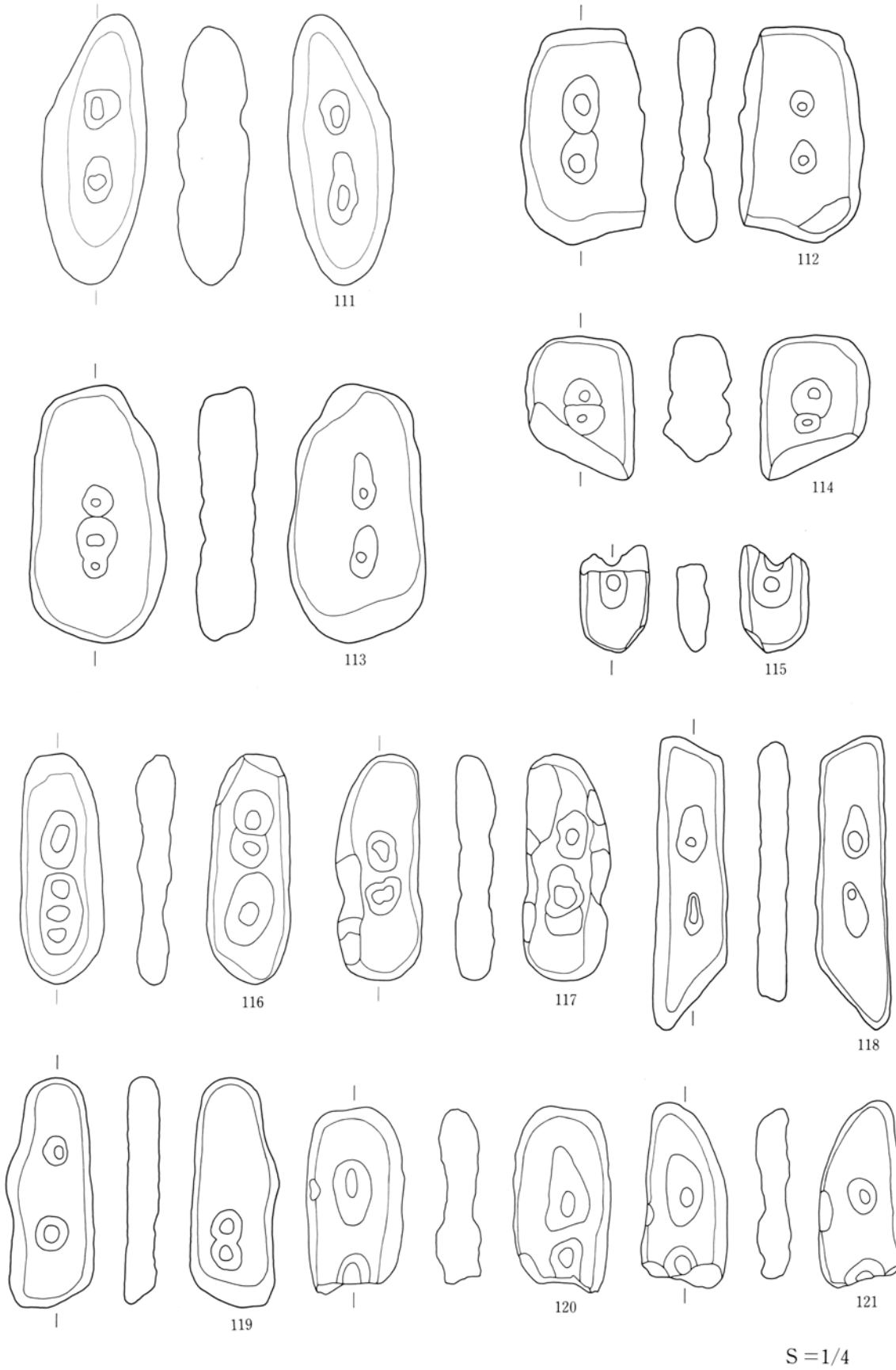
S＝1/4

第51図　26号住居跡出土遺物（39）

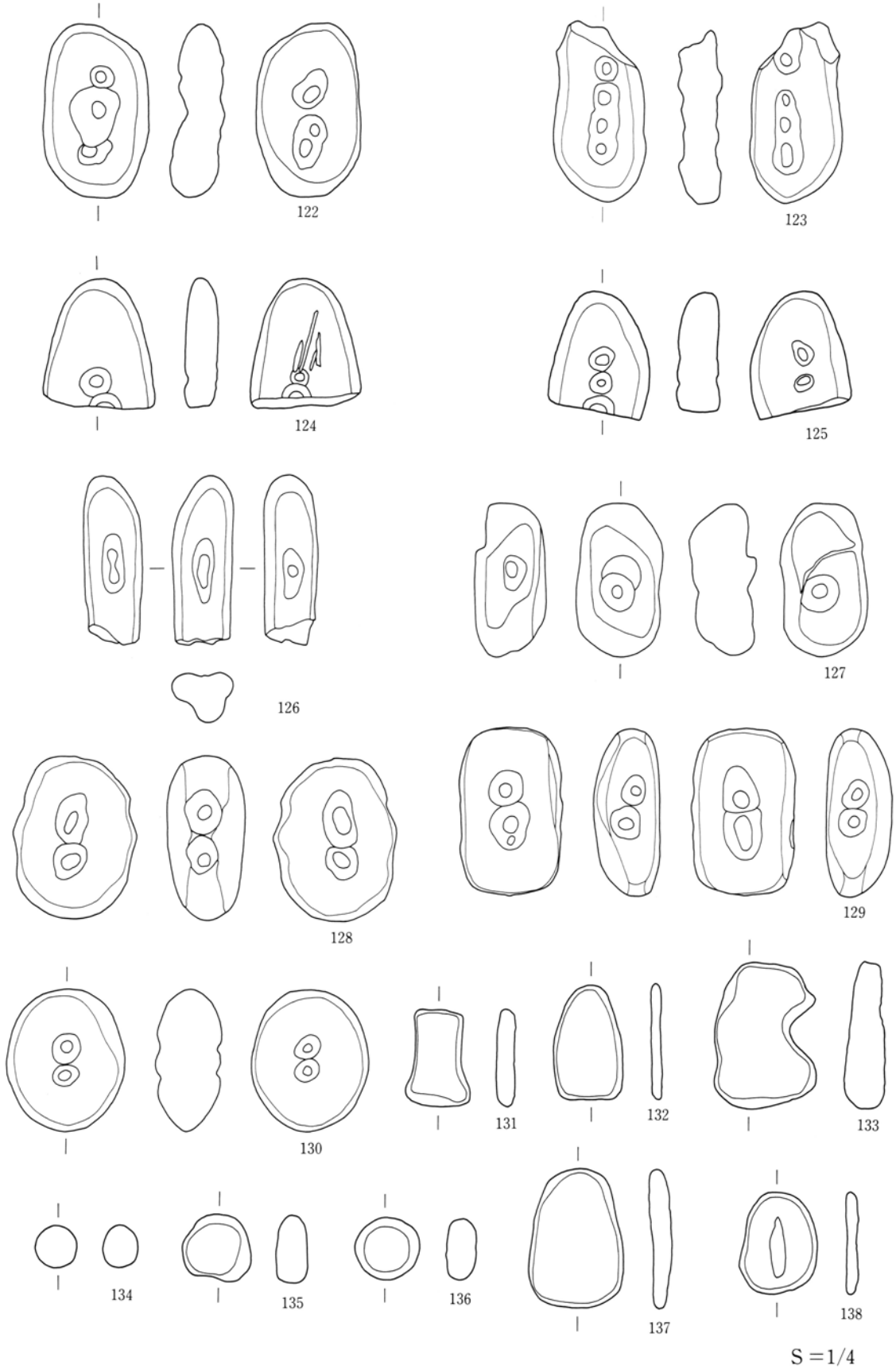
第52図　26号住居跡出土遺物（40）



第53図　26号住居跡出土遺物（41）



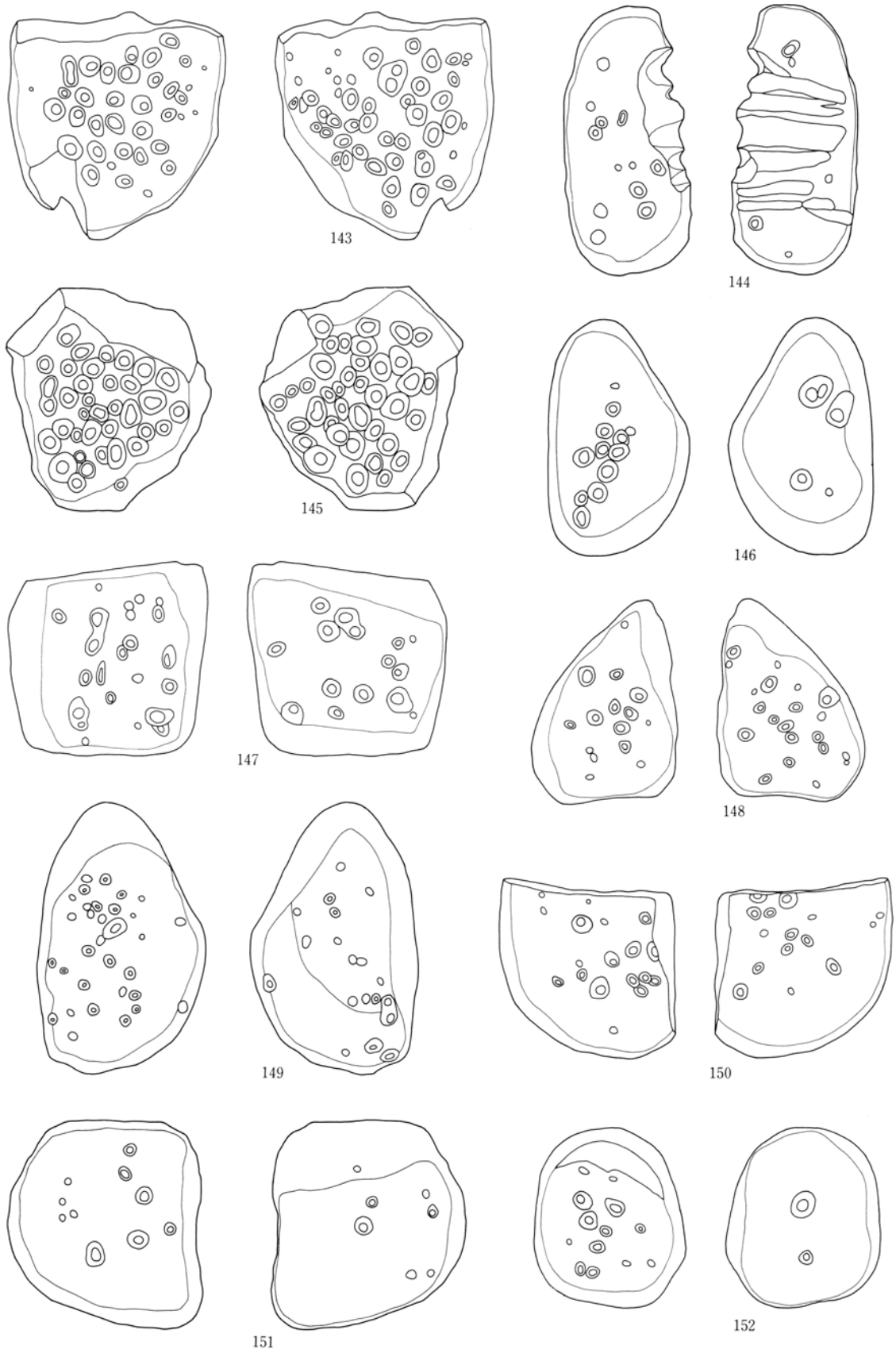
第54図　26号住居跡出土遺物（42）



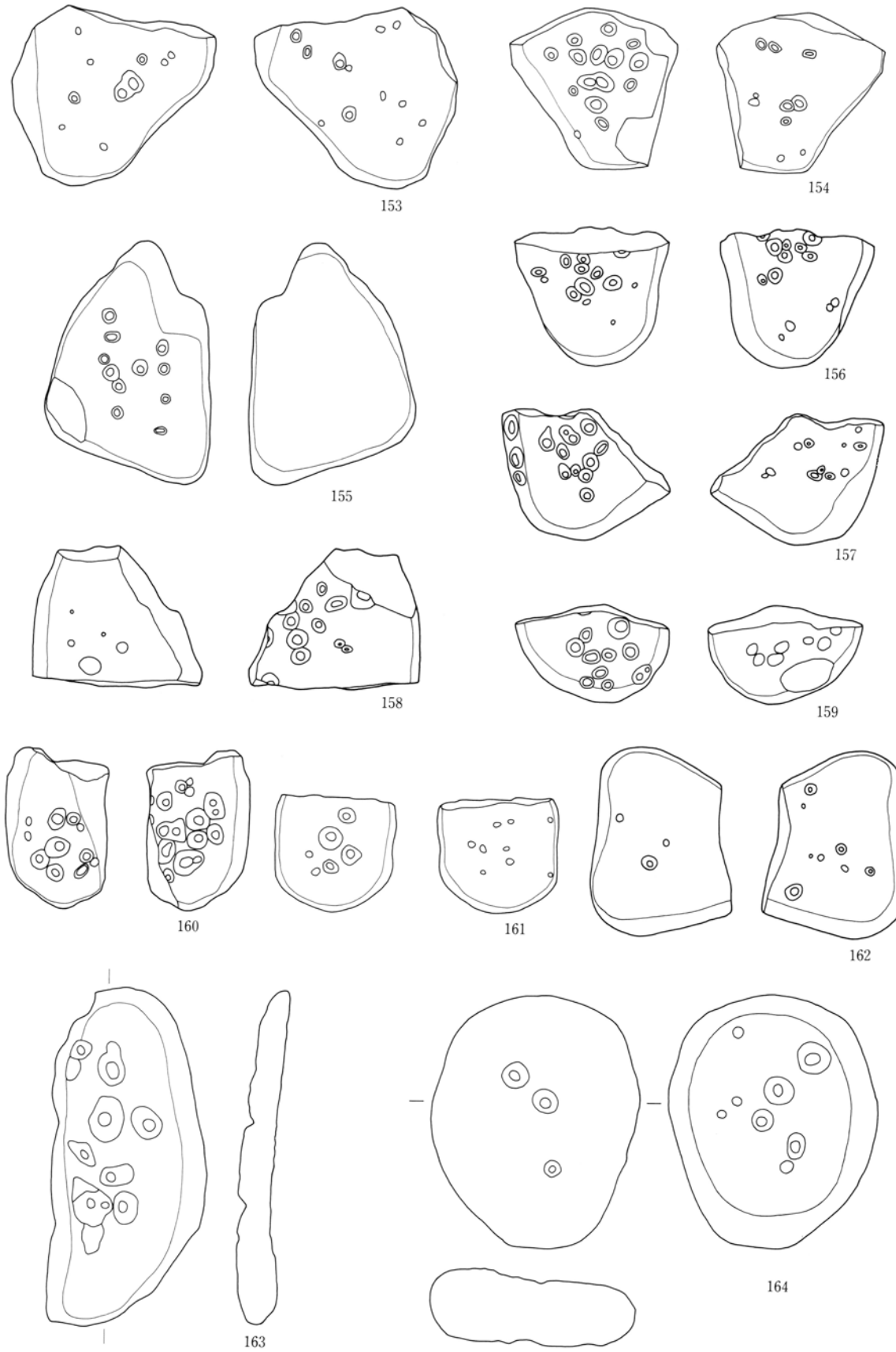
第55図　26号住居跡出土遺物（43）

S＝1/6

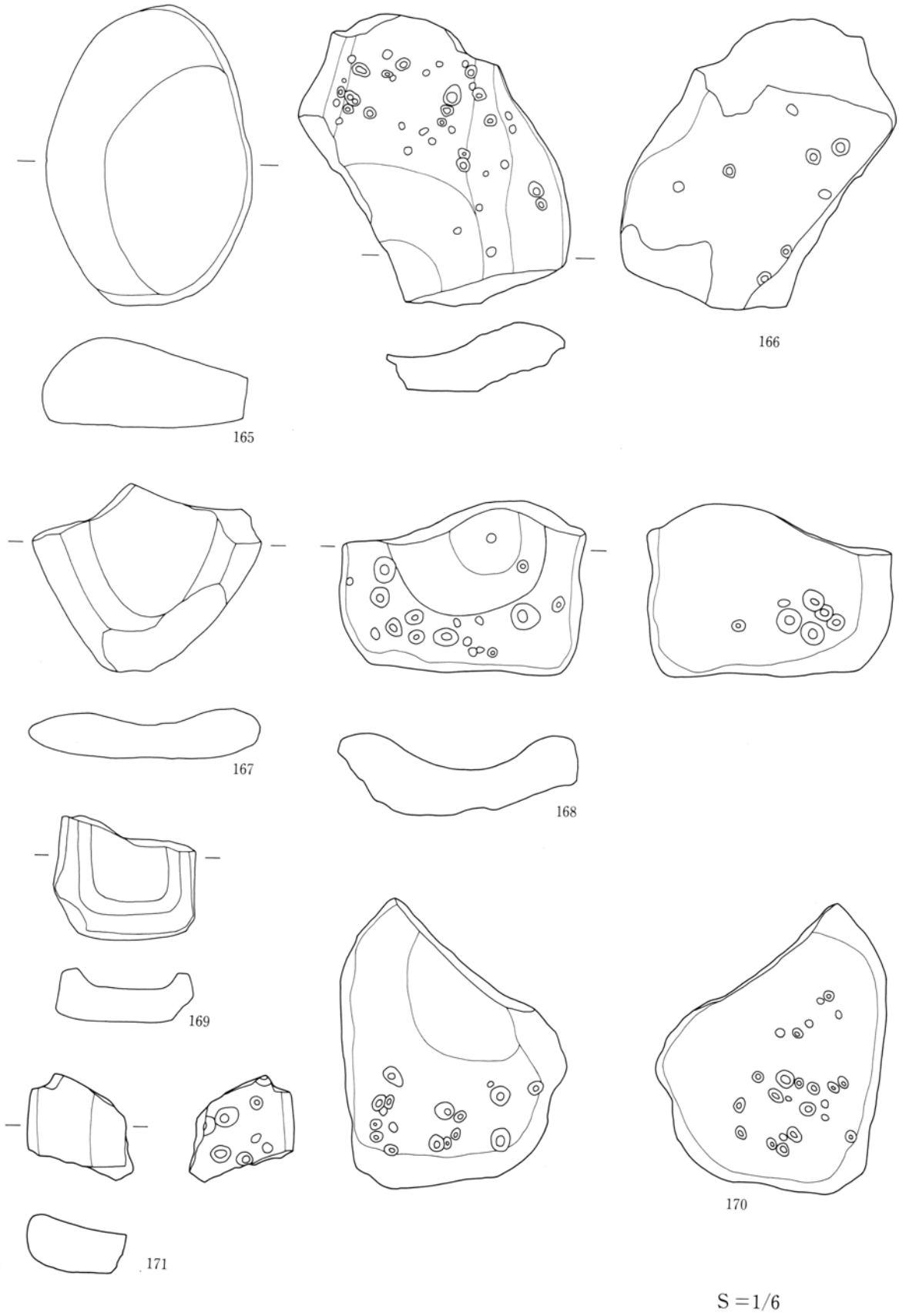
第56図　26号住居跡出土遺物（44）



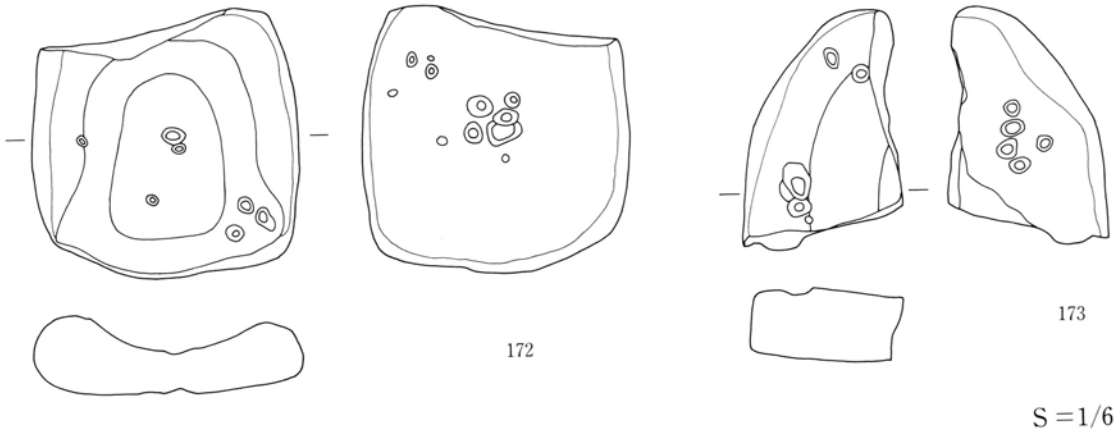
第57図　26号住居跡出土遺物（45）　　S＝1/6



第58図　26号住居跡出土遺物（46）　S＝1/6



第59図　26号住居跡出土遺物（47）



第60図　26号住居跡出土遺物（48）

表６　26号住居跡出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石鏃	黒曜石	2.2	1.6	0.3	0.5
2	石鏃	黒曜石	2.1	1.6	0.3	0.4
3	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.3	0.5
4	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.4	0.5
5	石鏃	黒曜石	1.8	1.6	0.3	0.7
6	石鏃	黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.7
7	石鏃	黒曜石	2.3	1.8	0.4	1.0
8	石鏃	黒曜石	1.5	1.6	0.4	0.8
9	石鏃	チャート	2.1	1.8	0.2	0.6
10	石鏃	チャート	2.2	1.6	0.3	1.2
11	石鏃	黒曜石	1.6	1.8	0.3	0.6
12	石鏃	黒曜石	1.3	2.1	0.3	0.9
13	石鏃	黒曜石	1.6	1.4	0.6	1.2
14	石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.6
15	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.3	0.7
16	石鏃	珪質頁岩	3.8	1.6	0.7	4.0
17	石錐	チャート	2.7	1.4	0.7	1.7
18	石錐	黒曜石	3.2	2.1	0.9	3.2
19	石錐	チャート	3.0	2.1	0.9	4.1
20	石錐	チャート	3.1	2.2	0.4	2.6
21	石錐	黒曜石	3.4	2.3	1.5	6.4
22	石錐	黒曜石	3.1	1.9	0.4	1.6
23	石錐	黒曜石	1.8	1.5	0.5	0.8
24	スクレイパー	黒曜石	1.6	0.8	0.3	0.4
25	スクレイパー	黒曜石	2.9	0.8	0.5	0.8
26	スクレイパー	黒曜石	1.9	2.2	0.5	1.7
27	スクレイパー	チャート	2.2	1.3	0.4	0.8
28	スクレイパー	黒曜石	2.2	2.2	0.7	3.1
29	スクレイパー	黒曜石	2.0	1.7	0.6	0.8
30	スクレイパー	チャート	2.9	2.1	1.0	4.3
31	スクレイパー	黒曜石	1.9	1.6	0.8	2.4
32	スクレイパー	黒曜石	3.5	2.7	1.2	6.0
33	石錐	黒曜石	2.6	1.8	1.0	2.4
34	スクレイパー	黒曜石	4.3	1.9	0.8	5.4
35	スクレイパー	チャート	3.8	1.2	0.4	1.5
36	スクレイパー	黒曜石	4.3	2.3	1.4	6.1
37	スクレイパー	黒曜石	2.3	2.7	1.2	3.8
38	石匙	珪質頁岩	5.3	2.9	0.7	8.3
39	スクレイパー	硬質泥岩	7.0	4.7	1.8	55.0
40	スクレイパー	硬質泥岩	7.4	4.4	1.9	76.0
41	スクレイパー	珪質頁岩	8.6	7.3	1.9	116.4
42	スクレイパー	硬質泥岩	7.9	7.9	2.7	216.6
43	打製石斧	珪質頁岩	8.3	6.0	2.2	138.6
44	打製石斧	硬質泥岩	9.0	4.9	1.9	99.5
45	打製石斧	黒色頁岩	9.5	4.3	1.6	64.9
46	打製石斧	細輝安山岩	10.6	6.3	2.4	180.0
47	打製石斧	粗輝安山岩	6.7	5.8	1.5	81.4
48	打製石斧	硬質泥岩	8.7	5.3	1.2	66.1
49	打製石斧	粗輝安山岩	7.4	4.8	2.3	60.3
50	打製石斧	珪質頁岩	4.8	5.5	1.3	50.3
51	打製石斧	硬質泥岩	9.3	6.4	2.0	130.0
52	打製石斧	硬質泥岩	6.0	5.5	3.0	93.0
53	打製石斧	珪質頁岩	8.9	5.1	1.2	57.9
54	石錘	緑色片岩	7.9	6.4	1.3	98.6
55	打製石斧	雲母石英片岩	9.6	4.3	1.4	71.8
56	打製石斧	緑色片岩	9.1	4.4	1.1	77.2
57	打製石斧	雲母石英片岩	11.6	6.4	1.4	145.9
58	凹石	黒色片岩	8.3	11.4	3.4	430.0
59	凹石	牛伏砂岩	11.2	8.8	2.8	243.0
60	凹石	黒色片岩	11.3	5.8	3.3	250.0
61	凹石	雲母石英片岩	13.9	5.3	2.2	250.0
62	凹石	緑色片岩	14.7	5.8	2.0	300.0
63	凹石	緑色片岩	8.9	5.7	3.2	255.0
64	凹石	緑色片岩	9.0	6.4	4.5	415.0
65	凹石	牛伏砂岩	8.9	9.9	3.1	250.0
66	凹石	牛伏砂岩	8.8	8.5	3.0	280.0
67	凹石	黒色片岩	15.7	5.2	4.1	455.0
68	凹石	緑色片岩	7.4	9.8	4.0	415.0
69	凹石	緑色片岩	5.5	11.6	2.3	210.0
70	凹石	緑色片岩	9.9	6.4	1.8	195.0
71	凹石	緑色片岩	8.8	7.1	3.5	360.0
72	凹石	牛伏砂岩	14.4	9.2	5.5	665.0
73	凹石	緑色片岩	8.4	10.4	6.5	700.0
74	凹石	牛伏砂岩	11.4	8.5	2.3	300.0
75	凹石	緑色片岩	12.7	5.9	2.6	260.0
76	凹石	緑色片岩	10.9	7.1	3.1	300.0

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
77	凹　石	緑色片岩	11.8	6.4	1.8	210.0
78	凹　石	緑色片岩	9.7	4.2	2.8	160.0
79	凹　石	黒色片岩	12.6	4.6	3.4	240.0
80	凹　石	雲母石英片岩	16.3	5.2	3.6	450.0
81	凹　石	緑色片岩	12.0	11.8	3.8	660.0
82	凹　石	牛伏砂岩	6.5	6.1	3.0	145.0
83	凹　石	黒色片岩	12.4	8.7	4.0	480.0
84	凹　石	牛伏砂岩	8.3	8.8	3.4	245.0
85	凹　石	緑色片岩	8.1	11.0	4.8	700.0
86	凹　石	牛伏砂岩	7.3	11.4	4.3	370.0
87	凹　石	黒色片岩	7.6	10.3	3.1	290.0
88	凹　石	緑色片岩	13.9	8.5	4.3	640.0
89	凹　石	黒色片岩	9.1	7.5	4.2	450.0
90	凹　石	黒色片岩	11.1	6.6	3.6	380.0
91	凹　石	緑色片岩	9.2	4.5	2.1	110.0
92	凹　石	緑色片岩	10.8	6.9	2.5	325.0
93	凹　石	牛伏砂岩	7.0	6.8	3.3	170.0
94	凹　石	粗輝安山岩	7.0	6.0	5.0	285.0
95	凹　石	黒色片岩	9.0	4.1	2.9	150.0
96	凹　石	牛伏砂岩	9.0	13.6	6.0	650.0
97	凹　石	黒色片岩	11.3	5.7	4.6	440.0
98	凹　石	牛伏砂岩	13.2	12.0	4.2	590.0
99	凹　石	緑色片岩	13.9	6.8	2.1	335.0
100	凹　石	緑色片岩	16.1	6.0	3.7	530.0
101	凹　石	黒色片岩	15.1	5.2	4.1	550.0
102	凹　石	粗輝安山岩	8.8	5.4	4.9	330.0
103	凹　石	緑色片岩	10.8	9.7	3.8	530.0
104	凹　石	粗輝安山岩	11.6	8.4	4.7	700.0
105	凹　石	緑色片岩	13.2	6.7	2.3	300.0
106	凹　石	牛伏砂岩	10.4	5.9	3.3	245.0
107	凹　石	緑色片岩	12.8	8.4	3.1	480.0
108	凹　石	牛伏砂岩	12.5	10.3	4.6	685.0
109	凹　石	デイサイト	11.0	8.8	5.2	690.0
110	凹　石	緑色片岩	10.9	6.4	6.3	610.0
111	凹　石	緑色片岩	18.0	6.9	4.7	790.0
112	凹　石	牛伏砂岩	14.4	8.4	2.9	395.0
113	凹　石	緑色片岩	17.3	9.2	4.2	985.0
114	凹　石	緑色片岩	9.8	7.3	4.6	470.0
115	凹　石	緑色片岩	7.2	4.7	2.2	120.0
116	凹　石	緑色片岩	15.4	5.4	2.4	360.0
117	凹　石	黒色片岩	15.1	5.8	2.7	325.0
118	凹　石	黒色片岩	19.7	5.0	2.0	375.0
119	凹　石	緑色片岩	15.4	5.8	2.3	390.0
120	凹　石	雲母石英片岩	12.5	6.6	3.1	385.0
121	凹　石	緑色片岩	12.6	5.8	2.3	260.0
122	凹　石	黒色片岩	11.7	7.1	3.7	425.0
123	凹　石	雲母石英片岩	12.0	6.0	2.9	300.0
124	凹　石	緑色片岩	8.6	7.5	2.3	205.0
125	凹　石	牛伏砂岩	8.6	6.7	2.9	180.0
126	凹　石	雲母石英片岩	11.3	4.1	3.4	220.0
127	凹　石	緑色片岩	10.3	5.8	4.5	410.0
128	凹　石	黒色片岩	10.9	8.3	5.2	590.0
129	凹　石	粗輝安山岩	11.1	6.8	4.4	490.0
130	凹　石	粗輝安山岩	9.6	7.8	4.4	450.0
131	凹　石	牛伏砂岩	6.5	4.4	1.4	43.0
132	凹　石	牛伏砂岩	7.8	4.6	0.7	40.0
133	凹　石	牛伏砂岩	9.8	6.8	2.7	198.0
134	凹　石	粗輝安山岩	2.8	2.8	2.4	19.0
135	凹　石	牛伏砂岩	4.6	4.7	2.2	48.0
136	凹　石	牛伏砂岩	4.2	4.4	2.1	40.0
137	凹　石	牛伏砂岩	9.3	6.4	1.5	100.0
138	凹　石	牛伏砂岩	6.9	5.2	0.9	38.0
139	多孔石	牛伏砂岩	40.0	27.7		15,150.0
140	多孔石	雲母石英片岩	32.6	28.0		12,200.0
141	多孔石	牛伏砂岩	26.5	22.3		8,250.0
142	多孔石	牛伏砂岩	25.0	18.1		5,800.0
143	多孔石	牛伏砂岩	22.1	21.6		3,950.0
144	多孔石	牛伏砂岩	27.3	12.7		2,690.0
145	多孔石	牛伏砂岩	22.6	20.4		4,150.0
146	多孔石	牛伏砂岩	24.0	14.5		3,410.0
147	多孔石	雲母石英片岩	19.0	20.0		7,700.0
148	多孔石	牛伏砂岩	20.4	14.6		2,830.0
149	多孔石	牛伏砂岩	26.7	16.7		5,000.0
150	多孔石	牛伏砂岩	17.7	17.6		2,780.0
151	多孔石	牛伏砂岩	21.0	19.8		3,950.0
152	多孔石	緑色片岩	18.0	15.4		3,800.0
153	多孔石	牛伏砂岩	18.5	20.8		1,645.0
154	多孔石	牛伏砂岩	16.2	17.0		1,870.0
155	多孔石	黒色片岩	24.7	17.2		3,200.0
156	多孔石	牛伏砂岩	14.0	15.5		1,395.0
157	多孔石	牛伏砂岩	13.0	17.1		1,550.0
158	多孔石	牛伏砂岩	14.2	16.7		1,550.0
159	多孔石	牛伏砂岩	10.0	16.0		990.0
160	多孔石	牛伏砂岩	16.2	10.4		1,480.0
161	多孔石	牛伏砂岩	11.7	12.1		730.0
162	多孔石	牛伏砂岩	19.0	13.7		1,675.0
163	多孔石	黒色片岩	22.7	10.4	2.8	880.0
164	多孔石	牛伏砂岩	17.1	14.1	5.1	1,450.0
165	石　皿	変閃緑岩	31.0	21.2	9.2	9,100.0
166	石　皿	牛伏砂岩	30.2	28.6	7.3	4,800.0
167	石　皿	牛伏砂岩	19.4	23.6	5.2	1,990.0
168	石　皿	牛伏砂岩	17.7	25.0	8.7	3,850.0
169	石　皿	粗輝安山岩	13.0	14.5	5.5	1,210.0
170	石　皿	牛伏砂岩	29.7	23.5		5,550.0
171	石　皿	粗輝安山岩	11.0	11.0	6.0	620.0
172	石　皿	牛伏砂岩	20.8	21.5	6.3	3,300.0
173	石　皿	牛伏砂岩	18.8	12.8	6.0	1,810.0

石器

出土した石器は、第48～60図に示すように、器種および量も豊富で173点を数えるが、図示できない剝片類の量は多量である。石鏃は黒曜石を石材とするものが多く16点、石錐は黒曜石とチャートを石材とし８点、スクレイパーは黒曜石・チャート・硬質泥岩を石材とし17点、珪質頁岩を石材とする石匙１点があり、さらに各種の石材を用いた打製石斧14点、凹石81点、多孔石26点、石皿９点がある。

27号住居跡（第11・61・62図　表７）

Ｃ区の台地の西側縁辺にあり、17・18―40グリッドに位置する。先の26号住居跡および28・35・40・41号住居跡・土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のものと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は26号住居跡よりも古く、28・35・40号住居跡よりも新しいものと考えられるが、28・40号住居跡との関係については不明な点もある。

住居の北側の大半を26号住居跡と重複しているため、残存するのは南側の一部分である。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われるが、定かではない。また、同様に重複する28号住居跡とは、僅かに段をもち、本住居床面の方が低い位置にあることが確認された。しかし、調査当初においては、重複している状況が解らなかったため、出土した遺物の多くは28号住居と混在した部分がある。壁は南側で僅かに検出されただけであり、床面は堅く平坦である。炉跡は確認されていない。いくつかのピットが検出されているが、本住居に伴うかどうかは不明。

出土遺物は、先にも述べたように28号住居と混在した部分はあるが、第61・62図に示すものは、明らかに本住居内から出土した遺物で、次の通りある。

土器

１～３は胎土に繊維を含むもので、１は口縁以下に縄文を施すものであり、２・３は胴部に縄文を施すもの。３はLRとRLによる羽状縄文となるものである。

４～48は胎土に繊維を含まないもので、４・５は外反する口縁部に半裁竹管により平行・斜位の沈線で文様を描くもの。６～８はやや内反気味となる口縁部に、刻みをもつ浮線で平行･曲線的な文様を描くもので、６は沈線による文様をもつもの。７・８の口舌部には、浮線によるＸ字状等の文様が施されている。９～13は胴部に爪形刺突をもつ平行沈線で文様が描かれるものであり、10～12は沈線間に刻みを有する。11には爪形刺突が充塡される部分もみられる。14は胴部に地文縄文とし、半裁竹管による斜行沈線を羽状に施すもの。15～31は胴部に刻みをもつ浮線で文様を描くものであり、地文に縄文が施されている。これらは、数条の浮線を平行に施すものが多いが、17・18のように平行な浮線間に波状等の浮線による文様を施すものもある。

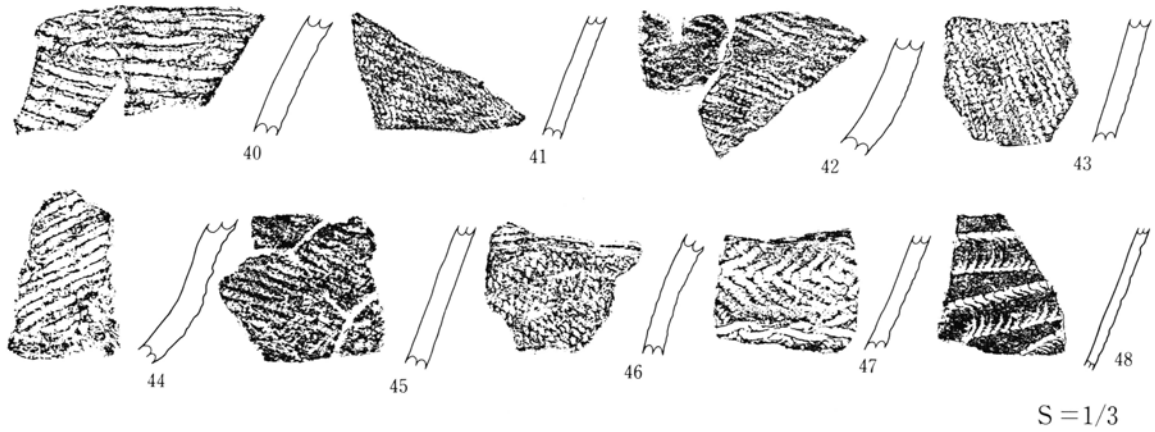
32～47は口縁部および胴部に縄文のみが施されるもので、33は平口縁となる口舌部に縦の浮線が施されるもの。34･35も、平口縁となるものである。施文される縄文は、RLないしLRの縄文であるが、47は結束による羽状縄文が施されている。

48は器厚がかなり薄い土器で、胴部に大きい爪形による密な連続刺突により文様を描くもので、他の出土土器に比べ、異なる様相の土器である。

石器

出土した石器には、第62図下段に示すごとく、上端を欠損する珪質頁岩製の打製石斧１点、片面ないし両面に凹孔を有する凹石が４点ある。この他にも、剝片類は多く存在する。

第61図　27号住居跡出土遺物（１）



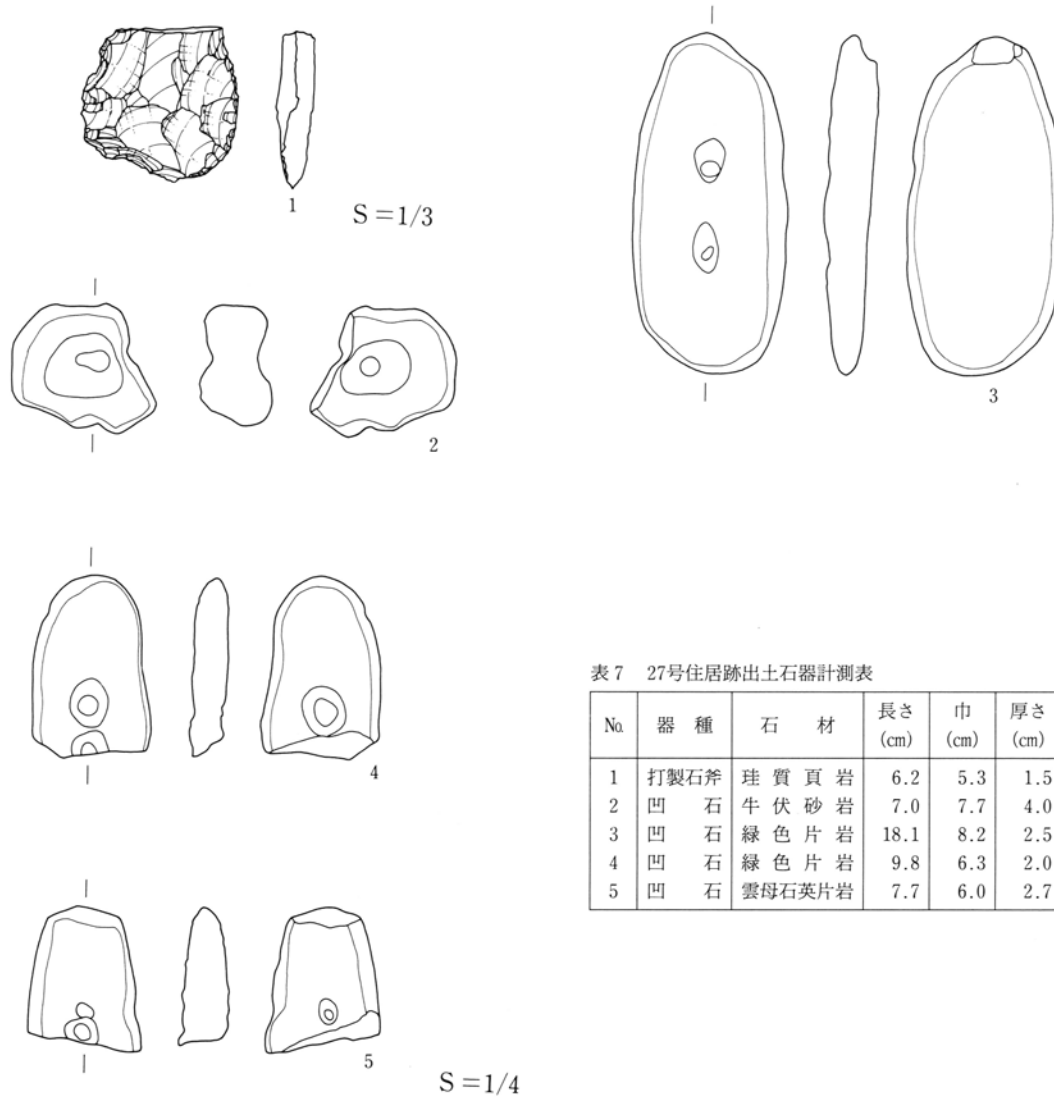


表７　27号住居跡出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	打製石斧	珪質頁岩	6.2	5.3	1.5	67.0
2	凹　石	牛伏砂岩	7.0	7.7	4.0	205.0
3	凹　石	緑色片岩	18.1	8.2	2.5	660.0
4	凹　石	緑色片岩	9.8	6.3	2.0	195.0
5	凹　石	雲母石英片岩	7.7	6.0	2.7	165.0

第62図　27号住居跡出土遺物（２）

28号住居跡（第11・63～69図　表８）

Ｃ区の台地の西側縁辺にあり、17・18―40グリッドに位置する。先の26・27号住居跡および35・40・41号住居跡・土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のものと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は、26・27号住居跡よりも古く、35・40号住居跡よりも新しいものと考えられるが、27・40号住居跡との関係については不明な点もある。

住居の北側の大半を26・27号住居跡と重複しているため、残存するのは南側の一部分である。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われる。また、重複する27号住居跡とは、僅かに段をもち、本住居床面の方が高い位置にあることが確認された。しかし、調査当初においては、重複している状況が解らなかったため、出土した遺物の多くは27号住居と混在した部分がある。さらに、35号住居跡とも同様に、床面が段差により区分できた。壁は、南側で35号住居跡を切るように検出され、東側でも一部が検出されている。残存する床面は、堅く平坦である。炉跡は確認されていない。いくつかのピットが検出されているが、本住居に伴うかどうかは不明。

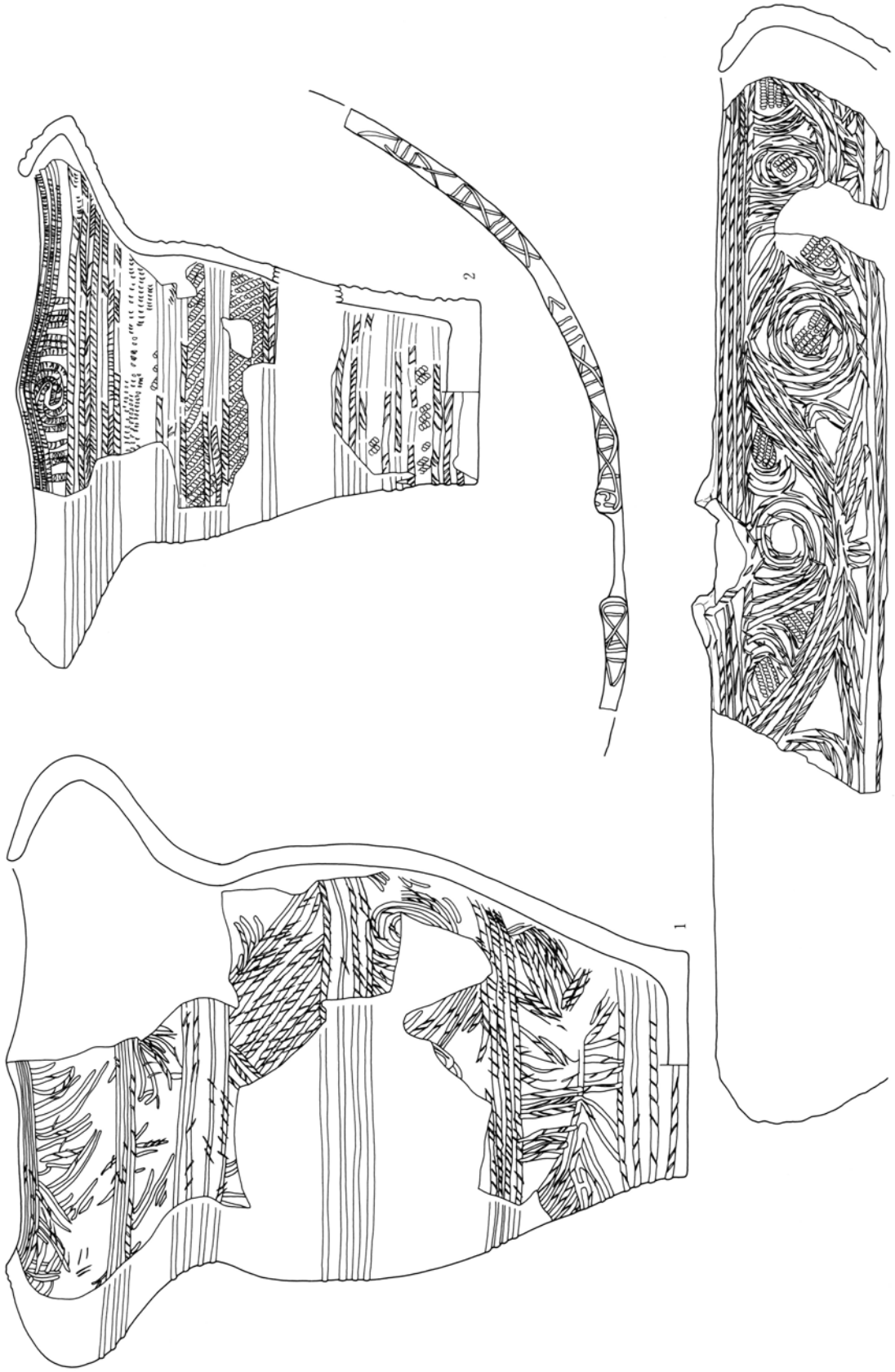
出土遺物は、先にも述べたように27号住居と混在した部分はあるが、第63～69図に示した。遺物については、次の通りある。

土器

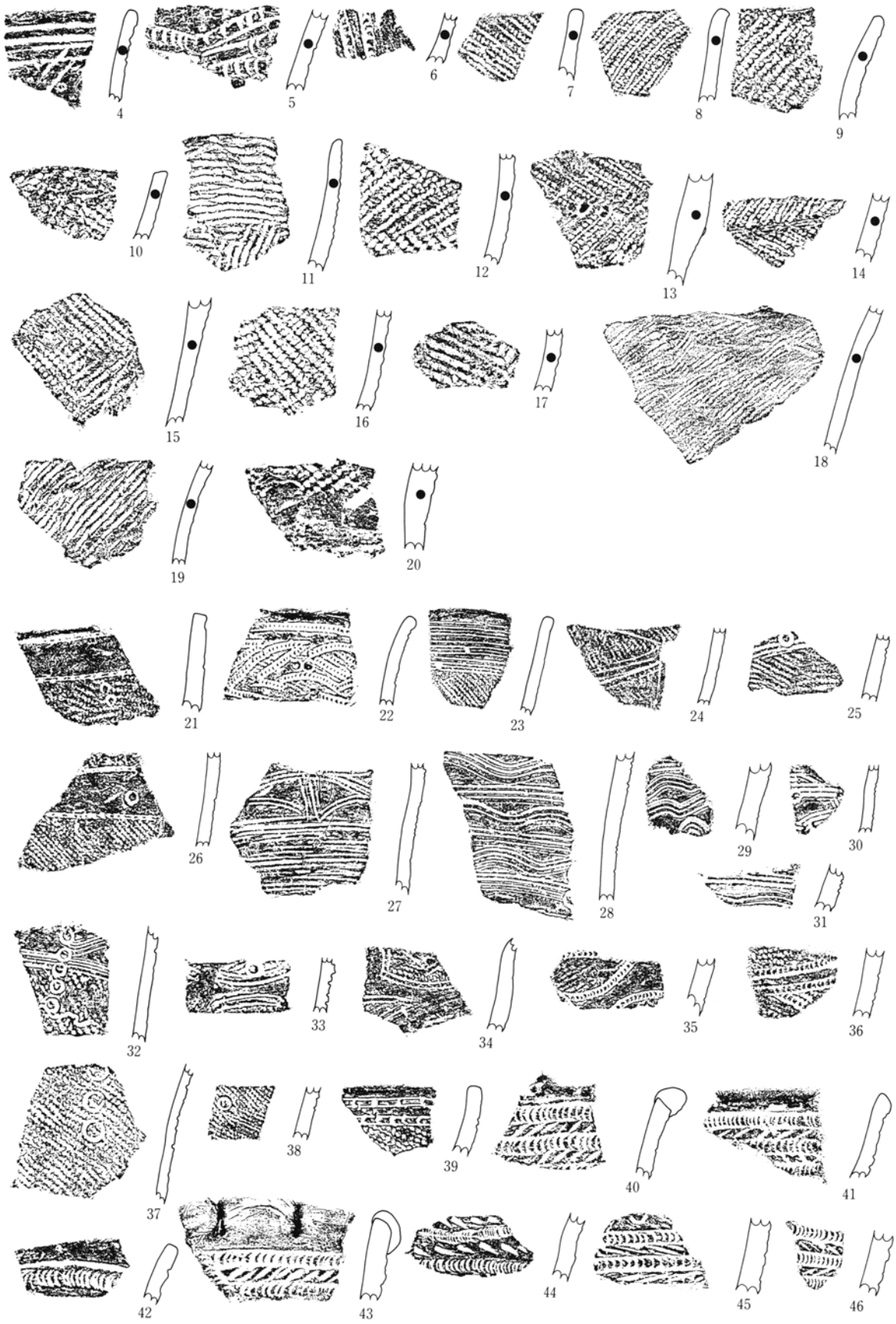
１は波状口縁となり、口縁が大きく内反し、頸部がくびれ、胴部がやや膨らむ深鉢となるもので、キャリパー状の器形を呈する。施文される文様は、刻みをもつ浮線によるもので、口縁から底部に至る間に、５段の文様区画を成すように数条の平行な浮線を巡らせる。各区画内には、渦状・弧状等の曲線的な文様が施される。２は波状口縁となり、口縁部が靴先状に大きく内側へ屈曲し、頸部がくびれ、胴部上半が僅かに膨らむ深鉢となる。施文される文様は、刻みをもつ浮線によるもので、口縁下に３条巡り、波頂下に渦状および両側に弧状の文様を描く。頸部に端数状の浮線が巡り、頸部下には浮線を伴わない爪形刺突が３条ほど巡る。胴部は地文縄文とし、３条を単位とする浮線が数段巡っている。３は平口縁となり、口縁が大きく内反する大形の深鉢を呈する口縁部で、口舌部に４単位の獣面突起が付いていたものと考えられるが、剝落している。施文される文様は、突起下を中心に、渦状・弧状等の曲線的な文様が組み合わされて施文されている。地文には、縄文を施している。

４～20・39は胎土に繊維を含むものである。４は口縁部に半裁竹管による平行沈線を巡らせ、その下に菱形の文様を描くものである。５・６は頸部に半裁竹管による平行沈線で菱形を描き、沈線内には爪形刺突を施すものである。７～20は口縁以下および胴部に縄文を施すもので、７～11は口縁部片である。施文される縄文は、11・18・19は無節が用いられ、７・８・12～14は１本ないし２本を附加させた附加条縄が使われている。12～17は羽状縄文となるものである。39はやや内反する平口縁となるもので、口縁下に細い半裁竹管による平行沈線を２条巡らせ、沈線内に爪形刺突をもち、以下に縄文を施すものである。

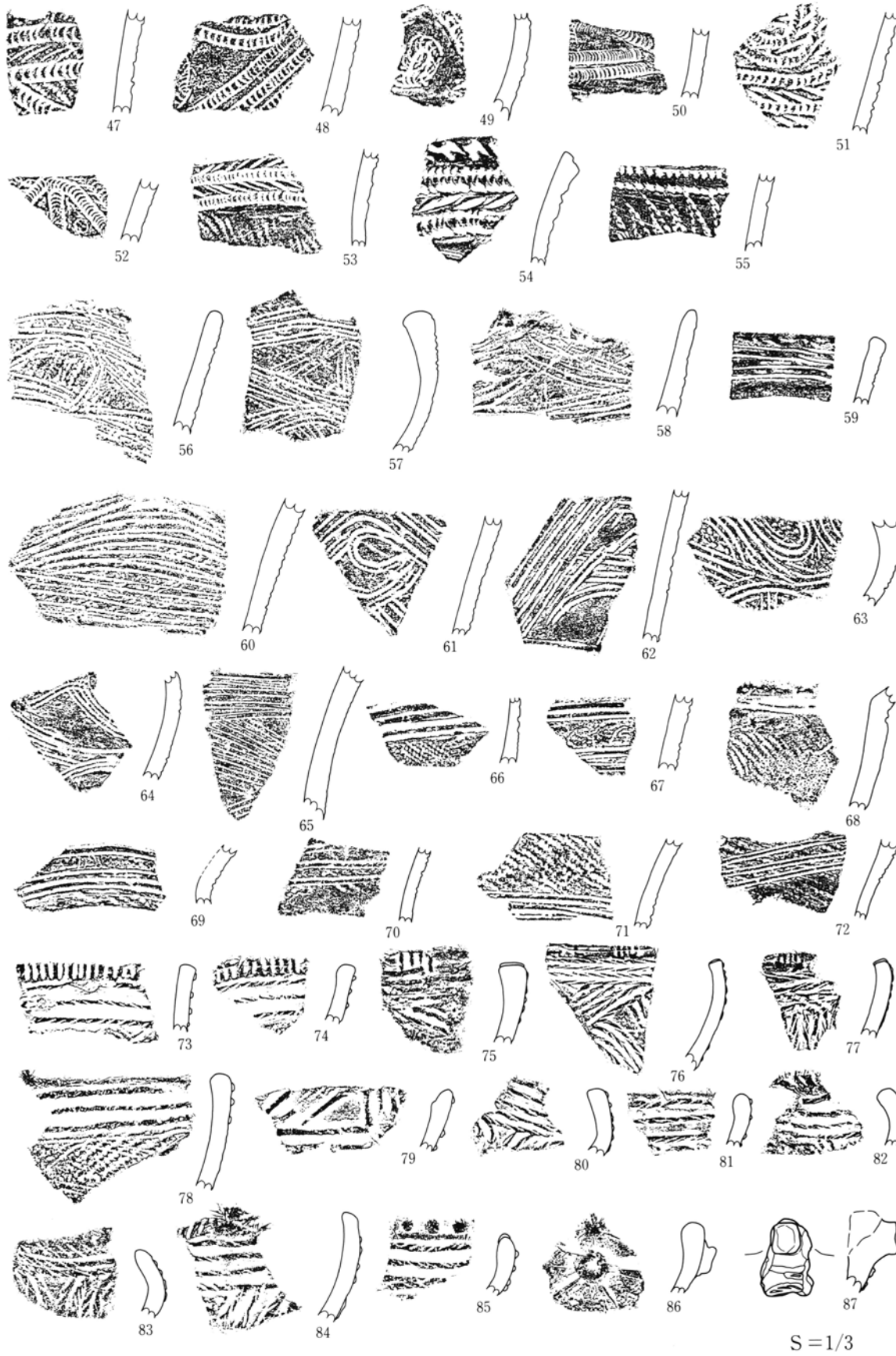
21～38・40～140は胎土に繊維を含まないものである。21～23は口縁部片で、21は口縁下に細い半裁竹管により間隔のある２条の平行沈線を巡らせ、沈線内に爪形刺突を加える。沈線間は無文帯となり、胴部には縄文が施されると共に、円形刺突をもつ。22は口縁下に細い半裁竹管により平行沈線を巡らせ、沈線内に爪形刺突を加える。その下には、同様の爪形をもつ平行沈線で、木葉文を描くと共に円形刺突をもち、地文に縄文を施している。23は口縁下に数条の平行沈線を巡らせ、以下に縄文を施す。24～26は胴部に地文縄文とし、細い半裁竹管により文様を描くもので、爪形刺突を加えるものや、円形刺突をもつもの等がある。28～32は半裁竹管により４条を単位とする沈線で平行・波状の文様を描き、28・32には円形刺突がみられ、胴部下半



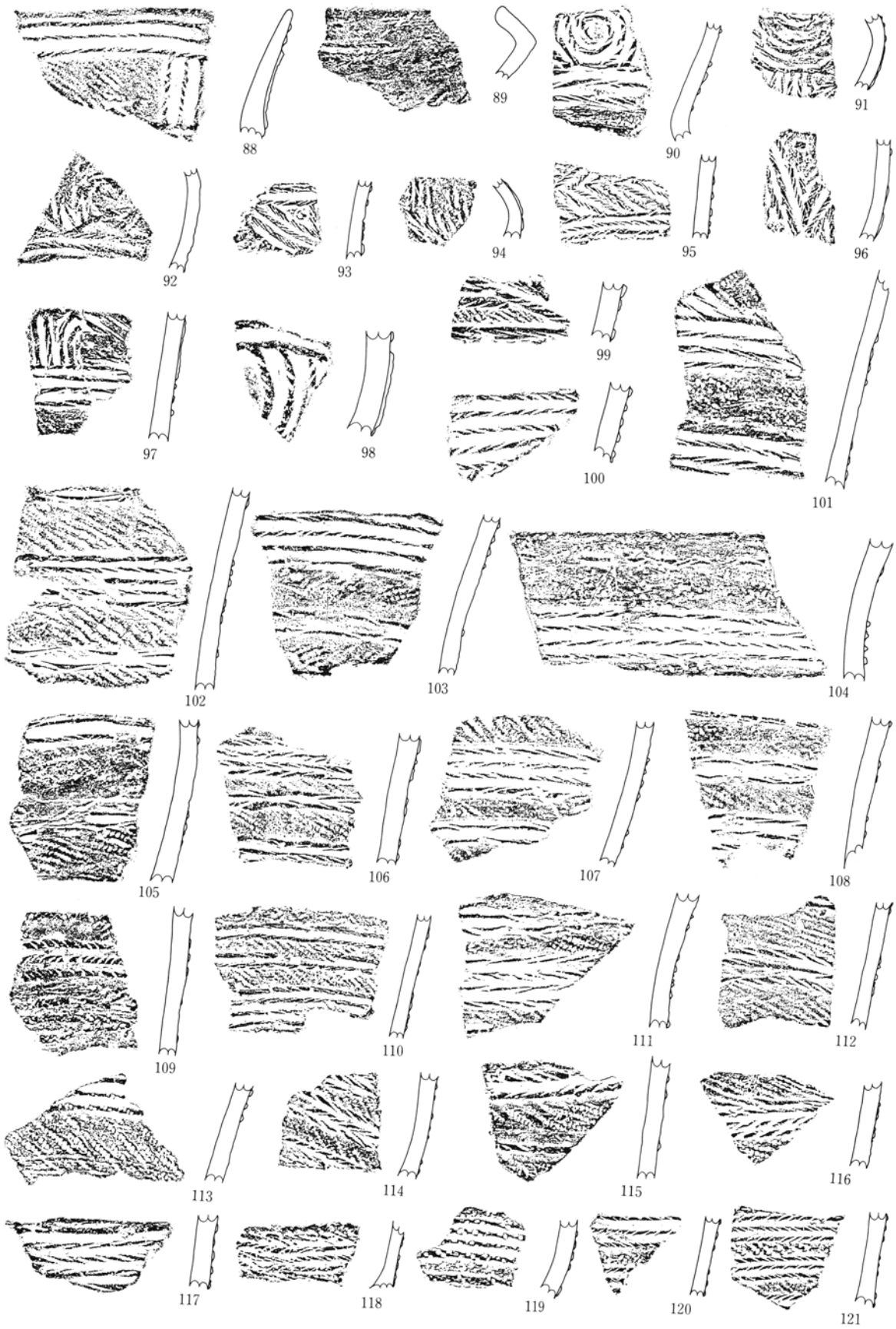
第63図　28号住居跡出土遺物（１）



第64図　28号住居跡出土遺物（２）　　S＝1/3

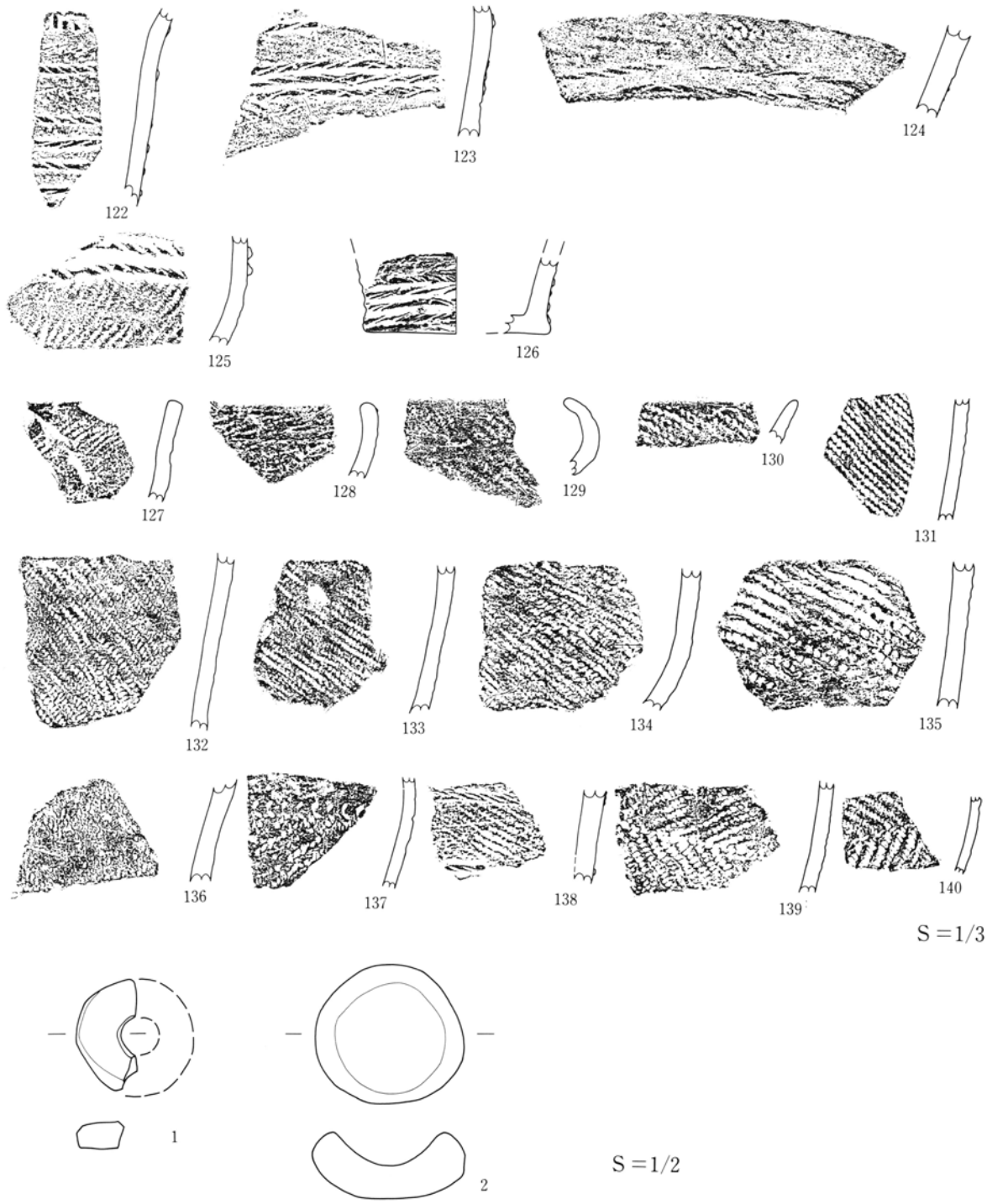


第65図　28号住居跡出土遺物（３）

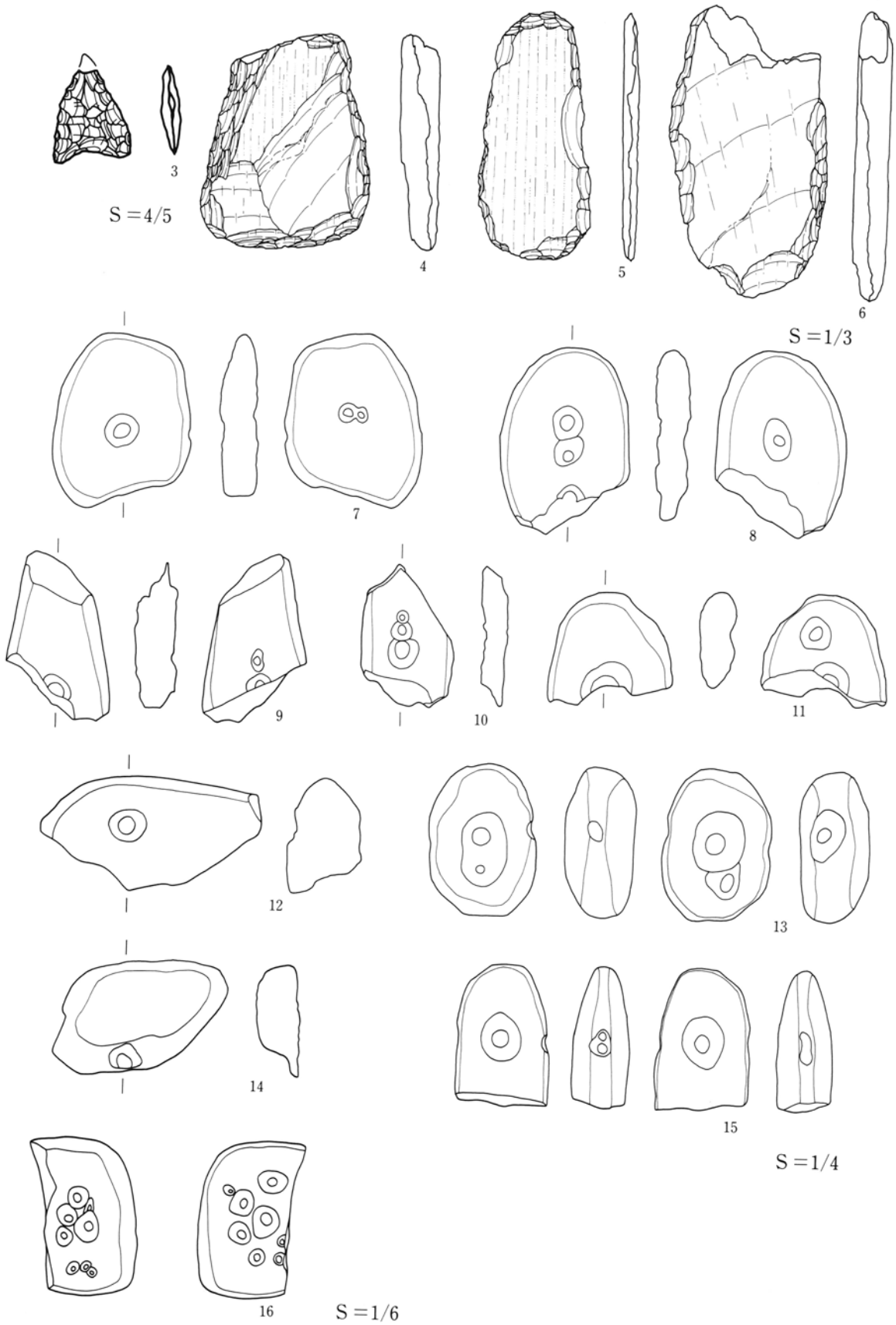


第66図　28号住居跡出土遺物（４）

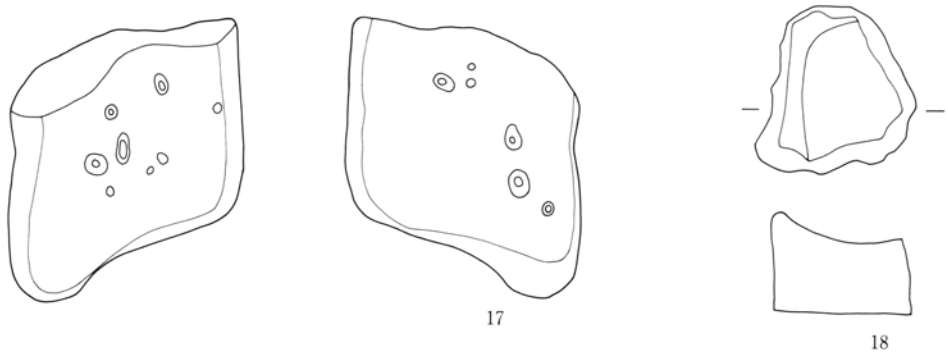
S＝1/3



第67図　28号住居跡出土遺物（５）



第68図　28号住居跡出土遺物（６）



第69図　28号住居跡出土遺物（７）

表８　28号住居跡出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	耳飾り	砂　岩	3.5	2.0	0.8	5.3
2	石製品	砂　岩	4.4	4.8	2.1	38.7
3	石　鏃	チャート	1.9	1.7	0.4	1.2
4	打製石斧	黒色片岩	11.0	8.7	2.0	256.1
5	打製石斧	黒色片岩	12.6	5.9	0.8	75.0
6	打製石斧	緑色片岩	14.7	8.2	1.8	311.7
7	凹　石	牛伏砂岩	12.2	9.5	2.6	320.0
8	凹　石	雲母石英片岩	12.8	8.8	2.4	350.0
9	凹　石	雲母石英片岩	11.5	6.7	2.8	265.0
10	凹　石	緑色片岩	9.8	6.5	1.8	160.0
11	凹　石	牛伏砂岩	7.7	8.5	2.5	170.0
12	凹　石	牛伏砂岩	15.1	7.8	5.1	500.0
13	凹　石	牛伏砂岩	10.5	7.0	4.8	360.0
14	凹　石	黒色片岩	11.8	7.8	3.0	310.0
15	凹　石	粗輝安山岩	9.7	6.4	3.7	260.0
16	多孔石	牛伏砂岩	16.2	10.4		1,200.0
17	多孔石	雲母石英片岩	22.0	18.3		4,150.0
18	石　皿	牛伏砂岩	13.3	13.0	7.7	1,330.0

には縄文が施されている。33～36は細い半裁竹管により木葉文等の文様が描かれるもので、円形刺突が加えられる33や、爪形刺突をもつ35・36があり、文様の区画内には縄文がみられる。

40～53は口縁部から胴部上半に爪形文および刻みにより文様を描くもので、40～43は口縁部片であり、40・43の口縁には小突起をもつ。54は爪形文および刻みにより同様の文様を描くものであるが、爪形は支点を交互にする変形爪形文が用いられ、他の爪形とは異なるものである。55も同様の変形爪形文をもち、胴部下半にはアナダラ属の貝殻腹縁文が施されるものである。

56～72は口縁部位下に、半裁竹管による沈線のみで文様が描かれるものである。56～58の口縁部には、平行および弧状の文様が描かれ、61～65の胴部にも弧状等の曲線的な文様が描かれている。66～72の胴部には、平行沈線が巡るものである。この内、62・64は地文をもたないが、それ以外は地文に縄文を施している。

73～126は浮線により文様が描かれるもので、73・74の口舌部には刻みをもち、75～77の口舌部には浮線によるX字状の文様が描かれる。浮線による文様は、平行および渦状・弧状の曲線的な文様であり、口縁部だけではなく、97のように胴部にも描かれるものがある。また102～126にみられるように、胴部以下には平行な浮線が数条単位で数段にわたって施されている。なお、浮線には斜位の刻みを有するものや、ハ字状の刻みを有するもの、縄文を有するもの等がある。78は浮線と共に沈線による文様が描かれるものであり、86の波状口縁となる波頂下には円形の瘤状突起が貼付されている。87は獣面突起となるものである。

127～140は口縁部以下の胴部に縄文が施されるものであり、139には結束による羽状縄文が施されている。140は器厚のかなり薄いもので、結束ではない羽状縄文が施されているものである。

67図下段の１・２は石製品であり、１は中央に孔を有するもので、抉状耳飾りないし垂れ飾りとなるものである。２は片面が大きく凹状にくぼむものである。

石器

出土した石器には、第68・69図に示すごとく、チャートを石材とする石鏃１点、片岩製の打製石斧３点、片面ないし両面に凹孔を有する凹石が９点、多孔石２点、石皿１点がある。この他にも、剝片類は多く存在する。

35号住居跡（第11・70～72図　表９）

Ｃ区の台地の西側縁辺にあり、17・18―40グリッドに位置する。先の26・27・28号住居跡および40・41号住居跡・土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のものと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は、26・27・28号住居跡よりも古く、40・41号住居跡との関係については不明。

住居の北側の大半を27・28号住居跡と重複しているため、残存するのは南側の一部分である。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われる。また、重複する28号住居跡とは、僅かに段をもち、本住居床面の方が高い位置にあることが確認された。しかし、調査当初において、出土した遺物の一部に28号住居と混在した部分がある。壁は、南側で41号住居跡と重複していることから不明。残存する床面は、堅く平坦である。炉跡は確認されていない。住居内の周囲には周溝が巡っており、この周溝から住居規模が想定されよう。また、いくつかのピットが検出されており、本住居に伴うものも存在すると考えられるが、特定はできない。

出土遺物は、床面近くから繊維土器が主体の出土しており、無繊維土器は28号住居との混在の可能性が高い。遺物については、次の通りある。

土器

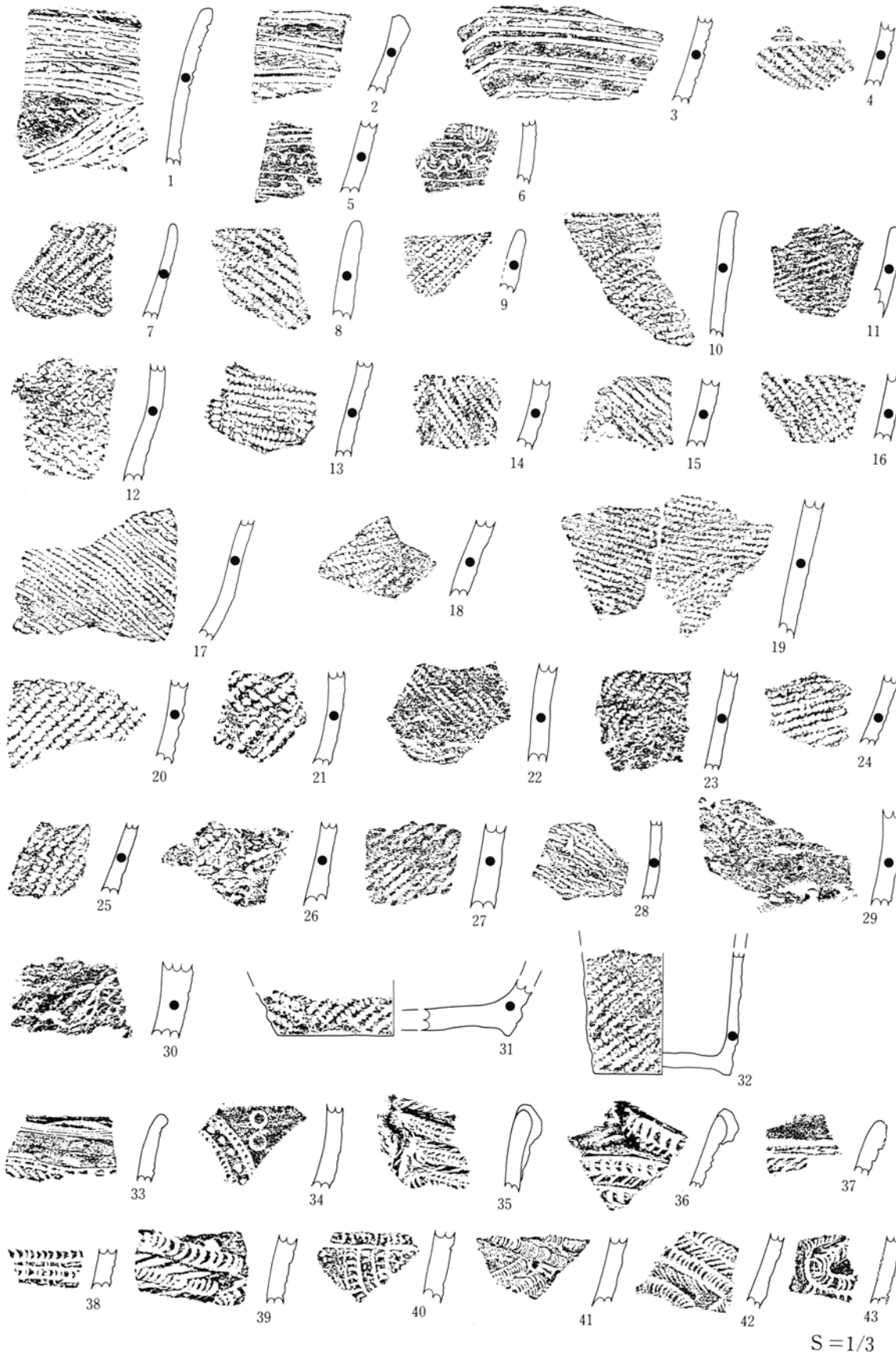
１～32は胎土に繊維を含むものである。１は波状口縁となる口縁部に半裁竹管による平行沈線を数条巡らせ、その下に菱形の文様を描くもので、２は平口縁となるが同様の文様を描くものである。３も口縁部に菱形文を描くもので、４は平行沈線内に爪形刺突を加え、胴部に縄文を施すものである。５・６は口縁部ないし胴部に、半裁竹管による平行沈線およびコンパス文で文様を描くもの。７～32は口縁部以下および胴部に縄文を施すものであり、15・28には無節の縄文が、９・17には１本附加の附加条縄が用いられている。また、７・12～15・31は羽状縄文が施されるものであり、31・32の底部はやや上げ底気味となるものである。

33～63は胎土に繊維を含まないものである。33は平口縁となる口縁下に細い半裁竹管による平行沈線を巡らせ、沈線内に爪形刺突をもつ。34は沈線内に爪形刺突をもつ平行沈線で曲線的な文様を描くと共に、列点刺突および円形刺突をも施すもの。35～43は口縁部から胴部に、爪形文と刻みにより平行および曲線的な文様を描くものである。44は口舌部に刺突をもち、口縁部に地文縄文とし、半裁竹管により弧状等の文様を描くもの。45は獣面突起である。46～51は刻みをもつ浮線で文様を描くもので、46は平行な浮線間に曲線的な文様をもつもの。47～51は数条を単位とする浮線を平行に施すものであり、いずれも地文に縄文をもつ。

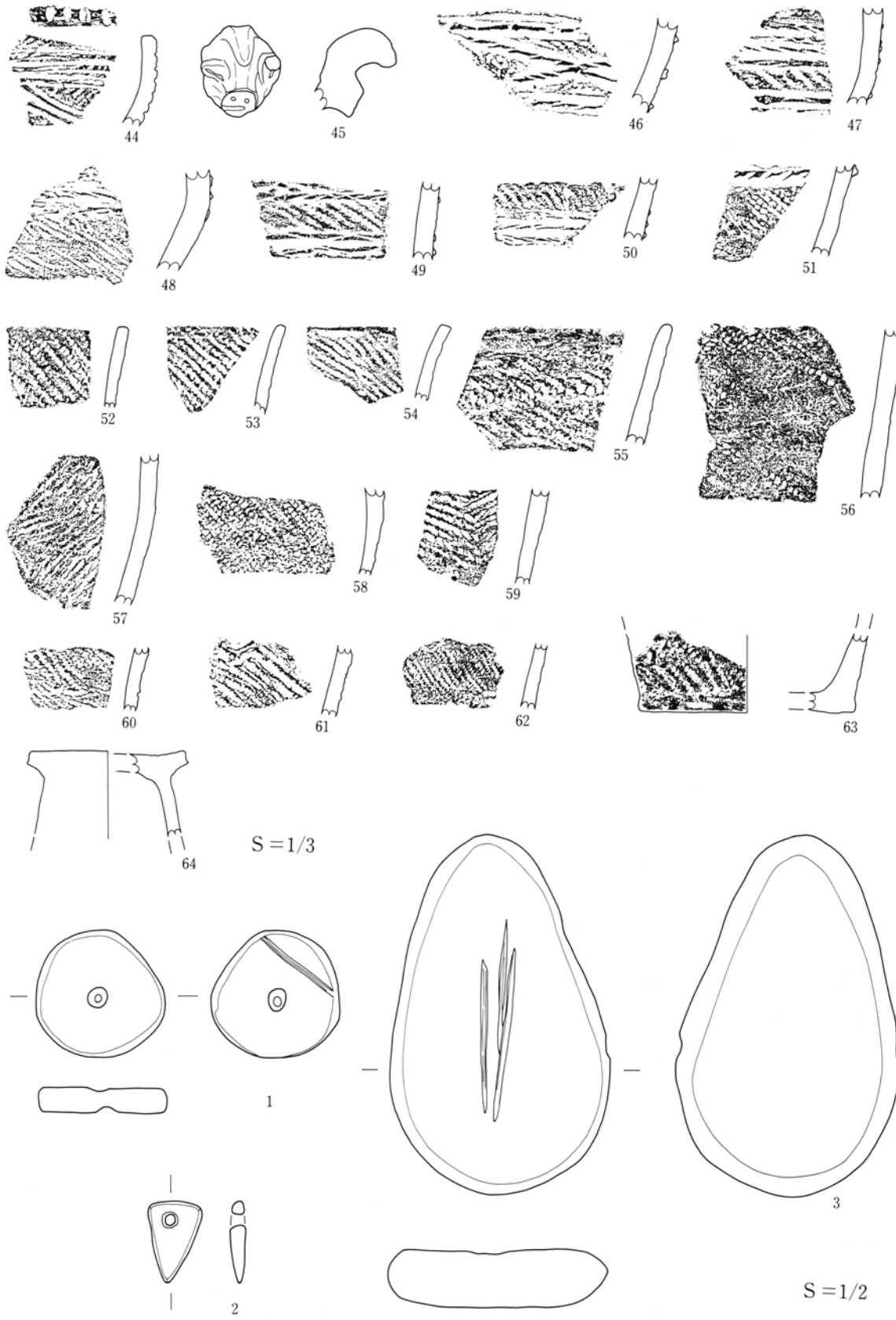
52～63は口縁以下および胴部に、縄文を施すものである。

64は混入と考えられる古墳時代初頭の土器で、台付土器の脚部である。

第71図下段の１～３は、石製品である。１は中央に孔とならない凹を両面にもつもので、抉状耳飾りない



第70図　35号住居跡出土遺物（Ⅰ）



第71図　35号住居跡出土遺物（２）

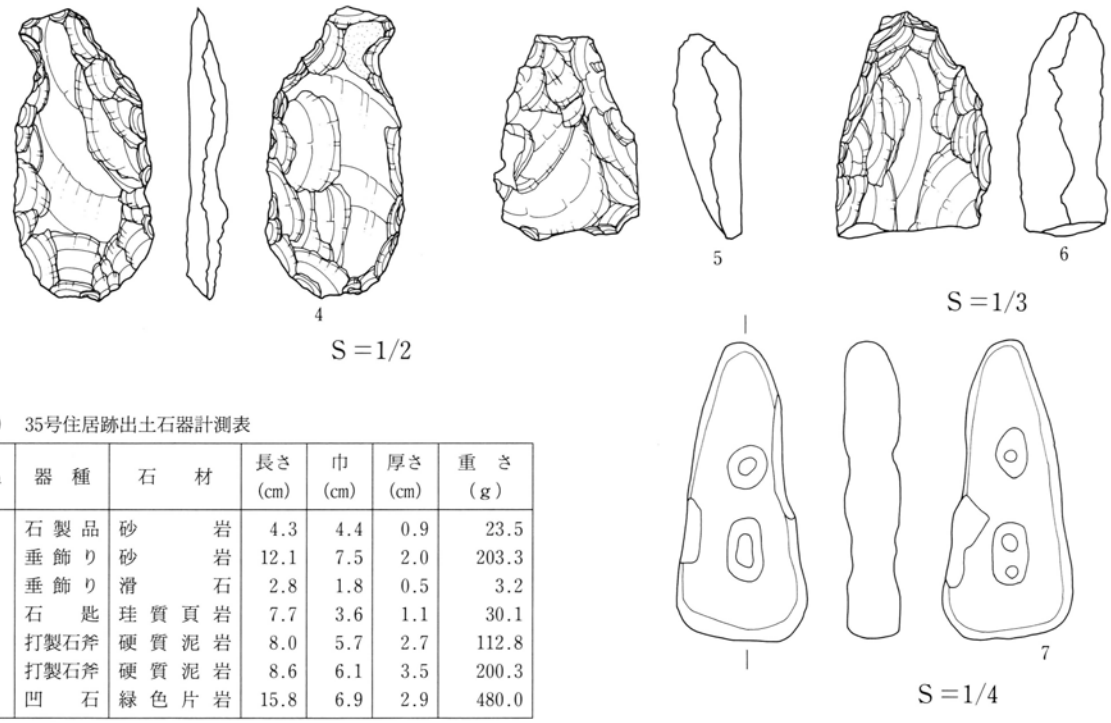


表９　35号住居跡出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	石製品	砂　岩	4.3	4.4	0.9	23.5
2	垂飾り	砂　岩	12.1	7.5	2.0	203.3
3	垂飾り	滑　石	2.8	1.8	0.5	3.2
4	石　匙	珪質頁岩	7.7	3.6	1.1	30.1
5	打製石斧	硬質泥岩	8.0	5.7	2.7	112.8
6	打製石斧	硬質泥岩	8.6	6.1	3.5	200.3
7	凹　石	緑色片岩	15.8	6.9	2.9	480.0

第72図　35号住居跡出土遺物（３）

し垂れ飾り類の未製品と考えられる。２は三角形に研磨・整形され、孔をもつもので、ペンダント状の垂れ飾りである。３は片面に溝を有するものである。

石器

出土した石器は、第72図に示す４点と比較的に少なく、石匙１点、打製石斧２点、両面に２箇所の凹孔をもつ凹石１点である。

40号住居跡（第11・73図　表10）

Ｃ区の台地の西側縁辺にあり、17・18―40グリッドに位置する。先の26・27・28号住居跡、302号土坑と重複しており、出土遺物等から縄文時代のものと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は、26・27・28号住居跡よりも古いことが確認されている。

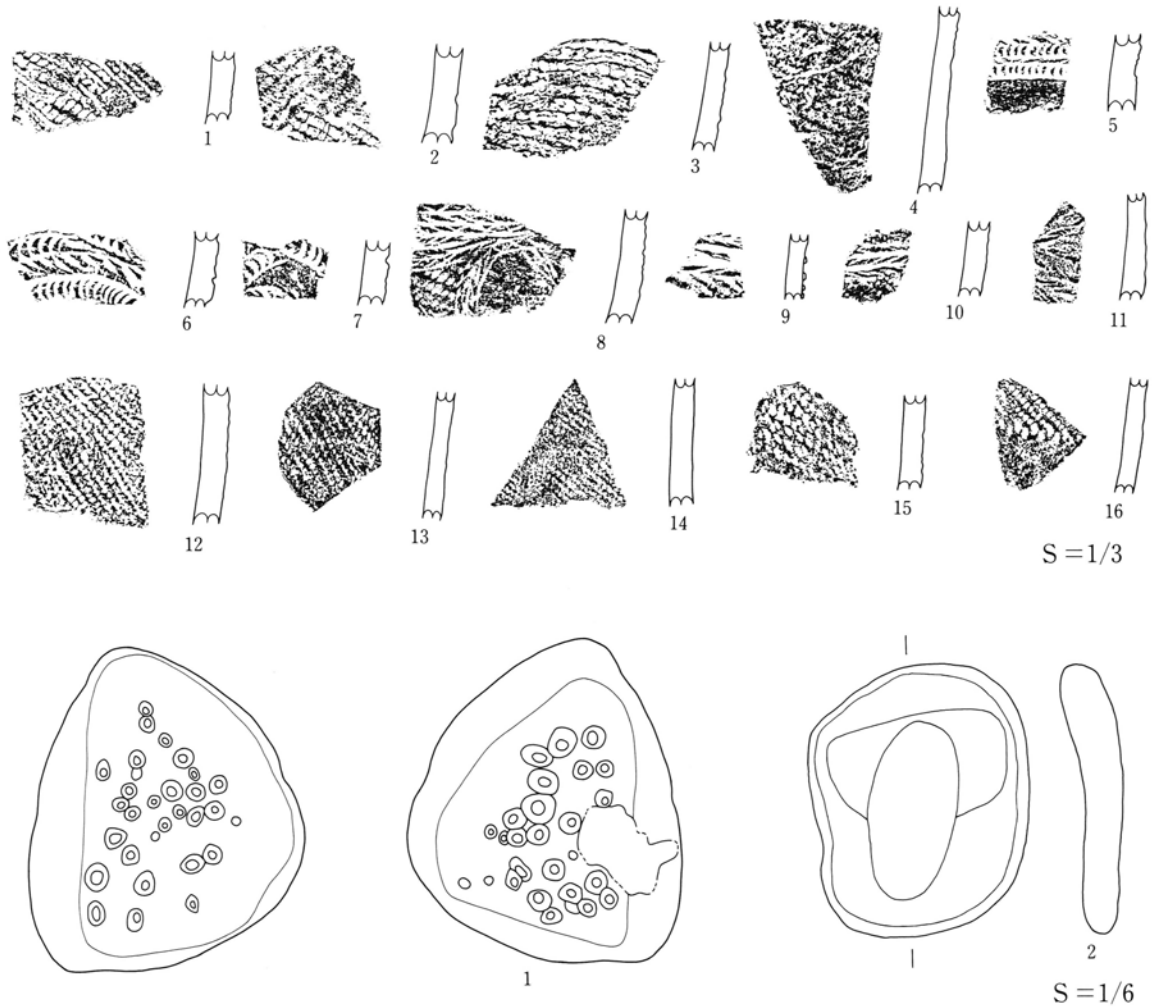
住居のほぼ中央に26号住居跡、南側を27・28号住居跡と重複しているため、残存するのは東・北・西側の一部分である。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われる。壁は、残存する三方で検出されている。残存する床面は、壁周辺だけであり、平坦である。炉跡は確認されていない。

出土遺物は僅かであり、第73図に示すごとくで、遺物については、次の通りある。

土器

１～４は胎土に繊維を含むもので、胴部に縄文を施すもの。１は附加条縄が用いられ、２は羽状縄文となる。

５～16は胎土に繊維を含まないもので、５～７は胴部に爪形文と刻みにより平行および曲線的な文様が描



第73図　40号住居跡出土遺物

表10　40号住居跡出土石器計測表

No.	器　種	石　　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	多孔石	黒色片岩	25.5	22.0		5,900.0
2	石　皿	牛伏砂岩	21.0	17.4	4.8	1,675.0

かれるもの。８～11は刻みをもつ浮線により文様を描くもので、８には弧状の曲線的な文様がみられる。９～11は平行な浮線が数条巡らされている。12～16は胴部に縄文が施されるもので、16は結束による羽状縄文である。

石器

出土した石器は、第73図下段に示す大形の多孔石１点と、石皿１点の計２点である。

41号住居跡（第11図）

Ｃ区の台地の西側縁辺にあり、17・18―40グリッドに位置する。先の26・27・28・35・40号住居跡と重複しており、出土遺物等から縄文時代のものと考えられる。覆土の堆積状況等から、本住居跡は、26・27・28号住居跡よりも古いものと考えられるが、35号住居跡との関係については不明。

住居の北側の大半を35号住居跡と重複し、35号住居跡の南側周溝の南側に一部分が残存するだけである。その残存部分からすれば、平面形状は方形を呈しているものと思われる。この重複する35号住居跡とは、床面が同一面となっており、それぞれの周溝の方向の違いから異なる住居跡と断定した。しかし、新旧関係も不明であることから、同一住居の拡張の可能性もある。壁は、南側で検出されており、45cmを測る。残存する床面は平坦であり、炉跡は確認されていない。住居内の周囲には周溝が巡っており、この周溝から住居規模が想定されよう。また、柱穴については、35号住居跡との関係もあり、本住居に伴うものの特定はできない。

遺物の出土は、見られなかった。

59号住居跡（第74・75図）

本住居跡は、東側台地の中世城郭外堀の西側平坦面にあり、７・８―51グリッドに位置し、60号住居と重複し、61号住居跡の北西側に隣接してある。また住居の北側には、242号土坑が隣接している。重複する60号住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が新しい。

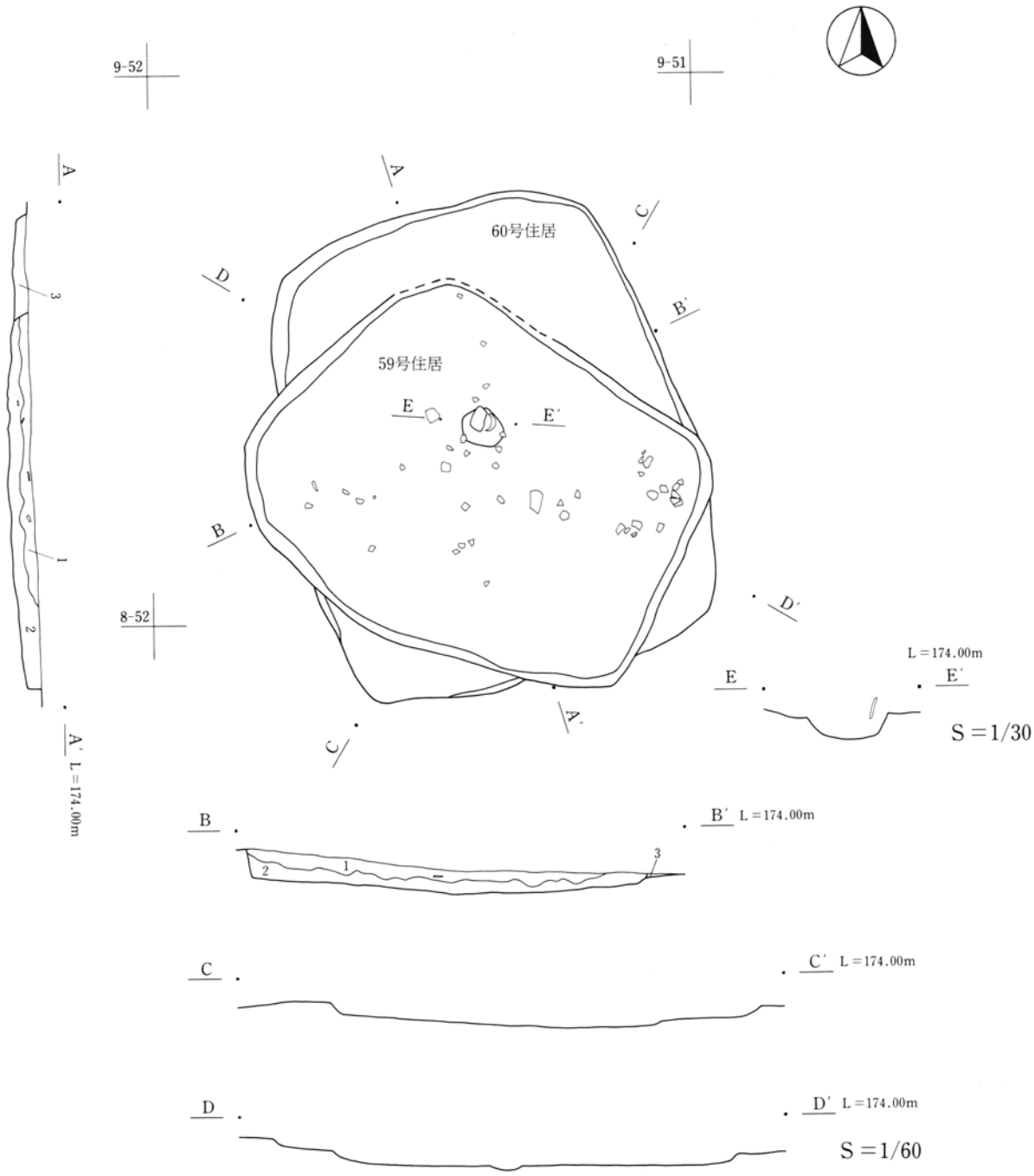
平面形は、長軸3.8m、短軸3.0mを測るやや不整な隅丸長方形を呈している。長軸方向は、南東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平をうけているが、以外に残存状態は良好で、壁高は最大で25cmほどを測る。床面は平坦ではあるが中央部がやや低く、中央部を中心に硬くしまった面を確認することができた。炉跡は、長軸上の中央より西寄りに、やや窪んで焼土を伴い検出されている。柱穴は、検出されなかった。

出土遺物は少なく、覆土および床面上に散漫に分布する。土器は小片が多く、第75図に示したものは、炉跡から出土したものである。遺物については、次の通りである。

図示した土器は、２個１対となる把手をもつ深鉢となるもので、把手部にＶ字状の隆帯をもち、口縁部には押し引き状の沈線が巡り、把手の右側には波状となる隆帯を一部にもつ。その下には、押し引き状の沈線が鍵状ないしクランク状に把手下に配され、併せて短く垂下する隆帯を添わせている。胴部には指頭圧痕による凹凸を、横位に数段もち、胴部中央には押し引き状沈線が１条巡っている。また、裏面口縁部には、把手部およびその左側に波状の隆帯がみられる。

60号住居跡（第74図）

本住居跡は、東側台地の中世城郭外堀の西側平坦面にあり、７・８―51グリッドに位置し、59号住居と重複し、61号住居跡の北西側に隣接してある。また住居の北側には、242号土坑が隣接している。重複する59号



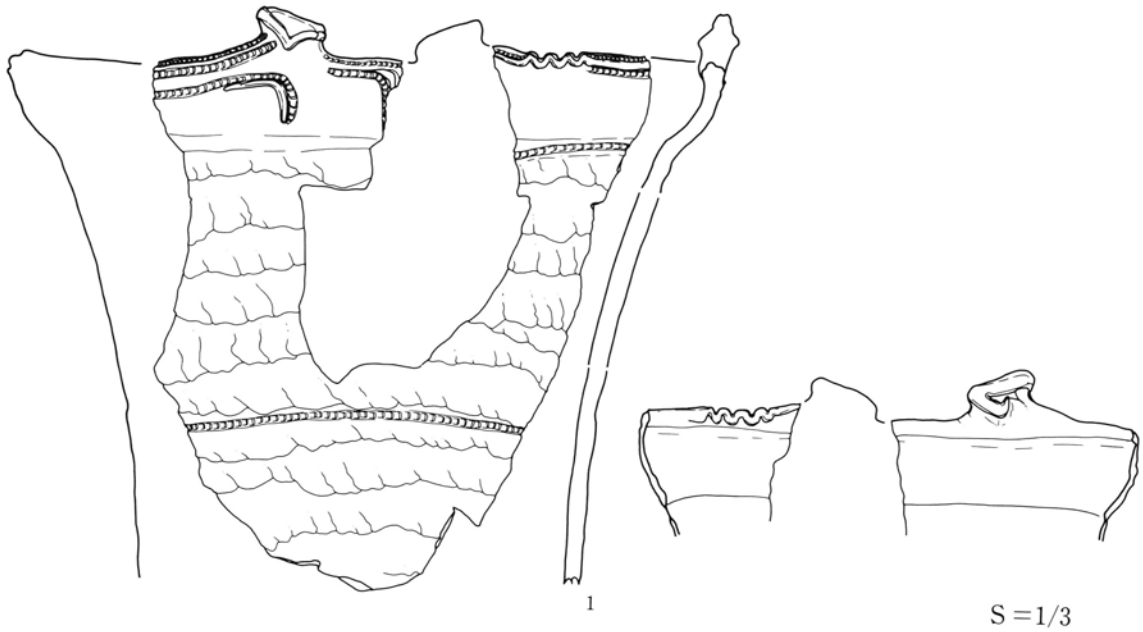
59・60号住居跡土層

1　褐色土　　ローム粒・炭化物を少量・白色硬質軽石（二次堆積ローム下の土に近似）を多量に含む。硬質。

2　淡い褐色土　ロームブロック多量に含む。硬質。

3　淡い褐色土　２層に近似（60号住居）。

第74図　59・60号住居跡平面図



第75図　59号住居跡出土遺物

住居跡との新旧関係は、覆土の堆積状況等から本住居の方が古い。この59号住居跡は、本住居の中央部に重複し、本住居より掘り込みが深いため、本住居の残存状態はきわめて悪い。

平面形は、長軸4.4m、短軸3.6mを測り、59号住居より一回り大きい隅丸長方形を呈している。長軸方向は、南南東を示す。復土は中世城郭造成時の削平をうけているため薄く、壁高は最大で10cmほどを測る。床面は平坦な、やや硬くしまった面を確認できた。炉跡は、59号住居と重複しているため不明。柱穴等も、検出されなかった。

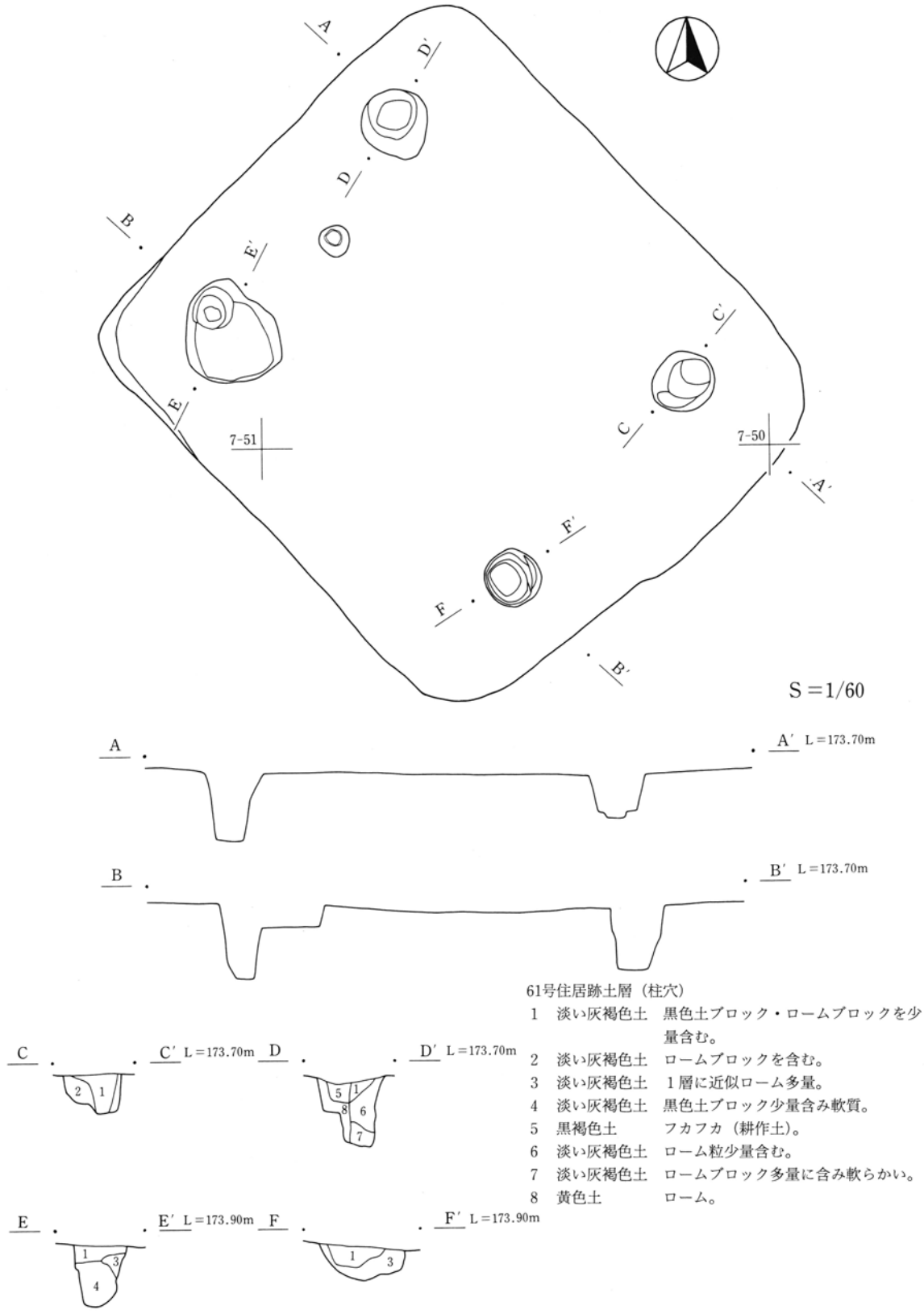
遺物等の出土はみられなかった。

61号住居跡（第76・77図）

本住居跡は、東側台地の中世城郭外堀の西側平坦面にあり、６・７―50・51グリッドに位置し、59・60号住居跡の南東側に隣接してある。また住居の西側には、680号土坑が隣接している。住居覆土の大半が、中世城郭造成時の削平をうけ、残存状況は悪い。

平面形は、長軸5.7m、短軸5.0mを測る隅丸長方形を呈している。長軸方向は、南東を示す。覆土は中世城郭造成時の削平をうけ、わずかに残存する西隅の壁高は6cmほどを測る。床面は東側の３分の２ほどが削平をうけており、残存する西側部分で平坦なしまった面を確認することができた。炉跡は、長軸上の中央より西寄りに、埋甕炉が検出されている。柱穴は、住居の対角線上の比較的隅に寄った位置に、４本検出されている。なお西側の柱穴位置には、円形の土坑が伴っている。

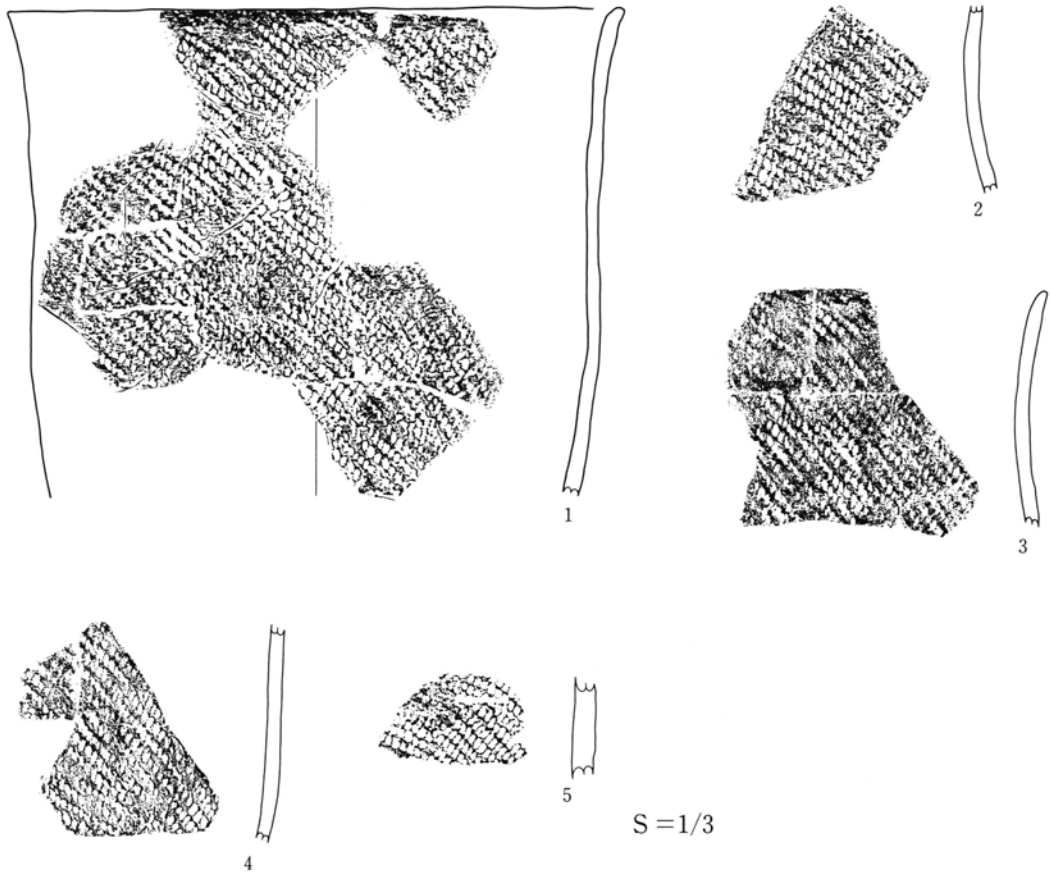
出土遺物は少なく、第77図１に示したものは、埋甕炉に使用したもの、およびその周辺から出土したものである。遺物については、次の通りである。



61号住居跡土層（柱穴）

1	淡い灰褐色土	黒色土ブロック・ロームブロックを少量含む。
2	淡い灰褐色土	ロームブロックを含む。
3	淡い灰褐色土	１層に近似ローム多量。
4	淡い灰褐色土	黒色土ブロック少量含み軟質。
5	黒褐色土	フカフカ（耕作土）。
6	淡い灰褐色土	ローム粒少量含む。
7	淡い灰褐色土	ロームブロック多量に含み軟らかい。
8	黄色土	ローム。

第76図　61号住居跡平面図



第77図　61号住居跡出土遺物

土器

１は平口縁となり、頸部がややくびれる深鉢となるもので、口縁部以下に RL の縄文を施すものである。２～４は、１と同一個体となる口縁部および胴部片である。５は胎土に繊維を含む胴部片で、RL の縄文を施すものである。

石器

図示できる定型な石器の出土はなかったが、剥片類が僅かに出土している。

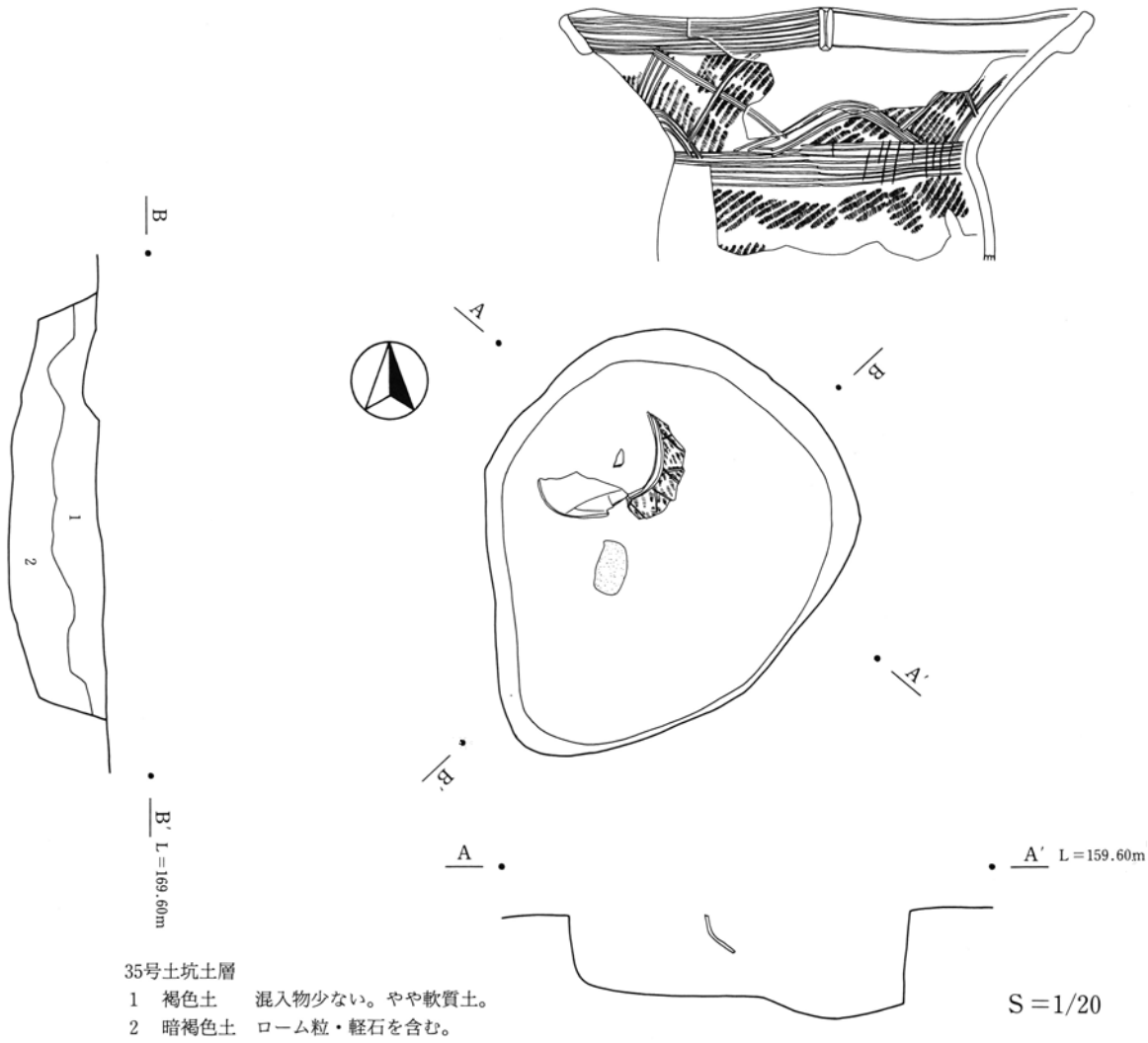
２．土　　坑

検出された土坑は、全体で800基余を数えるが、このうち堆積土・出土遺物等から明らかに縄文時代の所産と考えられるものは81基である。後述する不明土坑として扱った中にも、縄文時代の遺物を出土させている土坑が存在するが、共伴する遺物に異なる時代のものを含むため、本項とは分別して扱うこととした。また、遺物を出土させていない縄文時代の土坑の存在も考えられるが、他の時代のものと区別が難しい為、不明土坑の項で扱っている。

なお、各土坑の遺構説明については、土坑一覧表として表11に示す通りであり、ここでは主な土坑についての記載にとどめ、各土坑出土の遺物について記すこととする。

35号土坑（第78図）

東側台地の東側寄り（Ｂ区）で、16―26グリッドに位置する。中世城郭により削平を受けているが、残存状態は比較的に良好である。平面形は長軸1.15m、短軸0.93mを測る不整楕円形を呈し、深さは29c mを測る。



第78図　35号土坑平面図

出土した遺物は、第89図に示した大形の深鉢土器の半完形が１点のみで、覆土中の底面近くから出土している。土器から、縄文時代前期中葉の所産と考えられる。

745号土坑（第80図）

東側台地の西側寄り（Ｃ区）で、12―40グリッドに位置する。中世城郭により削平を受けているが、残存状態は比較的に良好である。平面形は長軸2.93m、短軸2.44mを測る楕円形を呈し、深さは44cmを測る。出土した遺物は、第90図６・７に示した土器で、覆土中の底面近くから出土している。土器から、縄文時代中期後半の所産と考えられる。

770号土坑（第79図）

東側台地の中央部（Ｃ区）で、11―41グリッドに位置する。中世城郭により削平を受けているが、残存状態は比較的に良好である。他の土坑と重複していることから南側が不明であるが、平面形は円形ないしは楕円形を呈しているものと思われ、深さは44cmを測る。出土した遺物は、第91図に示した大形の深鉢土器で、覆土中の中位から出土している。土器から、縄文時代中期前半の所産と考えられる。

774号土坑（第80図）

東側台地の中央部（Ｃ区）で、13―38グリッドに位置する。26号住居跡の南側にある。中世城郭により削平を受けているが、残存状態は比較的に良好である。平面形は径1.33mを測る円形を呈し、深さは44cmを測る。出土した遺物は、第107図に示した土器片が少量であるが、覆土中からは多くの大形の礫がみられた。

土坑出土遺物

４号土坑（第92図）

胴部の小破片である。胎土に繊維を含み、縄文を地文とし、太い沈線を施す。

７号土坑（第92図）

胴部の小破片である。胎土に繊維を含み、斜位に回転絡条体を施す。

８号土坑（第92図）

１・２は、胴部に刻みをもつ浮線隆帯を数条巡らせるもの。３は平口縁片で、口縁以下にRLの縄文を施す。４は胎土に繊維を含み、胴部にLRの縄文を施す。

10号土坑（第92図）

胎土に繊維を含み、胴部にRLとLRによる羽状縄文を施す。

11号土坑（第92図）

頸部から胴部にかけて、半裁竹管による平行沈線が数条巡らされ、円形刺突を縦位に施す。頸部上半には、半裁竹管による鋸歯状の文様が施されるようである。

18号土坑（第92図）

やや内反する波状ぎみの口縁部片で、口縁部に１条の沈線を巡らせ、以下にLRとRLによる羽状縄文を施す。

22号土坑（第92図）

胎土に繊維を含む平口縁部片で、口縁以下にLRの縄文を施す。

23号土坑（第92図）

１・２・11・12は、胎土に繊維を含む。１は、口縁部に半裁竹管による平行沈線を巡らせ、沈線上に爪形刺突を施す。２は、頸部に太い半裁竹管による平行沈線を巡らせたもの。11・12は、胴部に縄文を施すもので、11はLを、12はRLによるものである。３は縄文を地文とし、円形刺突を縦位に施したもの。４は口縁部に刻みをもつ浮線隆帯で文様を描くものであり、５・４は胴部に同様の浮線隆帯を数条巡らせるもの。７は集合沈線を施すもの。８は、波状口縁となる口縁に隆帯を巡らせ、波頂下にも隆帯を垂下させるもの。９は無文の胴部であり、10は胴部に結節縄文を施したものである。

25号土坑（第92・108図　表12）

胎土に繊維を含むものには、４・７・９があり、いずれも胴部に縄文を施すもので、９は羽状縄文が施される。１は口唇部に刻みをもち、口縁部に爪形刺突を２条巡らせ多感に半裁竹管による平行沈線で鋸歯状の文様を描き、その下部に弧状の平行沈線を施す。２は地文縄文の胴部に、単沈線による曲線的な文様を描くもの。３は平口縁下に平行沈線を数条巡らせ、沈線間に連続する刺突を施す。５は胴部に刻みをもつ浮線隆帯で文様を描くものであり、隆帯間に細かな刺突を施す。６は口縁下に、半裁竹管による沈線と、単沈線で格子状に文様を施すもの。８は胴部にRLの縄文を施すものである。

出土した石器には、磨石の１点がある。

35号土坑（第89図１、第108図　表13）

緩やかに波状を呈する平縁に近い深鉢で、頸部が大きくくびれ、口縁が外反する。波頂下には縦長の隆帯をもち、口縁および頸部下には半裁竹管による平行沈線が数条巡らされ、主文様にはやや大形の菱形の文様を描き、地文にはLの縄文が施されている。胎土には、繊維を含む。

出土した石器は、片面に凹孔をもつ凹石が１点である。

163号土坑（第92図）

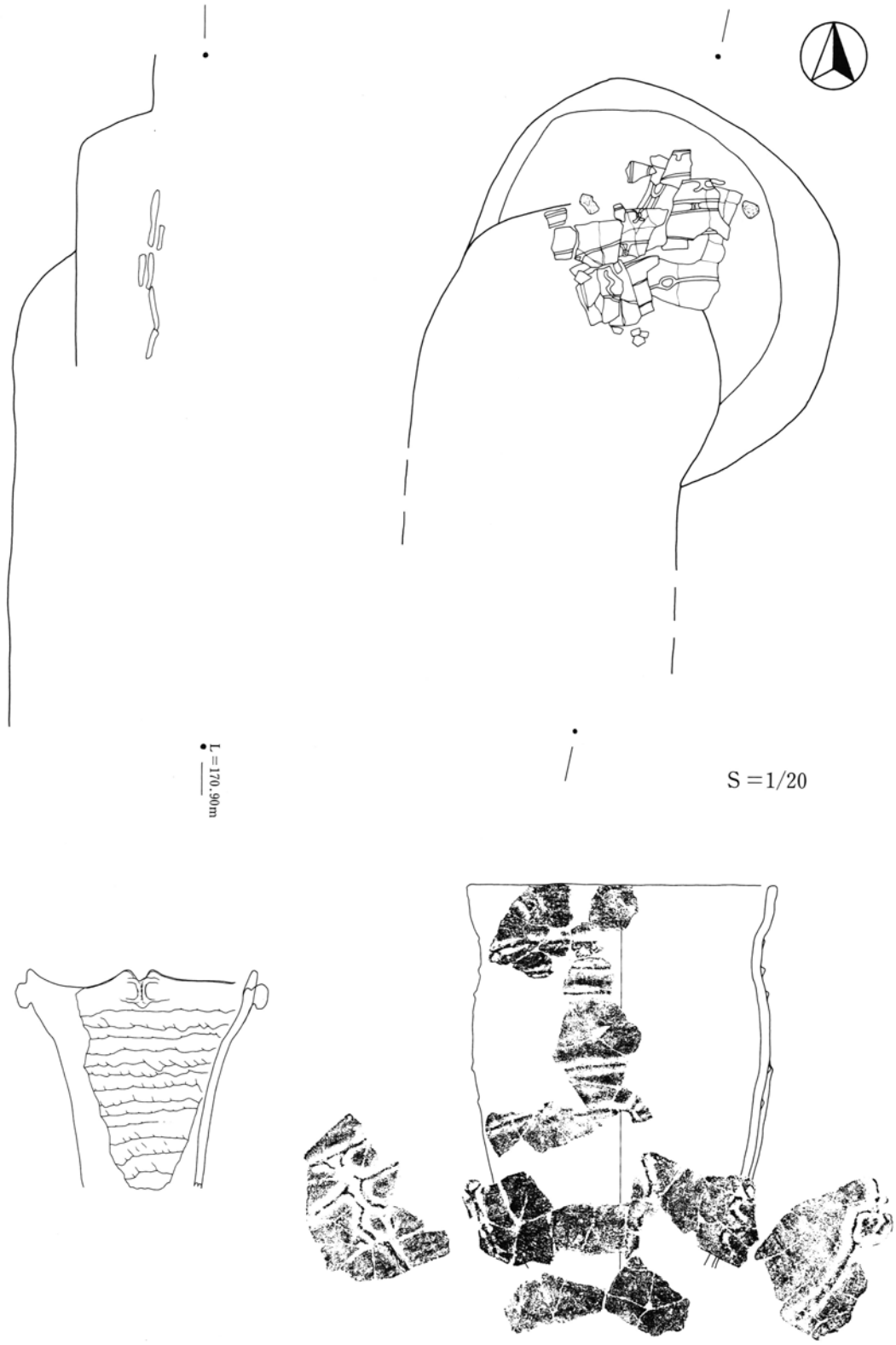
波状口縁の波頂部口唇に、刻み状の刺突をもち、口縁下にLRの縄文を施すもの。

166号土坑（第92図）

口縁下に、半裁竹管による集合沈線を施すもの。

211号土坑（第93図）

１は胴部下半に、半裁竹管による集合沈線を巡らせるもの。２は弥生時代中期の甕ないし壺形土器の胴部



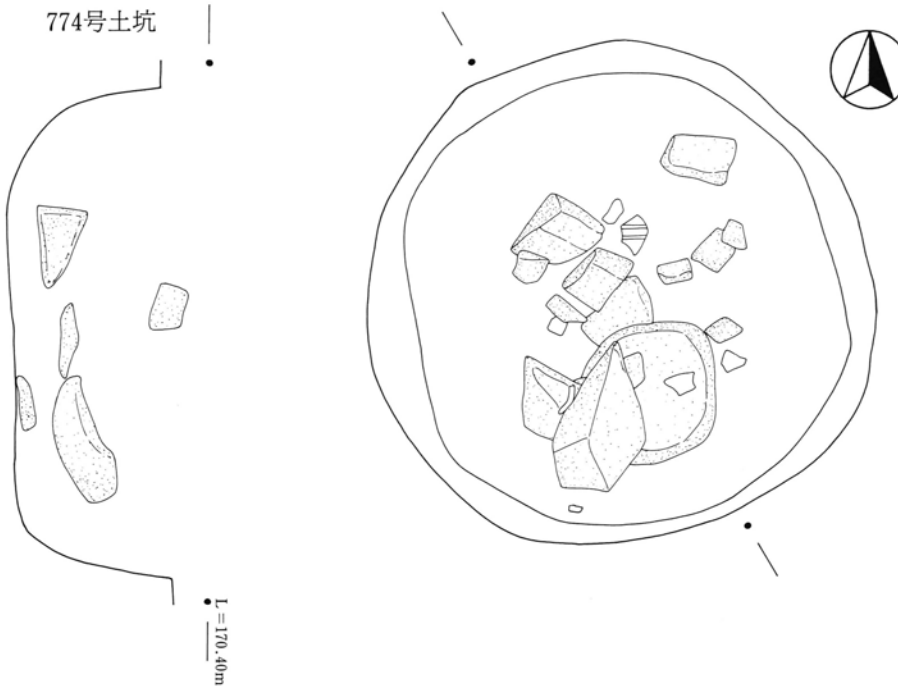
第79図　770号土坑平面図

745号土坑

745号土坑土層
1　暗褐色土　土器片多量に含む。
2　褐色土　　ロームブロックを含む。
3　褐色土　　焼土粒を含む。

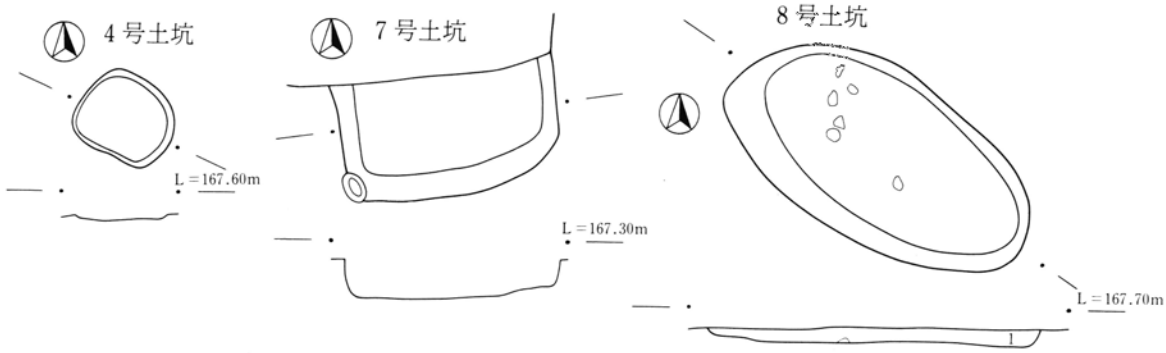
S＝1/40

774号土坑

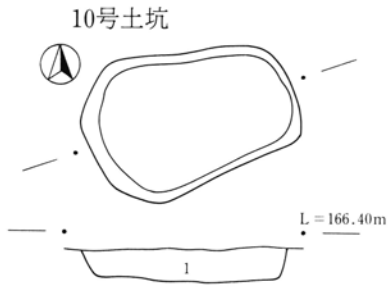


S＝1/20

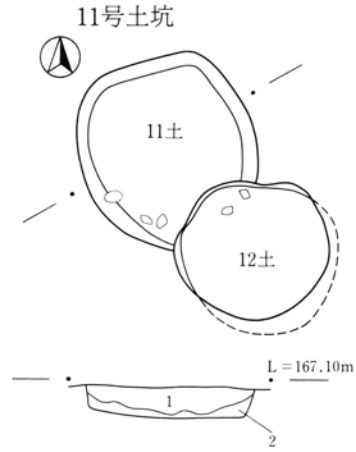
第80図　745・774号土坑平面図



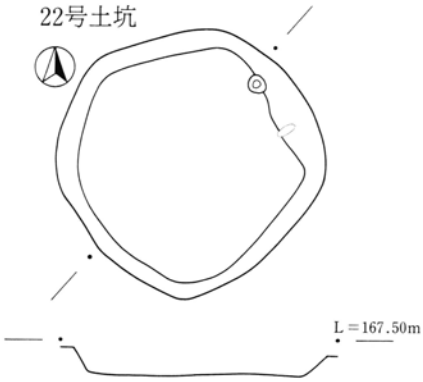
8号土坑土層
1　暗褐色土　ロームブロックを多量に含む。粘性。

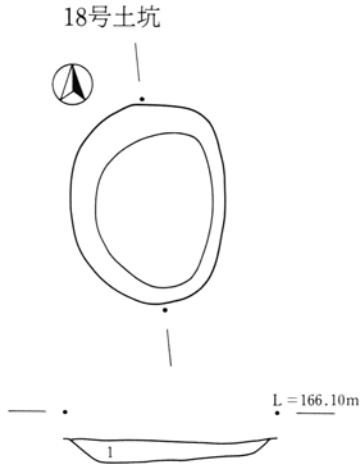


10号土坑土層
1　灰黒褐色土　ロームとの混土。砂・軽石を多量に含む。

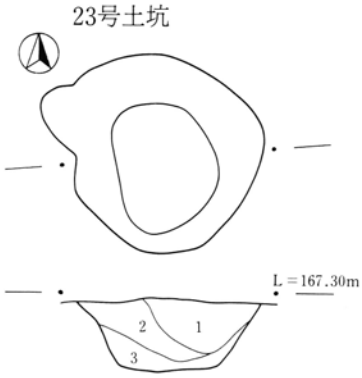


11号土坑土層
1　褐色土　灰黄褐色土とのブロック混土。砂・軽石を多量に含む。硬質・粘性。
2　黄褐色土　ロームとのブロック混土。硬質土・粘性有り。





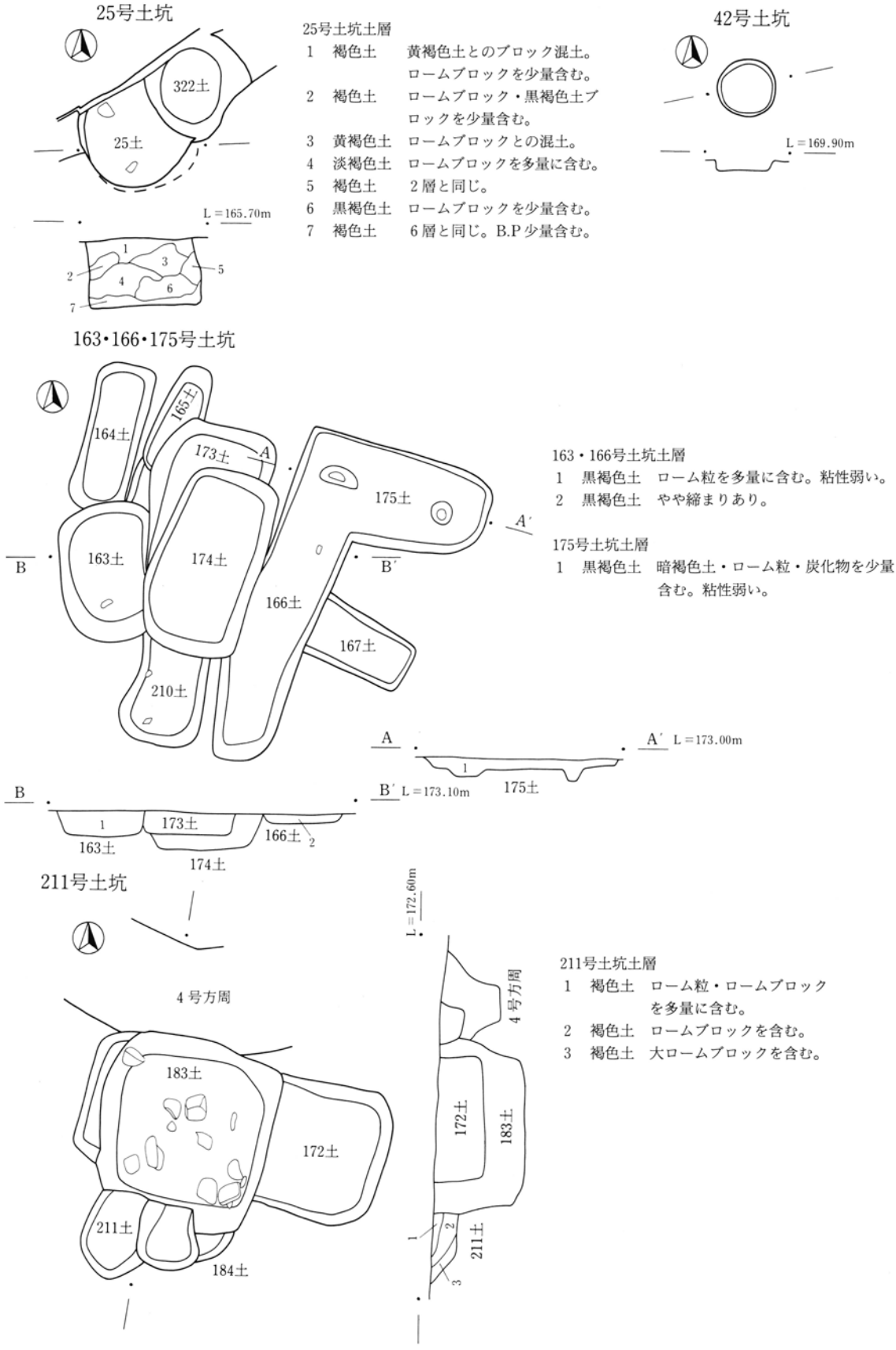
18号土坑土層
1　暗褐土　ローム粒を少量含む。締まりあり。



23号土坑土層
1　褐色土　軽石を少量含む。硬質土・粘性有り。
2　灰黄褐色土　ロームブロックを少量含む。硬質土・粘性あり。
3　黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。硬質土・粘性は強い。

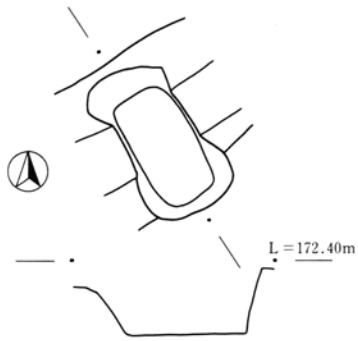
S＝1/60

第81図　縄文時代土坑平面図（１）

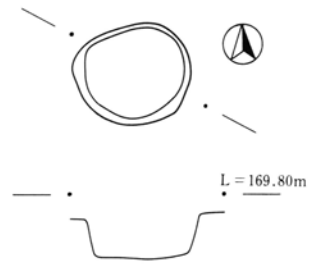


第82図　縄文時代土坑平面図（２）

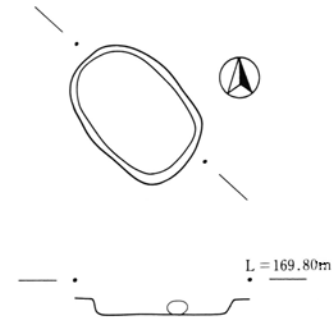
212号土坑



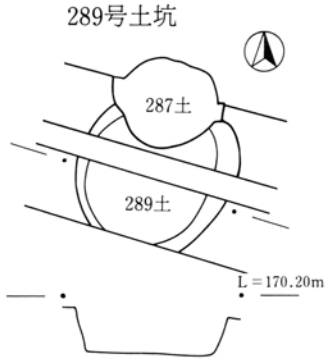
267号土坑



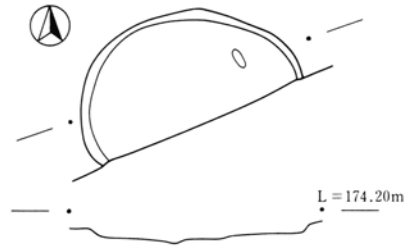
268号土坑



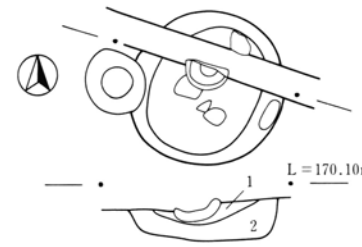
289号土坑



282号土坑

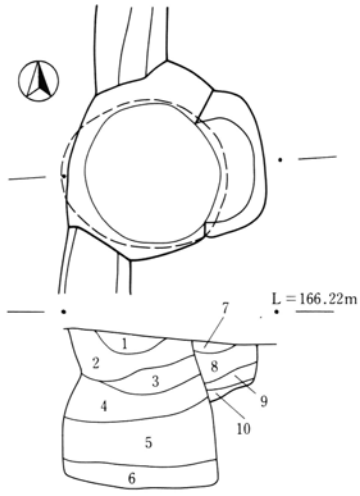


288号土坑



288号土坑土層
1　くすんだ褐色土　硬質。
2　くすんだ褐色土　１層とロームブロックの混土。

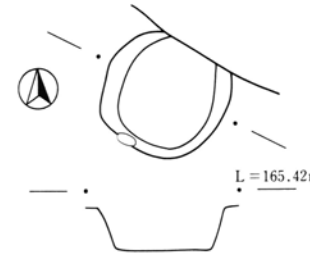
290号土坑



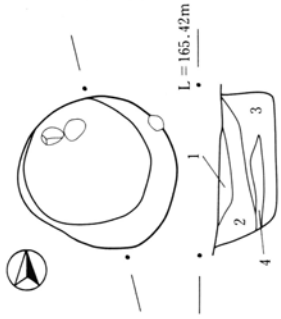
290号土坑土層

1	暗褐色土	A軽石を含む耕作土。
2	黒褐色土	混入物少なく軟質。
3	暗褐色土	ローム粒・ブロックを含む。
4	黒褐色土	ローム粒を少量含む。２層よりやや明るい。
5	明暗褐色土	ロームブロックを多量に含む。
6	黒褐色土	４層と同じ。
7	暗褐色土	ローム粒・白色スコリアを含む。硬質。
8	暗褐色土	ローム粒・ブロックを多量に含む。硬質。
9	暗褐色土	８層と同じ。やや暗く白色スコリアを含む。
10	暗褐色土	ローム粒・Y.P 軽石を多量に含む。

299号土坑

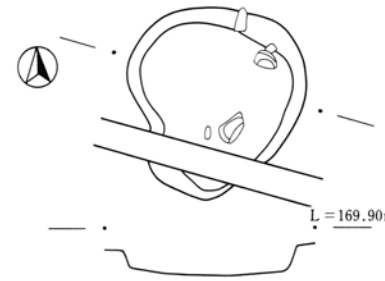


298号土坑



298号土坑土層
1　暗褐色土　ロームブロック・焼土粒を含む。
2　黒褐色土　ローム粒を少量含む。軟質。
3　黒褐色土　２層よりやや暗い。
4　黒褐色土　混入物の少ないかなり黒い土。

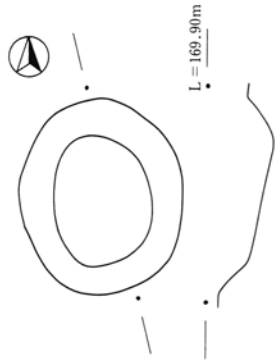
304号土坑



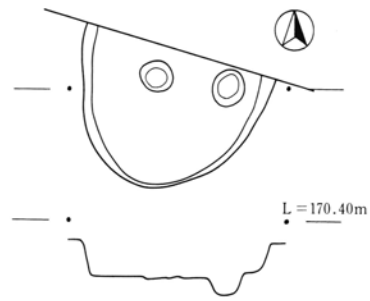
S＝1/60

第83図　縄文時代土坑平面図（３）

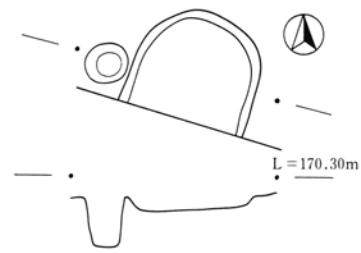
305号土坑



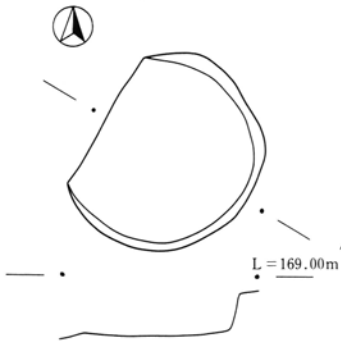
306号土坑



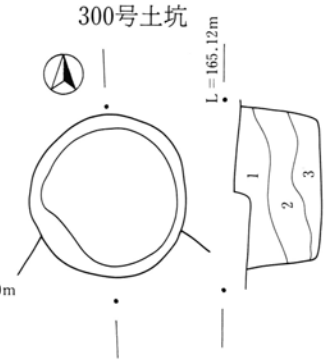
307号土坑



301号土坑

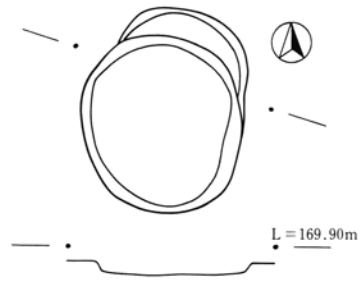


300号土坑

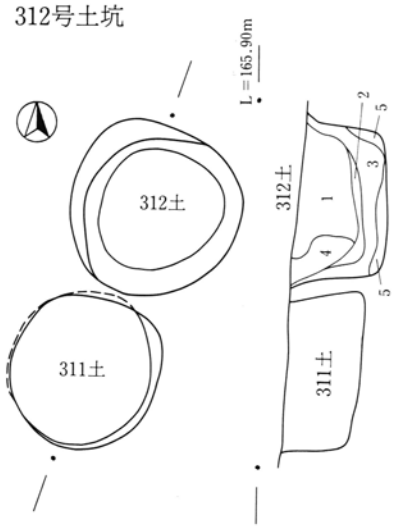


300号土坑土層
1　黒褐色土　混入物の少ない黒い軟質土。
2　黄褐色土　ロームブロック主体。
3　黒褐色土　１層と類似する。ローム粒を多量に含み明るい。

308号土坑

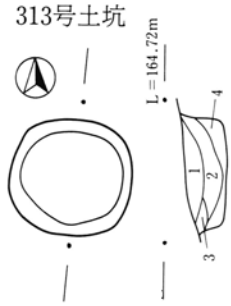


312号土坑



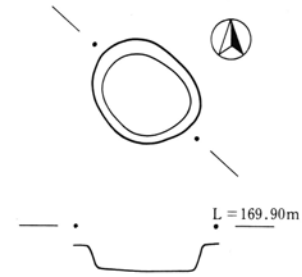
312号土坑土層
1　黄褐色土　ローム土。
2　黒褐色土　混入物の少ない黒い土。
3　黄褐色土　ローム土。
4　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。軟質土。
5　暗褐色土　ローム粒を多量に含む。ロームブロック混在。軟質。

313号土坑



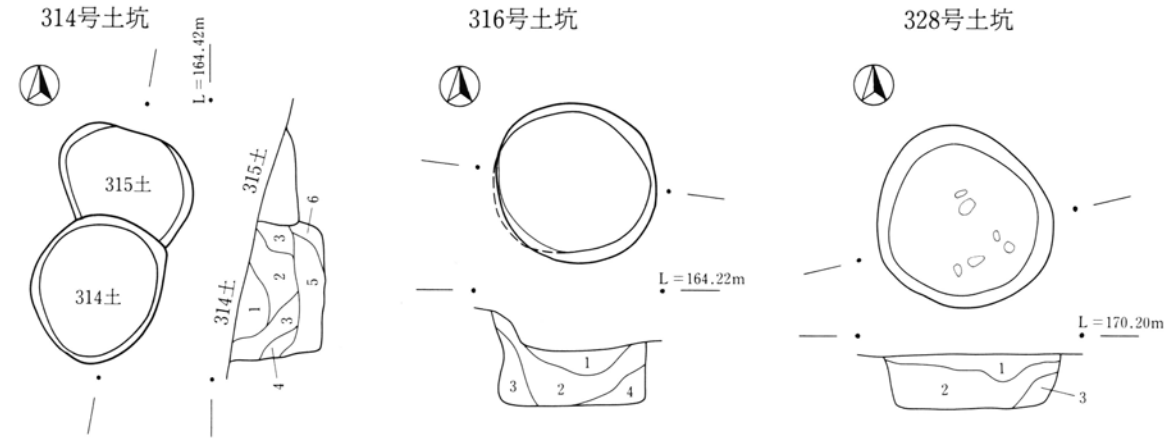
313号土坑土層
1　暗褐色土　ローム粒・少量の焼土粒を含む。軟質土。
2　黒褐色土　焼土粒を微量に含む。かなり黒い土。
3　暗褐色土　ローム粒を主体。
4　黒褐色土　２層と同じ。ロームブロック混在。

318号土坑



第84図　縄文時代土坑平面図（４）

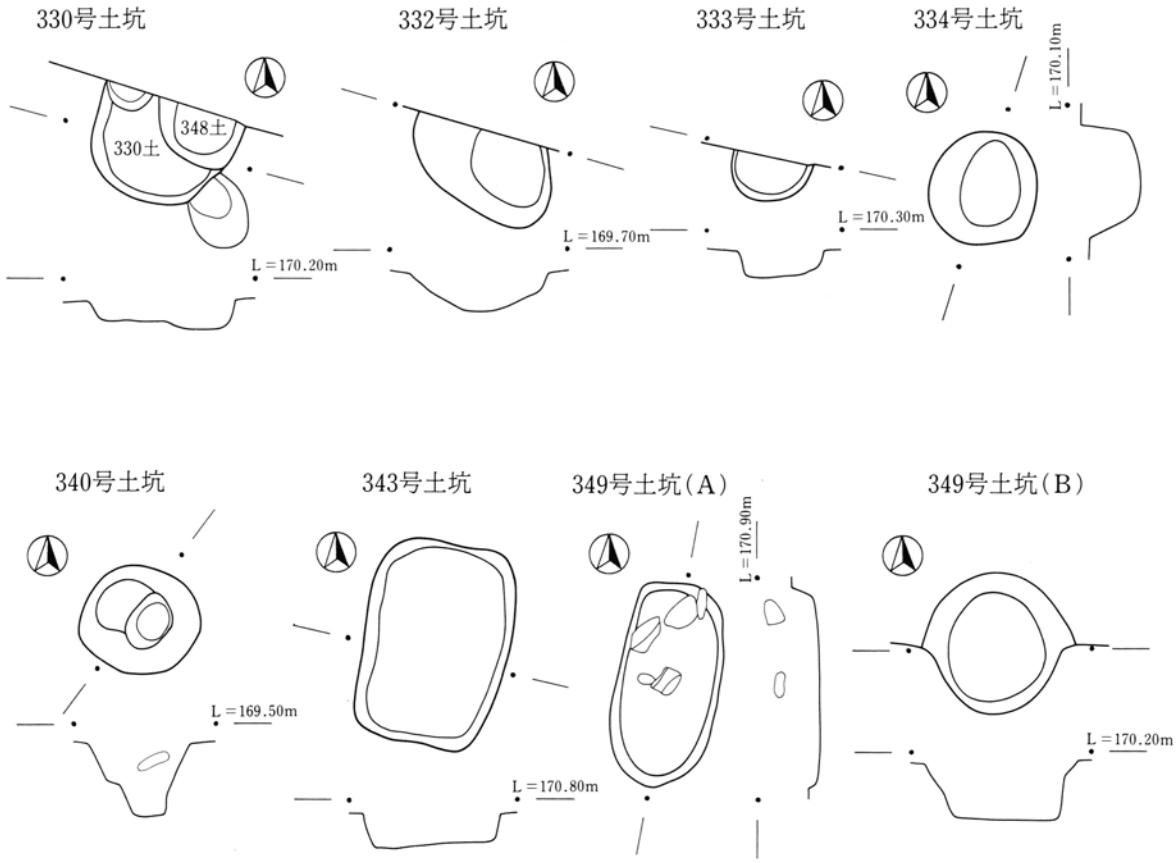
S＝1/60



314号土坑土層
1　黒褐色土　混入物少なく黒色。軟質土。
2　黒褐色土　１層より明るい。ロームブロック少量含む。
3　暗褐色土　１層よりやや明るい。ローム粒を多量に含む。
4　黄褐色土　ロームブロック主体。
5　黒褐色土　Y.P 軽石を微量に含む。かなり黒い。
6　暗褐色土　Y.P 軽石・ローム粒を含む。明るい。

316号土坑土層
1　黒褐色土　混入物少ない。黒い軟質土。
2　黒褐色土　ローム粒少量含む。１層よりやや明るい。
3　暗褐色土　ローム粒を多量に含み明るい。（崩落土）
4　暗褐色土　３層に類似。

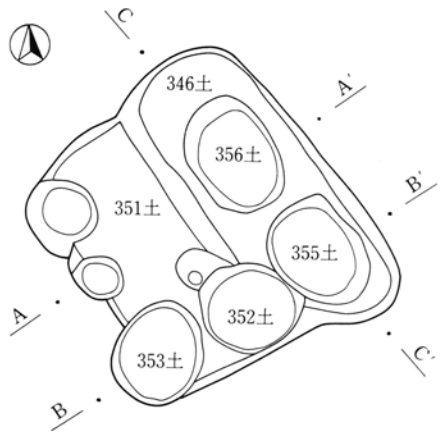
328号土坑土層
1　褐色土　硬質。
2　褐色土　ロームブロック含みやや軟質。
3　褐色土　ロームと２層との混土。

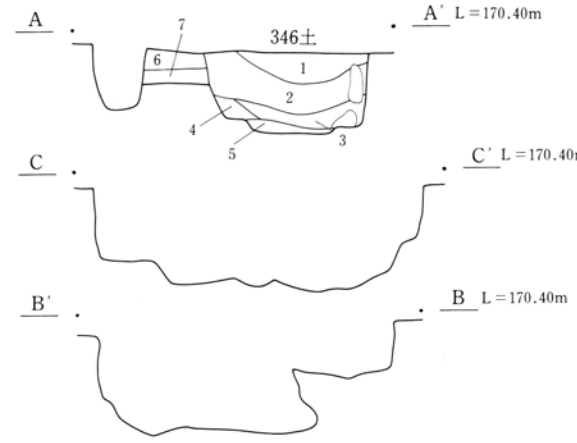


第85図　縄文時代土坑平面図（５）

S＝1/60

346・351・356号土坑

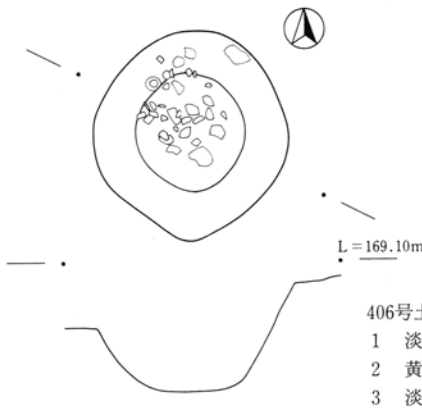




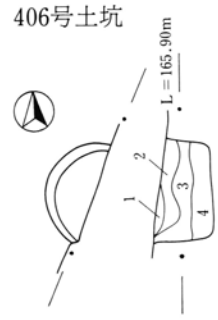
346・351・356号土坑土層

1　明暗褐色土　ローム粒を多量に含み明るい。硬質。締まりあり。
2　暗褐色土　混入物少ない。硬質。締まりあり。
3　暗褐色土　１層に類する。ロームブロック含む。やや軟質。
4　暗褐色土　３層に類する。かなり黒い粘質土。
5　暗褐色土　ローム粒・Y.P 軽石粒を多量に含み明るい。(356号土坑)
6　暗褐色土　汚れたロームブロックが多量に混在。硬質土。(351号土坑)
7　明暗褐色土　ローム粒・ブロック混在により明るい。粒子の密な黒い土を含む。(351号土坑)

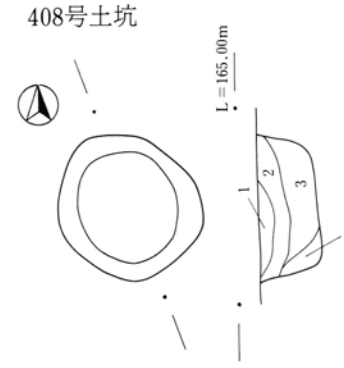
357号土坑



406号土坑



408号土坑



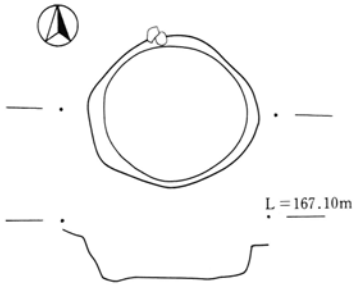
406号土坑土層

1　淡褐色土　軟質。
2　黄褐色土　ローム粒含む。軟質。
3　淡褐色土　ローム粒含む。軟質。
4　黒褐色土　３層との混土。やや硬質。下半５cmは特に硬い。

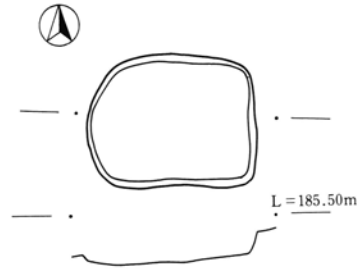
408号土坑土層

1　くすんだ黄褐色土　ハードロームとのブロック混土。硬質。(住居貼床)
2　くすんだ黄褐色土　ソフトロームとのブロック混土。軟質。
3　黒褐色土　軟質。
4　黒褐色土　３層に類似。

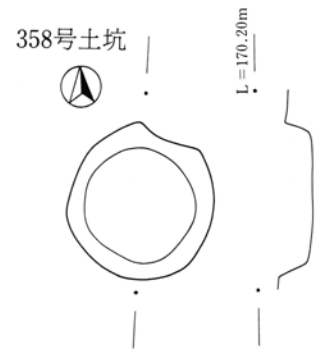
407号土坑



537号土坑

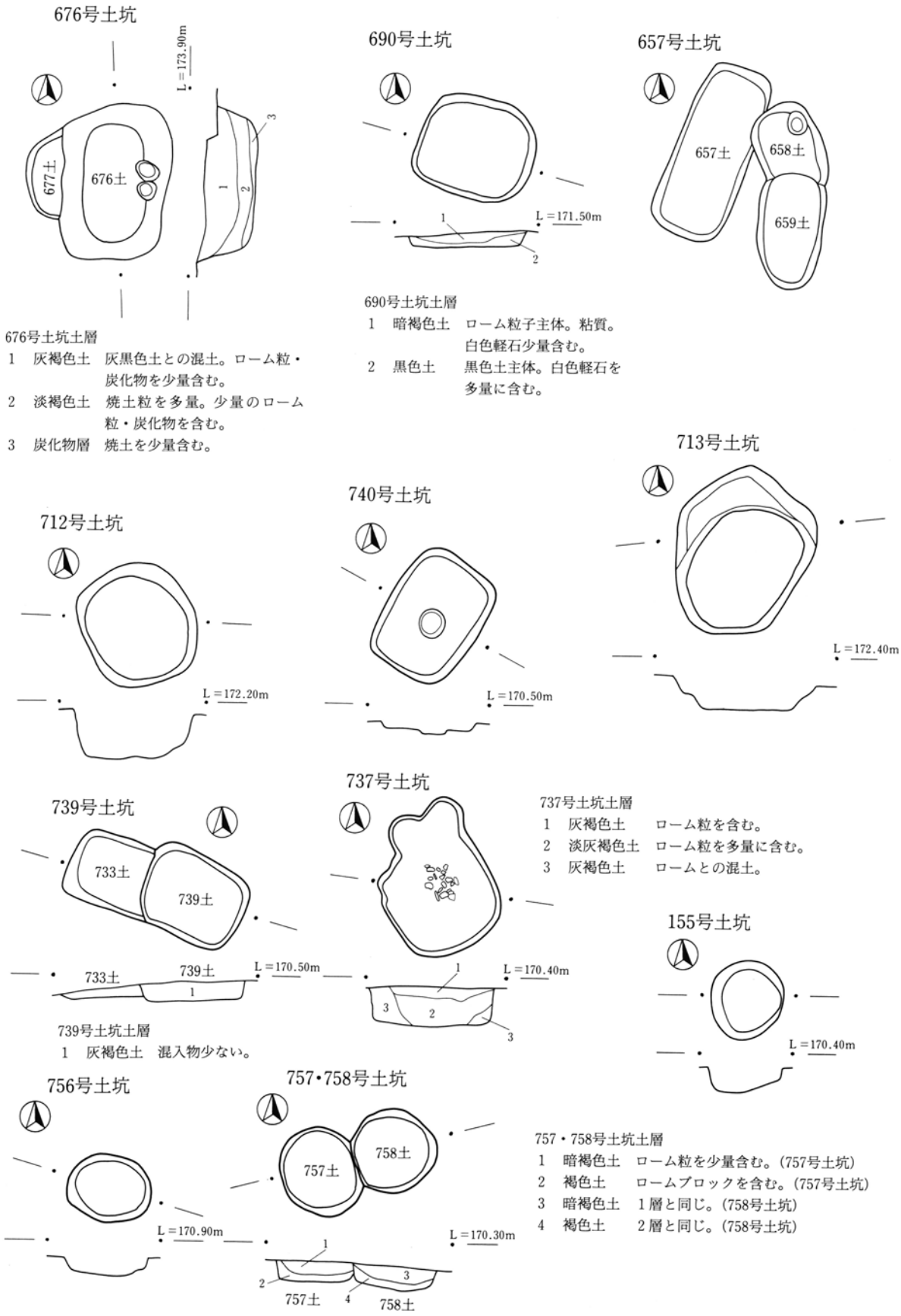


358号土坑



第86図　縄文時代土坑平面図（６）

S＝1/60



676号土坑土層

1　灰褐色土　灰黒色土との混土。ローム粒・炭化物を少量含む。

2　淡褐色土　焼土粒を多量。少量のローム粒・炭化物を含む。

3　炭化物層　焼土を少量含む。

690号土坑土層

1　暗褐色土　ローム粒子主体。粘質。白色軽石少量含む。

2　黒色土　黒色土主体。白色軽石を多量に含む。

737号土坑土層

1　灰褐色土　ローム粒を含む。

2　淡灰褐色土　ローム粒を多量に含む。

3　灰褐色土　ロームとの混土。

739号土坑土層

1　灰褐色土　混入物少ない。

757・758号土坑土層

1　暗褐色土　ローム粒を少量含む。(757号土坑)

2　褐色土　ロームブロックを含む。(757号土坑)

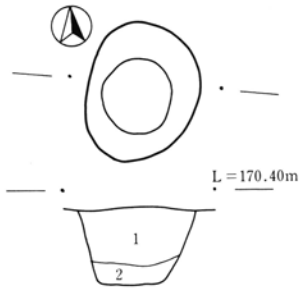
3　暗褐色土　1層と同じ。(758号土坑)

4　褐色土　2層と同じ。(758号土坑)

第87図　縄文時代土坑平面図（７）

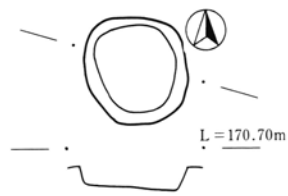
S＝1/60

759号土坑

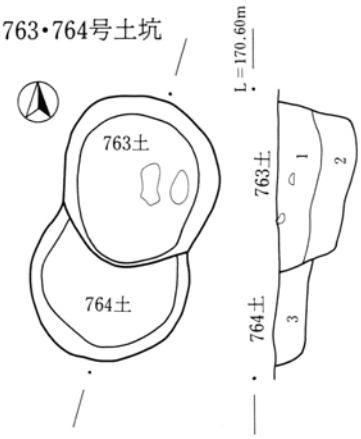


759号土坑土層
1　くすんだ黄褐色土　ローム粒を少量含む。
2　黄褐色土　ロームブロックを多量に含む。

766号土坑

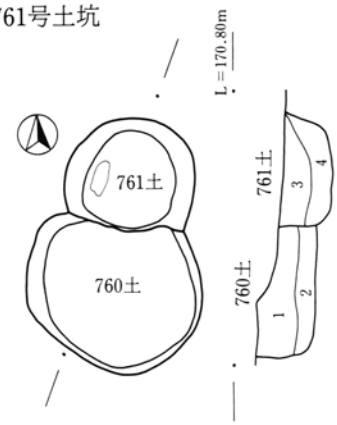


763・764号土坑



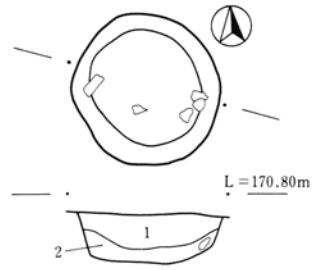
763・764号土坑土層
1　暗褐色土　(763号土坑)
2　褐色土　ロームブロック・粘質土ブロックを含む。(763号土坑)
3　暗褐色土　混入物少ない。(764号土坑)

760・761号土坑



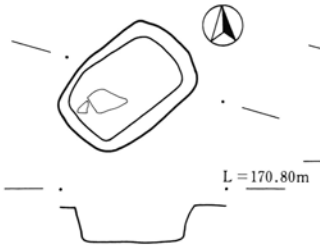
760・761号土坑土層
1　褐色土　混入物少ない。(760号土坑)
2　暗褐色土　ローム粒を少量含む。(760号土坑)
3　淡褐色土　ローム粒を多量に含む。(761号土坑)
4　淡褐色土　ロームとの混土。(761号土坑)

767号土坑

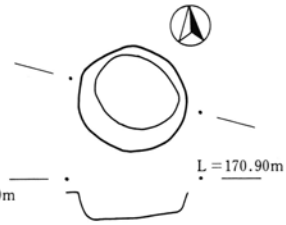


767号土坑土層
1　暗褐色土　ロームブロックを少量含む。
2　暗褐色土　ロームとの混土。

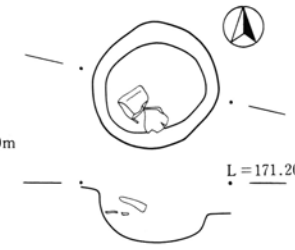
769号土坑



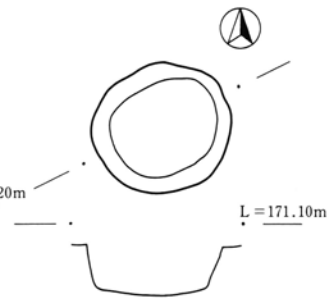
771号土坑



775号土坑



776号土坑



S＝1/60

第88図　縄文時代土坑平面図（８）

表11　縄文時代土坑一覧表

土坑No.	グリット位置	平面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	備考
4	26-24	楕円	0.81	0.64	6	
7	26-23	方形	1.60	1.10	32	
8	25-25	長楕円	2.58	1.34	36	
10	26-22	方形	1.68	1.04	28	
11	26-22	楕円	1.36	(1.12)	23	
18	27-20	楕円	1.36	1.22	23	
22	25-24	不整円形	2.10	2.00	38	
23	24-22	楕円	1.74	1.46	113	
25	28-17	円形	(1.22)	(0.90)	64	
35	16-26	不整楕円	1.15	0.93	29	
42	16-30	円形	1.18	1.14	10	
163	15-57	楕円	1.38	0.93	29	
166	14-56	方形	(2.48)	0.82	26	
175	15-56	方形	(1.20)	0.93	18	
211	15-54	楕円	(1.06)	(0.84)	27	
212	16-54	楕円	1.40	0.78	60	
267	16-37	円形	0.92	(0.62)	38	
268	17-37	楕円	1.30	1.10	14	
282	12-61	円形	3.61	(1.90)	14	
288	15-38	円形	1.27	1.20	38	
289	15-40	円形	1.14	(1.08)	33	
290	28-20	円形	1.58	1.50	116	フラスコ状
298	28-18	円形	1.24	1.12	53	
299	28-17	円形	1.00	(0.90)	46	
300	29-17	円形	1.26	1.26	71	
301	17-42	円形	1.60	(1.30)	24	
304	16-39	不整円形	1.50	1.42	26	
305	16-42	楕円	1.52	1.28	25	
306	15-40	楕円	(1.10)	(1.54)	29	
307	15-40	楕円	(0.88)	1.00	12	
308	16-40	円形	1.60	1.30	60	
312	16-29	円形	1.36	1.33	76	
313	16-30	円形	0.96	0.93	47	
314	16-30	円形	1.29	0.98	70	
316	15-30	円形	1.30	1.30	78	
318	27-24	円形	0.85	(0.43)	22	
328	14-41	円形	1.45	1.38	44	
330	14-41	円形	(0.82)	1.00	17	
332	17-37	不整楕円	1.21	(0.66)	30	
333	14-40	円形	0.64	(0.34)	23	
334	15-39	楕円	0.88	0.86	45	
340	16-40	円形	0.90	0.86	62	
343	12-40	方形	1.60	1.16	25	
346	14-39	長楕円	(1.84)	1.16	68	
349	13-43	円形	1.64	0.82	13	
351	14-39	方形	2.26	(0.86)	37	
352	14-39	円形	0.73	0.72	50	
353	14-39	円形	0.80	0.68	45	
355	14-39	円形	0.90	0.68	83	
357	14-44	円形	1.54	1.50	62	
358	12-25	円形	1.20	1.20	28	
406	28-20	円形	0.80	(0.36)	46	
407	26-21	円形	1.36	1.20	37	
408	29-17	円形	1.16	1.14	59	
537	3-93	方形	1.48	1.04	25	
657	7-57	長方形	1.74	0.80	31	
676	6-52	楕円	1.62	1.02	24	
690	10-45	方形	1.20	1.04	16	
712	6-41	楕円	1.39	1.26	55	
713	7-42	楕円	1.78	1.46	39	
737	13-39	方形	1.52	1.16	51	
739	13-42	方形	1.10	0.86	19	
740	13-37	方形	1.32	0.99	19	
745	12-40	楕円	2.93	2.44	44	
755	13-38	円形	0.84	0.76	30	
756	10-39	円形	0.87	0.68	28	
757	13-37	円形	0.94	(0.76)	24	
758	13-37	円形	0.88	0.87	31	
759	13-38	楕円	1.10	0.88	62	
760	12-38	円形	1.42	(1.80)	48	
761	12-38	円形	1.01	0.90	44	
763	12-39	楕円	1.34	1.23	63	
764	12-39	楕円	1.22	(0.77)	30	
766	11-39	円形	0.86	0.83	22	
767	11-39	円形	1.19	1.17	52	
769	11-39	方形	1.08	0.87	30	
770	11-41	楕円	1.42	1.15	44	
771	10-41	円形	0.88	0.80	22	
774	13-31	円形	1.33	1.32	44	
775	10-40	円形	1.01	1.00	40	
776	12-39	円形	1.08	1.01	40	

片で、斜位に条痕が施される。

石製品が１点出土しており、牛伏砂岩による身の薄い円盤である。

212号土坑（第93・108図　表14）

口縁が大きく膨らみ内反するもので、刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を描くもの。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が１点である。

267号土坑（第93図）

いずれも胎土に繊維を含むもので、１は沈線が施され、２・３は胴部にLRないしはRLの縄文が施されるもの。

268号土坑（第93・108図　表15）

１～３の胎土には繊維が含まれる胴部片で、１はLRおよびLと１本付加のRLの縄により羽状縄文を施す。２はLの縄文を施し、３は２本付加の縄文を施す。４は無繊維で、胴部にLRの縄文を施したものである。

出土した石器は、両面に多孔をもつ多孔石が１点である。

282号土坑（第90図４、第93・108図　表16）

第90図４は、胴部に半裁竹管による集合沈線を巡らせるもの。第93図１は、口縁部にLの縄文を施した後に、沈線を施すもの。２は口縁に耳タブ状の突起を有し、口縁部に横位の矢羽根状の沈線を施す。３は頸部に半裁竹管による集合沈線を施すもの。４は口縁以下に、Lの縄文を施すものである。５は胎土に繊維を含む胴部片で、LRの縄文を施す。

出土した石器は、黒曜石製の石鏃１点、両面および側面に凹孔をもつ凹石が２点である。

288号土坑（第93・109図　表17）

１は胴部に刻みをもつ浮線隆帯を巡らせ、半裁竹管による連続爪形で曲線的な文様を施すもの。２は地文に縄文をもち、胴部に刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を施すもの。３・４は胴部に曲線的に逆U字状ないしV字状に沈線で文様を描き、文様内に縄文をもつもの。５は無文の口縁部であり、６は無文の胴部である。

出土した石器は、打製石斧が１点と、裏面に多孔をもつ石皿が１点、片面が多孔となる多孔石が１点である。

289号土坑（第94・109・110図　表18）

４～13・15・16は胎土に繊維を含むもので、４は口縁下にLの縄文を施すものであり、５は口縁下にやや粗いRLの縄文を施すもの。６・９・10・12・15は胴部に０段多条のLRの縄文を施し、７・11・13・16は胴部にLの縄文を施す。８は胴部に、LRとRLにより羽状縄文を施す。１は口唇部が肥厚し、口縁部に半裁竹管による併行沈線および爪形刺突を巡らせ、孔を有する。２・３は胴部に刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を描くもので、３は梯子状となる隆帯によるものである。14は胴部にRLの縄文を施す。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が２点と、両面に多孔をもつ石皿が１点である。

290号土坑（第94・110図　表19）

繊維を含む胴部片で、LLR（正反の合）の縄文を施す。

出土した石器は、両面に多孔をもつ多孔石が１点である。

298号土坑（第94図）

全て胎土に繊維を含む。１は口縁部文様にＬとＲを２本１組とした撚糸側面圧痕で主文様を描き、円形刺突および刻み状の短沈線を充塡させ、その下部に刻みをもつ細い隆帯を２条巡らせ胴部文様との区画をし、胴部には０段多条のＬを２本で結節縄文を施す。２は波状口縁となる口縁直下に刻みをもつ隆帯を２条巡らせ、波頂下に同様の隆帯を曲線的に３条施し、ＬとＲを２本１組とした撚糸側面圧痕で主文様を描くとともに、円形刺突を配する。３・４は胴部に０段多条のＬを２本の結節縄文と、同様のＲを２本の結節縄文とによる羽状縄文を施すもの。５・６は胴部にLRの縄文を施すものである。

299号土坑（第94図）

繊維を含む胴部片で、縄文を施す。

300号土坑（第94図）

２点ともに繊維を含む胴部片で、０段多条のＬを２本の結節縄文と、同様のＲを２本の結節縄文とによる羽状縄文を施すもの。

301号土坑（第94図）

１は口縁部に刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を描くもので、地文に縄文が施されている。２は胎土に繊維を含む胴部片で、０段多条のLRとRL（附加条ではない）による羽状縄文を施すものである。

304号土坑（第95・110図　表20）

１は内反する平口縁の口唇部に刻みをもち、口縁部に櫛歯状工具による平行・波状文を巡らせ、その下に円形刺突を配するとともにレンズ状の文様を描く。２は浅鉢となる胴部片で、胴部が大きく屈曲する器形を呈し、半裁竹管による沈線と爪形文で木の葉状の文様を描くもの。３は口縁部に半裁竹管による連続爪形文を数条巡らせ、その間に刻みを施す。４は胴部に、３と同様の文様を施したもの。６は胴部に、３・４と同様な手法で曲線的な文様を描くもので、刻みはもたない。５・７～25は、刻みをもつ浮線隆帯で文様を描くものであり、地文に縄文を施すものが多く、10・15・16・24のように口縁部に曲線的な文様を施す。25は口縁部に獣面突起を有するものである。26は大形の深鉢となる頸部に、半裁竹管による集合沈線を施したもの。27～45は口縁部以下の胴部に縄文を施すもので、２・31・32・39・42・45は胎土に繊維を含むものである。31と39には羽状縄文が施されている。また、30・44には結節縄文がみられる。

出土した石器は、裏面に凹孔をもつ石皿と、両面に多孔をもつ石皿の２点である。

305号土坑（第93図）

３は繊維を含む胴部片で、Ｌの縄文を施す。１・２は胴部に半裁竹管による沈線で文様を描くもの。

306号土坑（第96・110図　表21）

２・４は胎土に繊維を含まないもので、他は繊維を含むものである。１・３は頸部に、半裁竹管による沈線で文様を描く。６は胴部に０段多条の閉端環付縄により、やや幅の狭いループ縄文が施される。５・８・10・12は、LR と RL による羽状縄文が施されるもの。７・15は LR の縄文が施されるが、７は０段多条の縄が用いられている。11は RL の縄文が施され、９・14にはＬが、13にはＲの縄文が施されている。16・17にも縄文が施されている。２・４は地文に縄文をもち、半裁竹管による沈線ないし集合沈線を施すものである。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が１点である。

307号土坑（第96図）

１は胎土に繊維を含み、波状口縁の波底部に小突起を有し、口縁下に粗い RL の縄文を施す。２は胴部に LR の縄文を施したもの。

308号土坑（第96・97・110図　表22）

１は口縁部に半裁竹管による平行沈線を巡らせ刺突を施し、平行沈線間に鋸歯状に沈線を施す。２は口縁部に半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせる。４・７・14は口縁部ないし胴部に、半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線を施すもので、４の沈線間には刻み状の刺突が加えられている。５・６は胴部に地文に縄文をもち、半裁竹管による平行沈線で曲線的な文様を描くもので、４の沈線間には刻み状の刺突をもつ。８～10は胴部に刻みをもつ浮線隆帯で、曲線的ないし平行に文様を施すもので、９・10は縄文を地文とし、10の沈線間には刺突を施している。11～13・15～20は口縁部ないし胴部に半裁竹管による集合沈線を横位ないし縦位に施すもので、11・13・16・18の地文には縄文が施されている。21・23は口縁部に棒状の縦長な隆帯を施すもので、地文に斜位の沈線をもつ。22は斜位の沈線を施した上に、瘤状の隆帯を貼付するもの。24・25は口縁部ないし頸部に半裁竹管による結節浮線文による渦巻状ないしレンズ状の文様を描くもので、地文に斜位の沈線をもつ。26は胴部下半部に縦位に結節浮線文を施すもので、地文には沈線が施されている。27は頸部に半裁竹管による縦位の沈線が施されるもので、地文に縄文が施されるもの。28・29は胴部に半裁竹管による矢羽根状の沈線を横位に施したもの。30は胴部に角押し文により文様を描くもの。42は口縁部に沈線を１条巡らせ、沈線下に縄文を施す。32～47は胴部に縄文を施すもので、33・34・37・40・44・45は胎土に繊維を含み、LR ないし RL の縄文を施し、40は羽状縄文を施すもの。32は結束による羽状縄文を施すもの。48は底部で、地文に縄文をもち、半裁竹管により平行沈線を巡らせるものである。

出土した石器は、周縁が作り出される石皿が１点である。

313号土坑（第97図）

１・２ともに胎土に繊維を含む胴部片で、１はＬとＲによる羽状縄文を施し、２は０段多条のＬを２本による結節縄文を施している。

314号土坑（第97図）

１は胴部に沈線で懸垂文をもち、懸垂文間に縦位回転によるＬの縄文を施す。２は胴部に０段多条の LR の縄文を施す。３は胎土に繊維を含む胴部片で、縄文を施している。

318号土坑（第97図）

１は小突起をもつ口縁部で、口縁下に縄文を施し、沈線を巡らせる。２は胎土に繊維を含む胴部片で、LRの縄文を施すもの。

328号土坑（第98・110図　表23）

４～８・10は胎土に繊維を含む胴部片で、LRないしRLの縄文を施し、７・10は羽状縄文を施す。１は口縁部に刻みをもつ浮線隆帯で文様を描くもの。２は胴部に半裁竹管による連続爪形刺突で文様を描くもので、刻み状の刺突を有する。３は口縁部直下に隆帯を巡らせ、隆帯下にLRの縄文を施す。９・11は胴部にRLの縄文を施すものである。

出土した石器は、片面に凹孔をもつ凹石が１点である。

330号土坑（第98図）

全て胎土に繊維を含むもので、１は頸部に半裁竹管で平行沈線を巡らせるもの。２は頸部に半裁竹管で若干支点をずらせるようにコンパス文風に沈線を巡らせ、胴部に縄文を施すもの。３～12は胴部にLRないしRLの縄文を施すもので、４～６・９・10は羽状縄文を施す。９は０段多条の縄を用いている。

332号土坑（第98図）

２以外は胎土に繊維を含むもので、１は頸部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、胴部に縄文を施す。３は口縁部以下に０段多条のLRの縄文を施すもの。４～９は胴部にLRないしRL、LないしRの縄文を施すもの。２は口縁部がやや外反し有段となり、口縁部以下にRLの縄文を施すもの。

333号土坑（第98図）

１・３は胎土に繊維を含むもので、１は頸部に半裁竹管による平行沈線で文様を描くもので、３は胴部に０段多条のLRとRLにより羽状縄文を施すもの。２は胴部に結節縄文を施すものである。

334号土坑（第98図）

胎土に繊維を含む胴部片で、薄く縄文が施されている。

340号土坑（第89図２、第99・111図　表24）

第89図２は、胴部上半がくびれ、口縁が内反する深鉢で、口縁に獣面突起をもつ。文様は半裁竹管による平行沈線で、口縁部には曲線を主体に、胴部には数段の平行が巡らされ、地文にRLの縄文が施されている。第99図の１・２は、口縁部に半裁竹管による沈線で、平行および波状の文様を描くもの。３は口縁部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、円形刺突を配する。４・５・19は胴部に半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線で、曲線的な文様を描き、沈線間に刻みを有する。６は胴部に半裁竹管による平行沈線で文様を描くもので、地文には縄文をもつ。７・８は浅鉢の口縁部から肩部にかけての破片で、７は図が逆である。口縁部下と胴部の屈曲する位置に、刻みをもつ浮線隆帯を２条巡らせて文様帯の区画を行い、区画内に半裁竹管による刺突をもつ平行沈線で曲線的な文様を描く。８の口縁部には孔を有する。９は小突起を有する口唇部に刻みをもち、口縁部には刻みをもつ浮線隆帯で、並行・曲線的な文様を描くもので、地

文に縄文を施す。10・11は口縁に獣面突起をもち、口縁部には刻みをもつ浮線隆帯により曲線的な文様を描くもので、地文に縄文をもつ。13も同様に、口縁部に刻みをもつ浮線隆帯により曲線的な文様を描くもの。12・14・15は胴部に刻みをもつ浮線隆帯を数条巡らせるもので、地文には縄文をもつ。16は口縁下に半裁竹管により平行沈線を巡らせ、その下に格子状の文様を平行沈線で描き、格子内に円形刺突を配し、地文に縄文を施す。17・18は胴部に半裁竹管による平行沈線で集合沈線状に描くもので、地文に縄文を施す。20～27は口縁以下および胴部にLRないしRLの縄文を施すもので、26には結節縄文が施されている。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が１点と、両面に多孔をもつ多孔石が１点、両面ともに多孔と石皿となるものと、両面に多孔をもつ石皿との２点がある。

343号土坑（第99図）

胴部に縄文が施されるもの。

346号土坑（第100・112図　表25）

１・４・16～18・21～23は胎土に繊維を含むもので、16は頸部に櫛歯状工具による列点刺突で文様を描くもの。１・４は頸部に半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線を施すもの。22は頸部下に半裁竹管による平行沈線を巡らせ、胴部に縄文を施す。17・18・21・24は胴部に縄文を施すもので、19・23は羽状縄文となるもの。２・４は胴部に半裁竹管による連続爪形刺突をもつ平行沈線で曲線的な文様を施すもので、３の沈線間には刻みを有する。５は胴部に刻みをもつ浮線隆帯で、曲線的な文様を描くもの。６は口縁部に１条の太い沈線を巡らせ、沈線下にLRの縄文を施す。７は波状口縁となる口縁部に１条の沈線を巡らせ、胴部に逆U字状の文様を描き、縄文を施すもの。８は胴部に沈線で懸垂文およびU字状の文様を描き、区画内に縦位回転の縄文を施す。９は胴部に太い沈線でU字状の文様を描き、区画内に縦位回転の縄文を施す。10は胴部に隆帯による懸垂文をもち、区画内に縦位回転の縄文を施す。11は胴部に微隆帯により懸垂文および曲線的な文様を描き、区画内に縦位回転の縄文を施す。12・13は胴部に沈線で直線ないし曲線的な文様を描き、区画内に縄文を施す。14は口縁下に隆帯を巡らせ刺突を施し、口縁部内を文様区画した内部に縄文を施す。15・19・20は胴部にLRないしRLの縄文を施すものである。

出土した石器には、剥片素材の側縁に連続的な平坦剥離を加え調整加工を施したスクレイパーが１点と、両面に多孔をもつ多孔石が１点である。

351号土坑（第100・112図　表26）

３・４・６・９～12は胎土に繊維を含むもので、口縁部以下ないしは胴部に縄文を施すものである。３は１本付加の附加条縄を施し、それ以外はLRないしRLの縄文を施したもの。１は波状口縁となる口唇部に結節浮線文を施し、口縁部に三角の孔をもつ。２は口縁部に沈線により文様を描くもの。５・７・８は胴部に縄文を施すものであり、７は羽状縄文となる。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ凹石が１点である。

353号土坑（第102図）

胴部にRLの縄文を施すもの。

355号土坑（第102図）

内反する平口縁の口唇部に刻みをもち、口縁部に半裁竹管により平行沈線を巡らせて区画し、区画内に半裁竹管による平行沈線と細い短沈線とで格子状の文様を施すものである。

357号土坑（第101図）

１・２・15は胴部に半裁竹管により縦位および弧状に集合沈線と、その間に縦位の矢羽根状の沈線を施す。３・14は胴部下半に半裁竹管により弧状および「の」字状の曲線的な文様を描き、小瘤状の貼付文を配する。４～６は口縁部に棒状の隆帯を縦位に貼付させ、４・５は口唇部から裏面にかけてさらに隆帯貼付をもつものであり、地文には半裁竹管による斜位の沈線が施されている。７は胴部に半裁竹管による斜位の沈線を施し、小瘤状の貼付文を配するもの。８は胴部に縦位の結節浮線文および小瘤状の貼付文をもち、地文には半裁竹管による沈線を施す。９・10は同一個体で、口唇部に刻みをもち、口縁部に結節浮線文風の刺突をもつ隆帯を数条巡らせるもの。11は頸部に結節浮線文風に細い隆帯を渦巻き状に施した後に、隆帯上に刻みを施すもので、地文には半裁竹管による斜位の沈線が施される。12・13は頸部に半裁竹管により、渦巻ないしは同心円状に沈線で文様を描くもの。16は胴部に半裁竹管により平行および縦位の矢羽根状の文様を描き、その文様の隙間に三角形の印刻文を施すもの。１は16と同様の文様・印刻文を施すが、文様全体に刻み状に沈線を施すものである。18は胴部に半裁竹管による縦位の矢羽根状沈線と、三角および棒状に長い印刻文を施すもの。19は有段となる口縁部に三角印刻文を施し、その下に半裁竹管による沈線で文様を描くもの。20は胴部に半裁竹管を束にしたような工具で、細かく密に刺突を施し、太い沈線的な印刻により文様を描くもの。21は胴部に細い隆帯で鋸歯状に貼付するとともに、結節浮線文による文様を描くもので、地文には縄文をもつ。23～25は胴部に縄文を施すもので、26はLRを、24・25はLRとRLの結束による羽状縄文を施す。27・28は無文となる底部であり、26はミニチュア土器である。22は縄文の施された、胴部片利用の土製円盤。29は牛伏砂岩による石製円盤である。

365号土坑（第102図）

胴部に沈線を施すもの。

406号土坑（第102図）

胎土に繊維を含む胴部片で、縄文を施している。

407号土坑（第102図）

１は口縁部に半裁竹管により斜位の平行沈線を施すもの。２は胴部にRの縄文を施すものである。

408号土坑（第102・112図　表27）

１・２ともに胴部に半裁竹管による沈線を施すもの。

出土した石器は、片面に凹孔をもつ凹石が１点である。

537号土坑（第102図）

胴部に半裁竹管により縦位および弧状の文様を描くもの。

584号土坑（第89図３、第90図５）

第89図３は、わずかに波状口縁となる深鉢で、頸部が大きくくびれ、口縁が外反する器形を呈する。波頂部には小突起を有し、口縁には半裁竹管による平行沈線が巡り、以下にＬとＲによる羽状縄文が施されている。胎土には、繊維を含む。第90図５は、平口縁の深鉢形を呈するもので、口縁以下にＬとＲによる羽状縄文が施されている。胎土には、繊維を含む。

676号土坑（第104・112図　表28）

１・２は胴部に半裁竹管による縦位の集合沈線を施すもので、１にはやや縦長の貼付文を配する。３は胎土に繊維を含む胴部片で、LR とＲによる羽状縄文を施すもの。

出土した石器は、剝片素材の側縁に抉入状の調整加工を施したスクレイパーが１点である。

690号土坑（第102図）

胎土に繊維を含む頸部片で、半裁竹管による平行沈線をもつ。

712号土坑（第102図）

１～３は胎土に繊維を含むもので、１は口縁以下に縄文を施すものであり、２は胴部に０段多条の LR と RL の羽状縄文を、３は胴部に RL の縄文を施すものである。４は胴部に半裁竹管による平行沈線を施すもの。５～７は胴部に条痕を施すもので、弥生時代中期の土器である。

713号土坑（第102図）

１・４～10・12・14は胎土に繊維を含むもので、１は口縁以下にＬの縄文を施す。４は頸部に櫛歯状工具による沈線と列点刺突を施す。５は頸部に半裁竹管によるコンパス文的な沈線を施すもの。６～10・12・14は胴部に LR ないし RL の縄文を施すもの。２は胴部に半裁竹管により平行沈線および三角印刻文をもつものであり、３は胴部に沈線で文様を描いた後に刻み状の沈線を施したもの。11・13は胴部に RL の縄文を施したものである。

737号土坑（第103図）

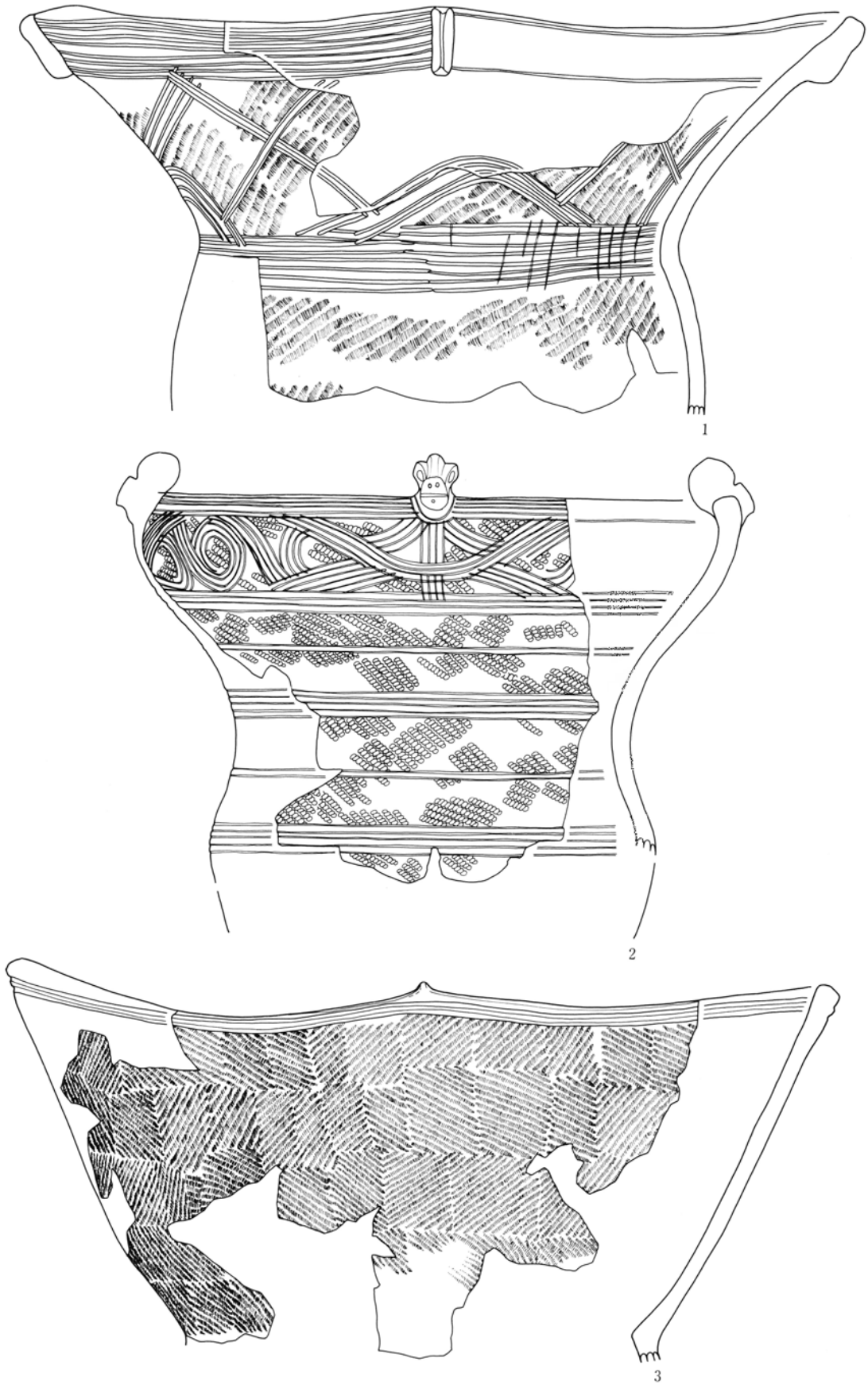
１・２は口縁部に１条の太い沈線を巡らせ、以下に縄文を施すものである。３～15は胴部に沈線による懸垂文およびＵ字状の文様を描き、その区画内に縦位回転の縄文を施すものである。

739号土坑（第103図）

胴部に円形刺突を縦位にもつもの。

740号土坑（第103図）

１は口唇部に刻みをもち、口縁部に刻みをもつ浮線隆帯を施すもの。２は胎土に繊維を含む胴部片で、LR の縄文を施すもの。３は胴部に微隆帯の懸垂文をもち、区画内に縄文を施すもの。４は胴部に RL の縄文を施すものである。

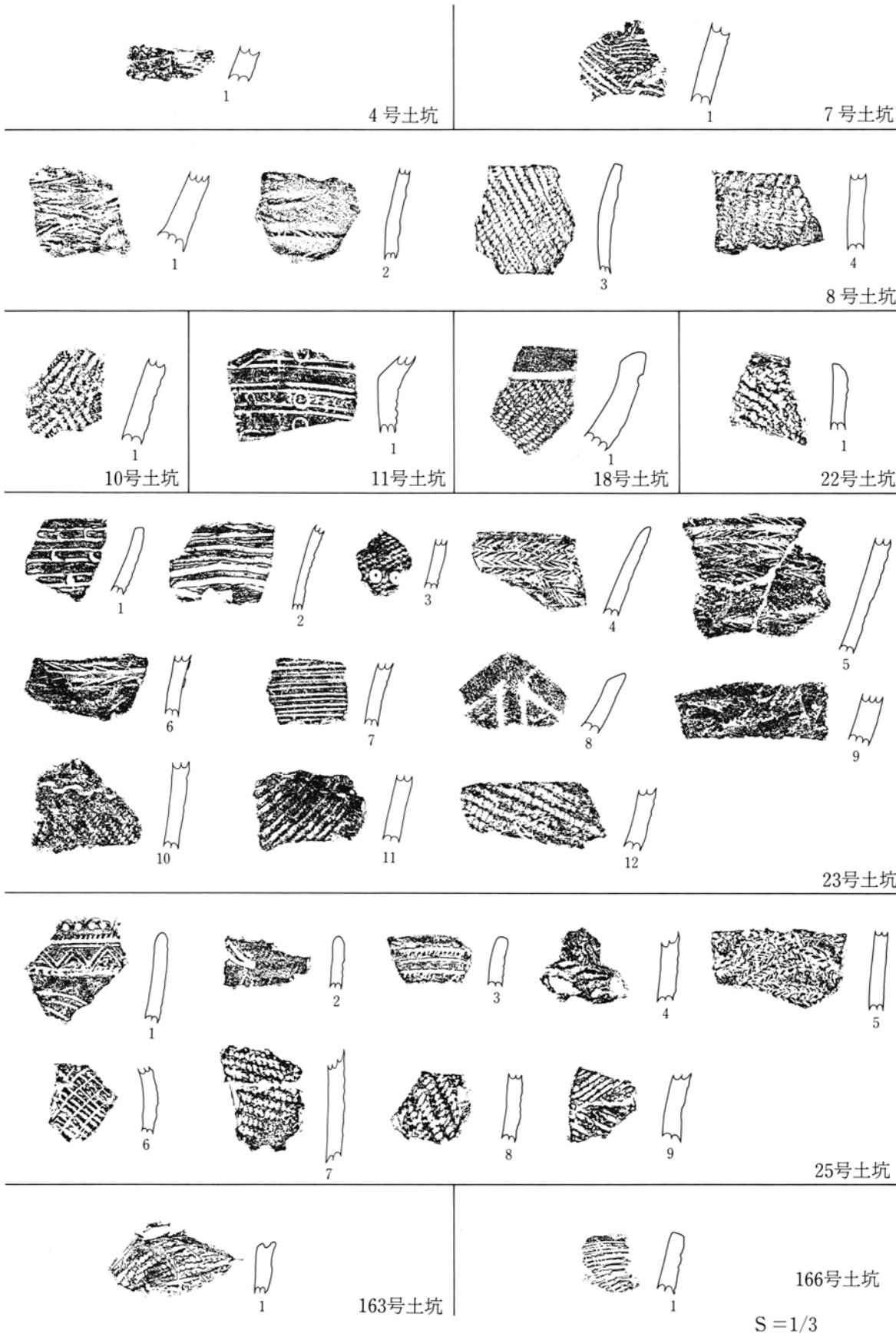


第89図　土坑出土遺物（１）　S＝1/3

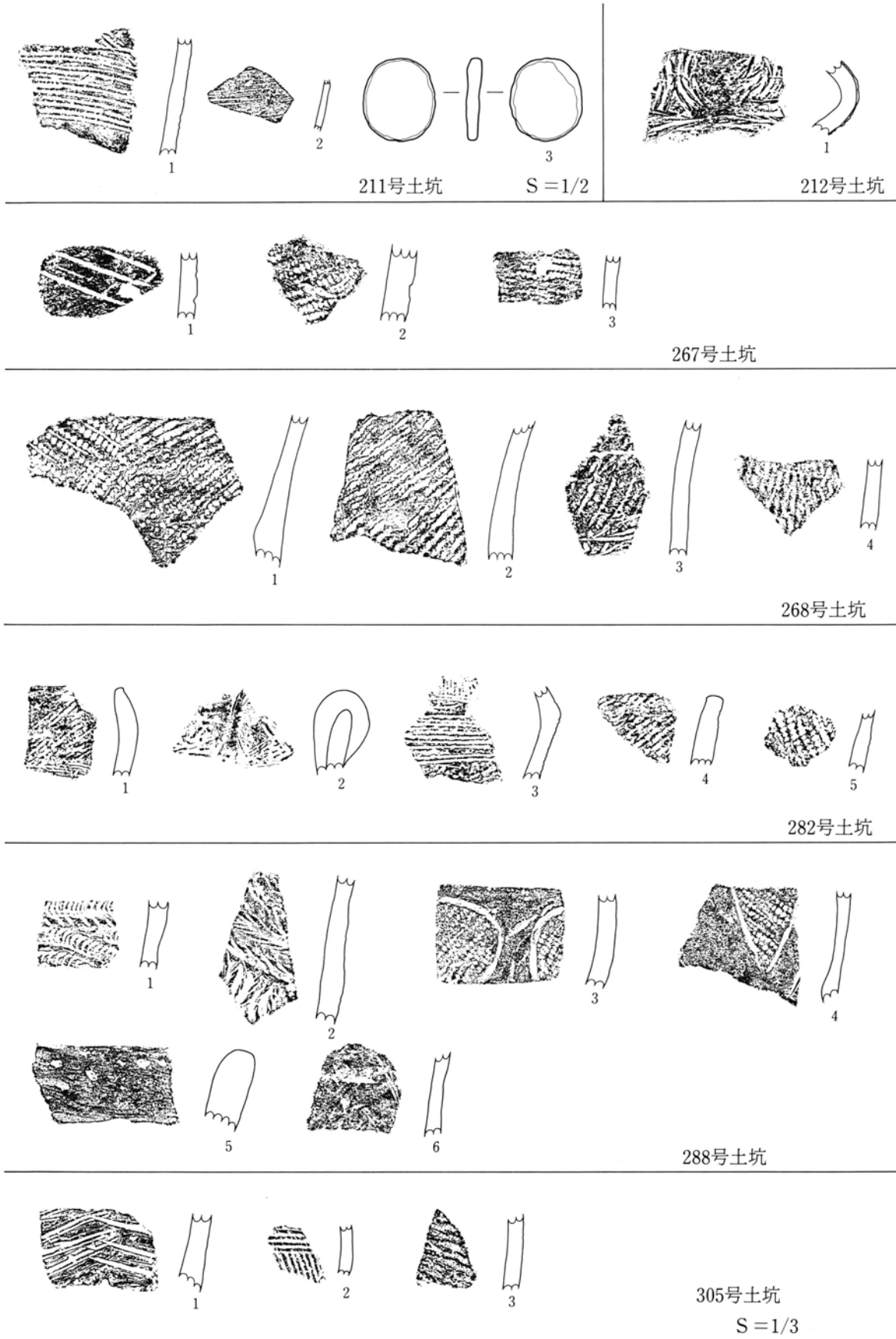
第90図　土坑出土遺物（２）

S＝1/3

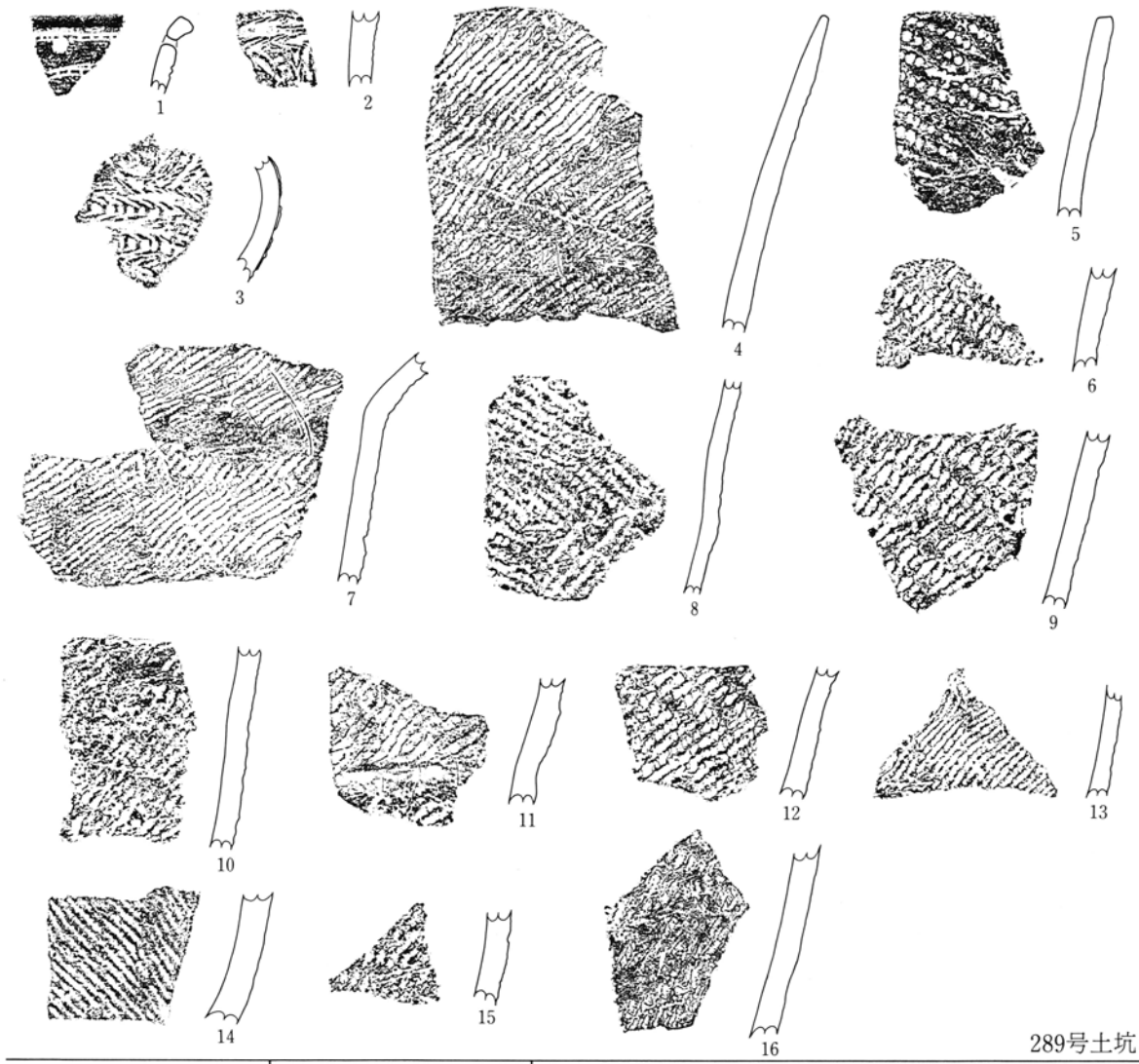
第91図　土坑出土遺物（３）

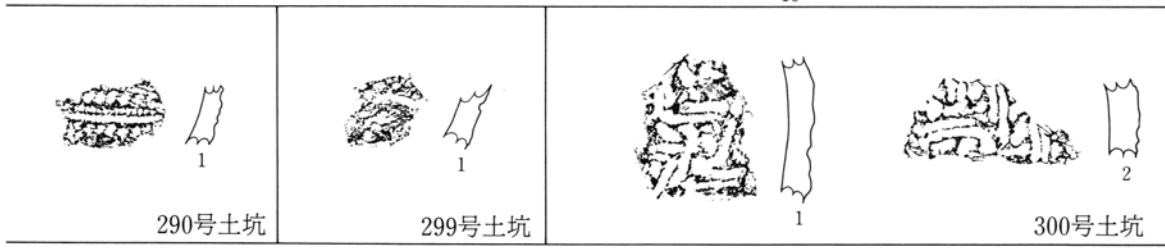


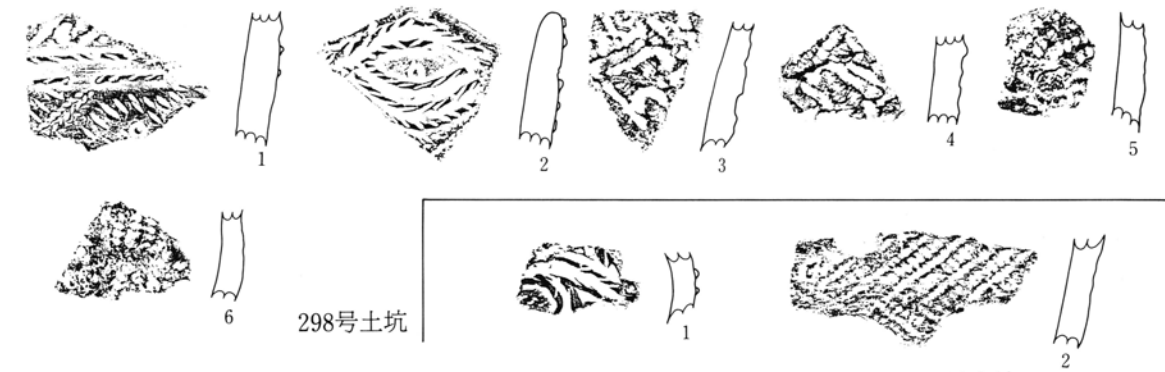
第92図　土坑出土遺物（４）



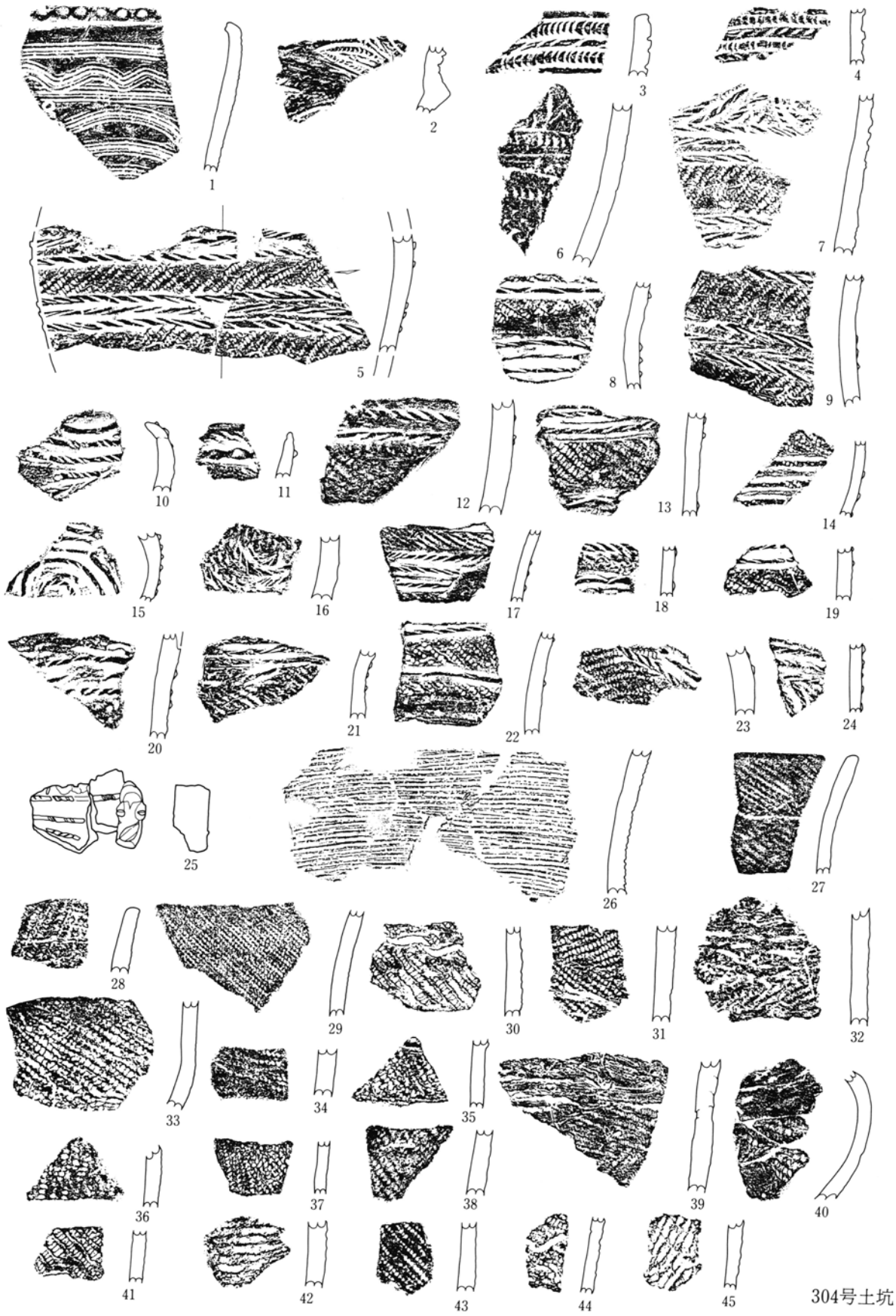
第93図　土坑出土遺物（５）



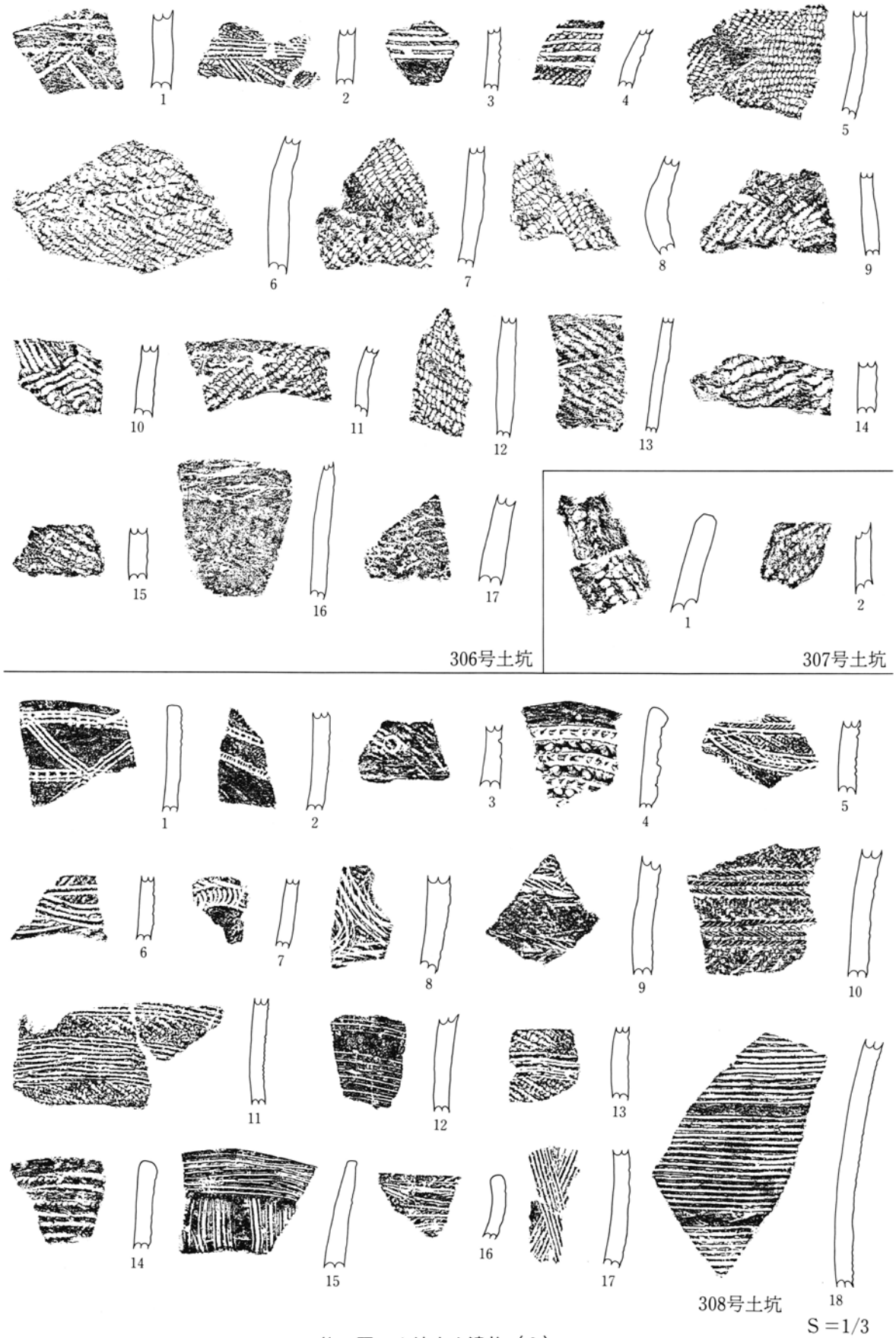




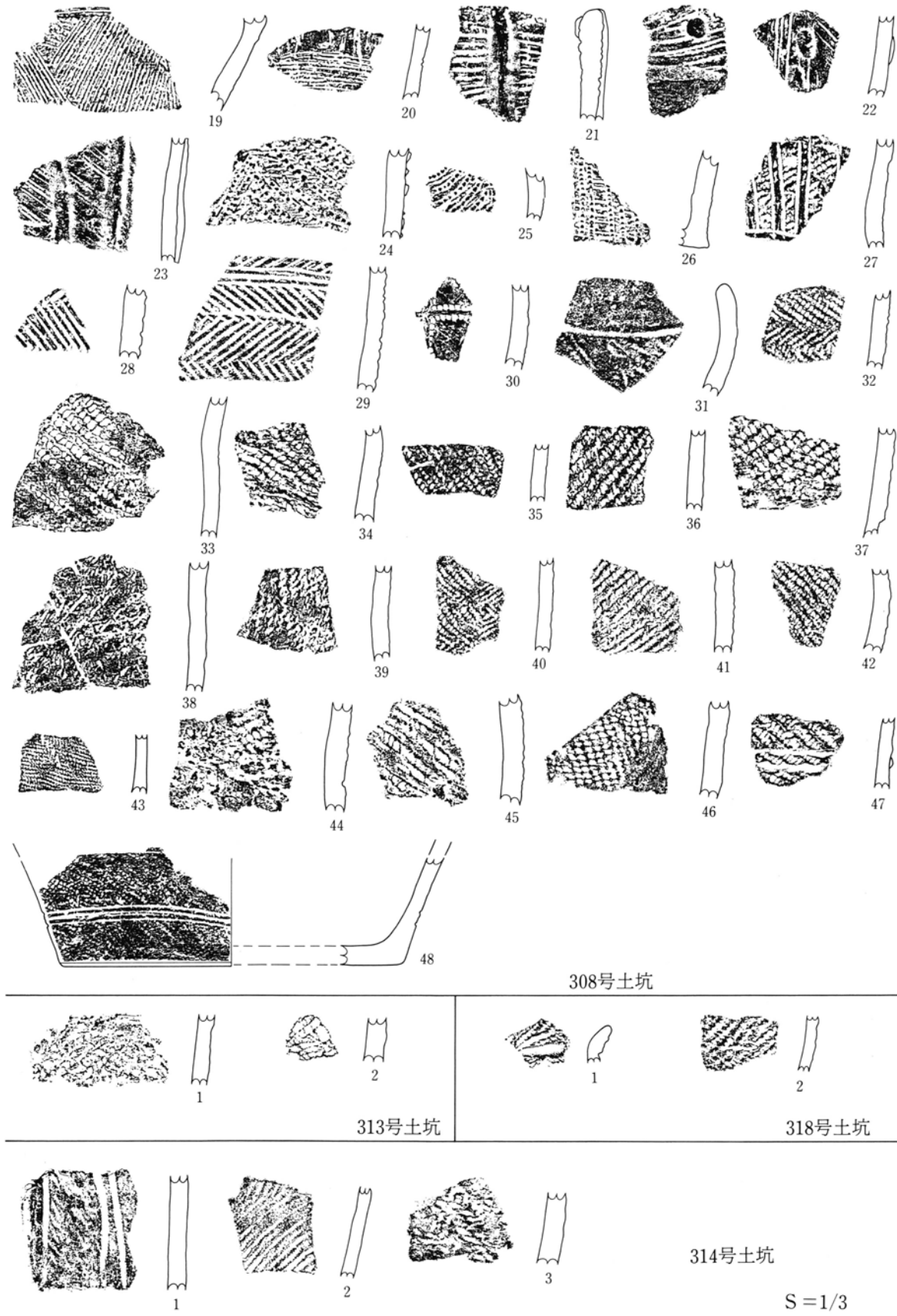
第94図　土坑出土遺物（６）　S＝1/3



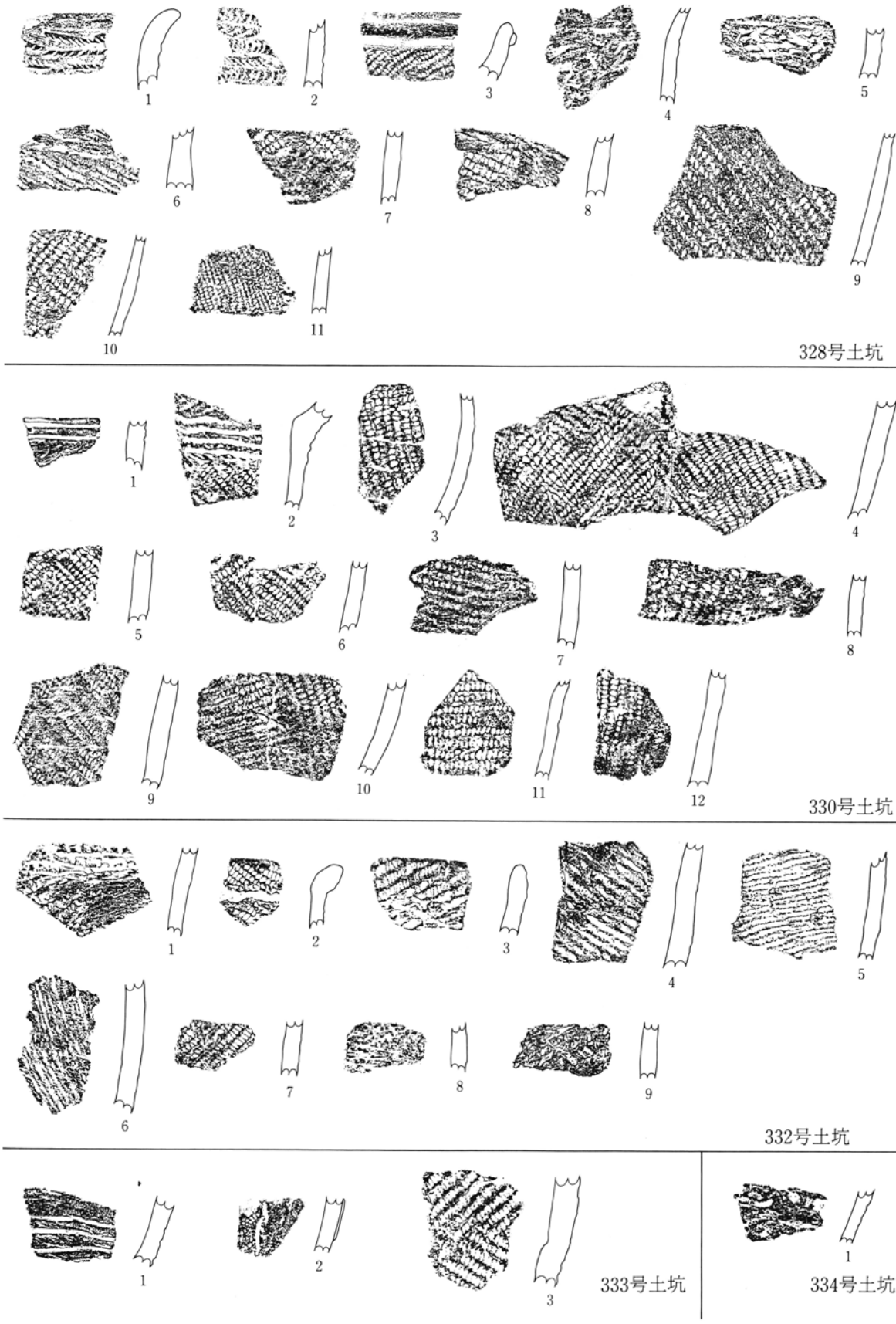
第95図　土坑出土遺物（７）　S＝1/3



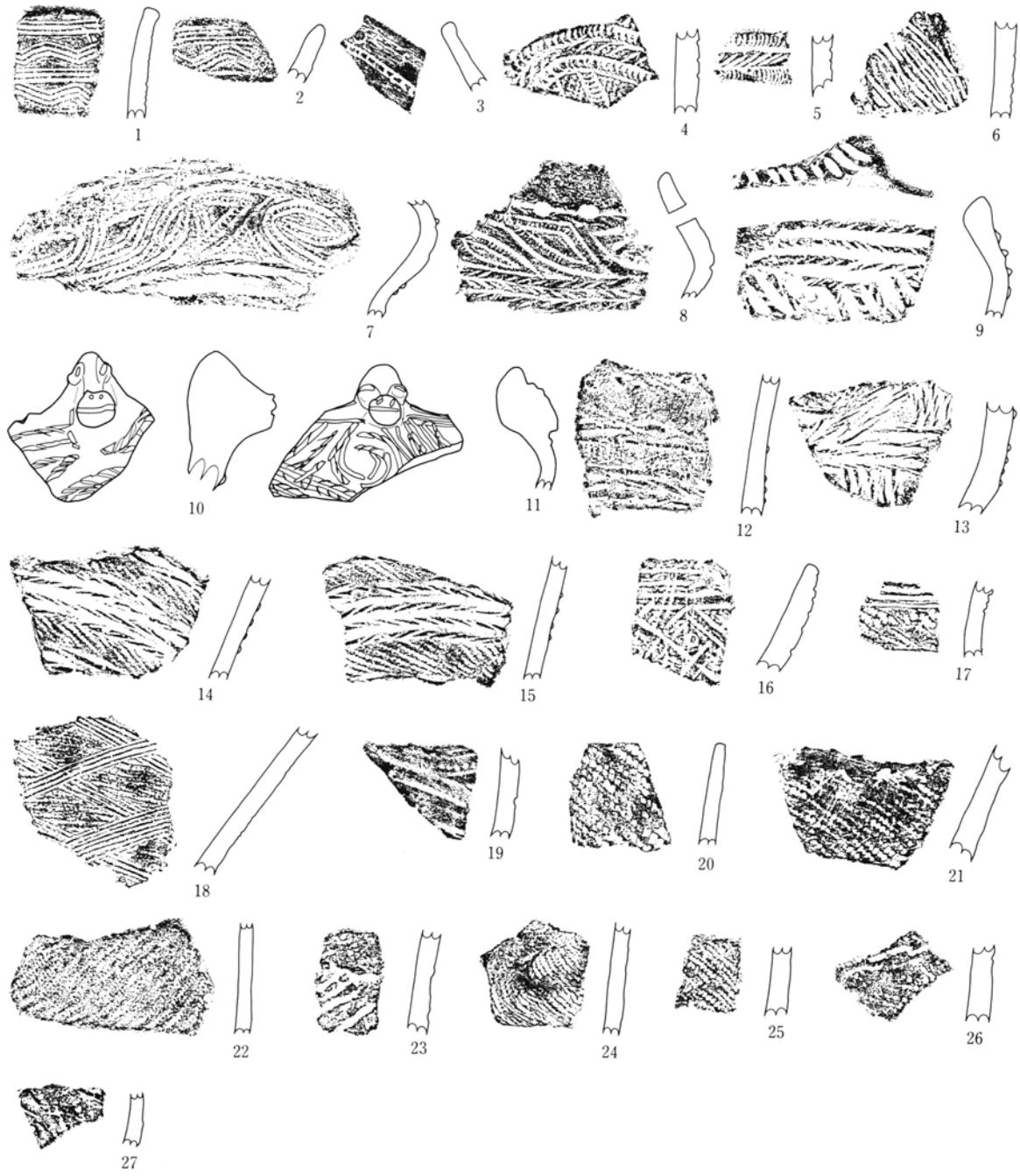
第96図　土坑出土遺物（８）



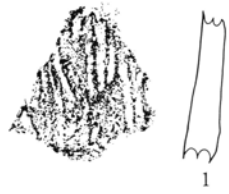
第97図　土坑出土遺物（９）



第98図　土坑出土遺物（10）　　S＝1/3



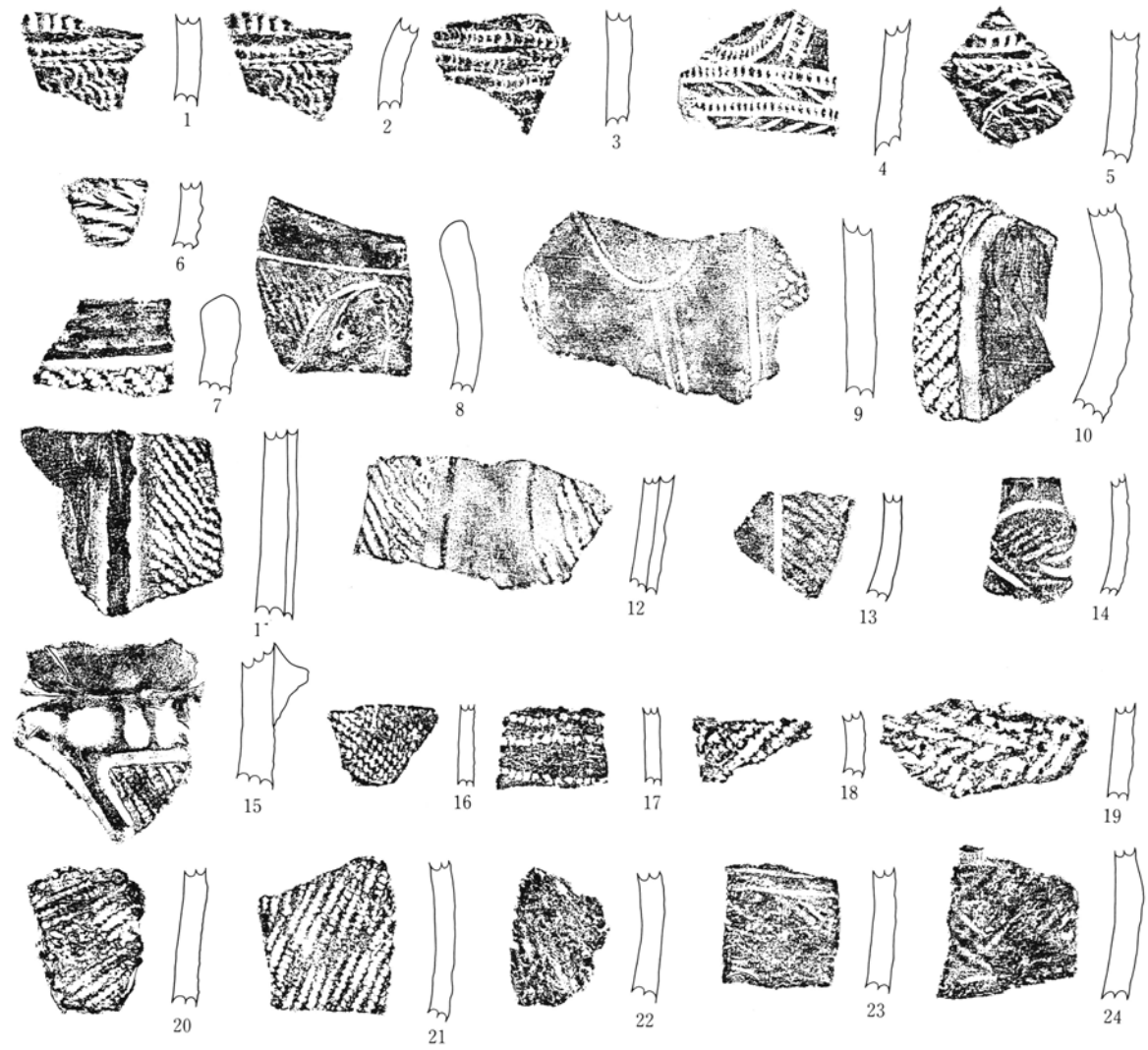
340号土坑



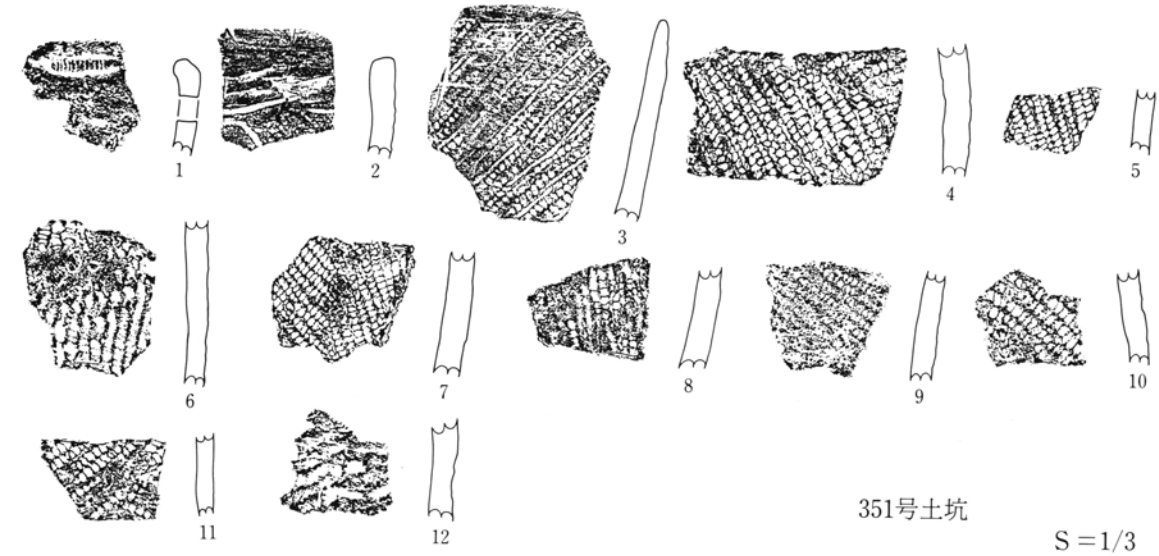
343号土坑

S＝1/3

第99図　土坑出土遺物（11）



346号土坑

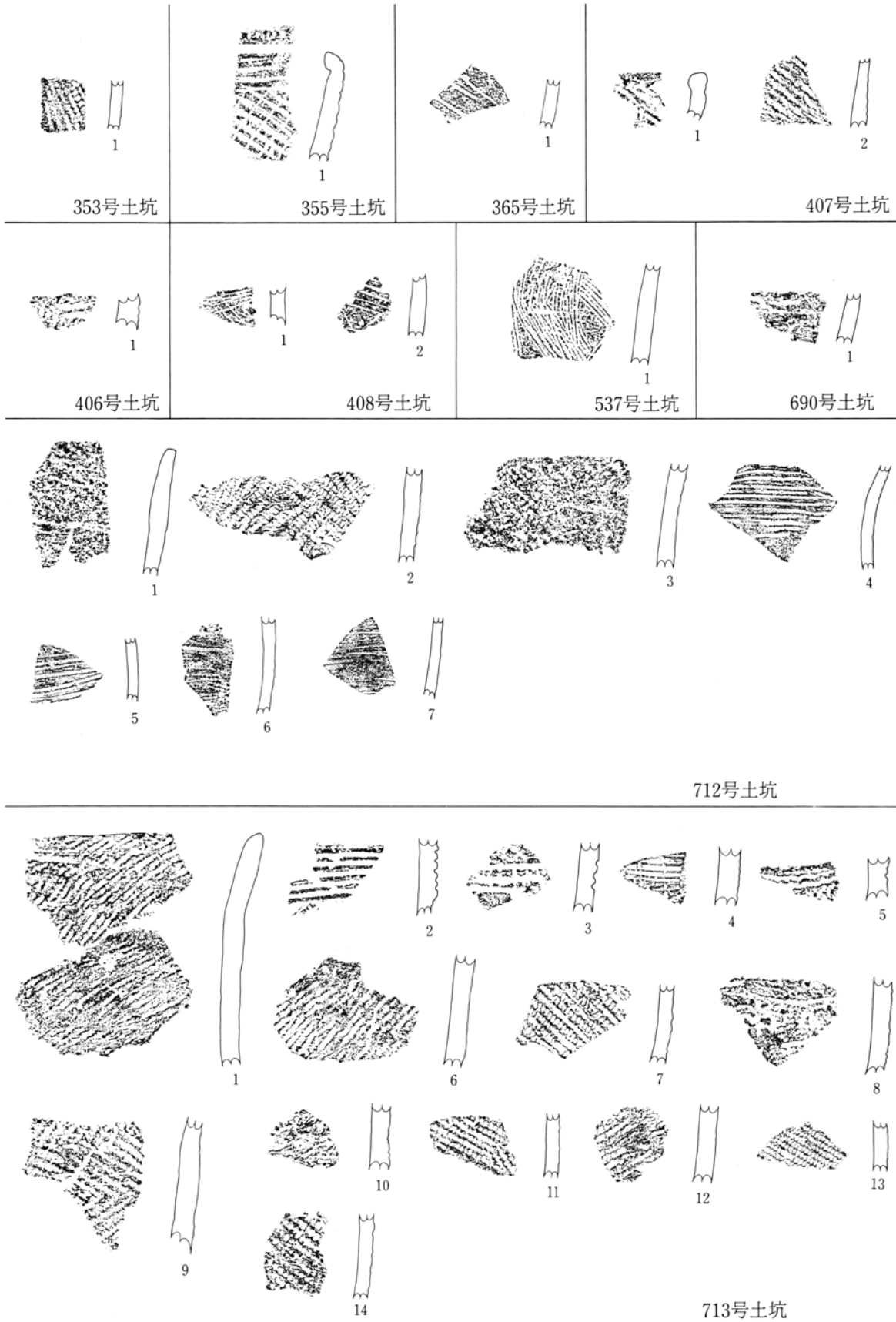


351号土坑

S＝1/3

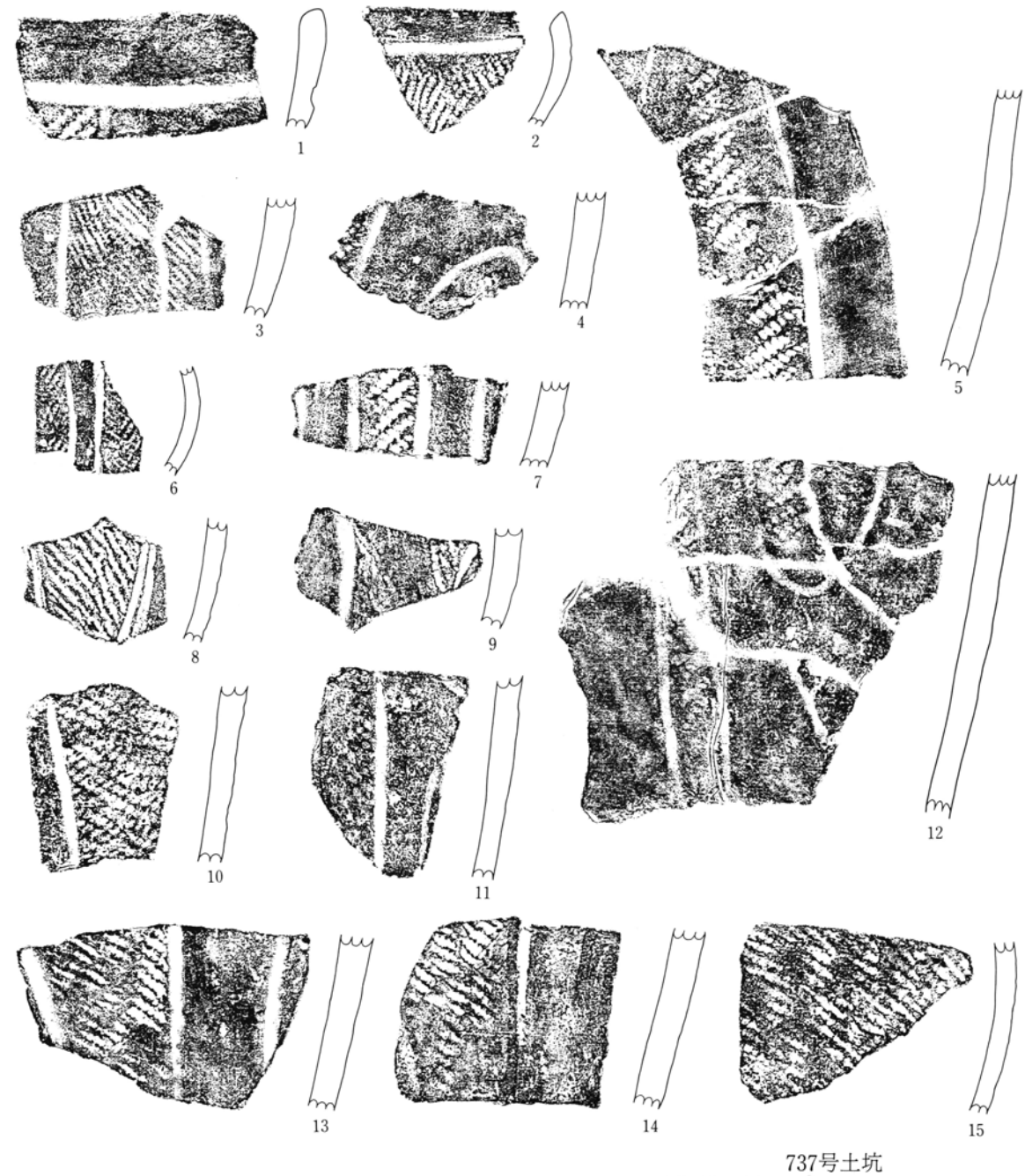
第100図　土坑出土遺物（12）

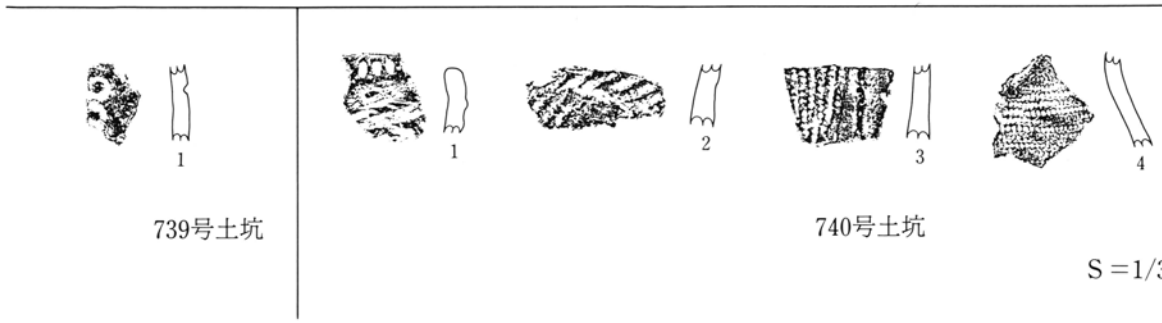
第101図　土坑出土遺物（13）



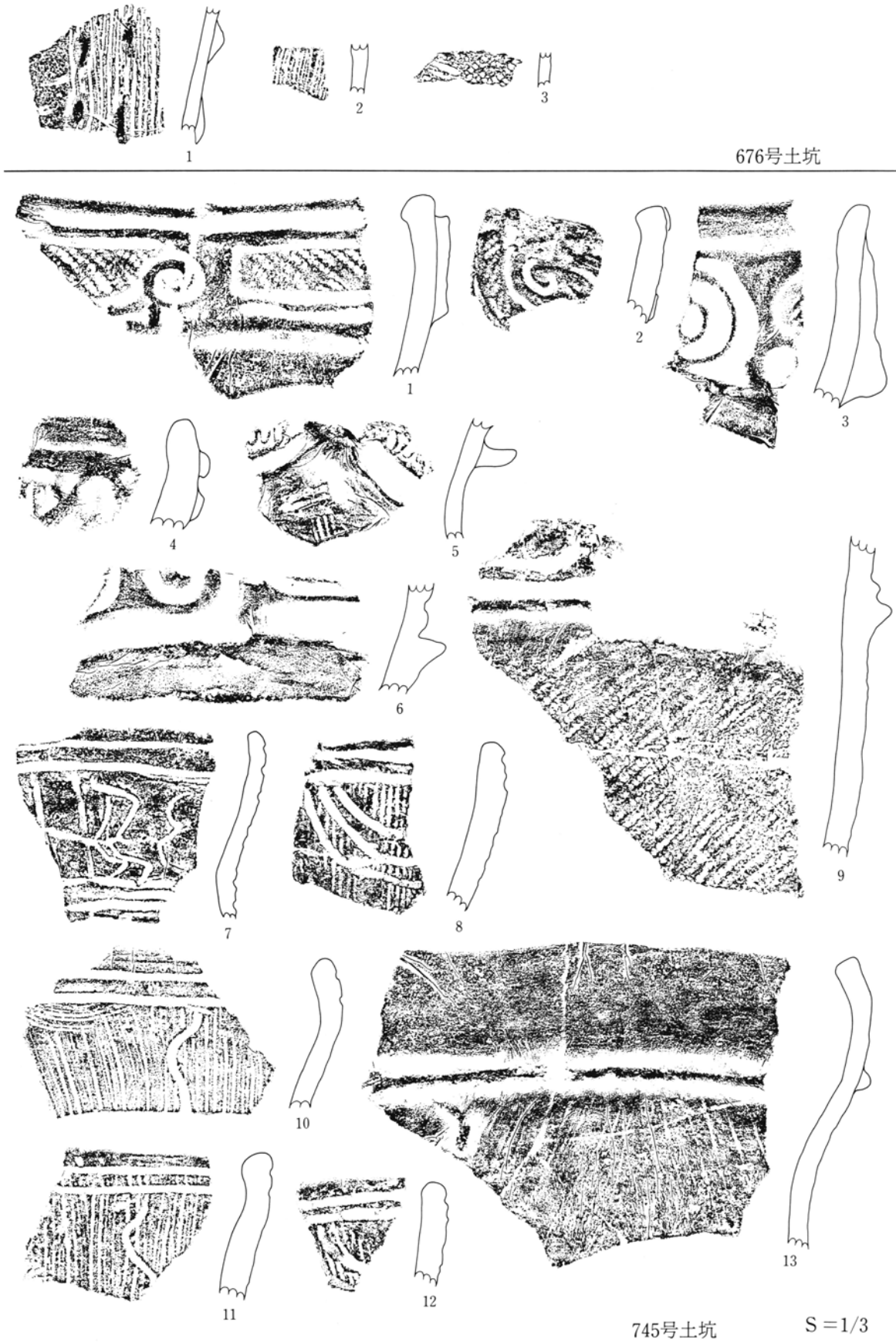
第102図　土坑出土遺物（14）

S＝1/3

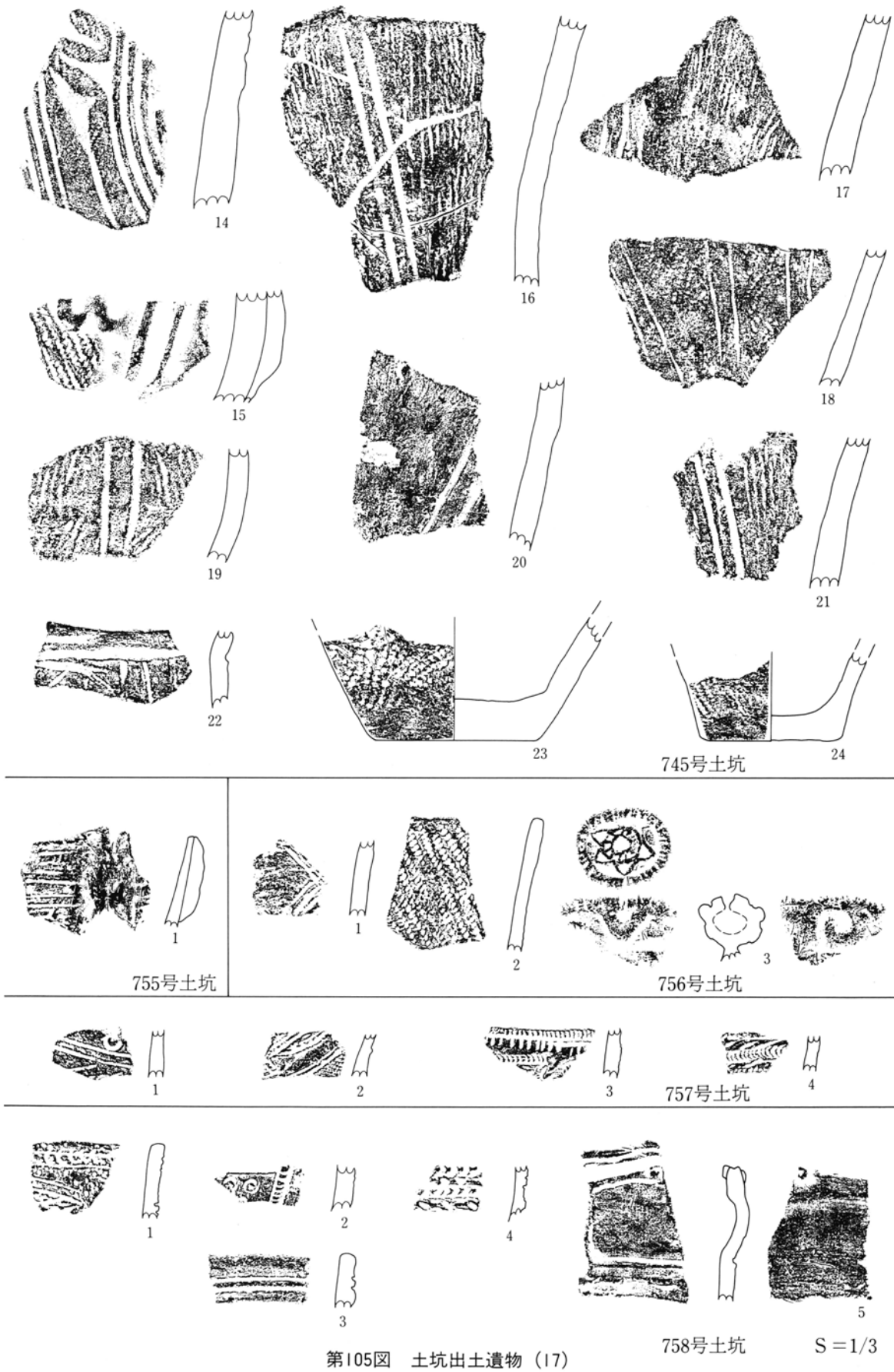




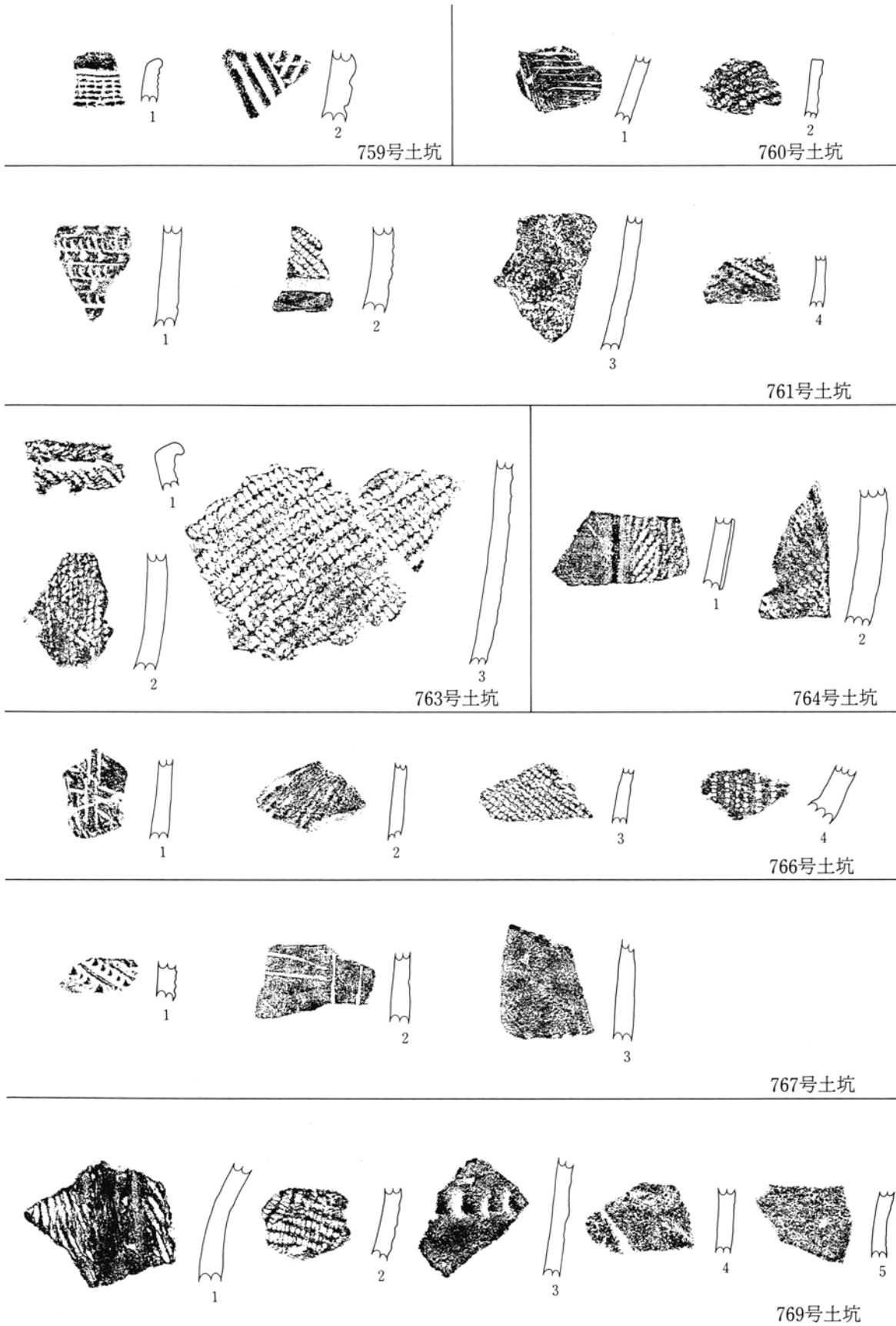
第103図　土坑出土遺物（15）



第104図　土坑出土遺物（16）

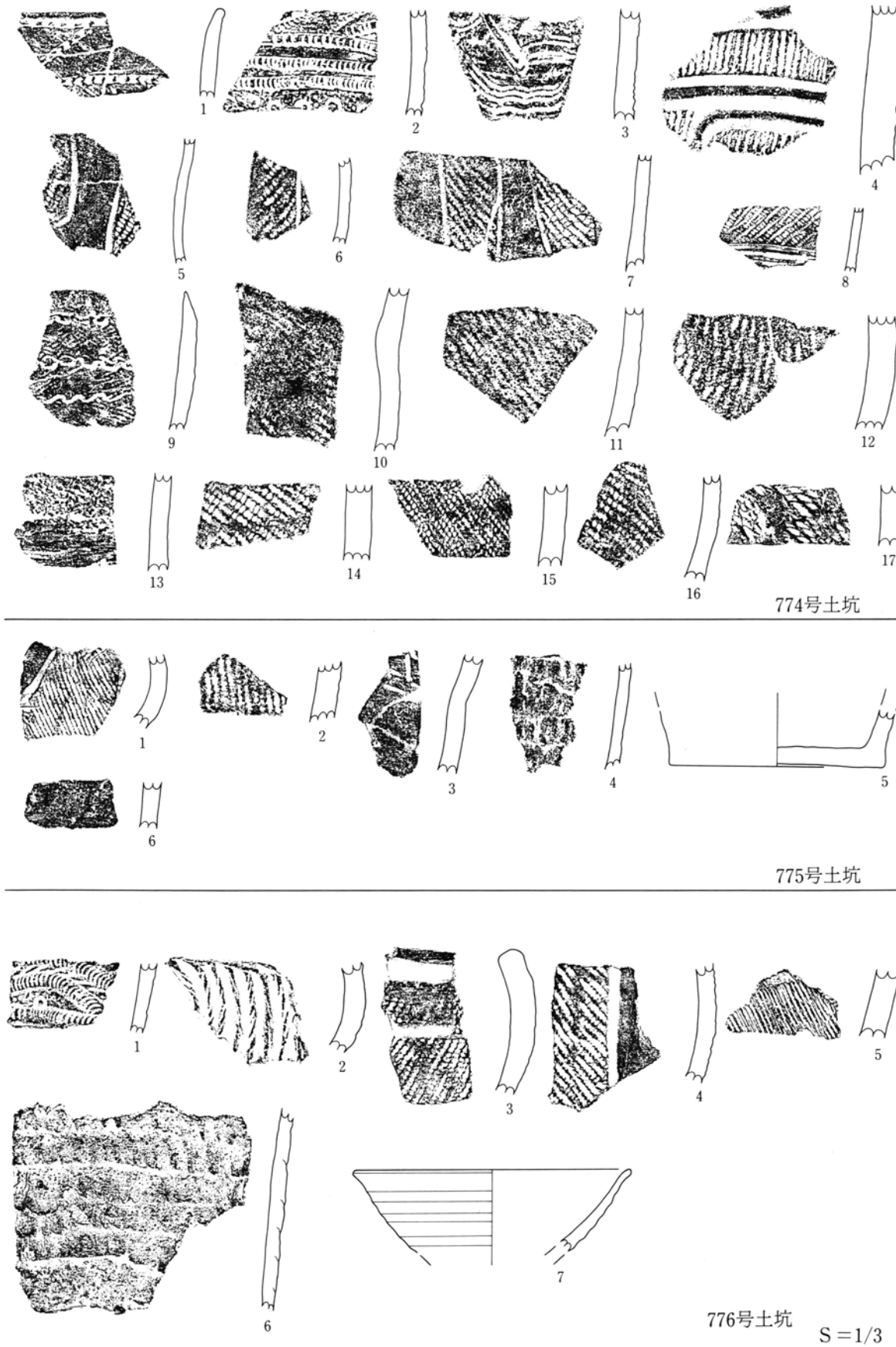


第105図　土坑出土遺物（17）

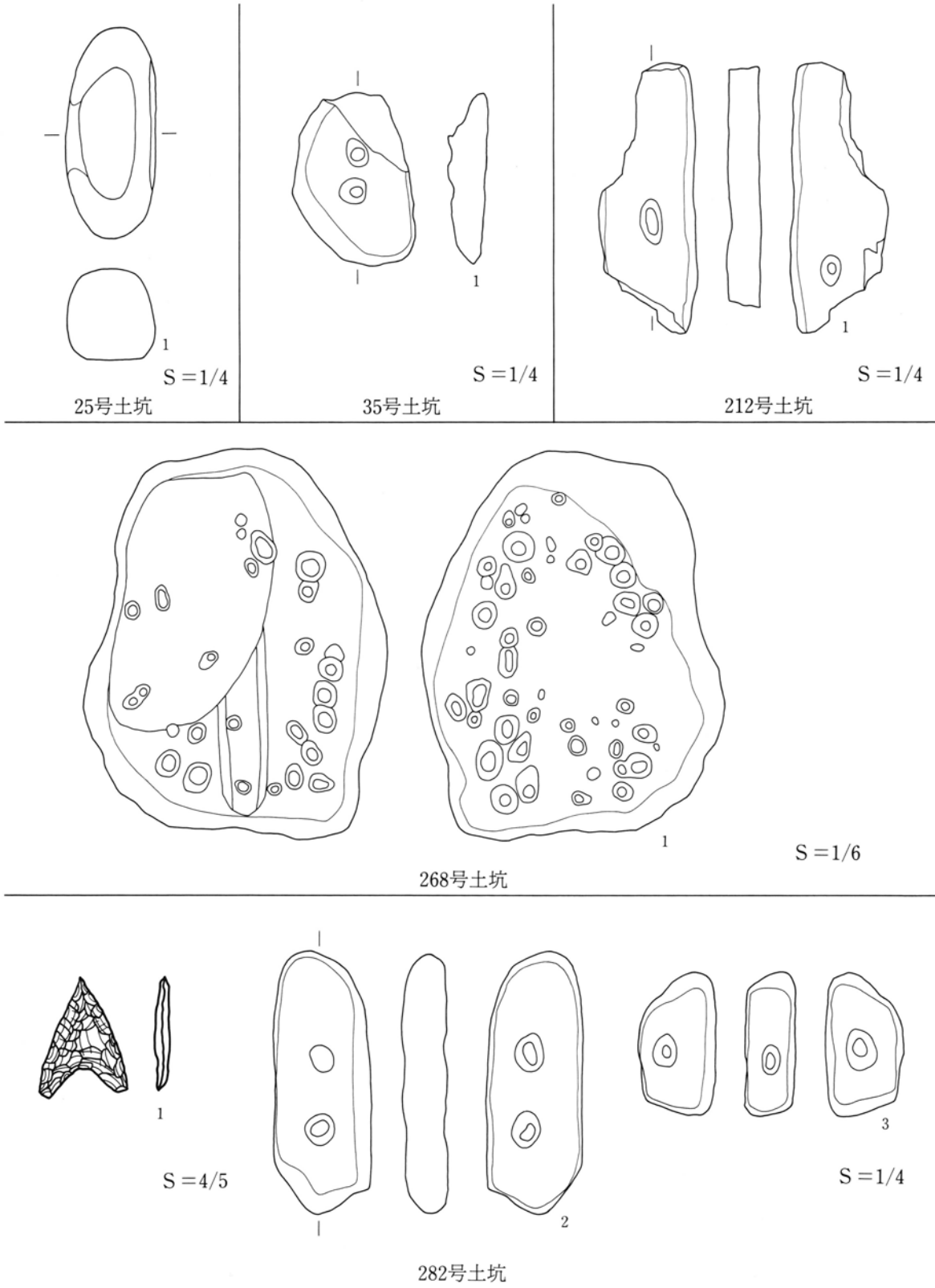


S＝1/3

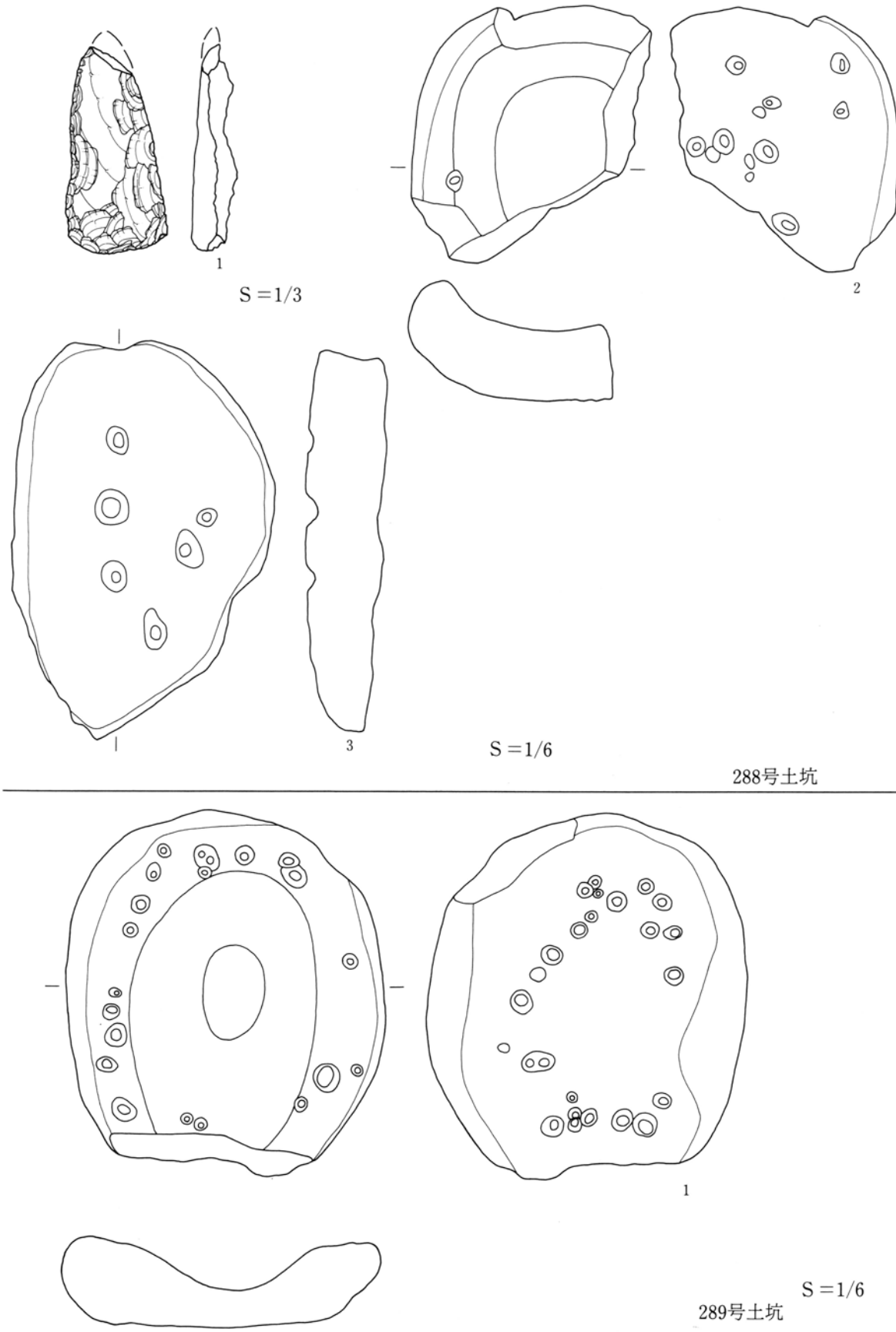
第106図　土坑出土遺物（18）



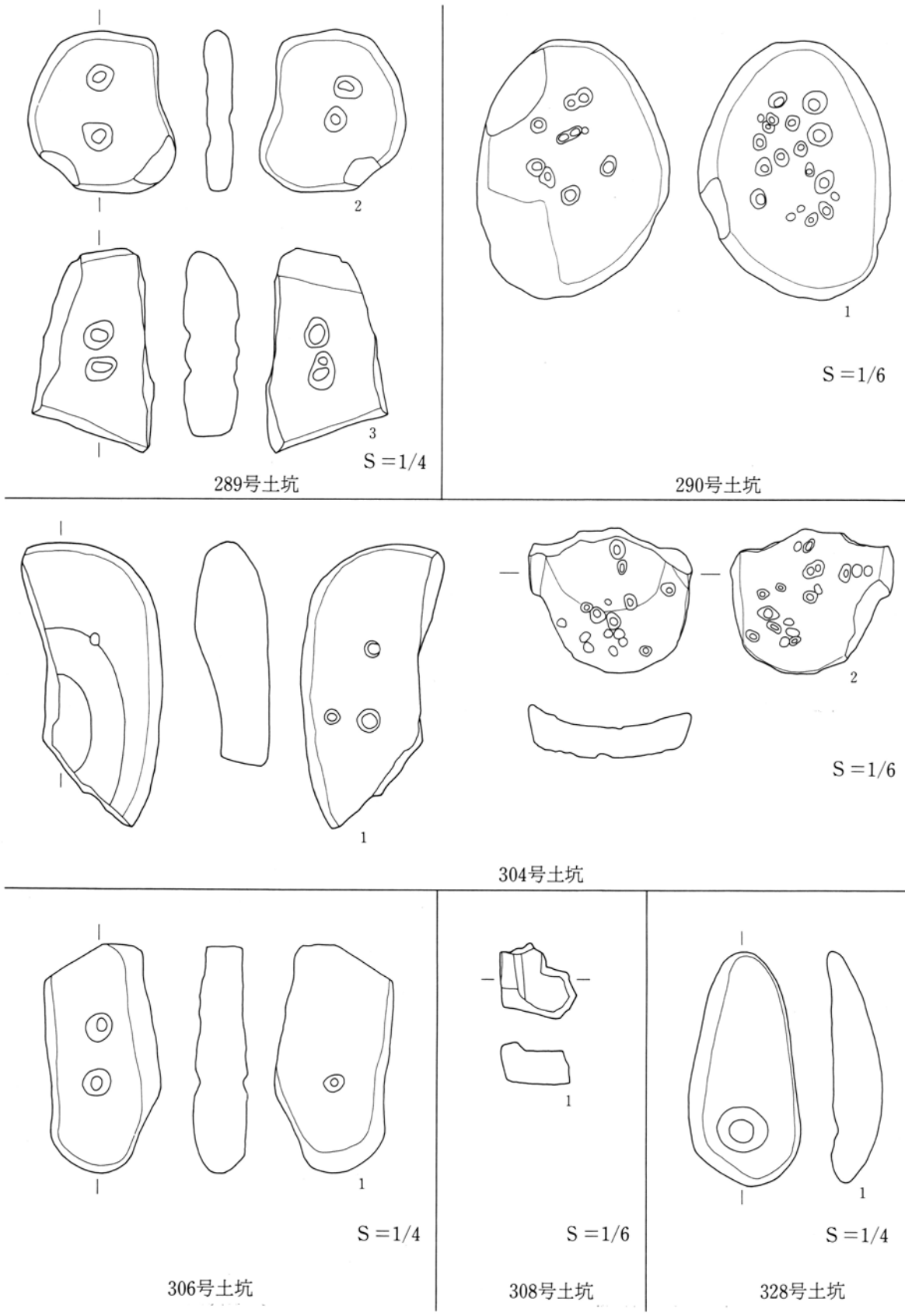
第107図　土坑出土遺物（19）



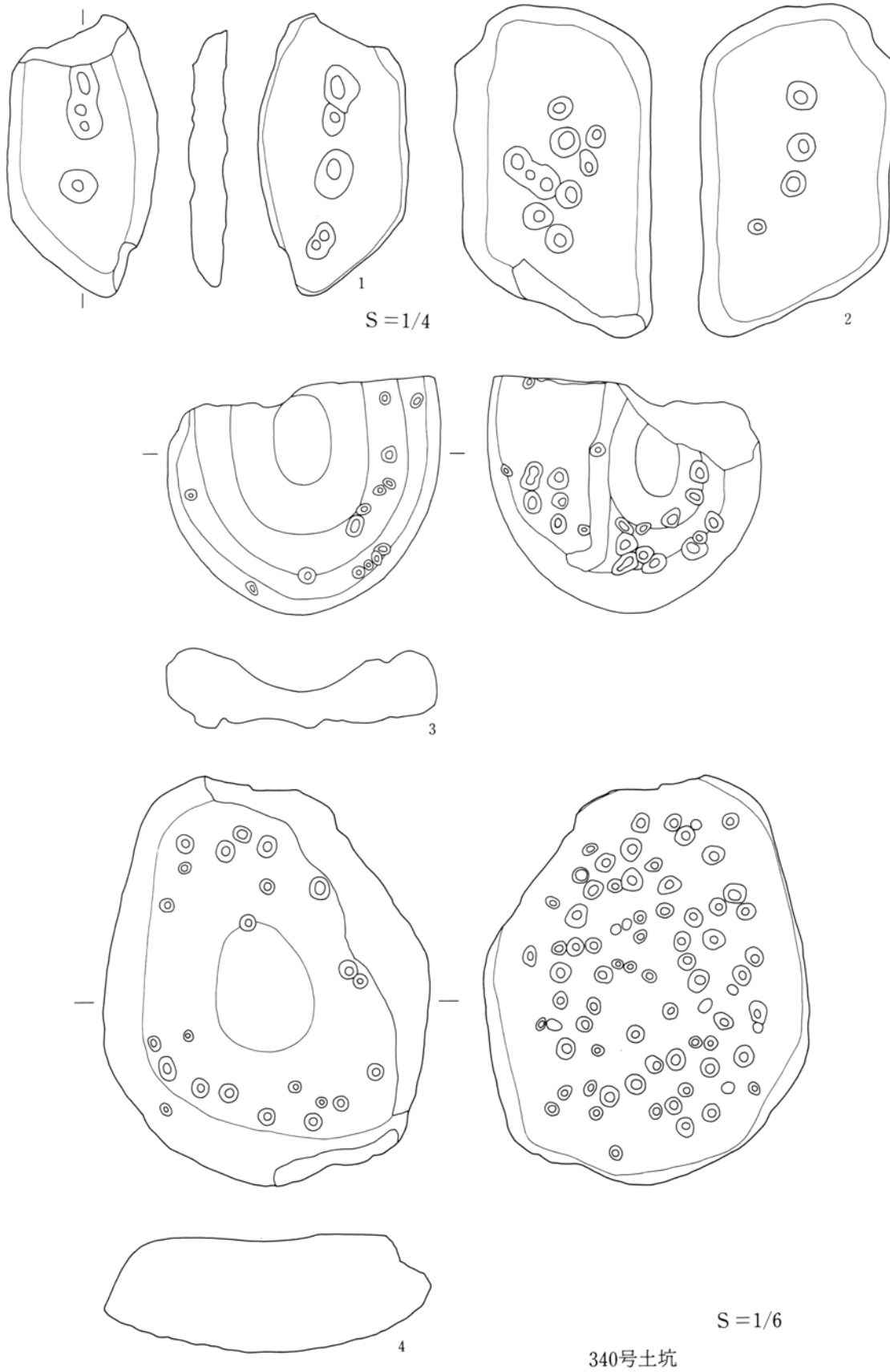
第108図　土坑出土遺物（20）



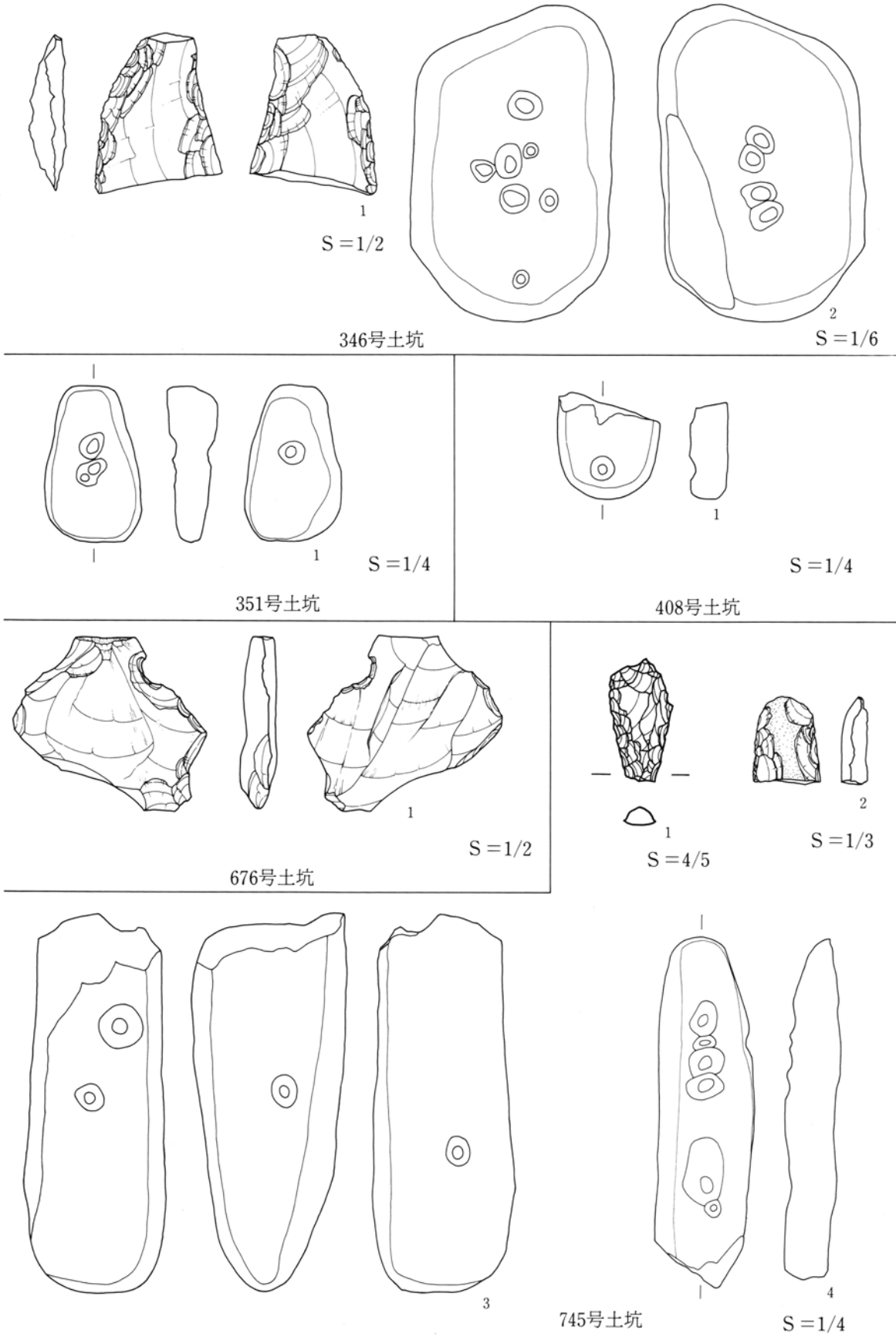
第109図　土坑出土遺物（21）



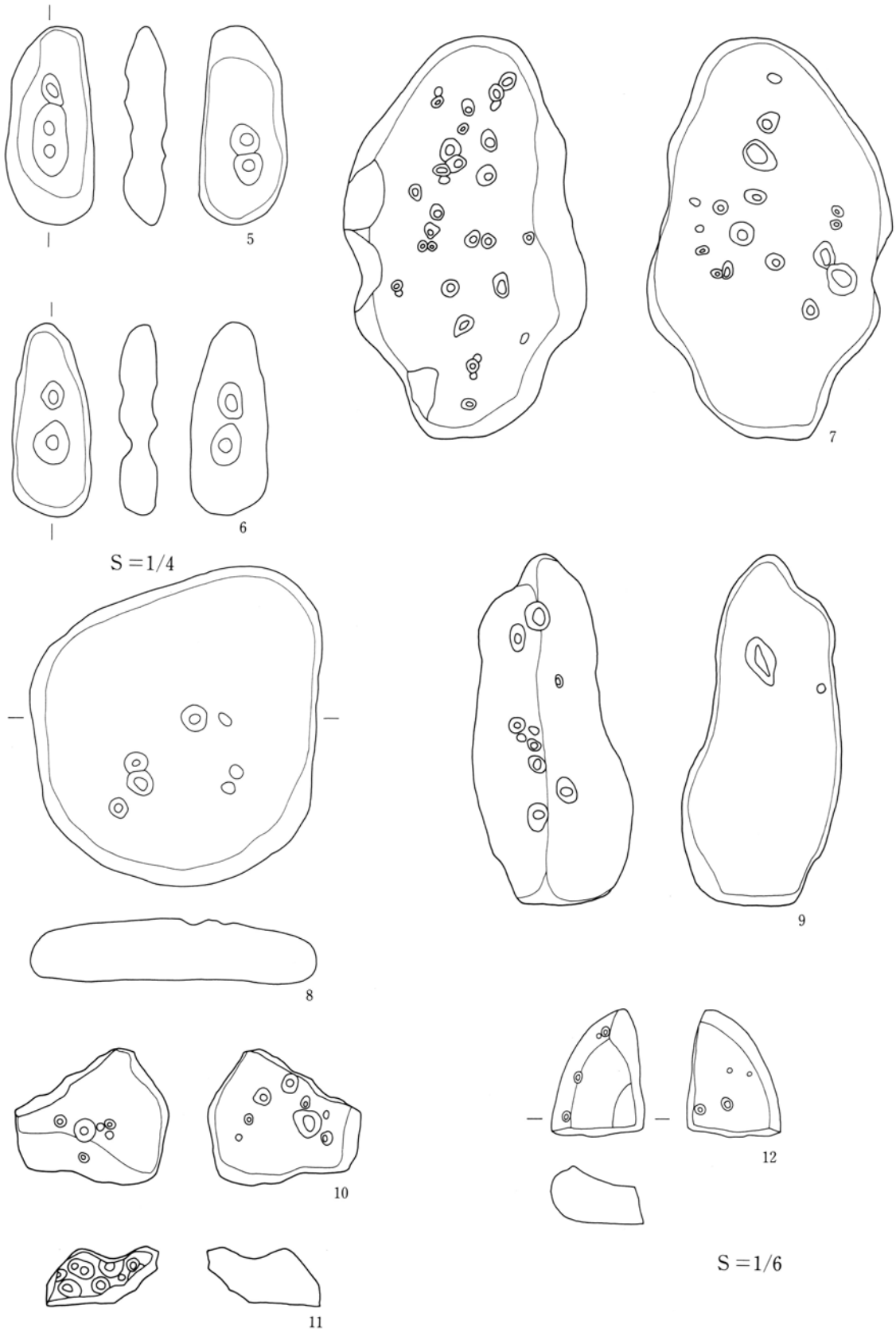
第110図　土坑出土遺物（22）



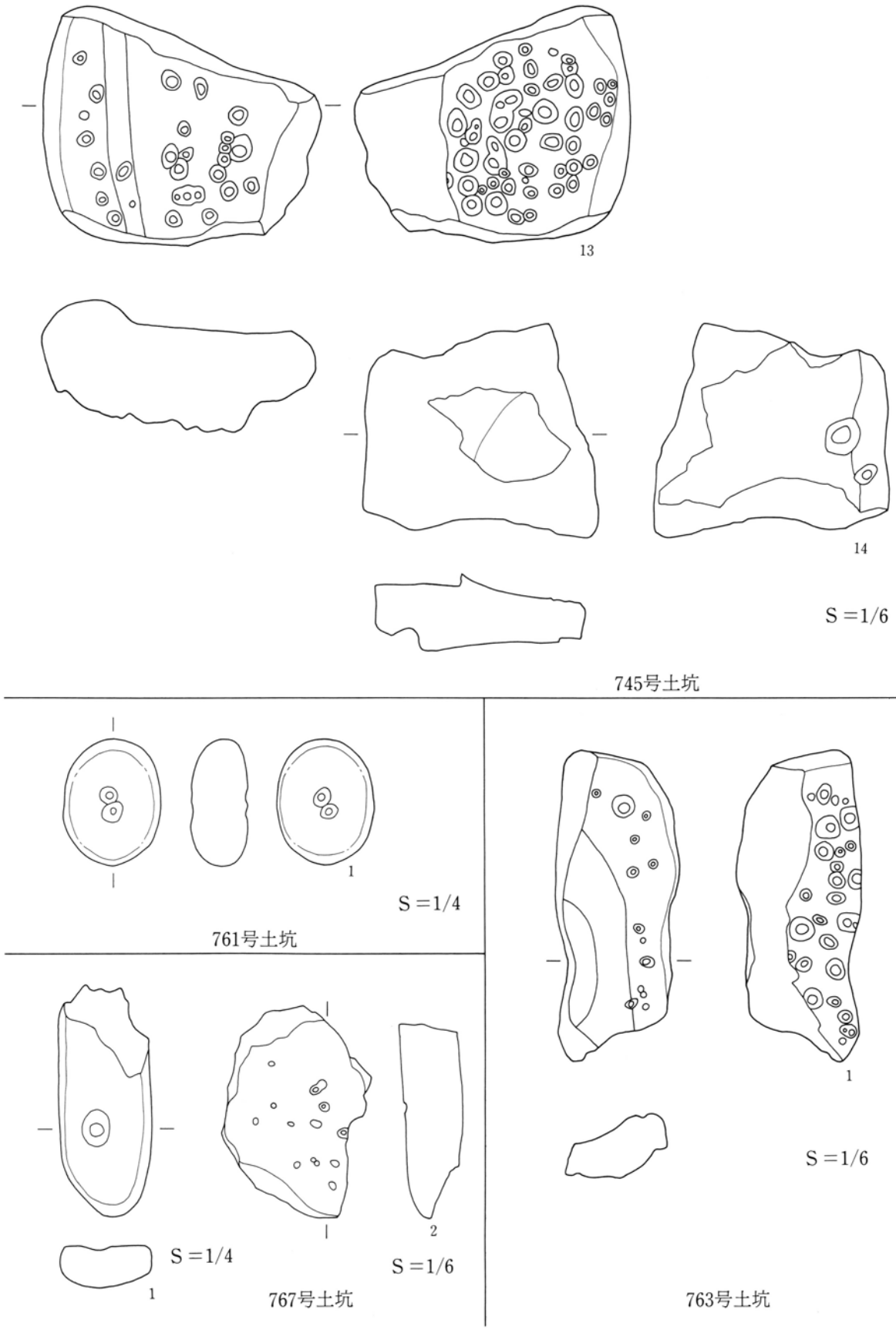
第111図　土坑出土遺物（23）



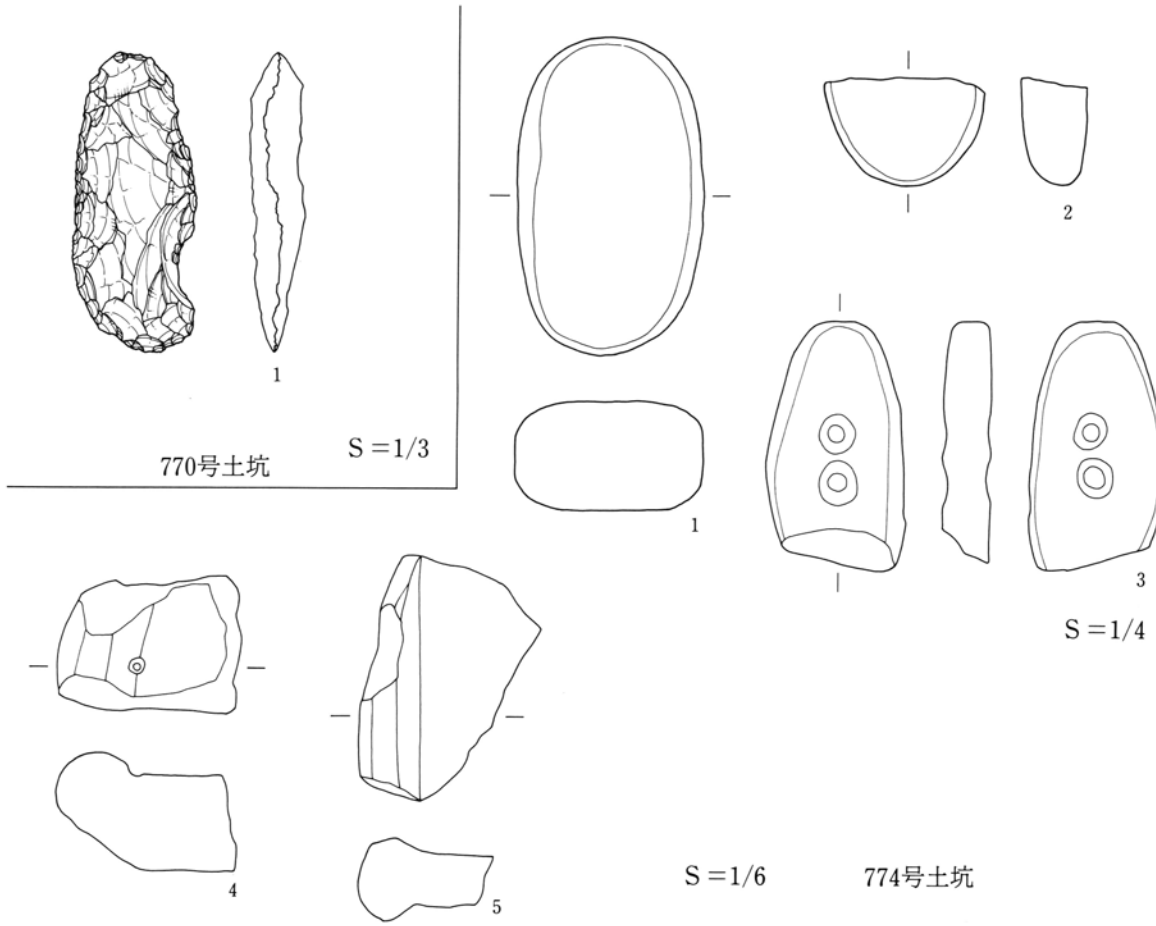
第112図　土坑出土遺物（24）



第113図　土坑出土遺物（25）



第114図　土坑出土遺物（26）



第115図　土坑出土遺物（27）

表12　25号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	磨　石	粗輝安山岩	14.0	5.9	6.0	810.0

表13　35号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	凹　石	緑色片岩	11.5	8.2	2.6	250.0

表14　212号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	凹　石	黒色片岩	17.8	6.5	2.2	295.0

表15　268号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	多孔石	牛伏砂岩	39.0	30.6		13,050.0

表16　282号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石鏃	黒曜石	2.5	1.8	0.3	0.8
2	凹石	雲母石英片岩	17.1	6.6	3.1	530.0
3	凹石	雲母石英片岩	9.5	5.1	3.3	250.0

表17　288号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	打製石斧	硬質泥岩	10.6	5.2	2.3	124.9
2	石皿	牛伏砂岩	26.8	24.2	12.0	6,900.0
3	凹石	黒色片岩	27.3	17.8	5.4	2,670.0

表18　289号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石皿	牛伏砂岩	37.6	32.6	9.5	12,400.0
2	凹石	緑色片岩	10.9	10.0	1.9	360.0
3	凹石	緑色片岩	13.8	6.2	3.6	670.0

表19　290号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	多孔石	黒色片岩	26.8	19.8		3,870.0

表20　304号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石皿	緑色片岩	29.5	14.5	7.6	4,050.0
2	石皿	粗輝安山岩	7.5	8.0	4.2	650.0

表21　306号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	緑色片岩	15.6	7.9	3.7	650.0

表22　308号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	石皿	粗輝安山岩	15.0	17.0	5.7	230.0

表23　328号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	緑色片岩	16.1	7.6	3.8	435.0

表24　340号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	緑色片岩	18.6	9.8	2.6	780.0
2	凹石	牛伏砂岩	22.0	13.2		2,845.0
3	石皿	牛伏砂岩	23.7	27.0	8.9	5,350.0
4	多孔石	牛伏砂岩	41.2	33.0	11.8	21,700.0

表25　346号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	スクレイパー	硬質泥岩	5.3	4.2	1.1	22.6
2	凹石	黒色片岩	21.5	13.8		2,900.0

表26　351号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	牛伏砂岩	10.7	6.6	3.5	270.0

表27　408号土坑出土石器計測表

No.	器種	石材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)
1	凹石	雲母石英片岩	7.5	7.0	2.6	200.0

表28　676号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	石　匙	珪質頁岩	6.0	6.6	1.2	50.7

表29　745号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	石　錐	黒曜石	2.6	1.3	0.5	1.8
2	打製石斧	硬質泥岩	4.5	3.5	1.3	25.2
3	凹　石	緑色片岩	25.9	9.8	10.5	4,100.0
4	凹　石	緑色片岩	24.0	6.8	3.8	815.0
5	凹　石	黒色片岩	13.2	5.8	2.7	320.0
6	凹　石	緑色片岩	13.0	5.3	2.5	300.0
7	多孔石	牛伏砂岩	39.5	24.3		9,100.0
8	多孔石	黒色片岩	19.5	21.1	4.0	2,740.0
9	多孔石	牛伏砂岩	34.5	16.0		3,950.0
10	多孔石	牛伏砂岩	13.7	15.7		1,255.0
11	多孔石	牛伏砂岩	6.0	11.3		200.0
12	石　皿	粗輝安山岩	12.3	9.4	5.8	750.0
13	多孔石	牛伏砂岩	24.2	28.5		8,300.0
14	石　皿	牛伏砂岩	14.7	16.0	5.3	1,200.0

表30　761号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	凹　石	デイサイト	8.8	6.6	3.8	305.0

表31　763号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	石　皿	牛伏砂岩	32.2	12.7	6.5	2,530.0

表32　767号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	凹　石	緑色片岩	15.8	6.4	2.8	600.0
2	石　皿	粗輝安山岩	21.6	15.2	6.6	2,870.0

表33　770号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	打製石斧	硬質泥岩	11.8	5.0	2.2	130.3

表34　774号土坑出土石器計測表

No.	器　種	石　材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重　さ (g)
1	磨　石	石英閃緑岩	16.7	10.0	5.8	1,735.0
2	磨　石	デイサイト	5.9	8.4	3.5	240.0
3	凹　石	緑色片岩	13.3	7.3	2.5	470.0
4	石　皿	牛伏砂岩	11.0	14.5	9.3	1,590.0
5	石　皿	牛伏砂岩	19.5	14.5	6.5	1,630.0

745号土坑（第90図６・７、第104・105・112～114図　表29）

第90図６は波状口縁をなす小形の深鉢で、口縁部には沈線と隆帯により渦巻および楕円等の文様を描き、胴部には沈線による懸垂文と縦位回転の縄文を施している。第90図７は、平口縁のキャリパー状を呈する深鉢で、口縁および頸部下に平行沈線を数条巡らせて文様区画を行い、区画内に縦位の蛇行沈線等を描き、胴部には縦位および斜位の沈線で文様を描く。第104図１～６はキャリパー状を呈する深鉢の口縁部で、沈線と隆帯により口縁部文様帯を区画し、区画内に沈線等により渦巻や長楕円等の文様を描くとともに、その内部に縄文を施す。７は口縁部に沈線で文様帯を区画し、区画内に縦位の蛇行沈線を描く。８・12は口縁に２条の平行沈線を巡らせ、口縁部に沈線で重弧状の文様を描き、地文には沈線状の縦位の条痕を施す。10・11は口縁に２条の平行沈線を巡らせ、口縁部以下に沈線で蛇行懸垂文を描き、地文には縦位の条痕を施す。13は無文となる口縁下に１条の隆帯を巡らせて区画し、胴部に隆帯による蛇行懸垂文が描かれ、地文には薄く沈線状の条痕が施される。９は１～６と同様の口縁部文様帯をもち、その胴部に縦位回転のRLの縄文を施すものである。14は胴部に沈線および隆帯で、直線ないし曲線的な文様を描くもので、地文には縄文を施す。15は胴部に隆帯による蛇行懸垂文等をもつもので、地文には縦位回転のRLの縄文を施す。16～21は胴部に沈線による懸垂文をもつもので、地文には回転絡条体（撚糸）を施す16・21や、縦位回転の縄文を施すものである。

出土した石器は、黒曜石製の端部が欠損した石錐１点、欠損した打製石斧が１点、片面ないし両面に凹孔をもつ凹石が４点、片面ないし両面に多孔をもつ多孔石が５点、両面に多孔をもつ石皿２点と、両面石皿となるもの１点がある。

755号土坑（第105図）

胎土に繊維を含む波状口縁となる口縁部で、波頂下に縦長の隆帯をもち、口縁部に半裁竹管による平行沈線を数条巡らせるもの。

756号土坑（第105図）

１は胎土に繊維を含む頸部片で、半裁竹管による菱状の文様を描くもの。２は胴部にRLの縄文を施す。３は口縁部の把手であり、表面には三角状の隆帯と刺突が施され、裏面には渦巻状の隆帯が施される。さらに上面の周囲には刻みをもち、細い隆線と三角印刻で星状の文様を描き、中央に円形の孔を有する。

757号土坑（第105図）

１は胴部に半裁竹管による文様を描き、円形刺突を施す。２は胴部に半裁竹管による木の葉状の文様を描くと共に、区画内に縄文を施す。３・４は胴部に半裁竹管による連続爪型文をもつ平行沈線で文様を描くもので、沈線間には刻みを有する。

758号土坑（第105図）

１は口縁部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせると共に、沈線で文様を描くもので、地文に縄文を施す。２・４は胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもので、２には円形刺突を配する。３は口縁部に半裁竹管による平行沈線を巡らせるもの。５は小突起をもつ口唇部に沈線を巡らせ、口縁部に隆帯で文様を描くと共に、その内側に角押文を巡らせる。裏面の小突起部には、小さな渦巻状

の隆帯を貼付する。

759号土坑（第106図）

１は口縁部に半裁竹管による平行沈線を数条巡らせるもの。２は半裁竹管による平行沈線と格子条の沈線を施すもの。

760号土坑（第106図）

１は胴部に斜行する沈線を施すもの。２は胎土に繊維を含む口縁部片で、口縁以下に縄文を施すもの。

761号土坑（第106・114図　表30）

１は胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。2は胴部に太い沈線で文様区画し、区画内に縄文を施すもの。3は胴部に縄文を施す。4は胎土に繊維を含む胴部片で、縄文を施すものである。

出土した石器は、両面に凹孔をもつ磨石が１点ある。

763号土坑（第106・114図　表31）

１は大きく屈曲する口縁の口唇部位下に、RLの縄文を施すもの。2は胴部にRLの縄文を施すもの。3は胎土に繊維を含む胴部片で、LRの縄文を施すものである。

出土した石器は、両面に多孔をもつ石皿が１点ある。

764号土坑（第106図）

１・２は胴部に微隆帯ないしは沈線で懸垂文を描き、縦位回転の縄文を施すものである。

766号土坑（第106図）

１～３は繊維を含むもので、１は頸部に半裁竹管による菱状の文様を描くもの。２・３は胴部に縄文を施すもので、３はRLの縄による。４は底部近くの胴部片で、縦位の角押文が施されている。

767号土坑（第106・114図　表32）

１は胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。２は胴部に沈線で文様を描くものであり、３は無文の胴部片である。

出土した石器は、片面に凹孔をもつ凹石が１点と、浅い多孔をもつが比較的面が平らな台石とも思われる多孔石が１点である。

769号土坑（第106図）

２は胎土に繊維を含む胴部片であり、LRとRLによる羽状縄文を施す。1は隆帯で懸垂文を描き、区画内に縄文を施す。３は胴部に爪形刺突を巡らせるもの。４・５は無文の胴部片である。

770号土坑（第91図９・10、第115図　表33）

９は双頂突起をもつ平口縁の深鉢で、双頂下には耳タブ状の隆帯をもち、胴部は無文となるが、輪積み痕

と指頭圧痕を残す。10は大形の深鉢となるもので、隆帯による文様が、口縁部以下に多段にわたって描かれるものである。

出土した石器は、打製石斧が１点である。

774号土坑（第107・115図　表34）

１は口縁部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。２は胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描き、円形刺突を配する。３は胴部に半裁竹管による平行沈線で、曲線的な文様を描くもの。４は胴部に隆帯と沈線で文様を描くもので、地文に回転絡条体(撚糸)を施している。５～７は胴部に沈線でＵ字状の文様等を描き、区画内に縄文を施すもの。９～17は口縁部ないし胴部にLRないしRLの縄文を施すもので、９には結節縄文が施されている。

出土した石器は、丁寧に研磨された磨石が２点と、両面に凹孔をもつ凹石が１点、周縁が作り出された石皿が２点である。

775号土坑（第107図）

１は胴部に沈線で文様を描き、区画内にＬの縄文を施す。２は胴部にLRの縄文を施すもの。３は胴部に沈線で文様を描くものであり、４は無文の胴部に輪積み痕を残すもの。

776号土坑（第90図８、第107図）

第90図８は波状口縁となる口縁部に、隆帯で楕円状の文様を描くと共に、その内側に角押文を巡らせ、胴部は無文となるが、輪積み痕および指頭圧痕を残す。第107図１は、胴部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描き、円形刺突を配する。２は口縁部に刻みをもつ浮線隆帯で曲線的な文様を描くもの。３は口縁下に微隆帯を１条巡らせ、以下にRLの縄文を施すもの。４は胴部に沈線で懸垂文を描き、区画内に縦位回転の縄文を施すもの。６は無文の胴部片で、輪積み痕および指頭圧痕を残す。５は表裏両面に刷毛目痕をもつ円筒埴輪片である。７は須恵器の坏で、ロクロ整形によるものである。

３．遺構外出土遺物

遺構外出土遺物の出土量は、膨大な量にのぼる。特に、Ｃ区とした地区からの出土物が、そのほとんどを占めている。これは、旧地形が北に延びる東側が高く、西側へ緩傾斜面を広くとる舌状台地であったものを、中世の城郭造成時に東側の高い部分を切り土し、西側の低い部分を盛り土したことで、結果的にＣ区とした西斜面部の包蔵状態が、極めて良好な状態にあったことに起因する。出土した遺物には、土器・石器が共に多く、土偶・岩偶等の土・石製品類も見られる。

土器（第116～297図）

出土した土器の量は、遺物収納箱で250箱余を数える。これらの土器は、Ａ区とした東台地の北端部に存在し多少谷地から出土したものと、Ｃ区とした同台地の西斜面で出土したものがほとんどであり、少量ではあるがＣ区の西側の中央台地（Ｅ区）からも出土している。土器は、縄文時代早期、前期、中期、晩期の資料であり、前期中葉以降から中期初頭までの出土量が最も多い。晩期のものは、僅かに４片だけであった。また、早期の資料については、Ｃ区に存在した谷地内から出土している。

記述するにあたり、次のように各土器群を大別し、各区ごとに土器の観察を行う。

第Ⅰ期　早期	第Ⅰ群	沈線文土器
	第Ⅱ群	絡条体圧痕文土器
	第Ⅲ群	条痕文土器
第Ⅱ期　前期	第Ⅰ群	二ッ木式土器
	第Ⅱ群	関山式土器
	第Ⅲ群	黒浜式土器
	第Ⅳ群	有尾式土器
	第Ⅴ群	縄文施文土器群（繊維土器）
	第Ⅵ群	諸磯ａ式土器
	第Ⅶ群	諸磯ｂ式土器
	第Ⅷ群	諸磯ｃ式土器
	第Ⅸ群	下島式土器
	第Ⅹ群	刺突凹凸文土器
	第Ⅺ群	浮島式土器
	第Ⅻ群	北白川式土器
	第XIII群	上の坊式土器
	第XIV群	大木系土器群
	第XV群	縄文施文土器群（前期後半無繊維土器）
	第XVI群	前期終末土器群
第Ⅲ期　中期	第Ⅰ群	中期初頭土器群
	第Ⅱ群	縄文施文土器群（中期初頭）

第Ⅲ群　　阿玉台式土器
第Ⅳ群　　加曽利Ｅ式土器

第Ⅳ期　晩期

Ａ区出土土器（第125～127図）

Ⅱ期Ⅰ群　この類に分別される土器は、かなり少ない。

61は胎土に繊維を含み、尖底深鉢となる胴部下半の土器で、０段多条の原体により縦位に長い菱形となる異方向縄文を施すもので、前期初頭の花積下層式土器の最も古い土器に位置づけられる。60は胎土に繊維を含む胴部片で、０段多条の短い原体により横位の羽状縄文が施されるものであり、花積下層式土器と考えられる。38は胎土に繊維を含む口縁部片であり、波状口縁となる。口縁部にはＬ・Ｒ・Ｌの３本を１組とする撚糸側面圧痕により、ループ等の文様が描かれ、竹管具による円形刺突が充填されている。新田野段階期のもので、二ッ木式土器と考えられよう。

Ⅱ期Ⅱ群

39は胎土に繊維を含む口縁部片であり、波状口縁となる。地文に縄文をもち、口縁部に断面がＤ字状となる半裁竹管による沈線で、文様が描かれる。施文される文様は、口縁下に３条の沈線が巡り、波頂下にＸ字状の文様が施され、その交点に円形文が描かれる。41～47は同一個体となるもので、頸部がくびれ、口縁が開く深鉢の器形を呈し、口縁部から頸部には半裁竹管による粗い波状文が描かれ、頸部には平行沈線を巡らせる。胴部には縄文を施すようであるが、原体は不明。

Ⅱ期Ⅳ群

48は口縁から頚部に、櫛歯状工具により波状および円形の文様を描くものである。

Ⅱ期Ⅴ群

49は胎土に繊維を含む口縁部で、波状口縁となり、波頂部に突起を有する。口縁以下には、正反の合による羽状縄文が施されている。52・56も同様に、正反の合の縄文を口縁部以下に施すものである。54・59は閉端還付縄（ループ文）が施されたものであり、54は口縁以下に、59は胴部片である。50・55は口縁部以下にLRの縄文を施すものであり、53・57・58は口縁部以下にRLの縄文を施すものである。60は胴部に短い０段多条のLRとRLにより羽状縄文を施すもの。61・69は胴部に０段多条のLRとRLで羽状縄文を施し、62～66はLRとRLで羽状縄文を施している。67は正反の合の縄で、LRとRLにより羽状縄文を施す。68はLRとRLによる結束羽状縄文である。70は胴部にLRの縄文を施すものであり、71～77はRLの縄文を施すものであるが、中には０段多条の縄を用いるものもある。

Ⅱ期Ⅵ群

78は平口縁となる口縁部に、細い半裁竹管具による平行沈線と沈線間に爪形刺突をもつ。79は平口縁の口縁部に、半裁竹管具により平行沈線を数段巡らせ、その間に波状沈線を巡らせる。さらに、縦位に円形刺突を施している。80・81は、79と同様の文様を胴部上半にもつものである。82は縦位の円形刺突と、波状沈線

を数段巡らせるもの。85は平行沈線を数段巡らせるものであり、86は爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、胴部にRLの縄文を施すもの。

II期Ⅶ群

87は地文を縄文とする胴部に、連続する爪形文で曲線的な文様を描くもの。88～91は胴部に連続する爪形文と刻みにより曲線的な文様を描くものであり、88には円形刺突も施されている。92は胴部に半裁竹管により格子目状の沈線を施すもの。93･94は胴部に半裁竹管による沈線で文様を描くものである。95～103は刻みを有する浮線文で文様を描くものであり、95～97には曲線的な文様が、98～103には胴部に数条の浮線文が巡らされている。なお、これらの地文には縄文が施され、101の浮線上には刻みではなく、縄文が施されている。

II期Ⅷ群

104は口縁下に横位の集合沈線をもち、胴部に縦位および矢羽根状の集合沈線を施すもの。105は胴部下に横位の矢羽根状沈線を施すものであり、106は縦位の集合沈線を施すものである。110は胴部に弧状の集合沈線を施している。107～109は胴部に斜位の細い沈線を施し、小さな豆粒状のボタン状貼付文をもつもので、109には爪形刺突が施されている。

II期Ⅸ群

111は胴部に結節浮線文で文様が描かれるものである。

II期ⅩⅤ群

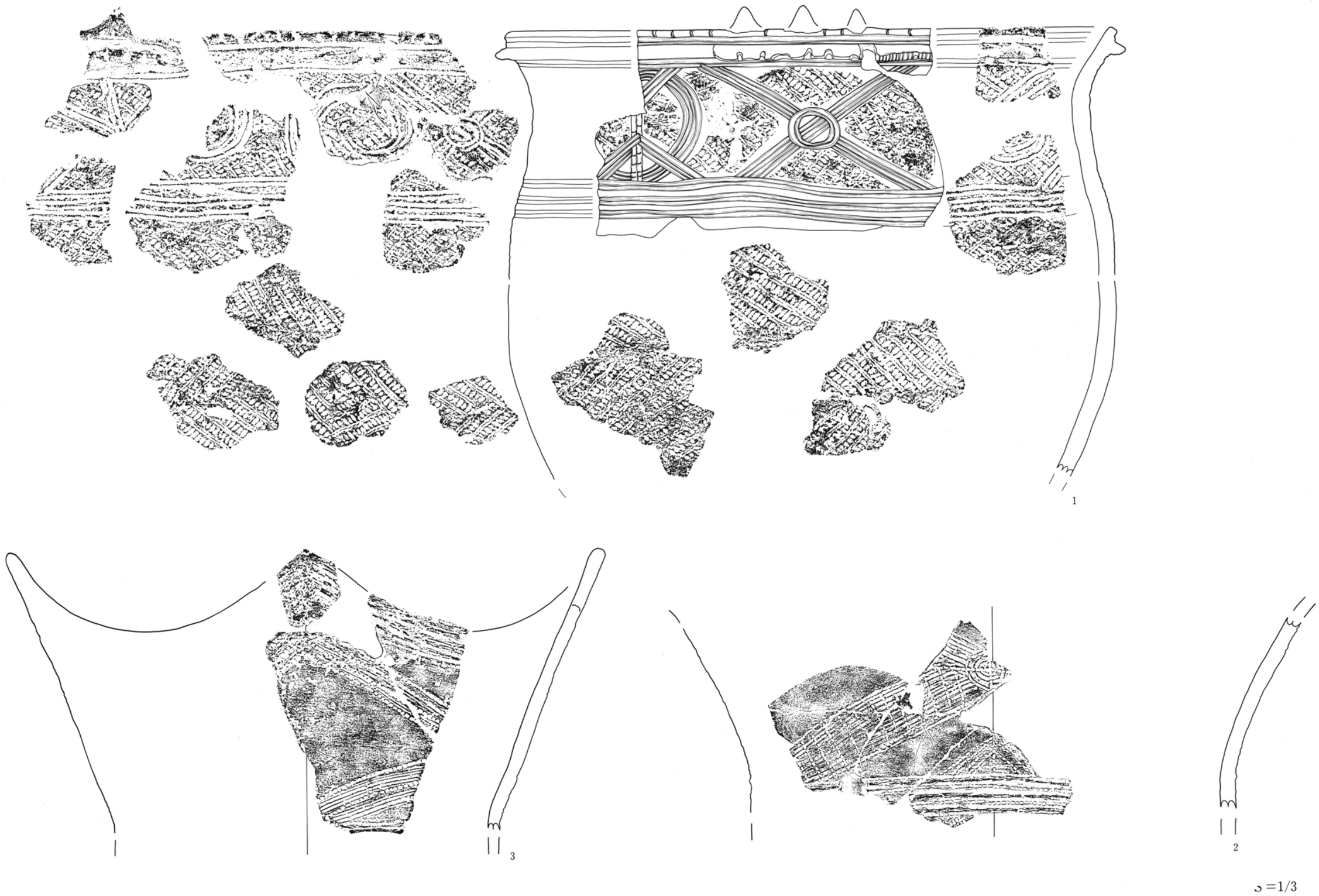
112は平口縁となる口縁部以下に、RLの縄文が施されるものであり、113～116は胴部にLRないしRLの縄文が施されるものである。

III期Ⅰ群

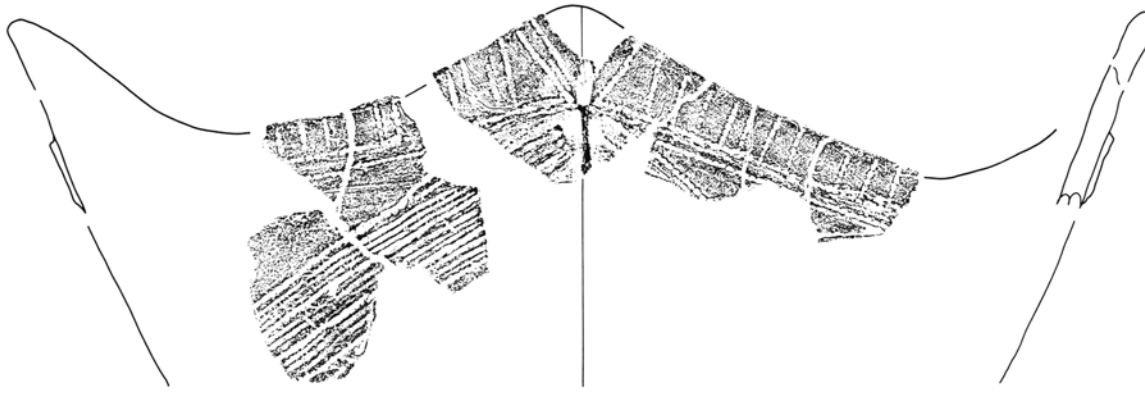
117は口縁部に隆帯等で文様区画し、区画内に格子状の沈線を施すもの。118は口舌部に縄文を施し、口縁部に波状沈線をもち隆体で文様区画を行い、隆体の内側に角押し文をもつ。胴部にはRLの縄文が施されている。119・120は同一個体であり、口舌部に刻みをもち、外反する口縁部には１条の角押し文が巡り、長楕円状の隆体をもつ。122は胴部に垂下する沈線と、点列状の刺突が加えられるものであり、123は円形ないしY字状の沈線が施されるものである。124・125は胴部に垂下する隆体ないし沈線をもち、縦位回転による縄文を施したものである。

III期Ⅲ群

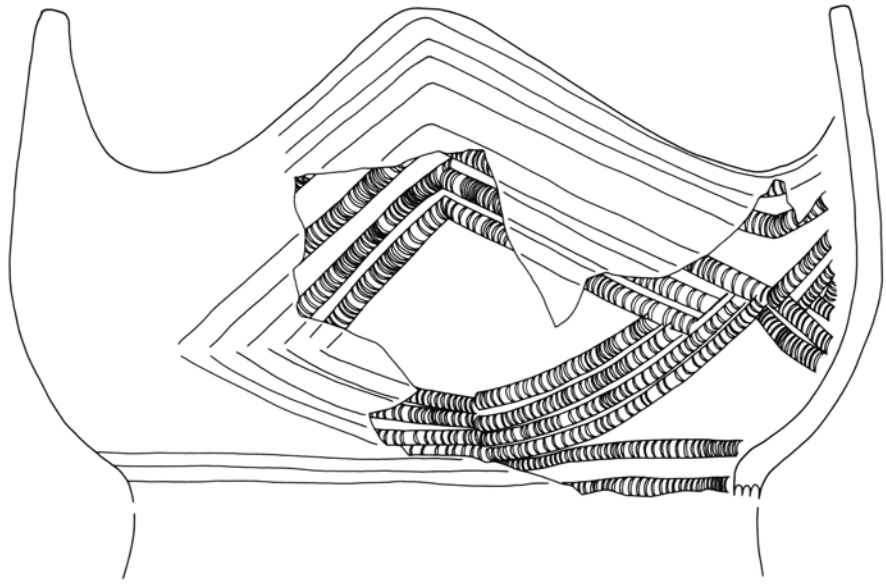
126は内反する平口縁の口縁部に、波状の角押し文を施し、その下に平行の角押し文で口縁部の文様区画を行うものである。127は内反する平口縁の口縁部に、隆帯により楕円状の文様を区画し、隆帯の内側に角押し文を添わせるように施文するものである。



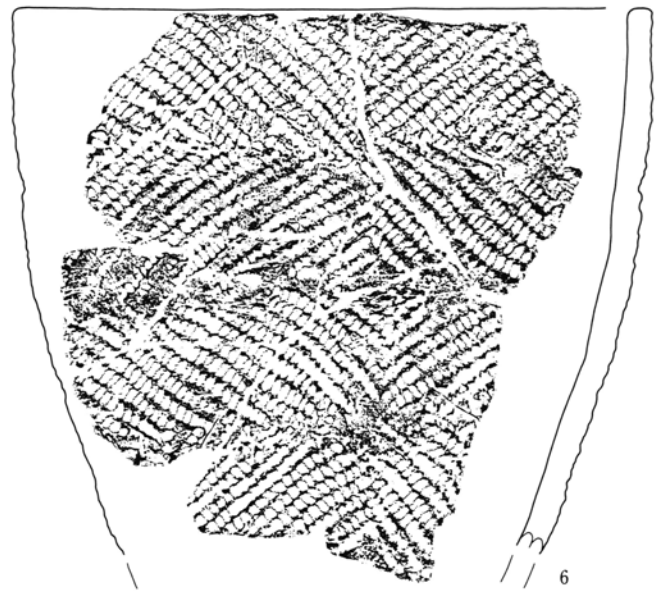
第116図　遺構外出土土器（1）



4

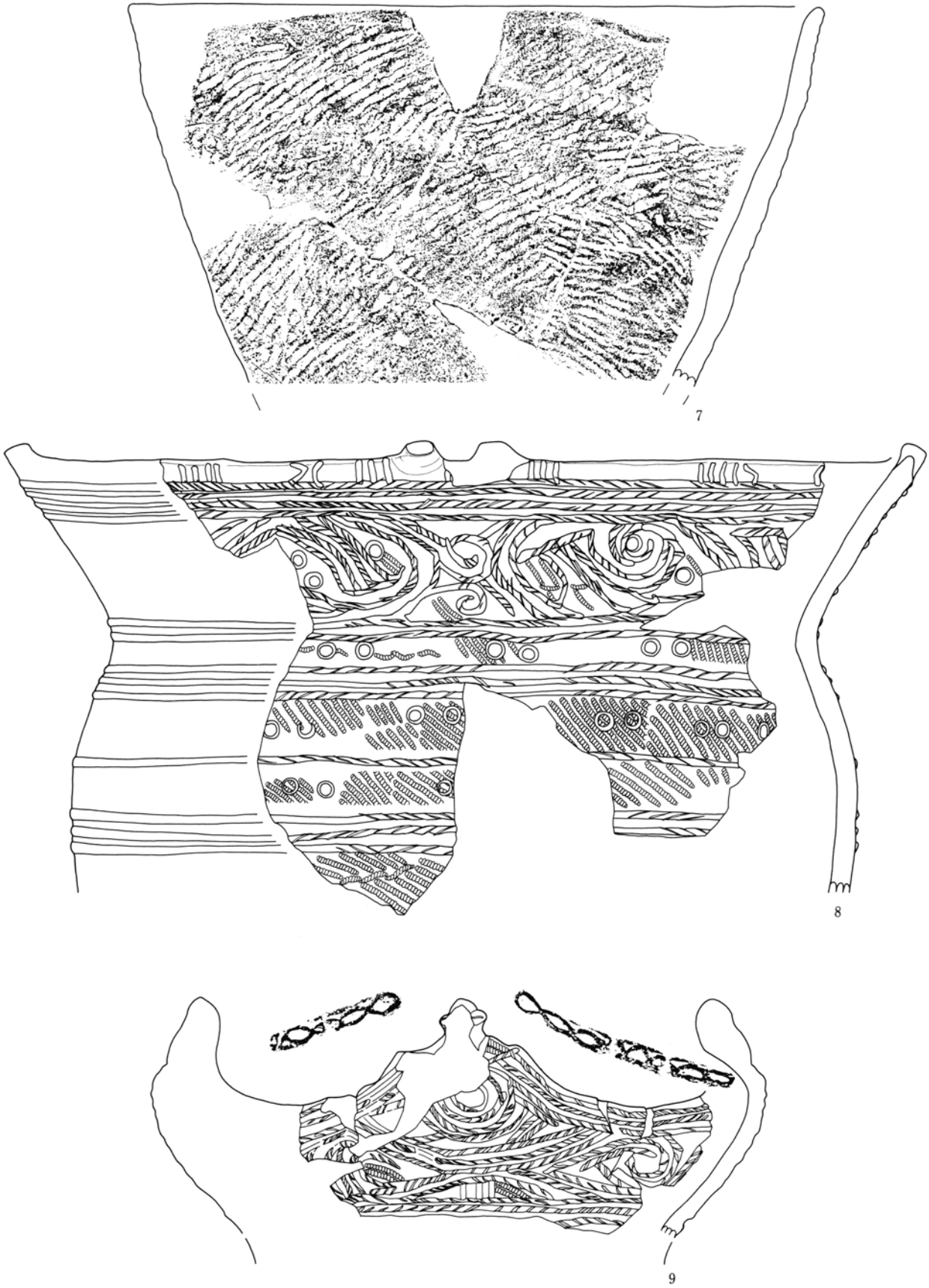


5



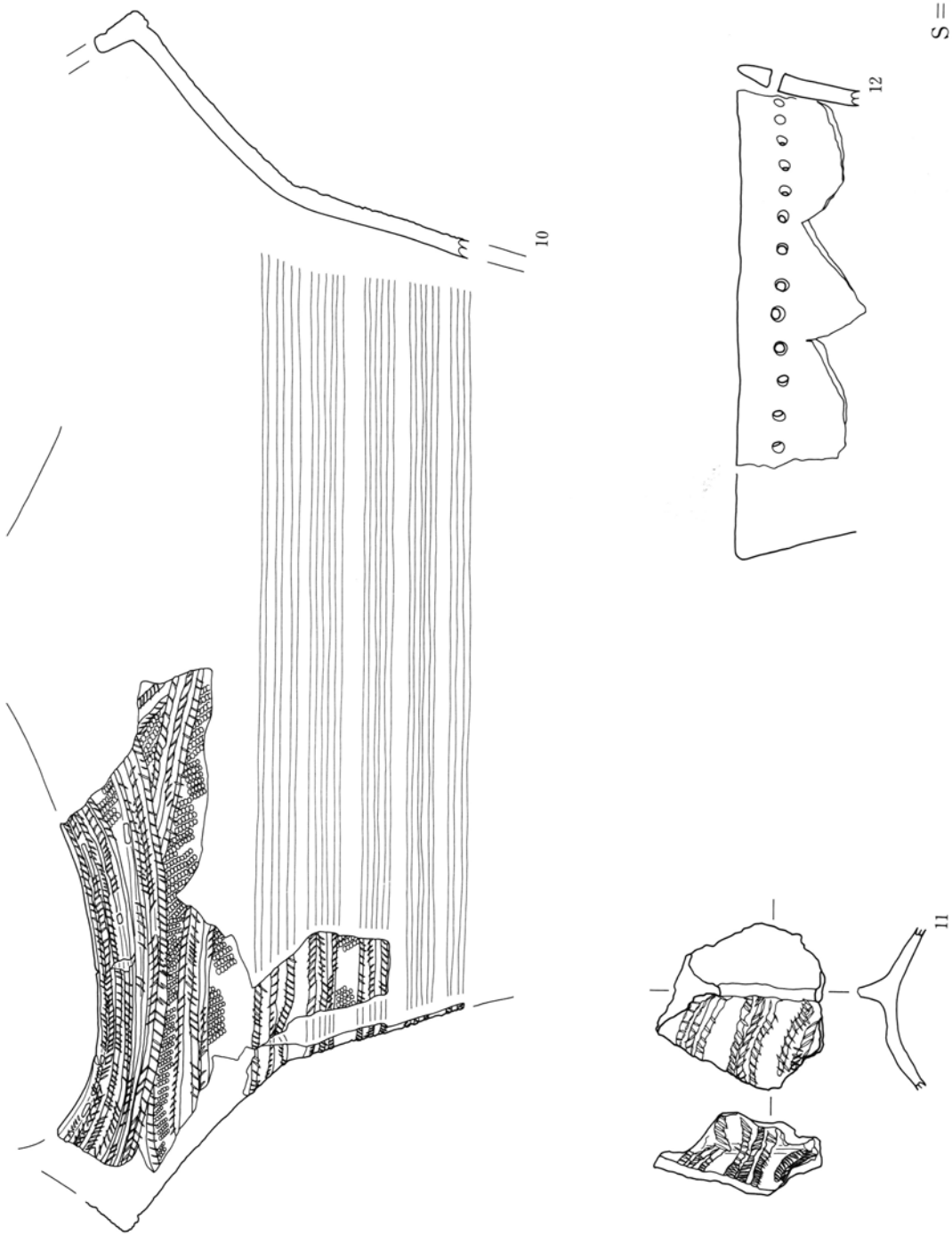
6

第117図　遺構外出土土器（２）　　S＝1/3

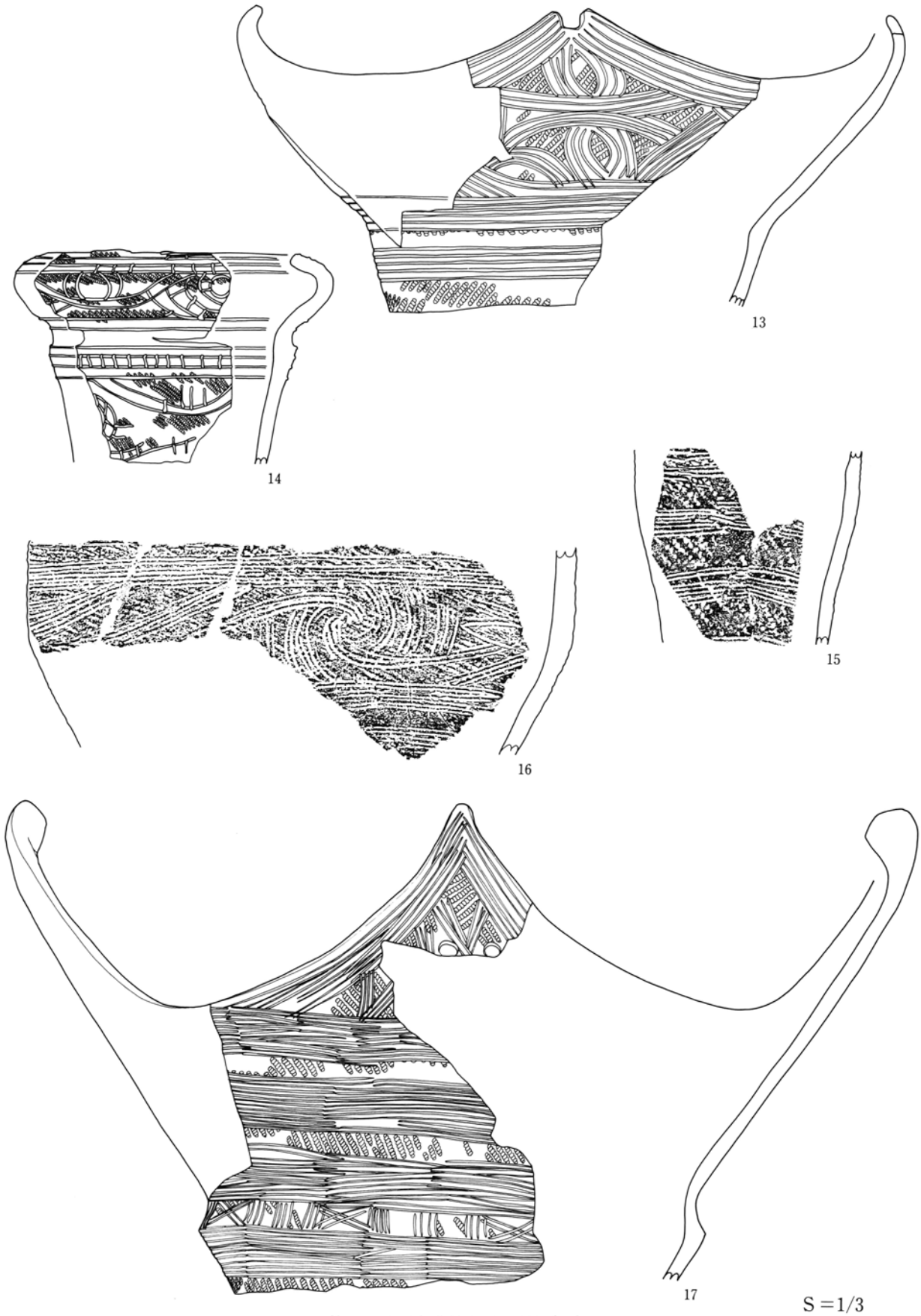


S＝1/3

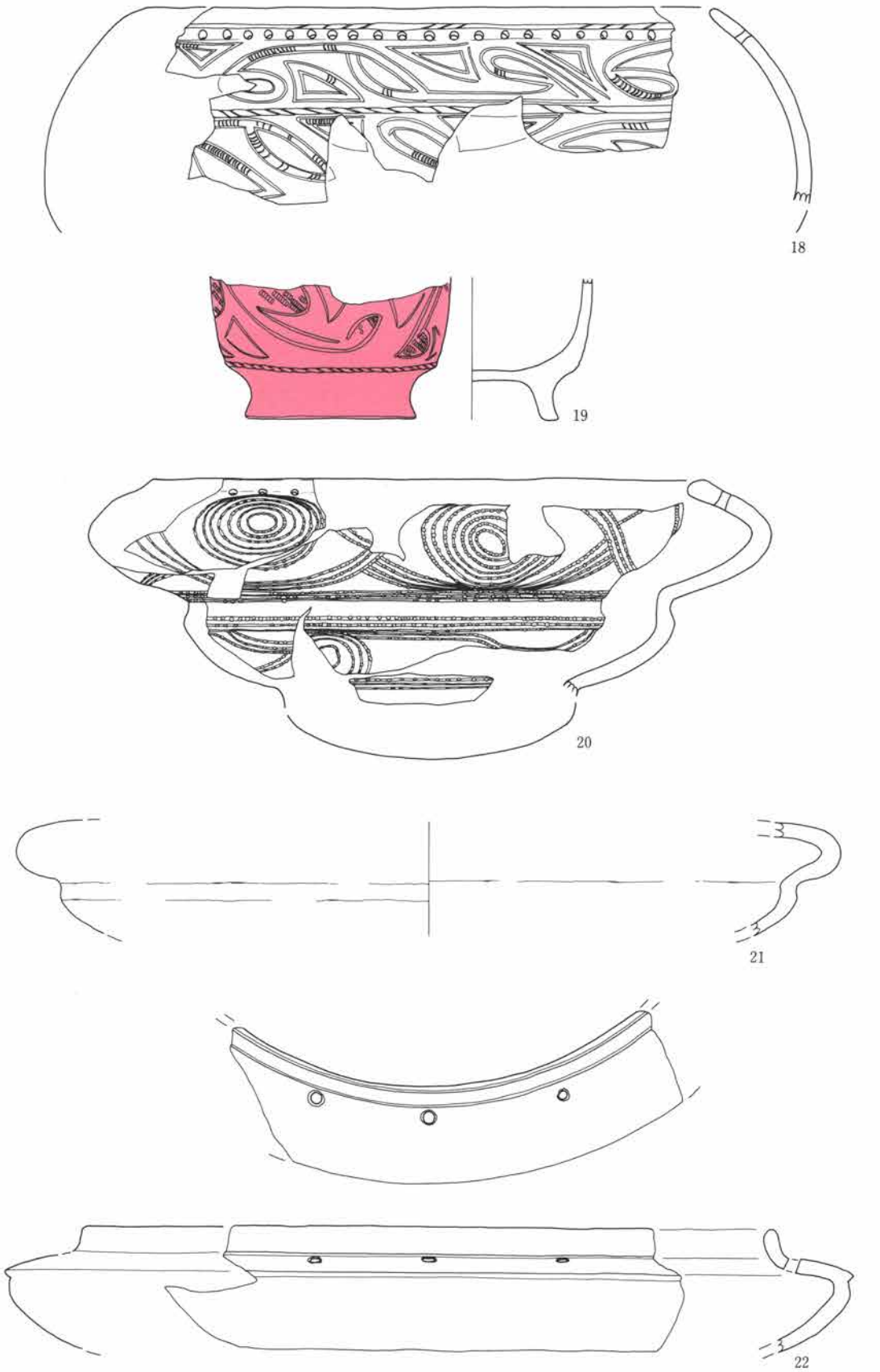
第118図　遺構外出土土器（３）



第119図　遺構外出土土器（４）

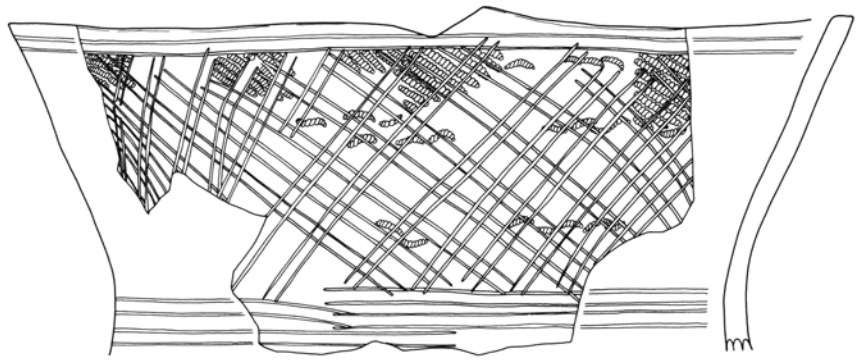


第120図　遺構外出土土器（５）

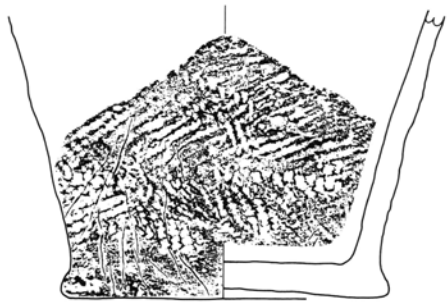


S＝1/3

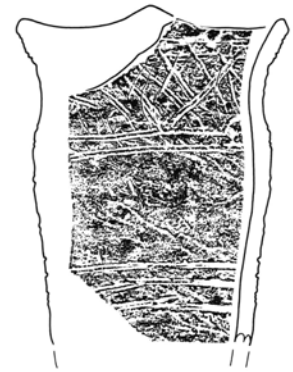
第121図　遺構外出土土器（６）



23

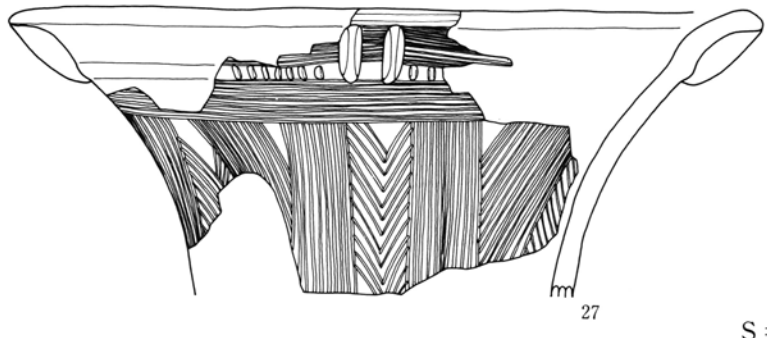


24



25

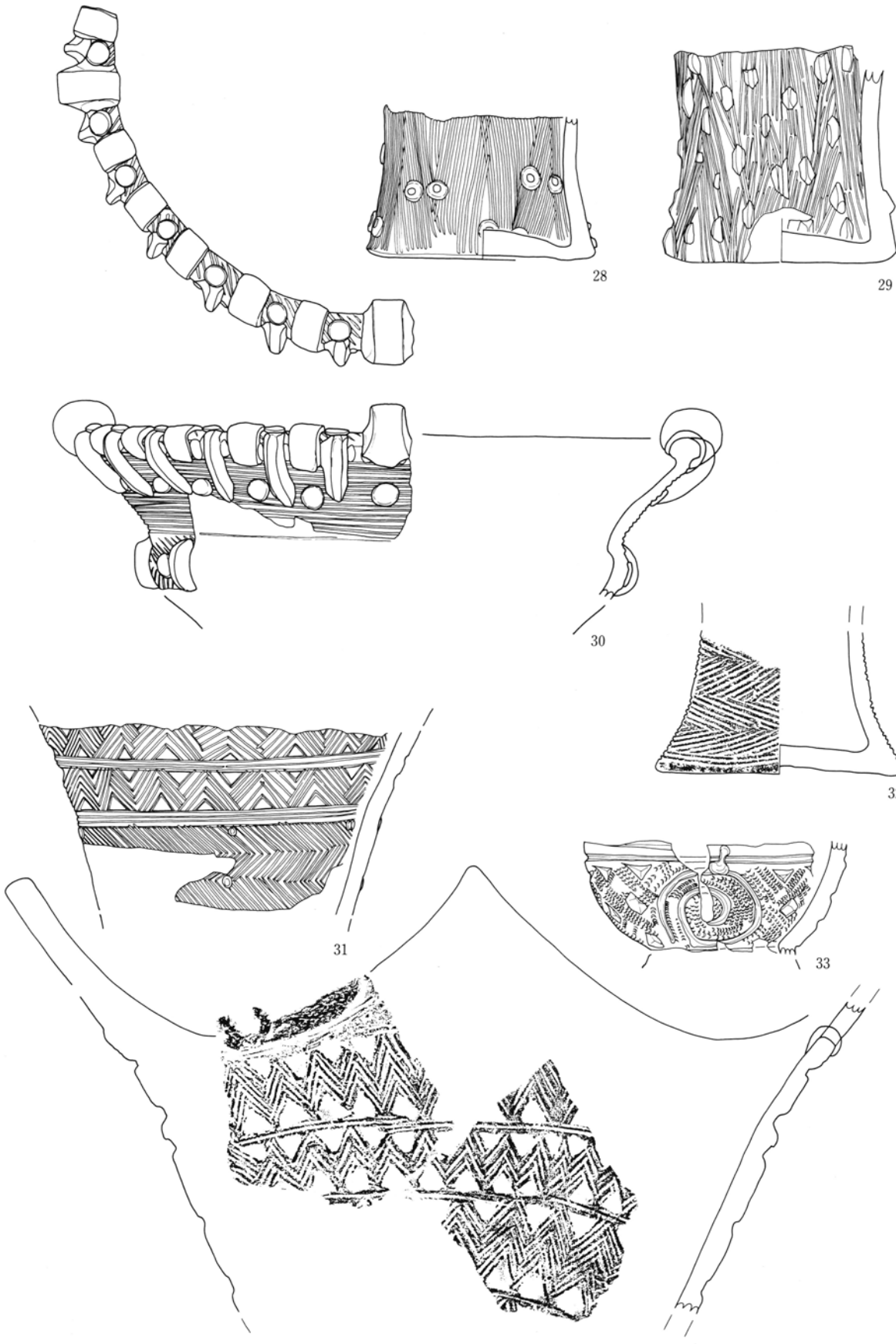
26



27

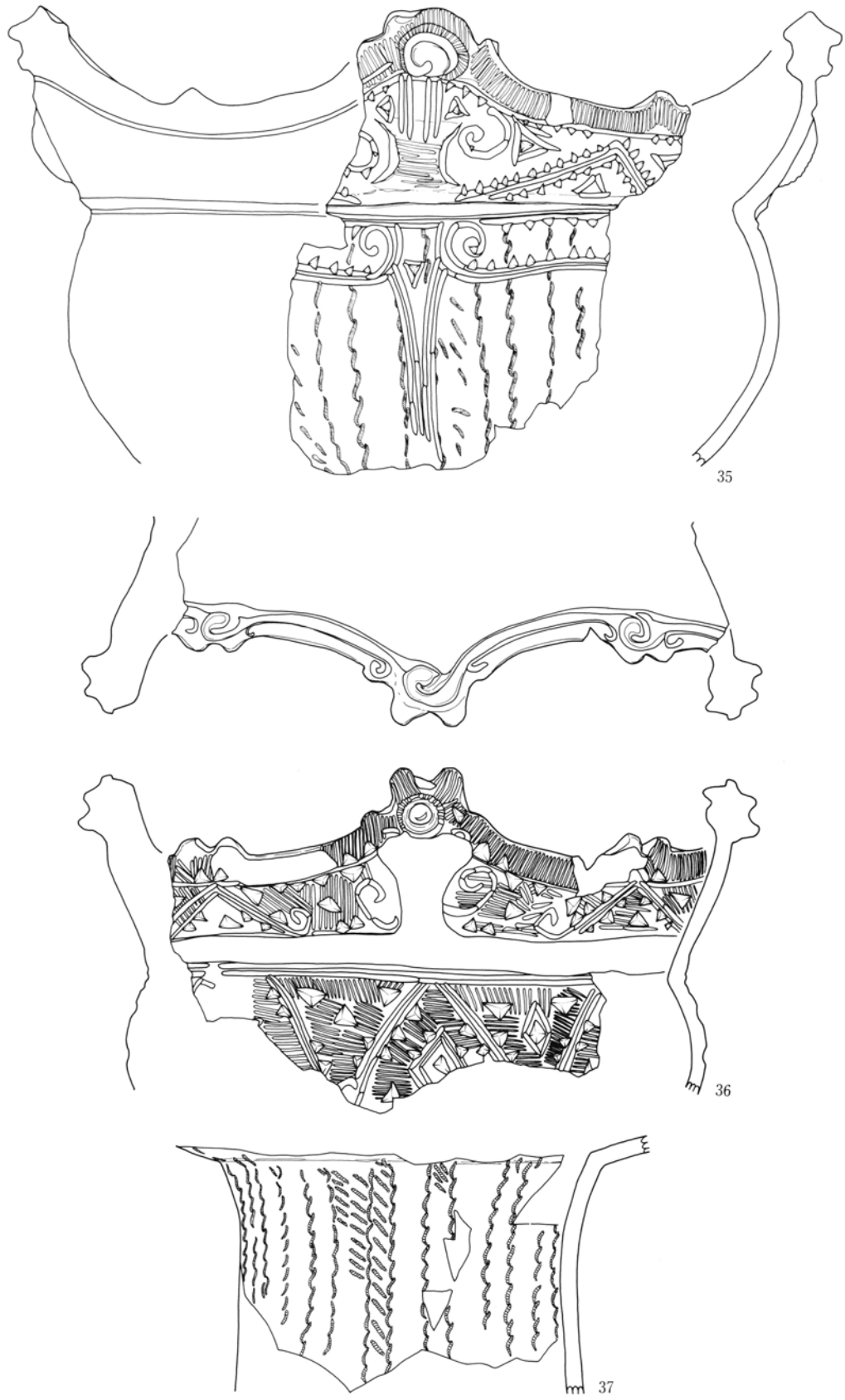
S＝1/3

第122図　遺構外出土土器（７）



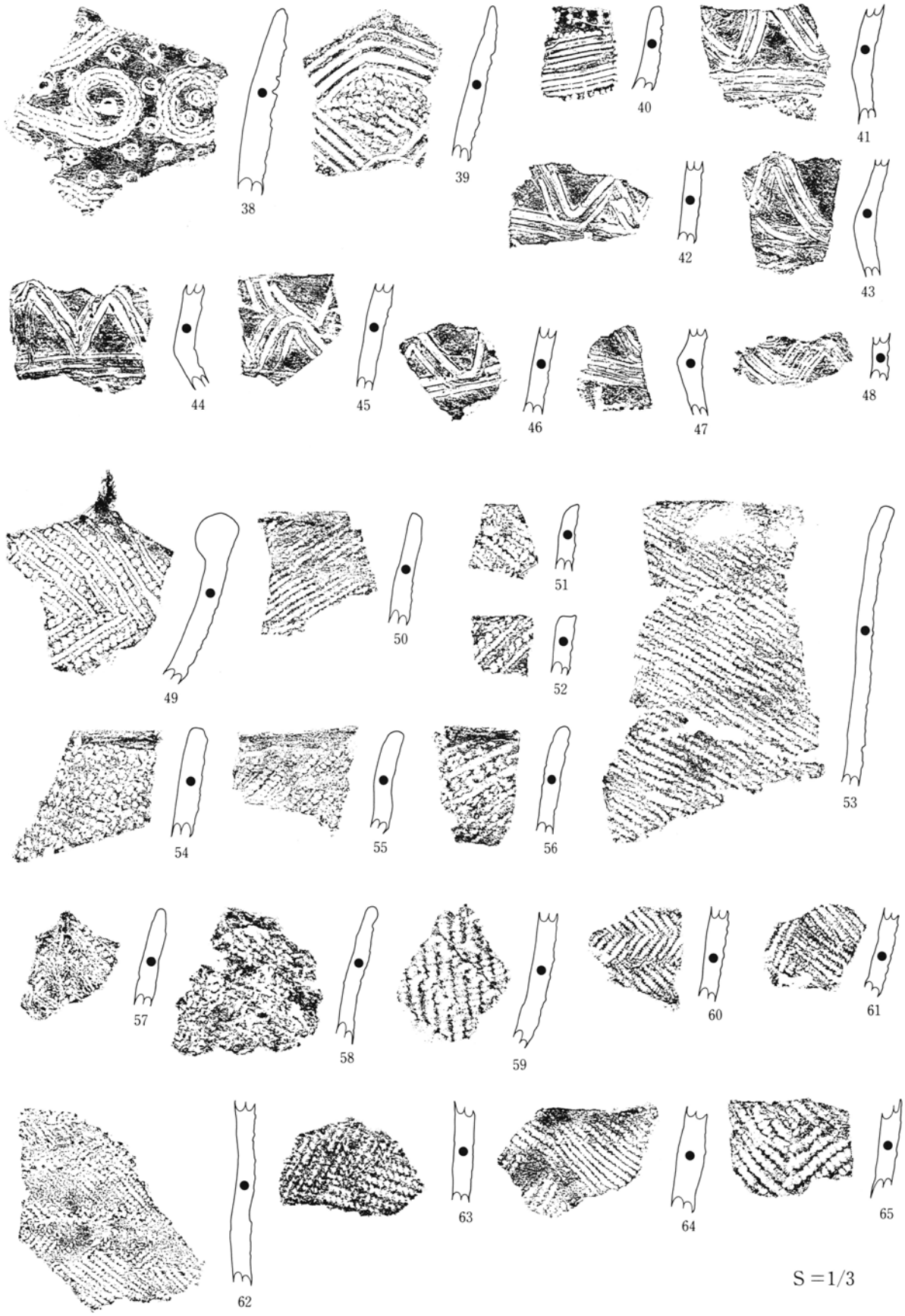
S＝1/3

第123図　遺構外出土土器（８）

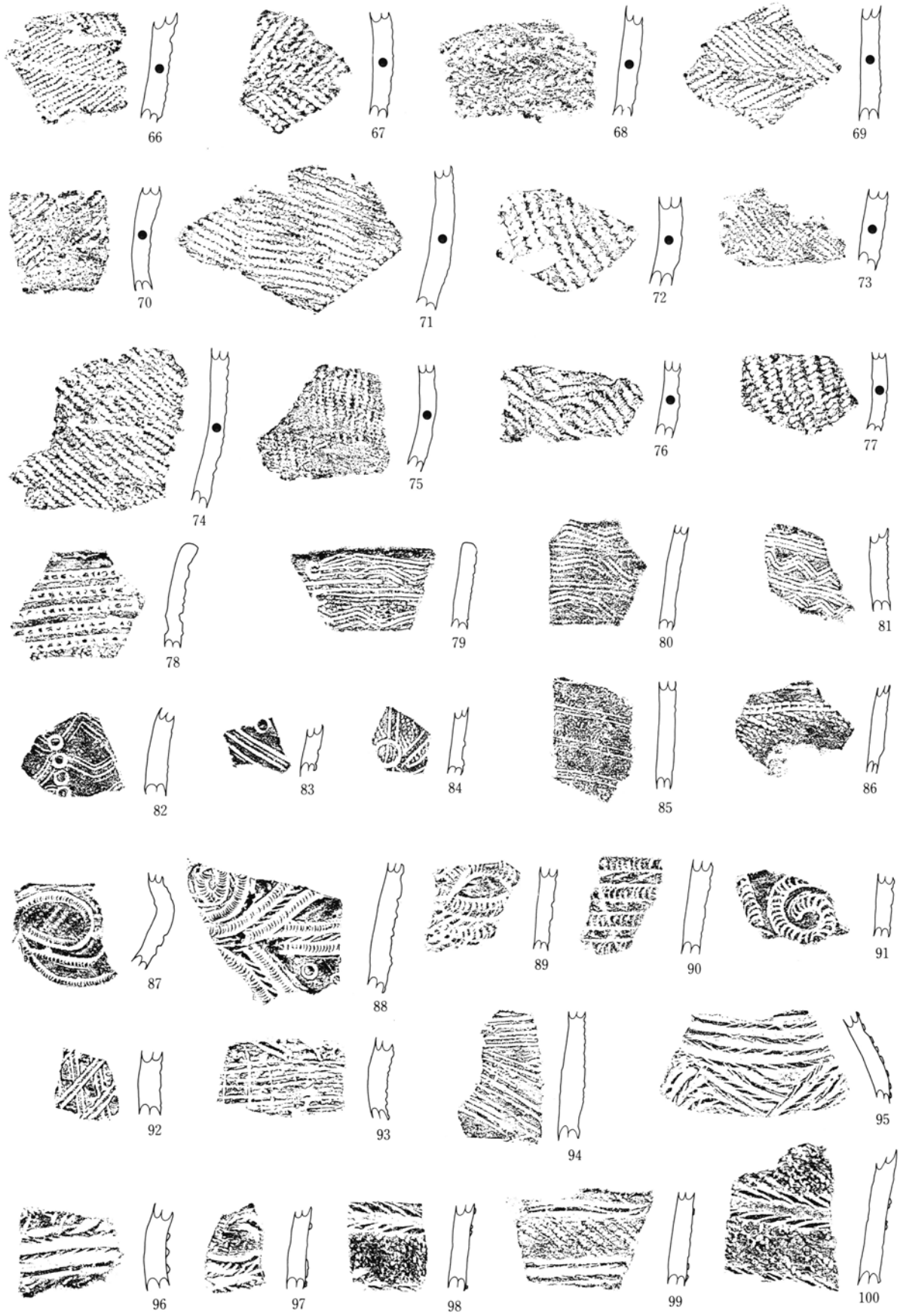


S＝1/3

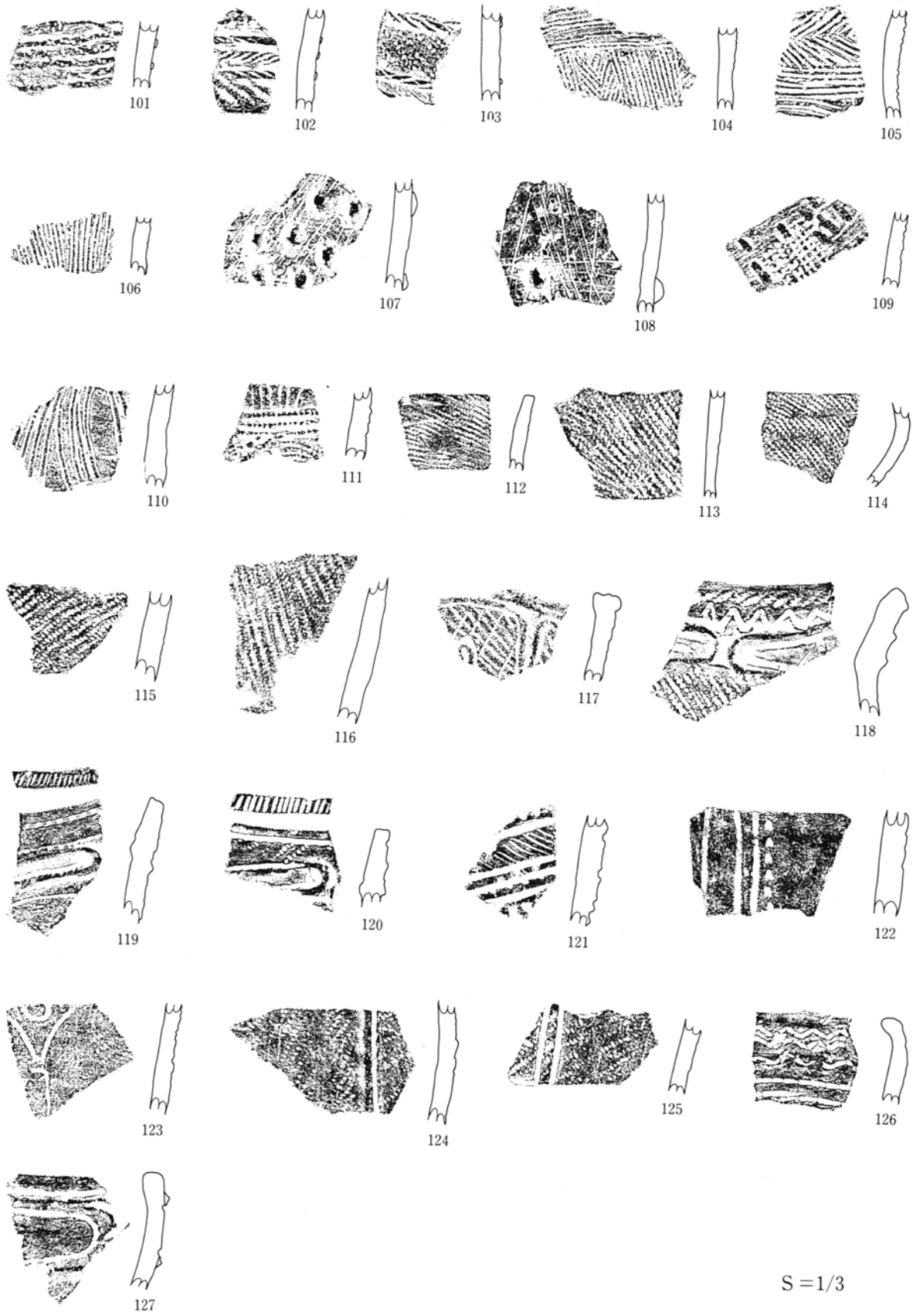
第124図　遺構外出土土器（９）



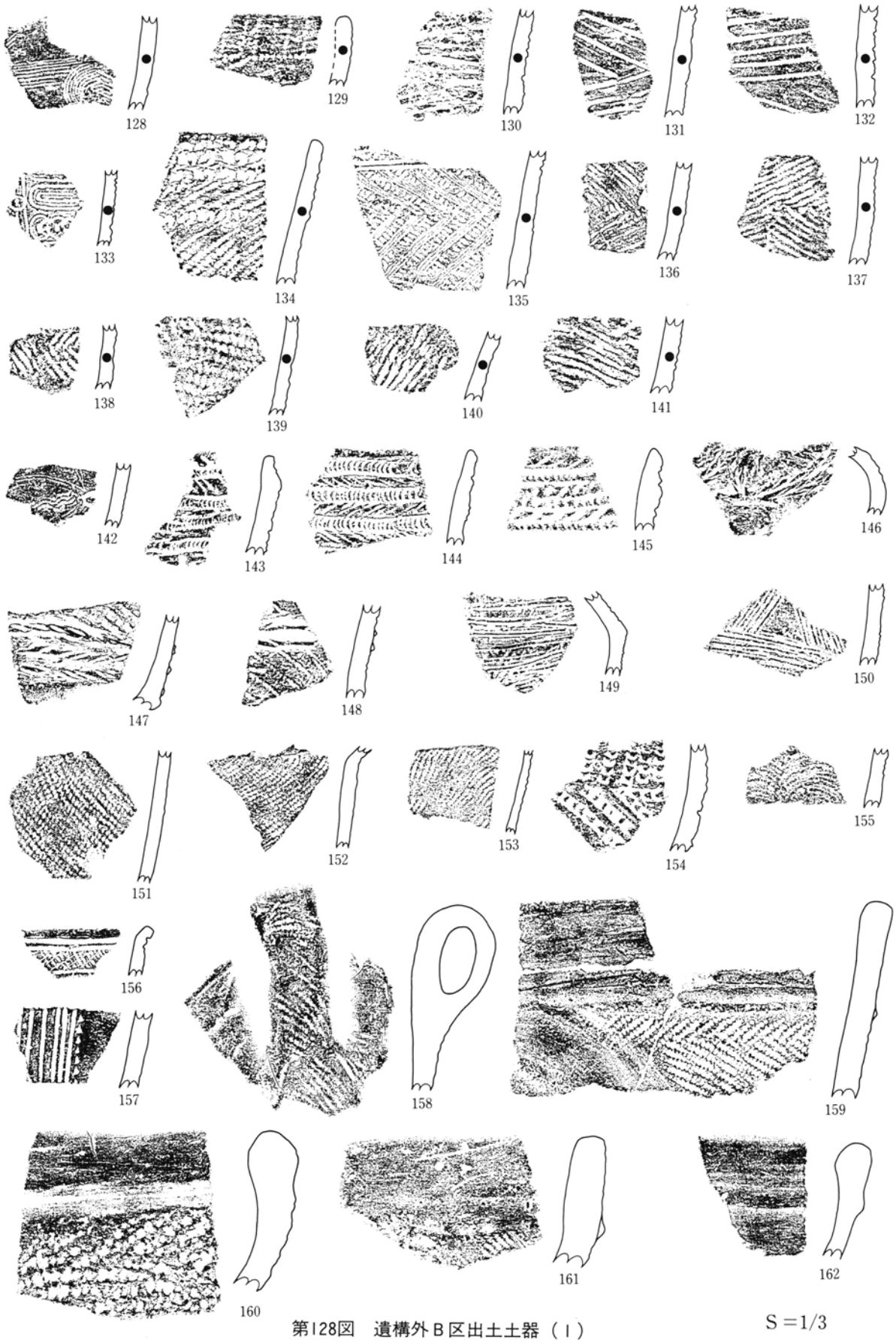
第125図　遺構外Ａ区出土土器（１）



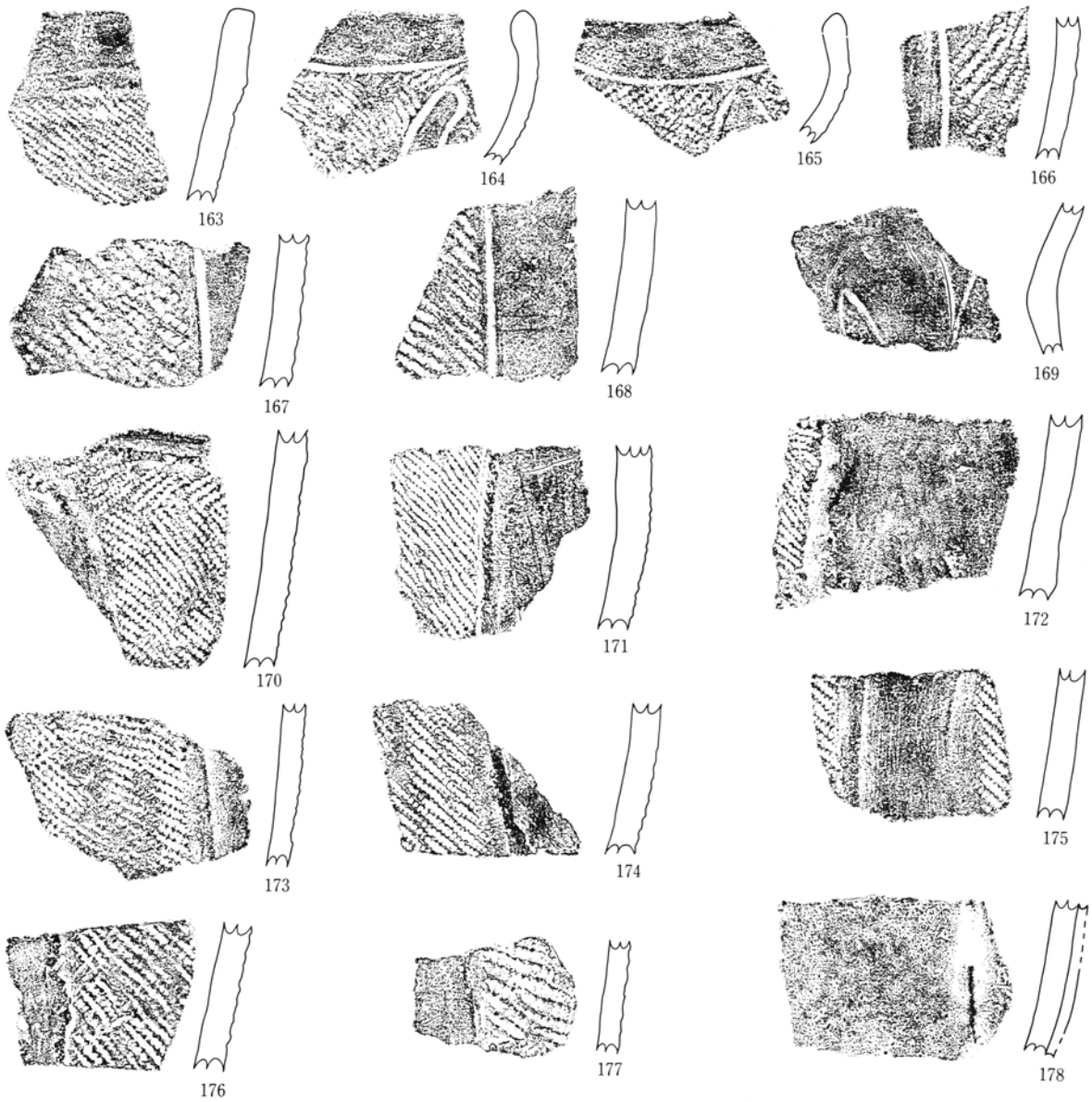
第126図　遺構外Ａ区出土土器（２）　S＝1/3



第127図　遺構外Ａ区出土土器（３）



第128図　遺構外Ｂ区出土土器（１）　　Ｓ＝1/3



S＝1/3

第129図　遺構外Ｂ区出土土器（２）

Ｂ区出土土器（第128・129図）

Ⅱ期Ⅲ群

133は胴部に半裁竹管による縦位･曲線的な文様を描き、さらにコンパス文を有し、円形刺突をもつ。土器の内外面は、共に丁寧に研磨されている。

Ⅱ期Ⅳ群

128は櫛歯状工具により、条線で円形等の文様を描くものであり、129は口縁部に縦位の連点状刺突帯をもち、以下に連点状刺突による文様を描くものである。130～132は口縁下に半裁竹管による平行沈線で、菱形等の文様を描くものである。

Ⅱ期Ⅴ群

134は口縁部以下に閉端環付縄によるループ文が施されるものであり、135は胴部に正反の合の縄による羽状縄文が施されるものである。136～138は羽状縄文が施されるものであるが、136･137にはＬとＲが、138にはLR（０段多条）とRL（０段多条）が用いられている。139はRLが施され、140･141にはＬないしＲが施されている。

Ⅱ期Ⅵ群

142は円形刺突をもち、横位にレンズ状の弧状沈線および波状沈線を施すものである。

Ⅱ期Ⅶ群

143～145は平口縁となる口縁部に、平行な爪形文を施し、爪形文の間に刻みを有するもので、143の口舌部にも刻みをもつ。146～148は刻みを有する浮線文で文様を描くものであり、146は頸部に曲線的な文様を描き、147･148は胴部に数条巡らせ、地文に縄文をもつ。149は屈曲する頸部に、平行沈線を巡らせるもので、地文には縄文をもつ。

Ⅱ期Ⅷ群

150は集合沈線で平行ないしは弧状に文様を描くもの。154は爪形刺突で縦位ないし斜位に文様を施すものである。

Ⅱ期Ⅸ群

155は口縁下に、沈線で弧状ないし渦巻き状の文様を描くものである。

Ⅱ期Ⅹ Ⅴ群

151～153は胴部に縄文を施すものであり、151にはRLが、152・153にはLRの縄文が施されている。

Ⅲ期Ⅰ群

156は平口縁となる口縁部に、沈線で口縁部区画を行い、区画内に格子状の沈線を施すものである。157は胴部に垂下する数条の沈線と、点列状の刺突を施したものである。

Ⅲ期Ⅳ群

158は波状口縁となる口縁部の波頂部に把手をもち、口縁部が無文で、以下にLRの縄文を施したもの。159は平口縁となる口縁部に、１条の隆体を巡らせて口縁部無文帯を区画し、胴部に隆帯で曲線的な文様を描き、区画内にLRの縄文を施している。160は平口縁となる口縁部に、太い沈線で口縁部文様を区画し、区画内にLRの縄文を充填する。161も同様であるが、RLの縄文を施すものである。163は平口縁となる口縁部が無文帯となり、以下にRLの縄文を施すものである。164･165は同一個体となるもので、内反する口縁部が無文帯となり、１条の沈線で区画された口縁以下に弧状の文様が描かれ、LRの縄文が施されるものである。166～168は胴部に垂下する沈線で区画し、区画内に縦位回転のLRの縄文を施している。170～178は胴部に垂下ないし弧状の隆体で文様区画し、縦位回転のLRの縄文を施している。

Ｃ区出土土器（第116～124・130～295図）

Ⅰ期Ⅰ群

179・184～186・187が本群の土器であり、胎土に多量の繊維を含む。179は波状口縁となる波頂部に、垂下する隆帯をもち、表面には地文に条痕を施した後、縦位の爪形刺突を施すもので、裏面にも条痕を施している。184は表面に格子状の沈線を施し、裏面には条痕を施している。185は179と同一個体となるもので、表面に地文条痕と縦位の爪形刺突、裏面に条痕を施すものである。186・187は表面に地文条痕と縦位の平行沈線が施され、裏面に条痕が施されているものである。

Ⅰ期Ⅱ群

180～183が本群の土器であるが、180・181は無繊維土器であり、182・183は胎土に多量の繊維を含む。180は口舌部に刻みをもち、口縁部に原体側面圧痕により２条の平行線を施し、その下に鋸歯状の文様を描く。181は口縁部に原体側面圧痕を斜位に施し、地文に縄文を施すもの。この180･181は、本期（早期）の所産のものではなく、他の時期の土器である可能性もある。182・183は口舌部および表裏面に条痕を施し、表面には絡条体圧痕がやや斜位に施されている。なお、182では羽状に施されている。

Ⅰ期Ⅲ群

188～202が本群の土器であり、胎土に多量の繊維を含む。これらの土器は、いずれも表裏面に条痕を施すものである。

Ⅱ期Ⅰ群

205・207の２点が本群の土器であり、胎土に繊維を含む。205は口縁下にＬ・Ｒ・Ｌの３本１組の撚糸側面圧痕によりループ状の主文様を描き、刺し切り文（棒状刺突）を充填させ、口縁部文様下に１条の刻みをもつ隆帯を巡らせて文様帯区画を行い、胴部にLRの縄文を施す。207は胴部上半に１条の刻みをもつ隆帯を巡らせ、以下の胴部にLRとRL（０段多条）による羽状縄文を施している。

Ⅱ期Ⅱ群

１・20・206・208～239を本群としたが、この内の一部はⅡ期Ⅲ群に含めるべき土器も存在する。とりあえず、本群の中で観察する。これらの土器の胎土には、全て繊維が含まれている。１は頸部が緩やかに括れ、

口縁が外反する大形の深鉢の器形を呈する土器で、平口縁となる口縁に角状の突起を４単位もつものと思われる。口縁直下にはまばらに爪形刺突を施し、その下に１条の鍔状の隆帯を巡らせ、隆帯の上下には沈線を添わせ、隆帯の一部には刻みを有する。頸部の括れ部には、半裁竹管による円形、Ｘ字状、の字状等の主文様が断面蒲鉾状の沈線で描かれ、部分的に爪形刺突をも有する。その下部には数条の平行沈線が巡らされ、文様帯の区画を行っている。なお、地文および胴部には、０段多条の正反の合の縄により羽状縄文が施されている。209～212は地文にＬＲの縄文を施し、半裁竹管による断面蒲鉾状の沈線で菱形状の文様を描くものである。213～220は同一個体となるもので、頸部の括れ部上半に半裁竹管による平行沈線と鋸歯文を数段描くもので、胴部には縄文が施されている。221は櫛歯状工具により平行および波状に文様を描くもの。222～224は同一個体となるもので、平口縁となる口縁下に半裁竹管による刺突列を巡らせ、その下に菱状の文様を平行沈線で描く。さらに、胴部にも沈線や刺突を施している。225は地文縄文の口縁部に、半裁竹管で菱状の文様を描くもの。226は半裁竹管による刺突状の短沈線を施すものである。227は口縁下に半裁竹管による菱形ないしは三角状の文様を描き、口縁部以下にＬの縄文を施すものである。228・229は口縁部に櫛歯状工具によりコンパス文を施すものである。230は口縁から頸部にかけて、櫛歯状工具による縦位の波状文を描き、胴部にＬＲの縄文を施している。234・235は同一個体となるもので、括れ部に円形および横位の隆帯で文様帯を区画し、上半にはＸ字状の隆帯と短沈線を施し、地文および胴部にＲの縄文を施すもの。237は波状口縁となる口縁部に、隆帯と短沈線で文様を描くものである。204・206・208は同一個体となるもので、括れ部に３条の細い隆帯を巡らせるものであり、ＬＲ（０段多条）とＲＬ（０段多条）による羽状縄文および０段多条のＲＬＲの縄文が施されている。236・238・239は胴部に閉端環付縄によるループ縄文が施されるものであり、238・239には１条の爪形刺突が巡らされている。

Ⅱ期Ⅲ群

240～329・1198～1212が本群の土器であり、胎土に繊維を含む。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

Ａ類　沈線により、平行、鋸歯状、菱形状等の文様を描くものを本類とした。

240・241は同一個体となるもので、波状口縁となる波頂下に長楕円状の隆帯をもち、口縁下に半裁竹管による数条の平行沈線を口縁に添わせるように巡らせ、口縁以下にＬＲとＲＬによる羽状縄文を施すものである。243・244も同一個体となるもので、波状口縁となる波頂下に垂れ下がるような円形の隆帯をもち、口縁下に半裁竹管による数条の平行沈線を口縁に添わせるように巡らせている。この240・241と243・244は、同一個体である可能性があり、その場合は波頂下隆帯が２対の異なる隆帯形状の土器となる。242・251は波状口縁となる波頂下に棒状に垂下する隆帯をもち、口縁下に半裁竹管による数条の平行沈線を口縁に添わせるように巡らせるもの。245は平口縁に棒状の垂下する隆帯をもち、口縁以下にＲの縄文を施している。248は小波状口縁となる波頂部に垂下する隆帯をもち、口縁下に半裁竹管による平行沈線と縄文を施すものである。249・250は口縁下に棒状の垂下する隆帯をもち、口縁部に半裁竹管による平行沈線で菱形状等の文様を描くもの。246は平口縁となる口縁に角状突起をもち、口縁下に２条の隆帯を巡らせるもの。247は小波状口縁をなし、口縁下に２条の隆帯を巡らせ、さらに上下の隆帯を結ぶ縦位の隆帯をももち、以下に縄文を施すもの。252は平口縁となる口縁下に１条の隆帯を巡らせ、その下に半裁竹管による沈線で鋸歯状の文様を描き、Ｒの縄文を施す。253・254は同一個体となるもので、平口縁となる口縁下に半裁竹管による数条の平行沈線を巡らせ、その下に菱形状の文様を描く。地文にはＬＲの縄文が施されている。255は口縁下に沈線で菱形の文様

を描き、その内部に十文字状の沈線を施している。257は口縁下に半裁竹管による平行沈線を数条巡らせ、その下にRLの縄文を施すものである。

B類　主にコンパス文を施文するものを本類とした。

258・259・260・263は同一個体となるもので、口端部がやや内反する平口縁をなし、口縁部に半裁竹管による平行沈線を数条巡らせ、その間にコンパス文を１条有する。胴部にはLR（０段多条）とRL（０段多条）による羽状縄文が施されている。21・262・264は口端部がやや内反する平口縁をなし、口縁部に半裁竹管によるコンパス文と平行沈線を数段巡らせるもの。265～268は内反ぎみの平口縁をなし、口縁部に１条のコンパス文を巡らせ、以下にLの縄文を施すもの。269・270は平口縁の口縁部に２条のコンパス文を巡らせ、地文にLの縄文を施している。271・272は平口縁の口縁部に間隔を開けた２条のコンパス文を巡らせ、地文にLの縄文を施すものである。273・274は口縁部にコンパス文のみを施すもの。275は内反ぎみの平口縁に小突起をもち、口縁部に１条のコンパス文を巡らせ、以下にLの縄文を施すもの。276は口端部がやや内反する平口縁をなし、口縁部に半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線と、コンパス文ないし波状文を数段巡らせるもの。277～279は口端部が内反する平口縁をなし、口縁部に１条のコンパス文を巡らせ、以下に右下がりないし左下がりの斜位に沈線およびコンパス文を施すものである。280は内反ぎみの小波状口縁をなし、口縁直下に１条のコンパス文を巡らせ、その下へは波頂下に縦位の沈線で区画し、横位の平行沈線とコンパス文を数段施している。281は口縁に小突起をもち、口縁下に２条のコンパス文を巡らせ、爪形刺突をもつ平行沈線で鋸歯状等の文様を描く。282・284は内反ぎみの平口縁の口縁部に、爪形刺突をもつ平行沈線とコンパス文を数段巡らせるもの。283は内反する平口縁をなし、口縁直下に爪形刺突をもつ平行沈線で横位の長楕円文を描き、その下に縦位ないし横位の長楕円およびコンパス文を描くものである。288～290・292～294・297は口縁部に平行沈線とコンパス文を横位に描くものである。291は口縁部に横位の平行沈線と斜位のコンパス文を描くものであり、295は斜位の平行沈線とコンパス文を施すものである。296は口縁部にコンパス文のみを施すもの。298～309は頸部の括れ部ないし胴部にコンパス文を巡らせるものであり、胴部には縄文が施されている。300・301・303・305・306はLの縄文が、298はRL、299・302はLR、304はLR（０段多条）、308はLとRによる羽状縄文、307・309にはLRとRLによる羽状縄文がそれぞれ施されている。

C類　爪形刺突をもつ沈線で、対角線文を描くものを本類とした。

310～313は内反ぎみとなる平口縁をなし、口縁部に細い半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を数条巡らせ、胴部ないし地文にLRあるいはRLの縄文をもつものである。311には円形刺突が加えられている。1198は内反ぎみの平口縁の口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線を２条巡らせ、その下に同様の平行沈線を地文の縄文の条方向に斜位に描く。地文はRLの縄文である。1199は内反する平口縁の口縁部に平行沈線を巡らせ、その下へ地文にRLの縄文を施した後に縦位と斜位の平行沈線を描き、縦位沈線上には円形刺突を加えている。1200は内反ぎみの平口縁の口縁部無文帯に２条の平行沈線を巡らせ、その下へ地文としてRLの縄文を施した後に、縦位、横位、斜位の平行沈線を描いている。1201は内反する波状口縁をなし、口縁に添って爪形刺突をもつ平行沈線で長楕円を描き、その下へ地文としてRLの縄文を施した後、波頂下に同様の平行沈線で縦位に、さらには斜位に文様を描いている。1202は内反する波状口縁で、地文にLRとRLで羽状縄文を施し、口縁部に爪形刺突をもつ平行沈線を巡らせ、以下に同様の沈線で縦位および斜位の文様を描く。315～329・1203～1212は胴部に細い半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を、横位、縦位、斜位に描くもので、横位に巡る沈線内が無文帯となり、胴部地文にLRとRLによる羽状縄文が施されている。これらに施される斜位の平行沈線は、地文である縄文の条方向に添うように施文されるのが特徴である。言い替えれば、地文であ

る羽状縄文と一体化して、対角線文が施文されているといえよう。

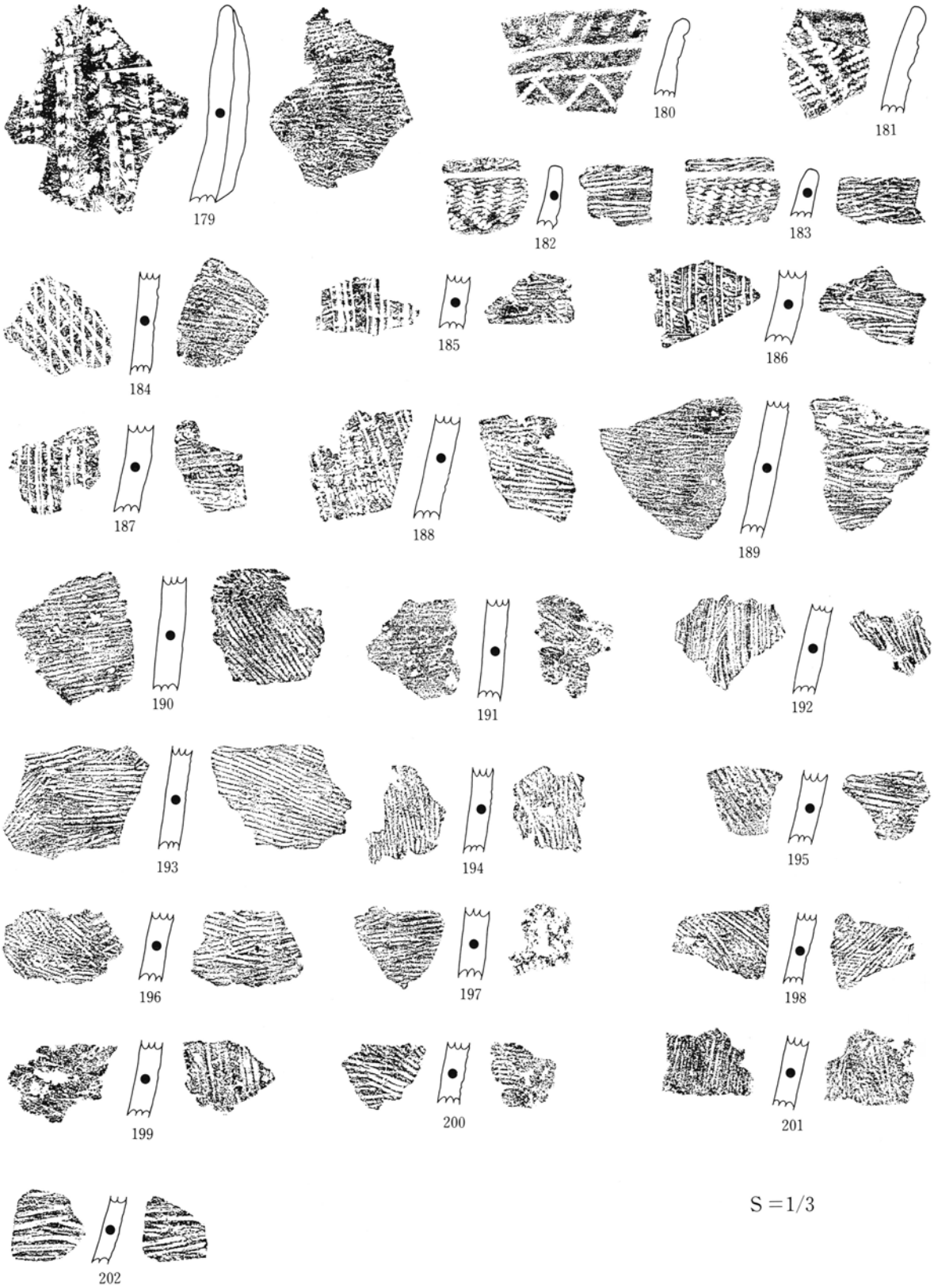
なお、1198～1212の胎土への繊維の混入量は、他の繊維土器に比べてやや少ない。

Ⅱ期Ⅳ群

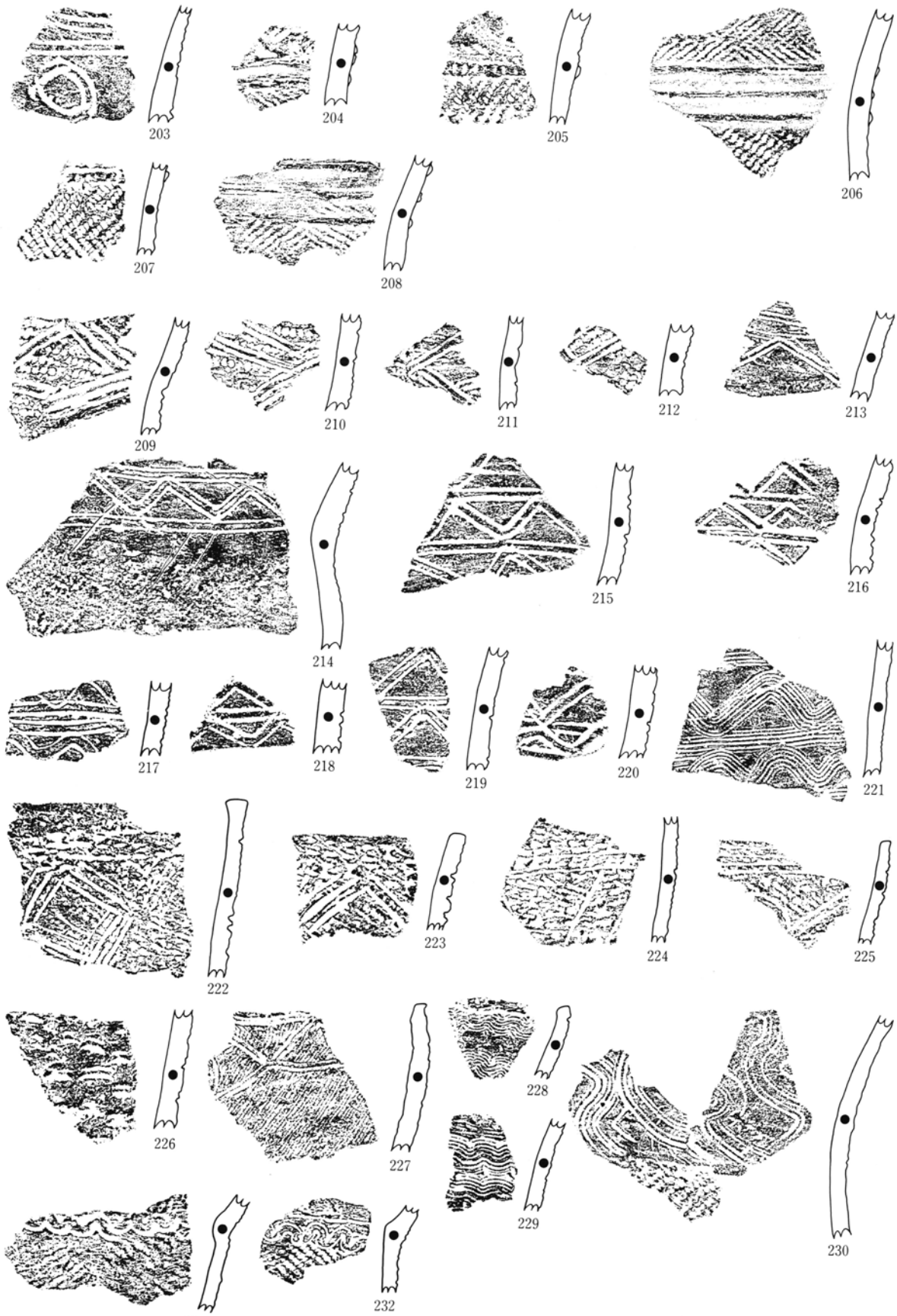
２～５・330～715が本群の土器であり、胎土に繊維を含む。これらの土器は、施文される文様から次のように分類される。

Ａ類　櫛歯状工具により、連点状刺突および条線等で主文様を描くものを本類とした。

２は頸部が括れ、口縁部が大きく外反する深鉢形を呈する土器で、主文様に櫛歯状工具による条線で大形の菱形を描き、菱形の交点部に小さな円を描く。菱形となる条線の上下には連点状刺突が添わされ、条線内にも条線に直交するように連点状刺突が施される。また、菱形の交点下には、連点状刺突により山形状の文様が施されている。頸部の括れ部には、細い隆帯が３条巡り、隆帯の上下および隆帯間にも連点状刺突を巡らせている。３は４単位の大波状口縁をなし、頸部が括れ、口縁部が大きく外反する深鉢形を呈する土器で、口縁下に櫛歯状工具による横位の条線と連点状刺突を巡らせ、その下に大形の菱形を描く。この菱形の上部と下部では施文方法が異なり、上部は条線間に連点状刺突を施すのに対し、下部では条線の片側だけに連点状刺突を施している。頸部の括れ部にも、条線および連点状刺突が巡るようである。４は４単位の大波状口縁をなし、頸部が括れ、口縁部が大きく外反する深鉢形を呈する土器で、波頂下には細い隆帯が垂下する。文様は、口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下には２条の横位の連点状刺突を巡らせて区画し、その下に大形の菱形を描く。施文される菱形は、条線で菱形を描いた後、条線の上下を含めた４条の連点状刺突を施すものである。330は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に２条の横位の連点状刺突を巡らせて区画し、その下に大形の菱形を描く。施文される菱形は、条線で菱形を描いた後、条線の上下に２条、条線内に１条の連点状刺突を施している。331は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に１条の横位の連点状刺突を巡らせて区画し、その下に大形の菱形を描く。施文される菱形は、条線で菱形を描いた後、条線の上下および条線内に１条づつの連点状刺突を施し、条線内にも条線に直交するように連点状刺突が施されている。333は波状口縁となる波長下に細い隆帯を垂下させ、口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に１条の横位の連点状刺突を巡らせて区画するもの。332は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による条線を巡らせた後に縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に１条の細い隆帯を横位に巡らせて区画し、その下に大形の菱形を描く。施文される菱形は、条線で菱形を描いた後、条線の上下に１条づつの連点状刺突を施している。334～338は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に１条の細い隆帯を横位に巡らせて区画し、その下に連点状刺突等により大形の菱形を描くもの。339・342は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に１条の横位の連点状刺突を巡らせて区画し、その下に連点状刺突等により大形の菱形を描く。340・341は波状口縁となる口縁下に、櫛歯状工具による横位の連点状刺突を数条巡らせ、その下に連点状刺突により文様を描くものである。343は波状口縁となる口縁部に、半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線を３条巡らせ、その直下に細い隆帯を１条巡らせて区画し、以下にRLの縄文を施した後、細い隆帯とその上下に連点状刺突を添わせて菱形等の文様を描く。344は口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、その直下に１条の細い隆帯を横位に巡らせて区画し、その下にLRとRLにより羽状縄文を施すもの。345～349は同一個体となるもので、波状口縁となる口縁下に櫛歯状工具による縦位の連点状刺突帯をもち、以下にLR（０段多条）とRLにより羽状

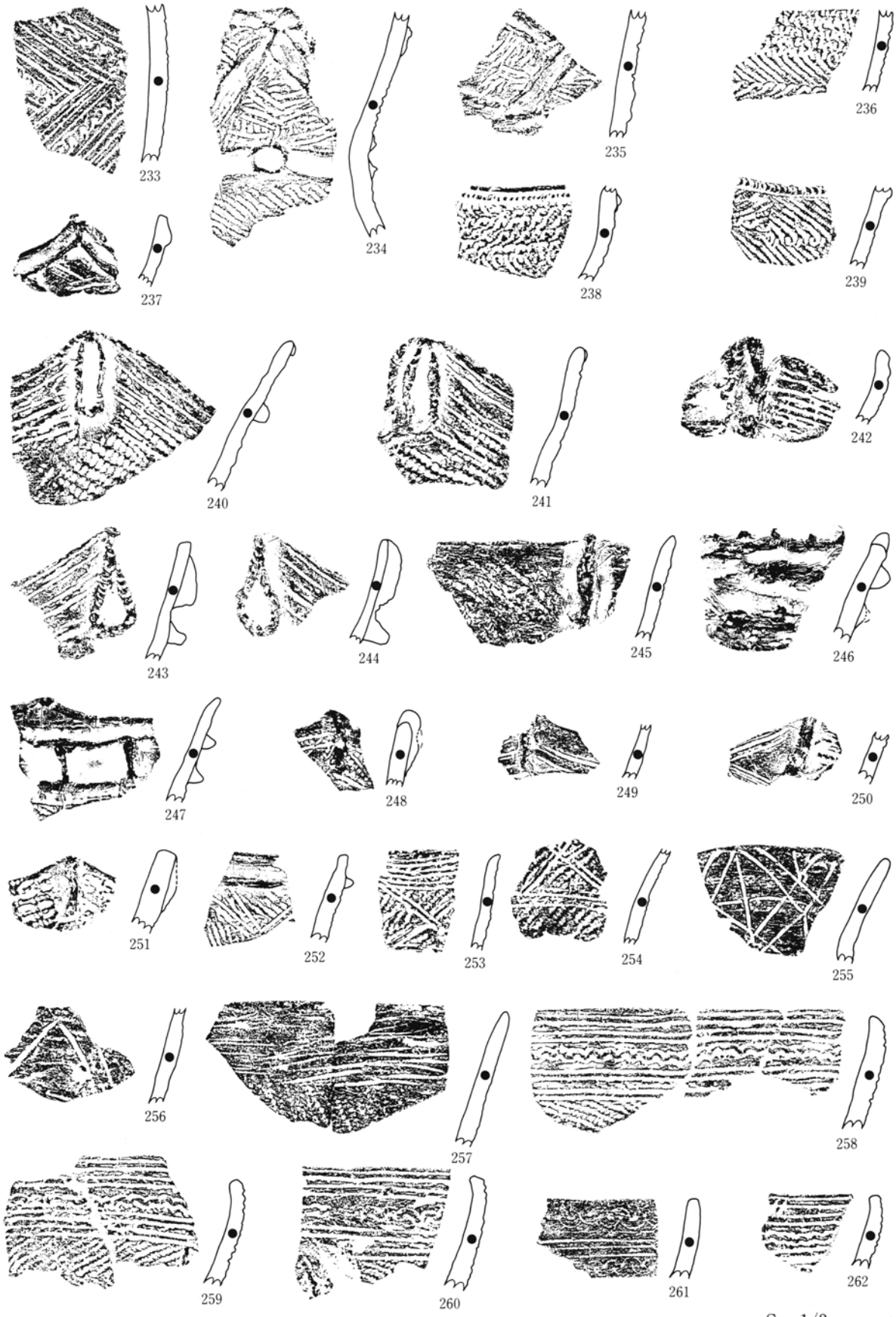


第130図　遺構外Ｃ区出土土器（１）



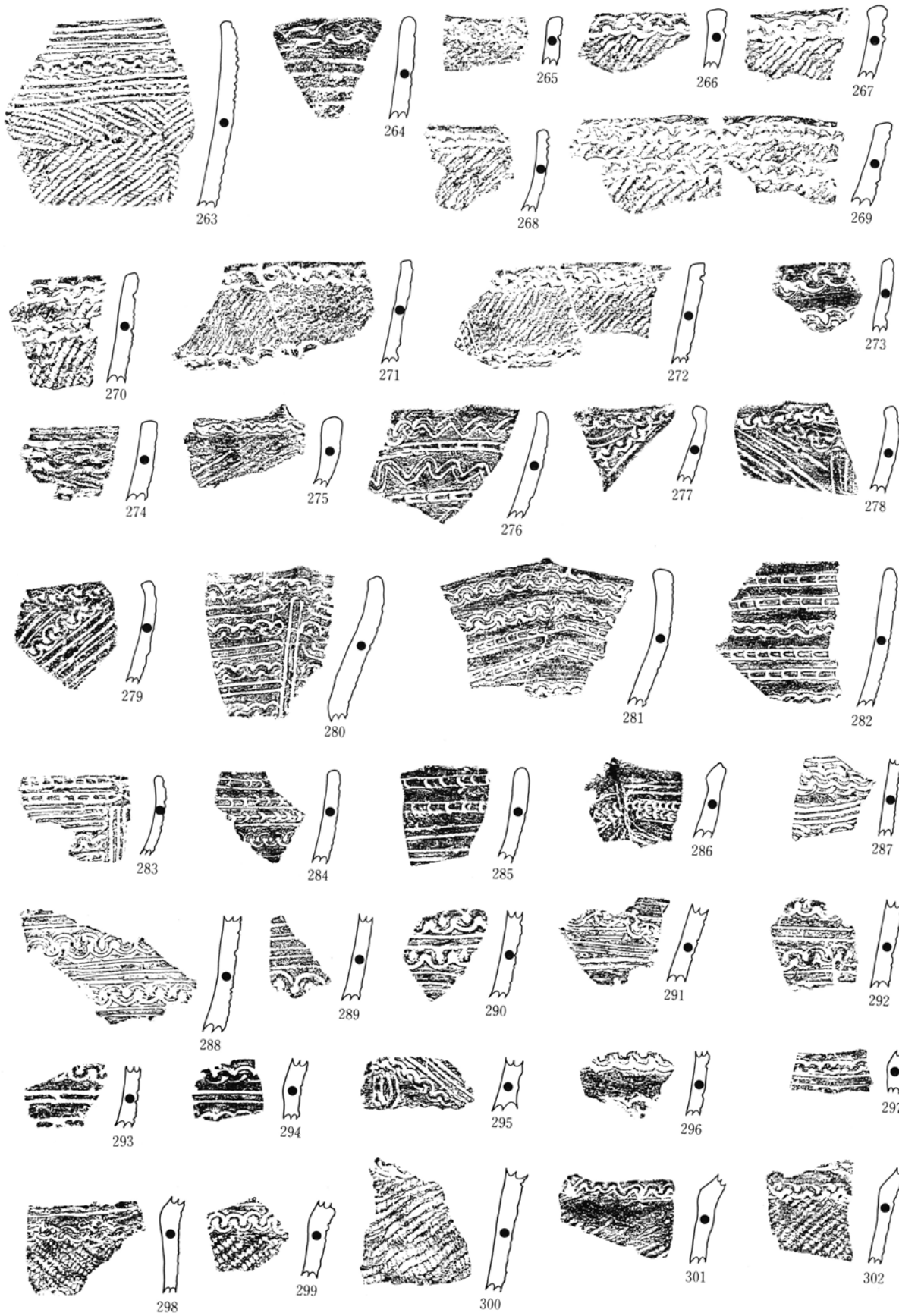
S＝1/3

第131図　遺構外Ｃ区出土土器（２）



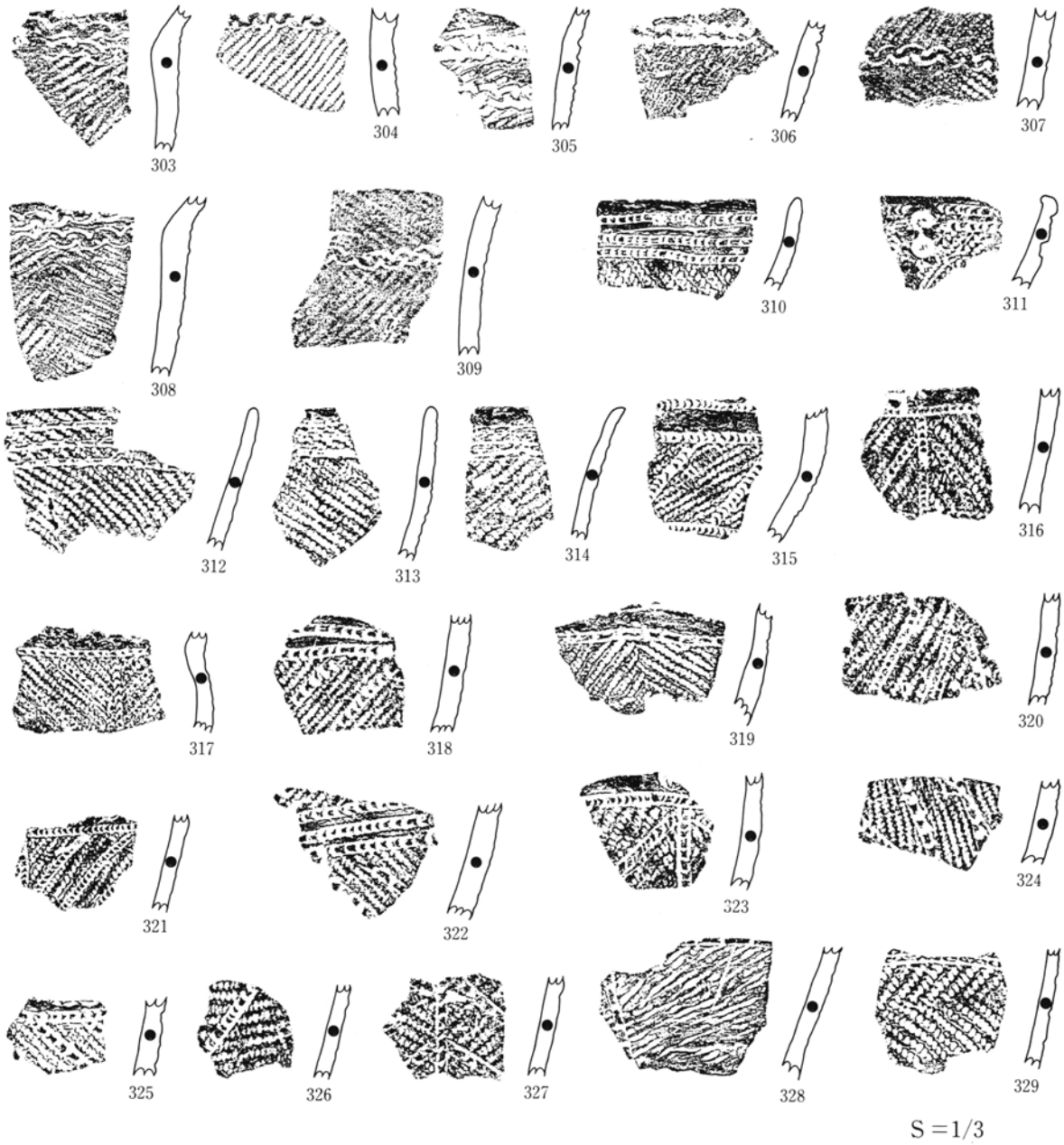
S＝1/3

第132図　遺構外Ｃ区出土土器（３）

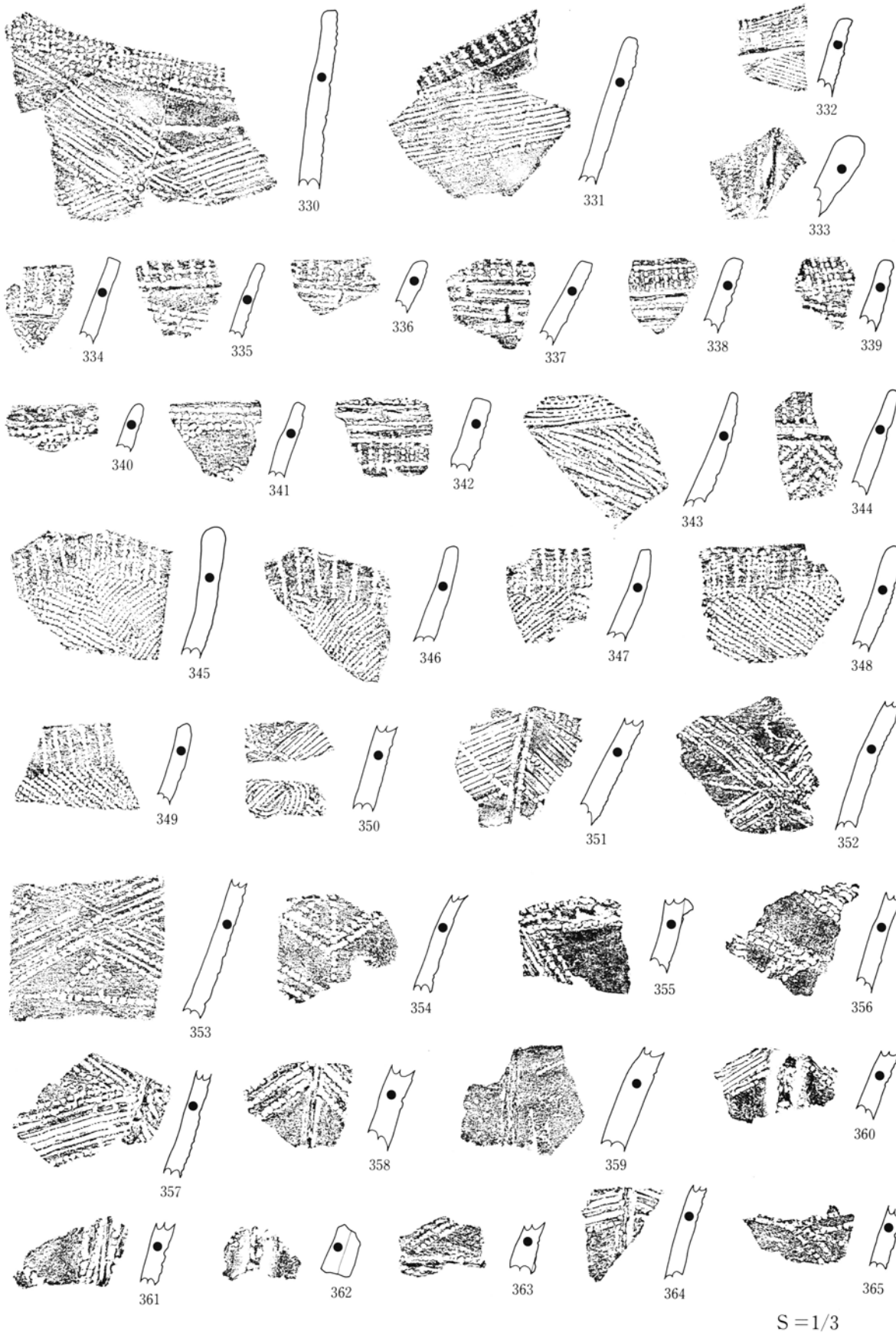


S＝1/3

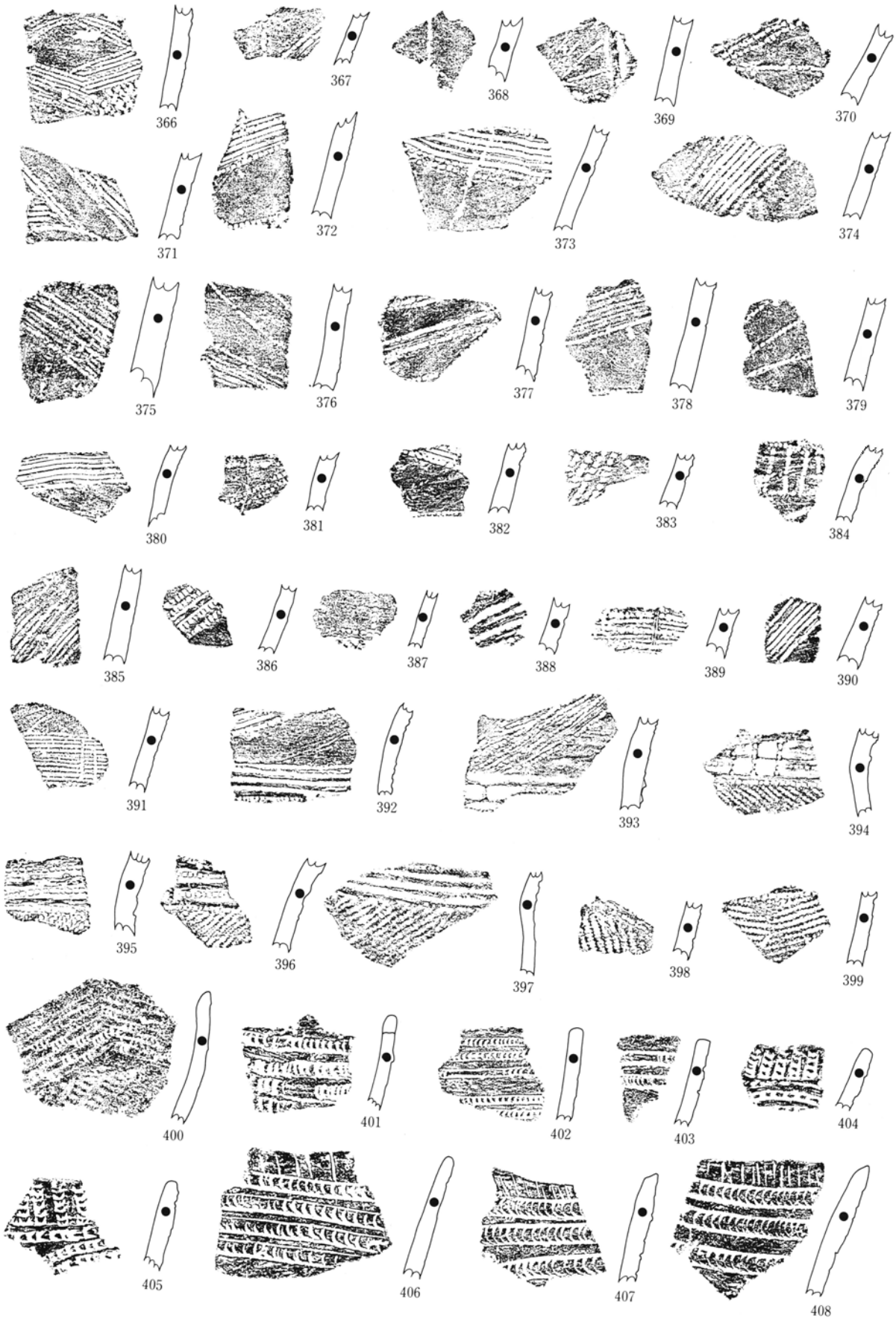
第133図　遺構外Ｃ区出土土器（４）



第134図　遺構外Ｃ区出土土器（５）

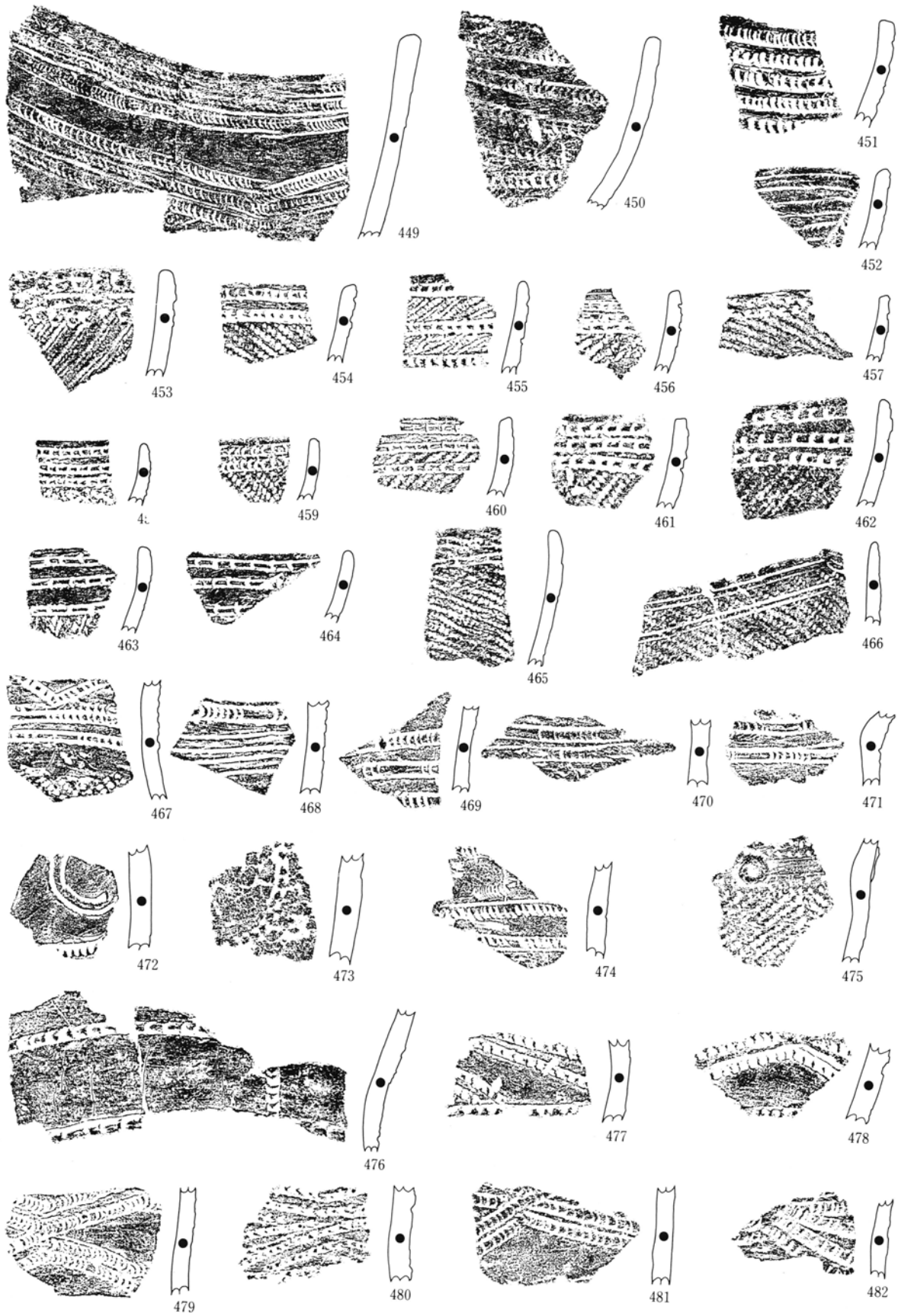


第135図　遺構外Ｃ区出土土器（６）



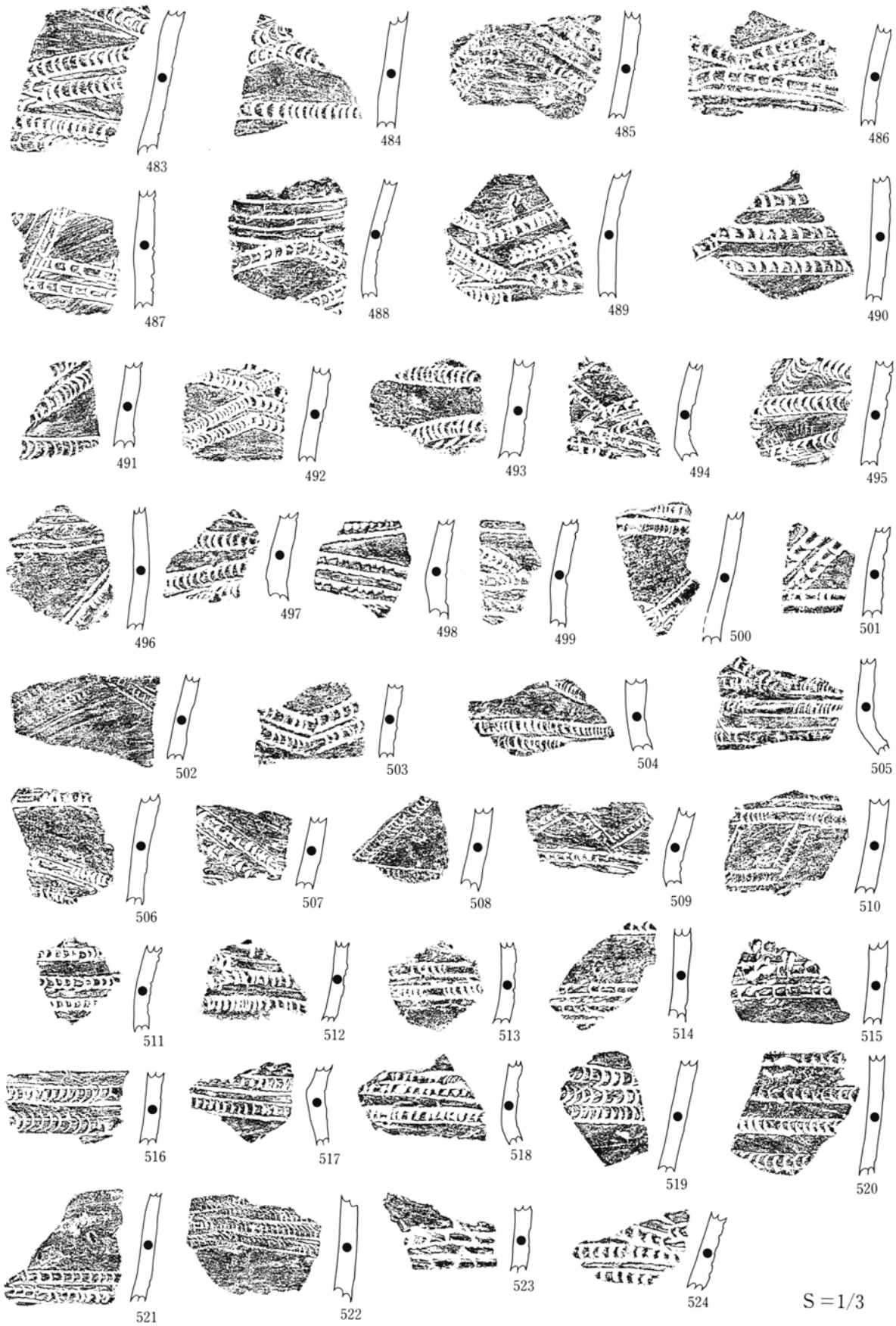
第136図　遺構外Ｃ区出土土器（７）　　Ｓ＝1/3

第137図　遺構外Ｃ区出土土器（８）

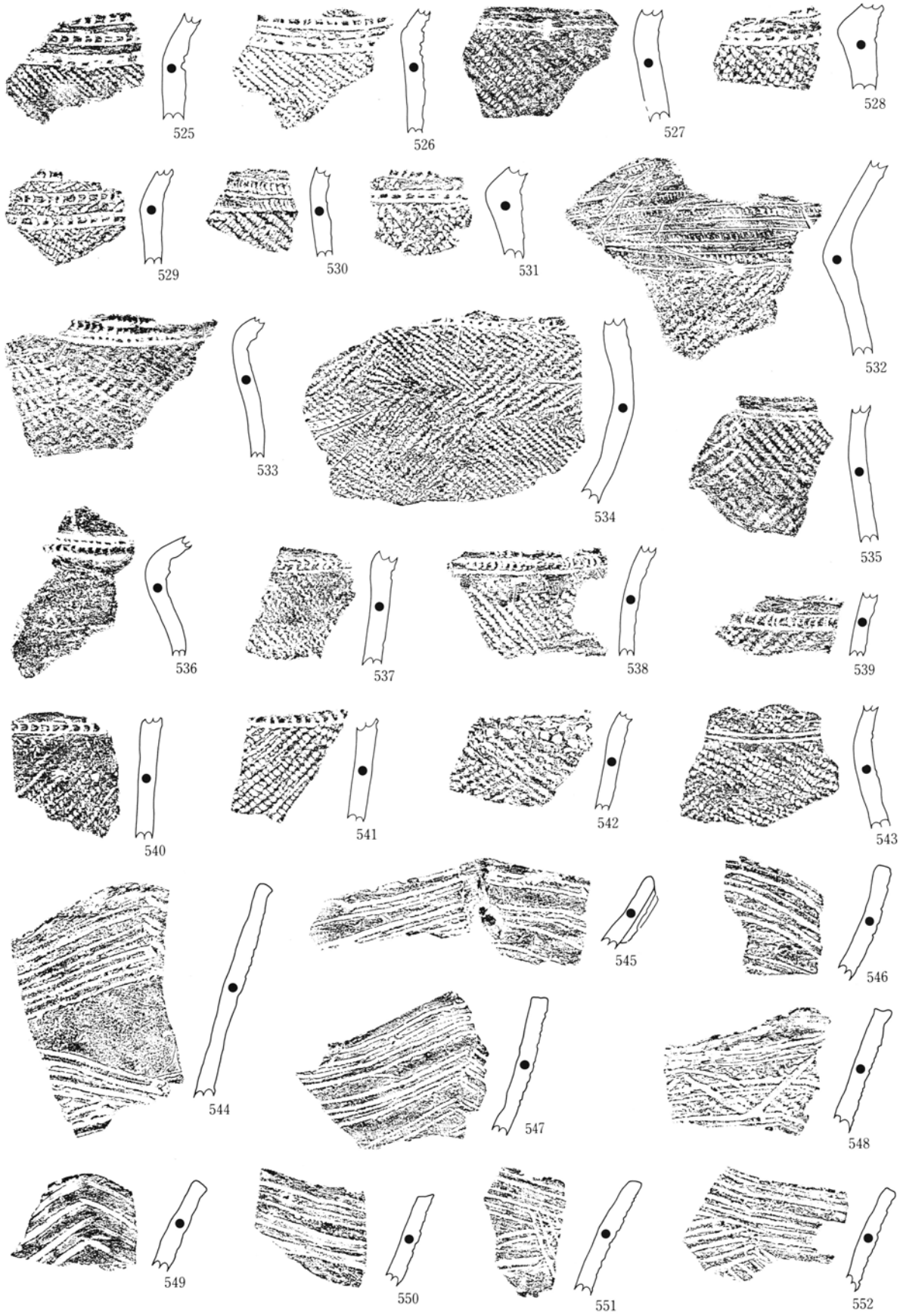


S＝1/3

第138図　遺構外Ｃ区出土土器（９）

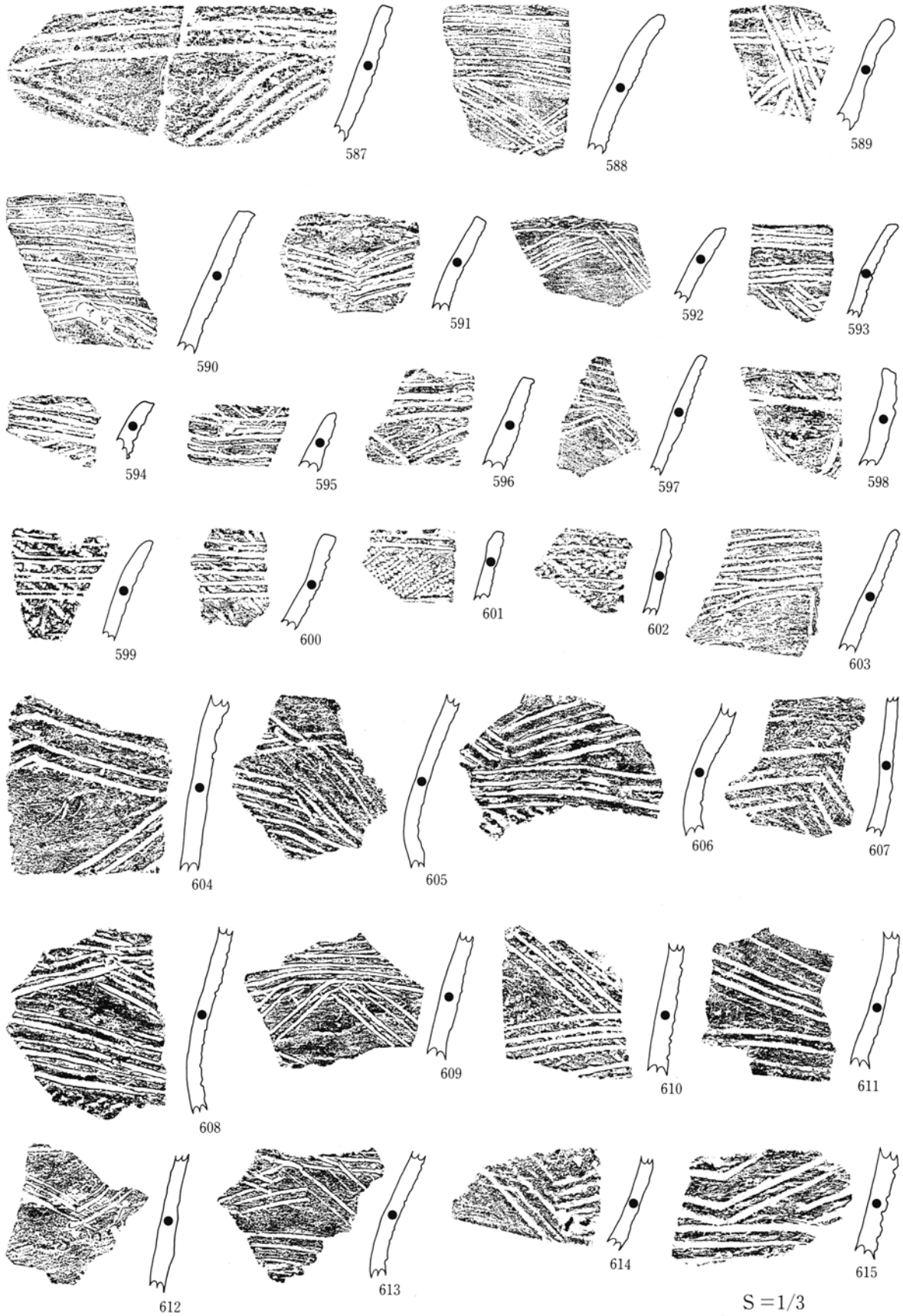


第139図　遺構外Ｃ区出土土器（10）

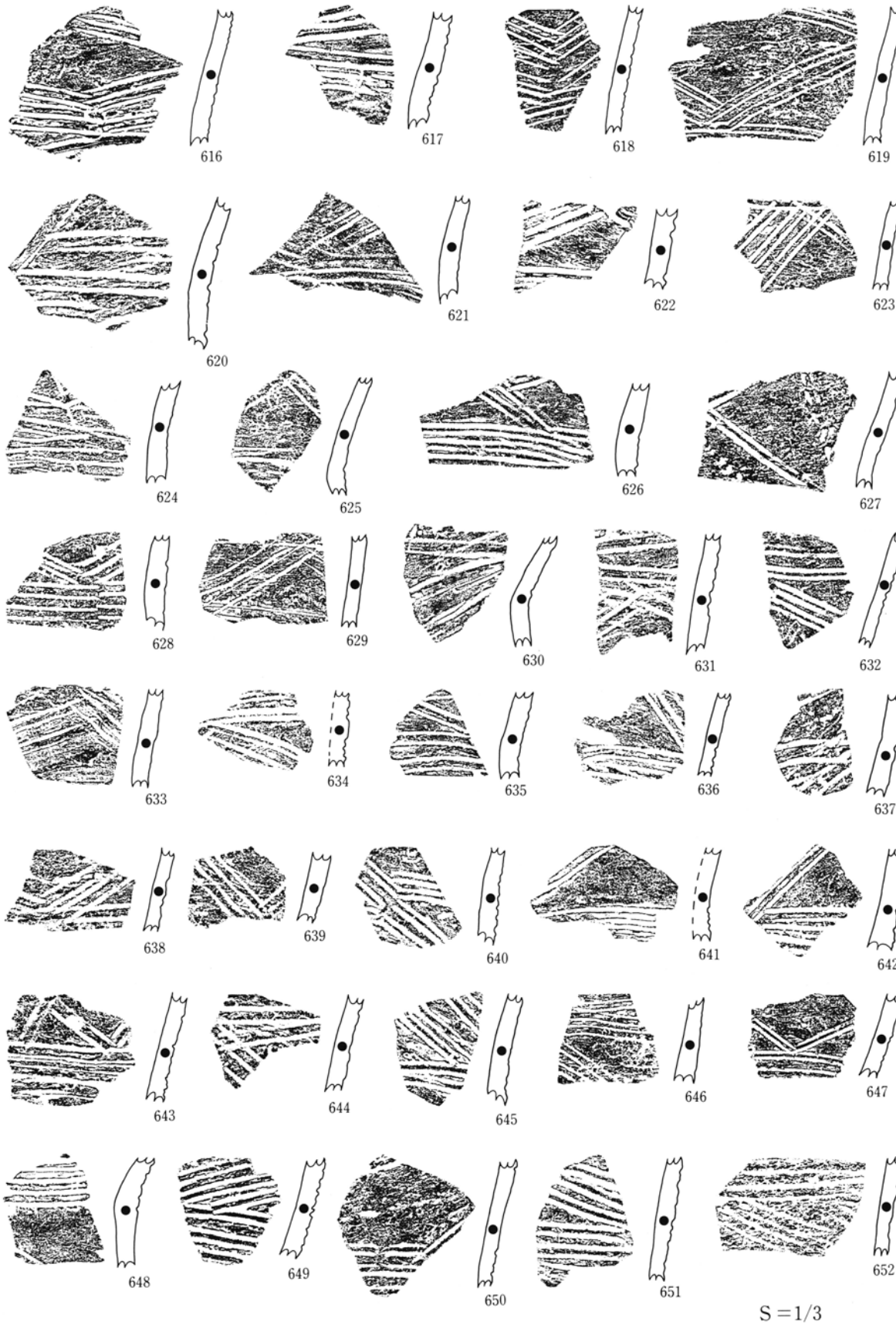


第140図　遺構外Ｃ区出土土器（11）　Ｓ＝1/3

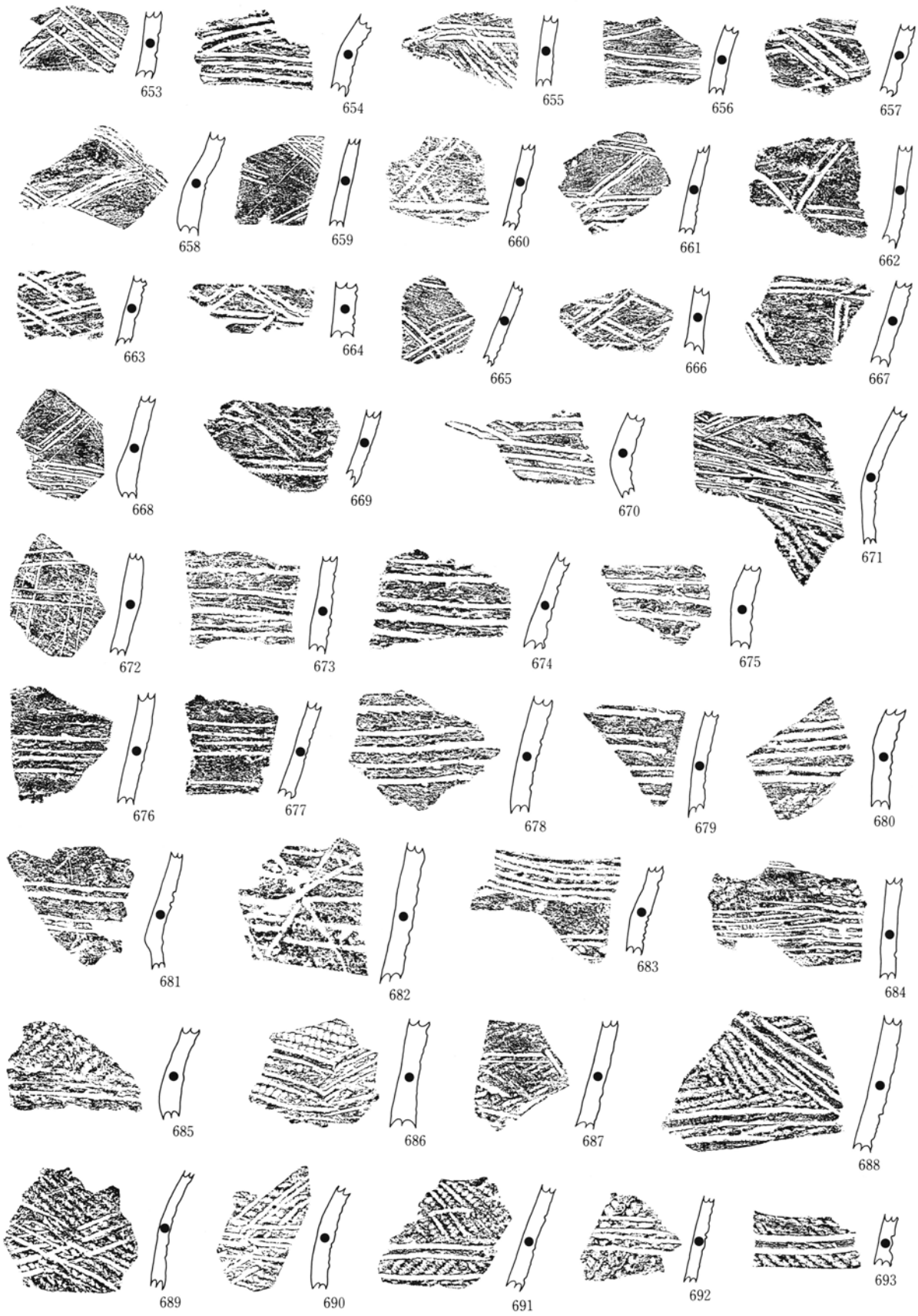
第141図　遺構外Ｃ区出土土器（12）



第142図　遺構外Ｃ区出土土器（13）

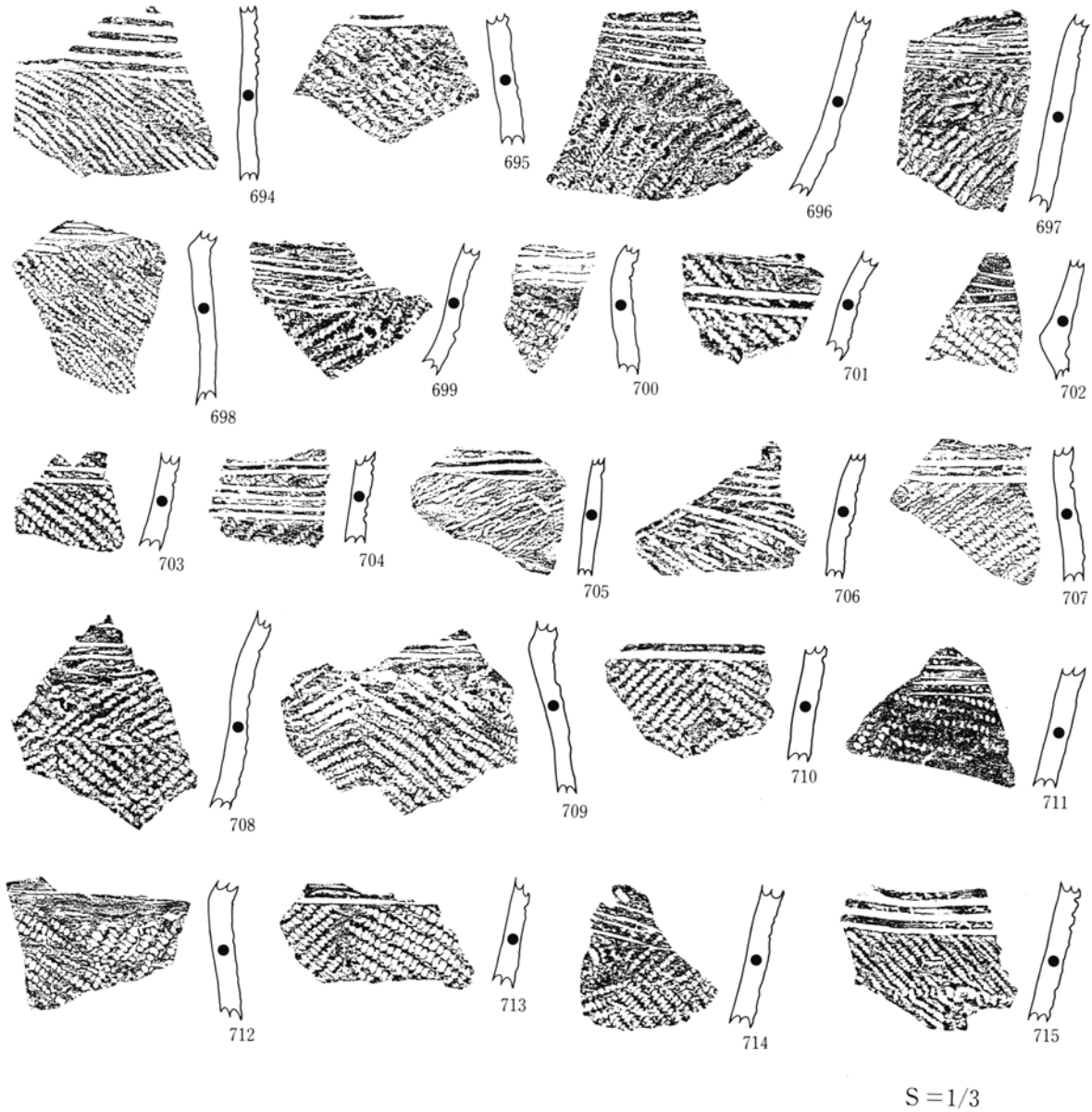


第143図　遺構外Ｃ区出土土器（14）

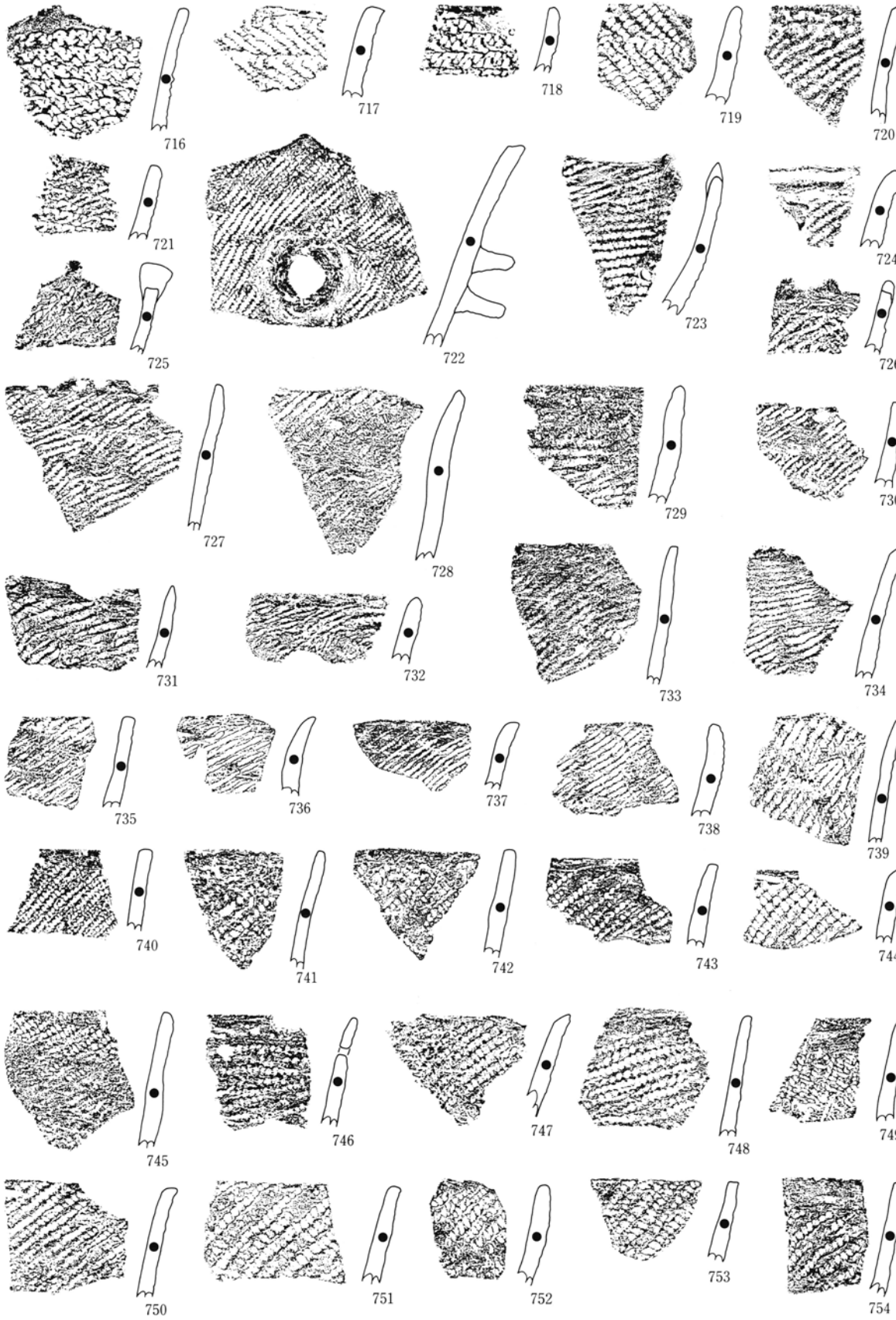


S＝1/3

第144図　遺構外Ｃ区出土土器（15）

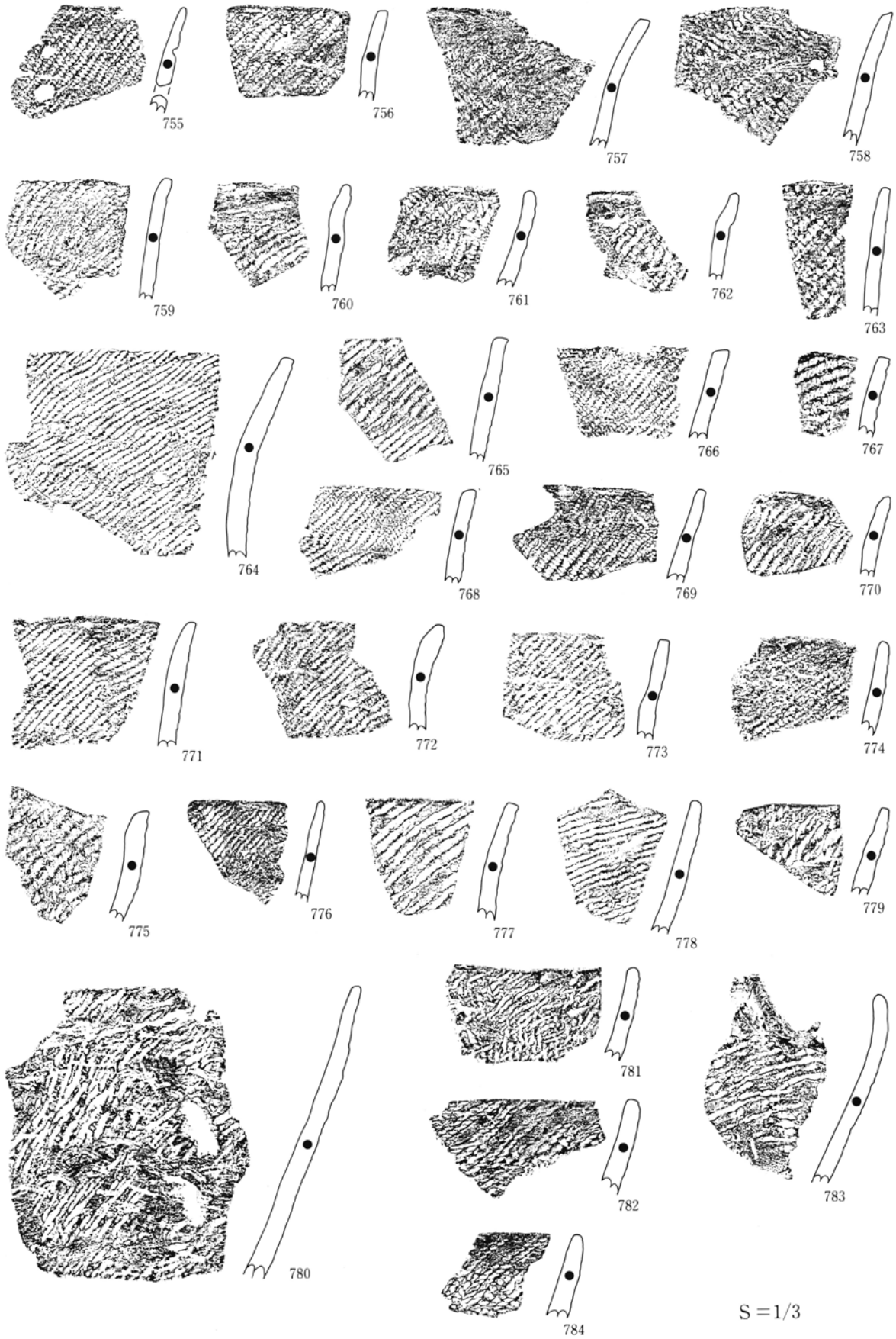


第145図　遺構外Ｃ区出土土器（16）

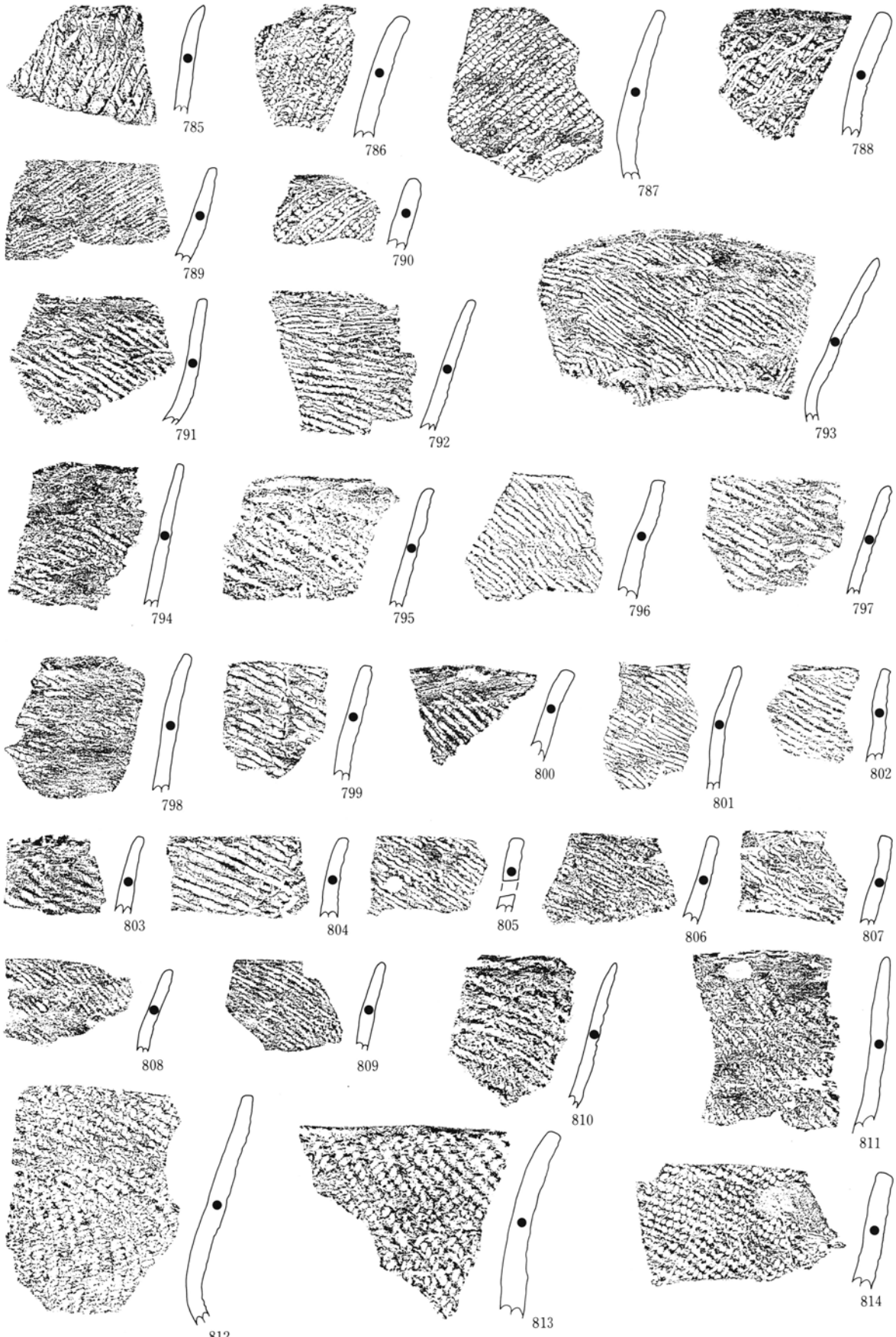


S＝1/3

第146図　遺構外Ｃ区出土土器（17）

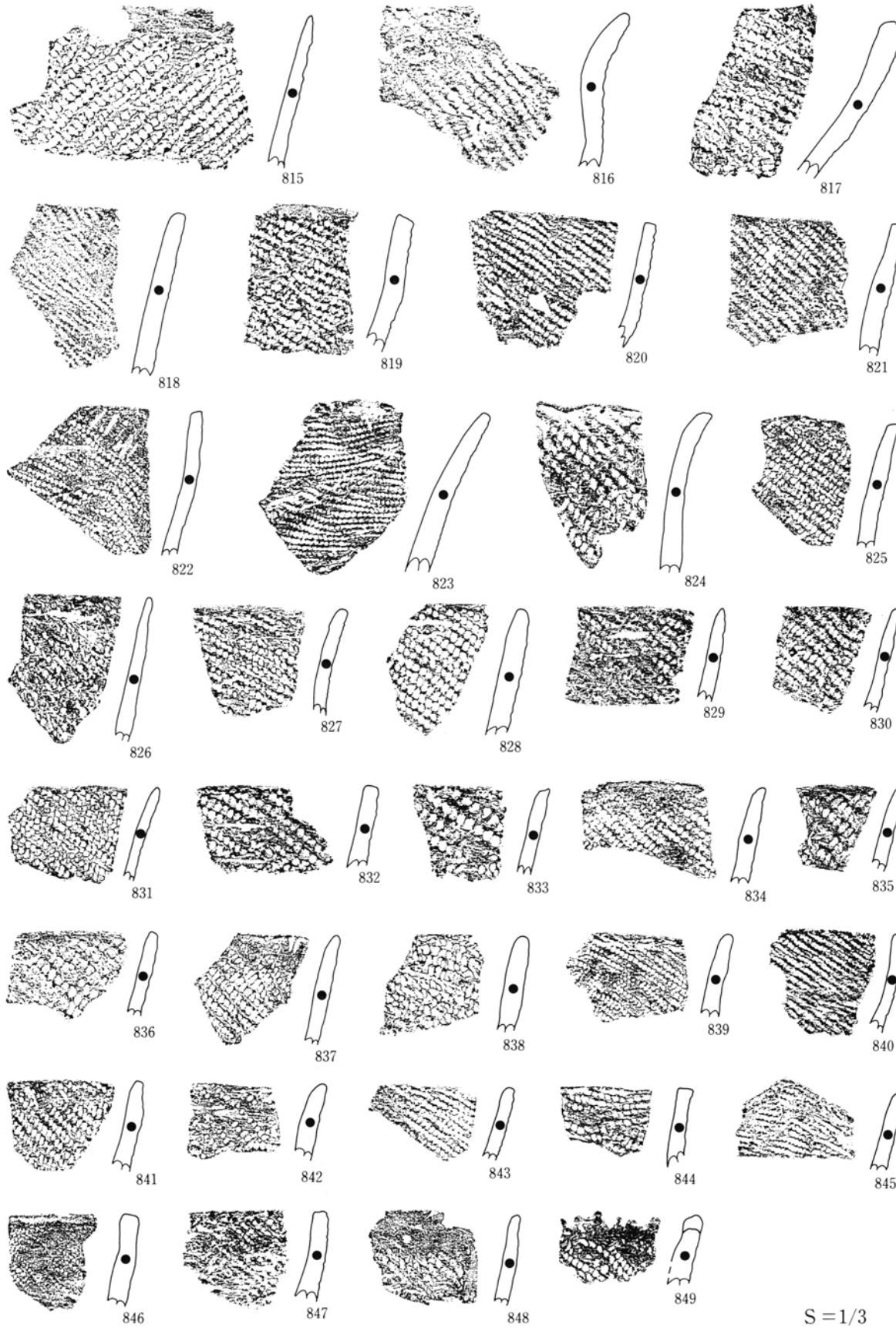


第147図　遺構外Ｃ区出土土器（18）

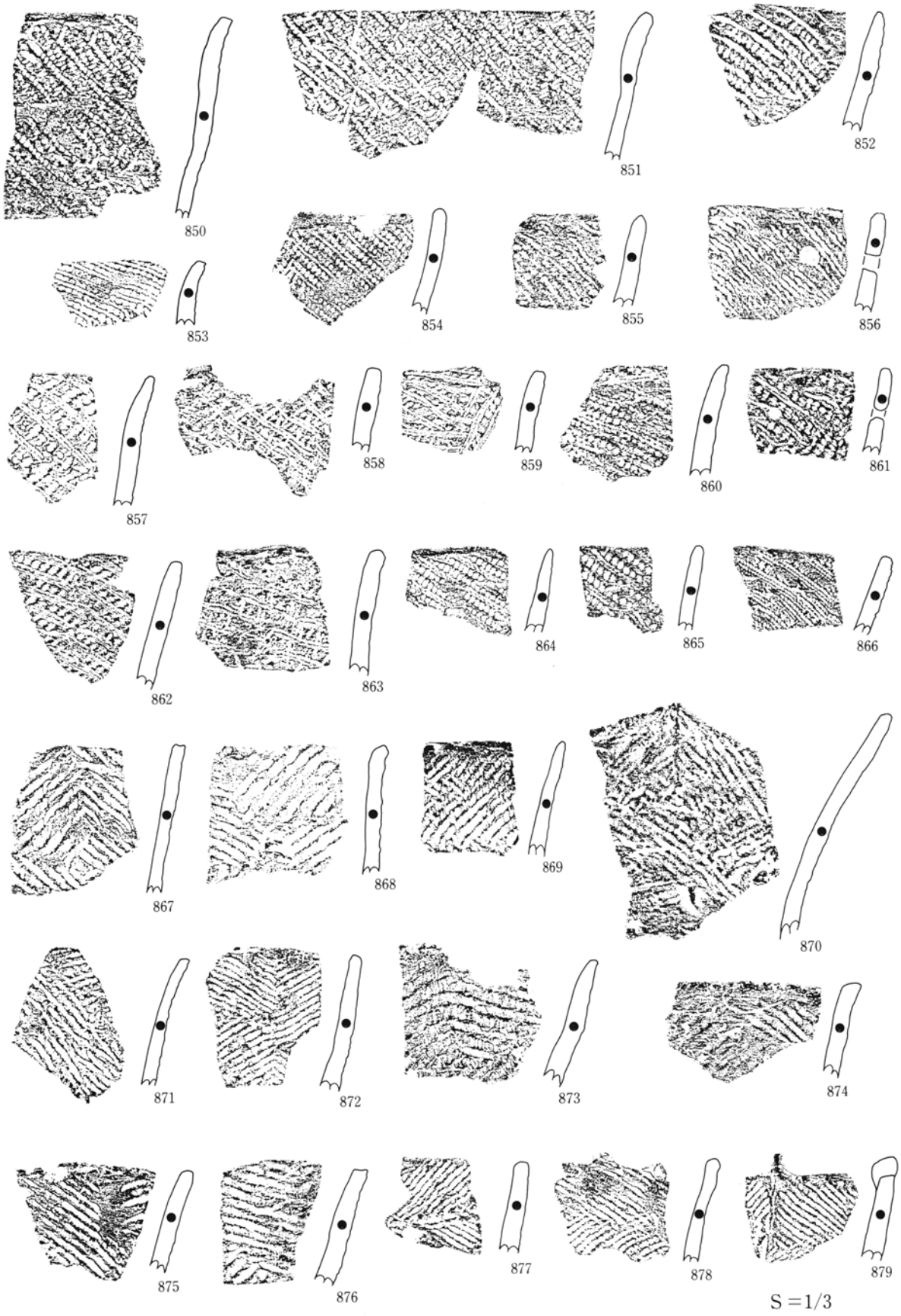


第148図　遺構外Ｃ区出土土器（19）

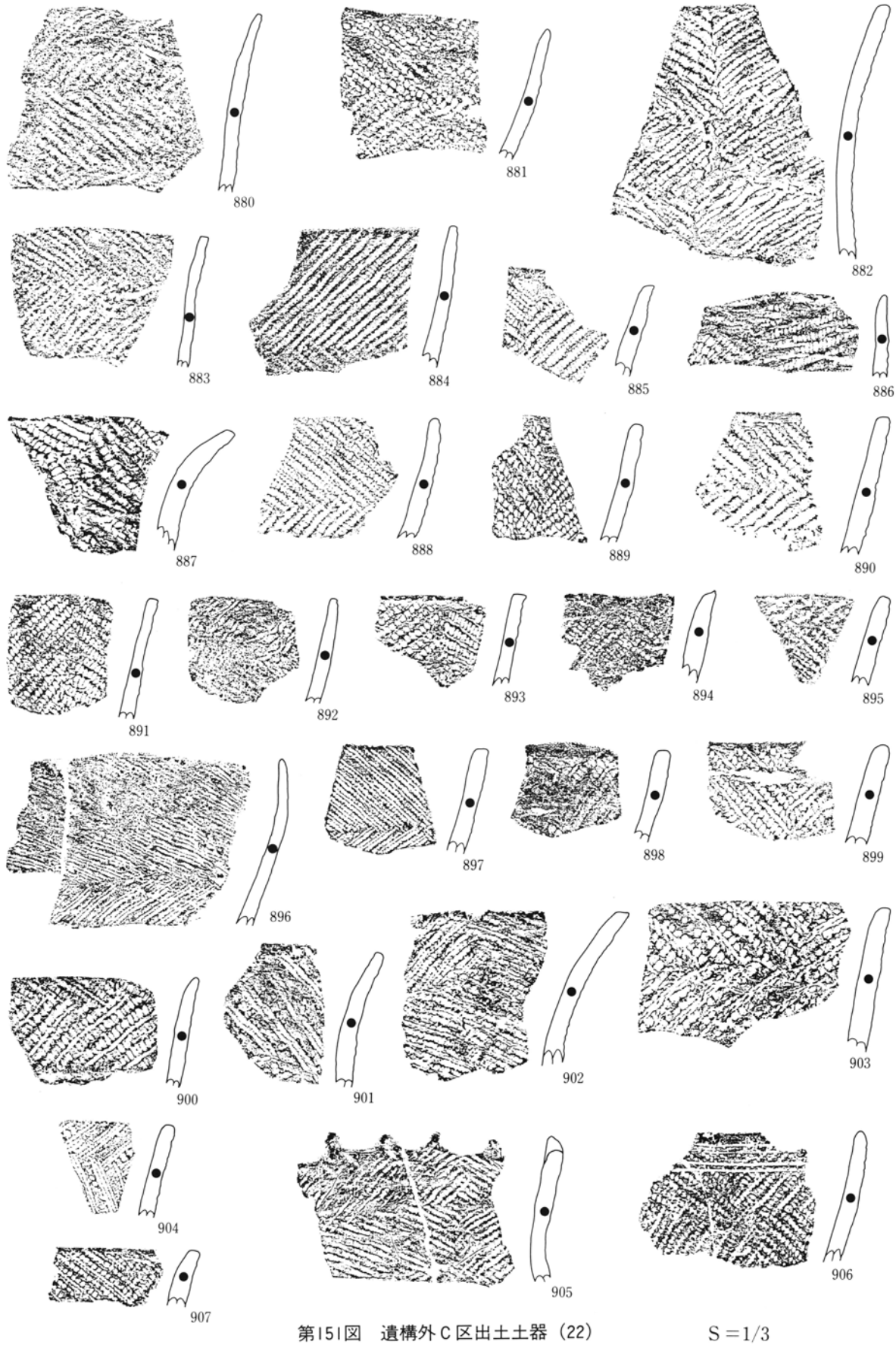
Ｓ＝1/3



第149図　遺構外Ｃ区出土土器（20）



第150図　遺構外Ｃ区出土土器（21）



第151図　遺構外Ｃ区出土土器（22）　　Ｓ＝1/3